
リオン -剣術使い-

笹沢 莉瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リオン - 剣術使い -

【Nコード】

N8537H

【作者名】

笹沢 莉瑠

【あらすじ】

何もかも失われた大戦争時代。唯一残ったものは、戦時活躍した英雄譚だけ。

その英雄譚に登場する英雄を祖先にもつ一族、その中で孤独をもつ少年が一人。少年は血の濃さが、その一族の中でも特に薄い。差別を受けて、忌まわしい『リアン』の名をもらった少年は、ある決意を胸にする。

「俺は、先生みたいになる」

王道（？）＋シリアス多めのファンタジーです。間違いが多い作者ですが、宜しく御願います。

総合ユニーク200000人突破！ 総合PV600000ヒット突破！ 有り難う御座います！！

感想に制限をつけていません。過激な誹謗中傷は、作者の貧弱なメンタルが崩壊しますのでご遠慮ください。（2010年より、改稿作業をしております。『読者の皆様へ』をお読みなってください）
現在の状況↓ 改稿：【第1章4】まで 本編：new！ 【第7章9】まで

なお、他サイトで上げていたものですが、引き上げております。

読者の皆様へ。

こんにちは、作者の笹沢莉瑠といいます。

この度は、「リオン - 剣術使い -」に興味を持っていたくださりがとうございます。初見の方も、すでに最新話まで読んでくださった方も以下の文を読んでください。（本文ではありません）

現在、己の文章力に未熟を感じたので、改稿作業に移っております。初見の方には大変不便であると思いますので、お気に召さない時はブラウザバックをお勧めいたします。

ただ、それでも読んでくださる方・新たに読み直してくださる方は、サブタイトルに がついているものを順番にお読みください。

（ が改稿済みの印ですので、参考にまでも。現在は【第1章4】悩める客人に更なる問いを まで改稿済みです。）

（改稿：5話分）×約4000文字〃20000文字

なお、新話作成も平行して行っていますので、更新が遅れますことを先に申し上げておきます。

それでは、また近いうちに会えますことを祈って。

笹沢 莉瑠

【序章】ひと時の平和 （前書き）

以下の登場人物、国、団体などは架空の存在です。 実際のものとは関係ありません。ご了承ください。

【序章】ひと時の平和

（平和だ……）

そう思う青年の姿にはどこか影があった。とある屋敷の門の柱にもたれかかる彼は、めぐるましく変わっていく空を見上げる。風で押し流された空の雲は、取り残されることはなく風下へひたすらに運ばれる。ふと、青年が視線を下にやると丁度一人の男が入ってくるどころだった。

屋敷が面するここは、白いタイルを一面敷かれた村の中央広場である。そこに入ってきた男は、薄いマントの下に簡素な鎧を身に着けていた。注意深く見れば、腰の剣に手が置かれていることに気づいただろう。

青年は男に気がつくと、ずっと体を起こしてちゃんと立った。そして、男の方が気づかないので、青年は苦笑をしながら歩み寄ることにした。

青年が一步前に踏み出し始めると、数人の子供がにぎやかな足音を立てて、広場に駆け込んできた。子供たちは一直線に男の下へ走りよっていく。はしゃいだ声を上げて男の周りに集まる。

「おじさんだあ！」

子供には気づいた男は、笑顔で笑いかけようとしたが『おじさん』という言葉に口元が引きつっていた。歩こうとしていた青年はピタリと止まって、何の準備やら両手を口をふさぐように当てた。青年の顔はきつとニヤけていたに違いない。

男は一息吐いてから、すうっと息を吸い込んだ。

「俺は『おじさん』っていわれる年じゃねえんだよっ！ いい加減

『お兄さん』って呼びやがれえっ」

たかが七、八歳の子供に真剣に怒鳴る男こと、ヒア・マクシアン。そして、ヒアの言葉に大笑いしている青年こと、モデラン・グラン

デは、口をふさいでいたはずの両手が意味を成していない。

高らかに笑い声を上げるモデランに、やっと気づいたヒアは驚くような速さでひとさし指をつきつけた。

「おまつ、モデラン！ 何笑ってんだよおっ！？」

モデランは今の発言をも笑いの種として、さらに大きく肩を震わせもっと大きい声で笑う。それが少し落ち着くと、モデランはヒアに言った。

「ボクは、ヒア君がツボなんだから仕方ないじゃないか。というより、君はこういう反応を期待してるわけなのかな？」

さっきのような大笑いとは違った、大人が見せる笑顔で言うモデランに、ヒアは深い深いため息をつく。この人はこうだから、どうしようもないとヒアには分かっているからだ。

ちなみに、モデランとヒアではモデランの方が七歳ほど年上である。ただ、言動や容姿的にいえばモデランの方が若く見えるらしい。

子供に囲まれているヒアとモデランは、その後毎日繰り返される会話を交わした。その様子を何度も見てきた子供は、決まった会話の終わりが見えてくると一人が口を開いた。

「なあなあ、おじ……じゃなくて『おにーさん』」

『おじさん』と言いかけて、『お兄さん』に直すところが子供ながら賢明だ。そうしなければ、また決まりきった会話が再び繰り返されることだろう。

「なんだ？」

ヒアが聞き返すと、子供はいった。

「いちばんはじめのリオン・フェブリーヤってどんな人だった？」

「はあ！？」

リオン・フェブリーヤとは、人名である。この世界リーディアにおいては、名前を知らない人などいないと言われるほど有名な人物

である。

彼はリーディアで起こった大戦争の功労者で、戦争をやめさせ世を平和へ導いた人であるといわれている。だが、当時の詳細を記した書物等が残っていないため、それが真実かはわかっていない。

子供がよく聞く昔話に登場する英雄は、あらゆる敵をなぎ倒す剣士だったようだ。そんな夢みたいな人物が存在するならば、ヒアだって一目みたい。

だが、本人はすでに故人。何百年も前に生きていた人物であるからして、ヒアがその人柄を知っているはずもない。

「おい、誰だよ。俺が何百年も前のリオン・フェブリーヤと知り合いだって、言った奴は！」

誰か、と言われて即座に答えたのは、子供たちではなくモデランだ。

「あの子に決まってるじゃん」

彼が、『あの子』と示すのはただ一人しかおらず、ヒアは顔をげんなりさせる。うすうすヒアにも分かっていたのだが、実際に断言されるのは気がめいるのだろう。

はあ、と大きくため息をつかざるを得ないヒアは、子供たちに一応言っておく。

「あのなあ、まず考えようぜ？ まともに考えて、俺がそんな大昔に生きていられるわけがないだろう？」

「えー、だってジュディアちゃんはあ次のリオンだよ。次のリオンが間違ってるっていうの？」

『あの子』の友達らしき少女がヒアに噛み付いたが、ヒアは学習した。一々相手にしていたらこっちの身が持たない、と。

「というか、モデラン。今日はどうするんだ？」

かるーくスルーしたヒアはモデランに別の話題を振った。決して、『あの子』なる少女の話題から逃げたいわけではない。

「そうだねえ。ボクは特に案をもっていないんだけど。あ、そう
だ。そろそろヒア君がこの村に来てからしばらくするし、ボクらと
戦っちゃう?」

しかし振った話は、ひどく大きな攻撃となつてヒアに返ってきた。
彼はひどく消沈した様子で、後悔の格好。がくんと膝が落ち、前へ
手をついて。

「なぜだ……神よ! あなたは死をお命じなのか!」

とてつもなく陰鬱な表情を見せ、ヒアは大地へ空へ訴えかける。
だがそれを聞き届けるべき神は、次期リオンの少女でもなく、背の
高い二十五歳の男でもなく。

「それはいいな。俺もそろそろ、ヒアの実力が知りたかった頃だ」
「わあ! ヒアはどれくらい強いかなあ」

ヒアの必死な訴えに、ではなくモデランの思い付きによる提案へ
の反応。新たな声の登場に、自分の世界に行っていたヒアは、顔を
すぐさ上げた。そしてそれぞれの持ち主が分かると、上がった顔
は絶望色に染まる。

「なぜだ。なぜ、俺はこんな目にあわねばならないのだ!」

「それは、ねえ? もちろん」「鍛えがいがあるから」「に決まっ
てるでしょ」

そう言つと、自然と口に笑みが現れた。そうなるとモデランはな
ぜか、こう思つてしまうのだ。

(平和だ……)

——これはいつの日か忘れられた、平和なひと時だった。

続

【序章】ひと時の平和 （後書き）

10' 10' 25

修正を始めました。すごい遅いですが、ちゃんと直していききたいです。で、よろしくお願いします。修正分とも内容が合うように新話も書き進めたいので、がんばります。

えっと、『読者の皆様へ』をお読みいただいていなければ、そちらの方も読んでいただけますと幸いです。では、また。

11' 10' 29

追記。二十三日の活報を書いてから、たったの六日で手を出します。序章の癖に設定が地の文にあつて、ごたごたするので、説明口調っぽくない台詞で。入らなかった部分は、一章の改稿（およびそのまた修正）にて入れたいと思います。

【第1章1】弱き者よ、神に祈り給え (前書き)

改稿済みです。

【第1章1】弱き者よ、神に祈り給え

1 1 , 1 1 , 2

序章の修正に続き、一章にも手をつけていきます。

大幅な修正の為、時間が掛かってしまっています。しかし、途中で「彼は、」というように切れてしまっではいけないと、思います。ですので、一時的に移動することにいたしました。

新たに読んで頂いている皆様には、大変不便であると思われるかもしれません。しかし、この移動は一時的なものであり、修正がされ次第こちらで表示させていただきます。数ヶ月かかる、とは申しませんが、できる限り早く修正を終わらせるつもりであります。

【1章1】から始めて、現在更新されている改稿分まで修正したいと思っております。その間、大変読みづらいとは思いますが、どうぞよろしくお願いします。

笹沢 莉瑠

【第1章1】弱き者よ、神に祈り給え （後書き）

10'11'27

改稿しました。スローペースですが、ちゃんと進めたいと思います。

未改稿部分と矛盾するところがありましたら、ご報告ください。

【第1章2】リオンとは、リアンとは、

不意に肩を叩かれた。とっさに振り返れば、同い年の少年がいた。リオン・ジェブリーヤの肩を叩いた少年は、指で広場の入り口を指す。それと同時に口から、嘲笑の言葉が出てきた。

「おい、『リアン』がきたぞ！」

リオンジアスの視線は、少年が指差す『リアン』の方をふらつと行ったが、すぐに白いタイルへ落ちていく。

周りの少年たちはどつと笑い声をあげ、その笑い声を侮辱の意味として、『リアン』と呼ばれた少年に浴びせかける。年少の者も、^{十歳の子供}年長の者も、ただ二人を除いて笑っていた。

リオンジアスは、以前のように彼らと同調してせせら笑うことも、彼を『下種^{げす}』な者として見下すことも出来なくなっていた。

前は、自分の名に冠された『直系^{リオン}の』の名前におごり、『血^{リア}の薄^ンい』を徹底的に侮蔑した。だがいつからか、それが出来ないようになっていく。

まだ耳障りな笑い声が出ている。耐えられなくなったりリオンジアスは、ばつと視線を上へ持ち上げた。その途中で見えた、『リアン』ことリアンビルの笑み。

ぞくり、と背筋が凍りついた。あわてて背を向けたリオンジアスは、身がきしむような寒気を覚える。木剣を握り締めるリオンジアスの腕が少し震えているのは、気のせいじゃない。

（殺気だ。真剣を用いた実践も経験していないはずなのに……なんでリアンビルは？）

周りの少年たちの大半は寒さを訴えながら、リアンビルから背を向けた。背を向けなかった者の多くは、氷になってしまったようにその場で固まっている。少年たちみんな、薄々気づいている。彼ら

が感じた悪寒は、冬の冷気のせいではないと。

リアンビルがマフラーで口元を押さえたからか、リアンビルから発せられる殺気は和らいた。

こわばっていた肩をほぐしながらリオンジラスは、固まったような白い顔でリアンビルのほうをすぐ見つめている少年を見つけた。その顔に浮かぶのは、真剣な表情だ。

気になったリオンジラスは、その少年に近づいた。

「リブシア？ どうしたんだよ」

呼びかけると、ハツとしたような顔つきでこちらを振り向いた少年。名はリブシア・アークメモリアという。くすんだ茶色の髪をもつリブシアは足早にリオンジラスに近づいてきた。

ひそりと背後まできたリブシアは、気まずそうにぼそぼそと言った。

「僕、あれを感じたことあるんだ。父さんからなんだけど。ねえ、どうしてビルはあれを？」

お前も感じたのか、とリオンジラスは頭の中でうつすら思ったが、なぜか引つかかったことがある。

「あれお前って、奴のことそう呼んでいたっけ？」

「ビルのこと？ ずいぶん前から、『リアン』抜きで呼んでると思うけど。……どうかしたの、今日は」

フェブリーヤー族とは血縁関係が一切ないリブシアは、むやみにリアンビルを軽蔑したりしない。本人の理由はもっと違うらしいが。

フェブリーヤー族で、血の濃さが優劣の原因のようになってきたその訳は、至極単純だ。今までのリオン・フェブリーヤたちが、初代の血筋に近い者ばかりを次代へ、としたためだ。意図して、選んだわけではないだろうが、才能と固い意志を持つ者を選んだ結果がこうだ。

「えっ？ 俺、何か変か？」

リオンジラスは、リブシアの言葉に首をかしげた。分かっているようなリオンジラスに、リブシアはふうと息をつく。白い息がリブシアの口から出てきた。

「ぼーっとしてるけど、ジラス。本当に自分で分かかってないの？ ビルの殺気で固まっていた僕でも、分かるくらいなのに」

身に覚えはないんだけど、とリブシアに言葉を返そうとする。リオンジラスがそうする寸前に、聞きなれた音が飛び込んできた。それすなわち、始まりを告げる音。

広場で集まっていた少年たちは、誰もが一斉に目を向けた。閉じられていた屋敷の門は二人の人によって、きしむ音を上げながら開かれる。その音こそ、『剣の習い』が始まる合図。

完全に開かれ戻らないようにしてから、門を開けた二人の人はすぐに屋敷のほうへ消える。

『剣の習い』の生徒たちの視線は、現れるべき人を待つ期待がこもっていた。

しばらくして、現れた。つやのあるやや短めの黒髪と、目をひく綺麗な青の瞳をもつ彼女は。

一瞬にして、周りの少年たちの視線は陶酔ぎみなものになった。そうでない者も、彼女にむけるまなざしは尊敬がこめられている。十四代目リオン・フェブリーヤである彼女は、寝不足の疲れを押し隠して微笑んだ。生徒の誰も、それが無理をしたものだと気づかなかった。

「おはよう、みんな」

『おはようございます、先生』

生徒の少年たちは、統率された軍隊でもあるようにそろった声で挨拶を返す。リオンジラスもその中に入って声を上げていた。

全員この広場に集まっていることを目で確認したりオンは、ひとつ爆弾を落とす。

「今日は試験をやるわよ！」

毎年、この時期だ。冬の寒さに世界全体が覆われている中、やつと春の訪れの兆しが現れる頃。その年に十五歳になった生徒らに、『剣の習い』卒業の試験を教師リオンは行うのだ。

ただ。その時、その瞬間に思いついたように始まるのだから、生徒たちはびっくり驚いている。

毎年毎年、皆の目が見開かれるので一瞬疲れも忘れて、くすりとりオンは笑った。

リオンジラスは嬉しさで体が温まってくるのを、じんわりと感じた。

ざわめく彼らにリオンは、屋敷のほうへ手を伸ばして指し示す。

「さあ、どうぞ。中に朝食を用意させたわ。今年中に十五にならない子も、食べちゃってね。試験と一緒にやるから」

それを聞いた少年たちはこぞって門の内へ駆け込み、朝食が用意されているという建物の中へ入っていく。走って行きながらも少年たちは、試験を受けることになった十五（または十四）の者を中心にし、興奮した様子でしゃべっていった。

ただ、十五歳なのに周りの輪ができていないのは彼ひとりだけ。

試験が今日行われると聞いて、口までせりあがってきそうな驚きと、試験が良ければ見えてくる未来にリオンジラスは、自分が気になっていたことを、忘れた。

フェブリーヤ一族が住まうこの村。一族の頭首が代々、村長も兼ねて治めてきたここでは、村人の三割がフェブリーヤの姓をもつ。村のわりに大きいここでも、多い割合だった。

剣豪といわれたリオン・フェブリーヤの子孫であるため、血のつながりがある者の多くが戦闘的才能を開花させる。そういった者は、リーディアの各国に仕えるために村を出て行った。だがそれでも、村におけるフェブリーヤ一族の多さは変わらない。

村、であるわりには大きいが、やはり村には違いなく。町のよう
に、商店が立ち並んだり旅人が行き交ったりしない。

外から流れ込んでくる勢力がないため、村で大きい力をもつのは
やっぱりフェブリーヤの者だ。厳密に言えば、村長である現十四代
目リオン・フェブリーヤにはナンバーツークらいの影響力があるも
の、ナンバーワンは彼女の年重ねた叔父。

血の濃い者をナンバーワンが多くとりこみ、徹底して血の薄い者
を迫害する。その忌むべき伝統を、守るべき伝統であるかのよう
に、現在まで連鎖させてきた。

今年、試験を受けるのは五人だ。まだ誕生日を迎えていないも
の、来月には十五になるリブシアも受けることとなる。五人を中
心に次々と、屋敷の食堂へ入っていくのを見届けたリオンも、後を
追うように中に入った。

たくさんの生徒たちは並べられた長机に向かい、屋敷で働く者た
ちがそれぞれに朝食を配り始めた。

湯気のたつた朝食を目の前にして、早朝から腹をすかせているリ
オンジアたちは、エサを前にした躰しっけのいい犬のように、食堂に入
ってきていたリオンを見上げた。

全員に朝食が配られたのを見て取って、給仕をしてくれた者たち
が厨房のほうへ引っ込んでいくと、リオンは彼らに言う。

「さあ、どうぞ。今日のパンは焼きたてよ？」

それを聞くないなや、成長期の少年たちはパンに手をのびし、ス

ープの入った碗を持ち上げて、口へどんどん運んでいく。お世辞にも上品とはいいがたいも、元気な年頃の少年の食べ方に、リオンは思わずくすつと笑ってしまう。

誰も彼も空腹を満腹に変えるため、せつせと口の中へ食べ物を取り込んで流し込んでいる。

「食べながらでいいから、聞いててね」

ふと、リオンが話し始めたので、食事にひたすら集中していたリオンは顔を上げた。

「食べ終わったら、各自村を一周してちょうだい。そうしたらまた指示だすから」

投げやりのような言葉を残すと、じゃあねとばかりに手を振りながら食堂から出て行った十四代目リオン。

ぱたん、と扉の閉じる音が聞こえた途端、生徒たちは目の前の食べ物を片付け始めた。それも、さきほどよりも猛烈に速いスピードで。

食器やコップと机、フォークやスプーンと食器。それぞれがぶつかり合う音。十五歳の生徒に卒業の試験を受けさせる、と聞いて広がった興奮なんて虚無のことだったみたいに、人の声はしない。

無言でひたすらに食べている空間の中、一番早く席を立ったのは『リアン』だった。黙ったまま食器を重ねてから、マフラーと木剣をもって外に出て行った。

椅子にすわって食べている生徒たちの警戒する視線に見送られたリアンビルが出て行ってしまつと、静かにしゃべり始めた一部の生徒たち。それに煽られて、全体が食べつつもしゃべりだす。

「なあ、お前さ。『リアン』が試験に受かると思うか？」

彼らの話題はやっぱり試験のことだ。試験内容はどうか、合格した先輩なんかはこういうことをしたらいいとか。

『剣の習い』の卒業。それには二種類ある。まずは合格、それは一段階上の『剣術の習い』へ通うことを許されること。『剣術の習い』では、すごい技を教えてもらえるらしい……。

合格しそこねると、『剣術の習い』にはいけない。ただそれだけのこと。ただ、合格しなかった人が圧倒的に合格した人より多かったそうだ。

リオンジラスは、徐々に騒がしくなる話し声を耳にしながら、手の中の碗を見つめていた。

【第1章2】リオンとは、リアンとは、

（後書き）

やっと終わりました。ついでにサブタイトルも変更しました。

遅ればせながら、あけましておめでとうございます。改稿第三弾（？）【第1章2】をお送りしました。

非常におそいペースで申し訳ありません。年末年始はどこでもそうでしょうが忙しく、前回のえつと【第7章6】騎士団事情。でしたか、その話の更新より一ヶ月経ってしまいました。

次の更新は七章のほうですね。また遅くなってしまうと思います。が、「長期連載休止中」のレッテルが貼られないうちに上げたいです。

これは愚痴になりますが、なぜでしょう。アクセス解析で、新しい話を投稿したわけでもないのに、ユニークが一日で100を超えてました！

なんでなのでしょう。ちょっと怖くなります。でも、お気に入り登録が一件増えていたりして、嬉しかったり。

追記 リブシアの年齢について。

リブシアの年は、ビルやジアスの一つ下という設定でしたが、この際に変えさせていただきます。なお、その部分はすでに修正しているつもりですが、修正されていない場合は、ご指摘願えますと嬉しい限りです。

【第1章3】独り回想につき (前書き)

改稿済みです。

【第1章3】独り回想につき

走っていた。

騒がしくなっていた食堂を一人出て行き、タイルの広場を横切った。

早朝の泥道。木々の上にかかる薄い霧。身をきるように鋭い風は、もう吹いてこない。口から出てくるこの息は見えないほどかすか。揺れる肩に、一瞬宙を浮く両足。ふっと身体が浮いたと思えば、すぐ片足のつまさがが地面につく。

昨夜の雨でぬかるんだ泥が、勢いにおされて飛んだ。かかとまで濡れた土についてしまう前に、身体は前へ浮かび上がる。そしてまた両足が上に。交差して前に出てきた足が、つまさきから地に触れた。

顔を触れては離れていく風。鋭くはない。思えば、やわらかいくらいだ。風は匂いを運んでくる。冬の終わりに咲く花、春の予兆を知らせる花。

霧、いや霏ちやか？ 前方を走っているはずの人影も薄い。足音は聞こえてくるが、それだけだ。短い息継ぎも、悪い足元で滑るような音も聞こえない。ときどき、水溜りのふちを踏み込んで、水音が飛び込んでくる。

リオンジアスは、息を吐いて空気を吸った。繰り返されるその動作は永遠。彼の前を走る影との距離は、変わらないように思える。

リオンジアスには最近、思い出せないことがある。実際、五年も経てば鮮明に覚えているはずもないのだが、そこだけがとけない雪で覆われているかのよう。

走りなれた道。すぎゆく景色をいつも見ていた。今日のように、濡れた道も何度も通った。水溜りができる場所はほとんど決まって

いる。だから、水溜りを避けるのは簡単だ。

この時期は日が昇るのが早い。彼が家を出たときの暗さは、西に追いやられている。

（リブシアに、ぼおーっとしていると言われた。何でだろう？ 俺には思い当たることがな……い、とはいえないか）

夢を見た。彼はいつもほとんど覚えていないし、実際見たという夢すらおぼろだ。ただ一枚の絵のような映像が、かすみかけながらも浮かび続けるのだから。だから気になって仕方がない。

月はない。わずかな星の光のもと、暗闇の中独り少年。手にした棒のような物を、思いつき振り上げた姿。

リオンジアスの視点は、その少年から離れている。しかし闇の中に溶け込めない人影は、輪郭だけがはつきりとしていた。少年の黒に染まる顔で、唯一光るのは煮えたぎるような瞳。戦慄を覚えるほど、その目は強い感情をこめていた。

彼は、頭のなかの映像に目を凝らしてみる。走るのは今までの慣れに任せて。

「あ……」

その目に浮かぶ色濃い感情には、見覚えがあった。ついさっき、今日のさきほどリオンジアスが見た人のもの。口元の『笑み』に殺気をにじませていた、その少年の目だ。

リアン。リアンビル、だ。

（じゃあ、あれはリアンビルなのか。でも、少し背が低かったような）

正直、あれは幼い姿だった。背丈は今の十歳ぐらいに見えた。それでも、あのリアンビルの目。それだけは異様な光を放つ。実際の年を飛び越えた、強く黒い感情が目に表示していた。

（きつと、あれは十歳の頃のリアンビルなんだ。でも、なぜその姿

を夢に——？)

人が夢をみたとき、夢には何か意味があるらしい。そう聞いたことがあったリオンジラスは、意味を考え始める。ちょうどリオンジラスが思い出せない記憶の、あたりの年頃だ。そのことに気づいたリオンジラスは、もう一度注意深く映像を見た。

周りが暗いということは、遅い時間に違いない。星も見えているのだから、夕方と朝方はなくなった。それとリオンジラスはこの映像の背景に、見覚えがあった。この背景は、彼の家の窓から見えるものだった。

そう気づいた瞬間、風が急に吹き抜ける。花びらを巻き込んでリオンジラスの隣を通り過ぎた春風。リオンジラスは足を止め、風の行方を捜すように振り向いた。春風は花びらを空に届けようと舞い上がる。

ささやかな春の香りに吸い込まれそうになる。むせ返るほど陽気なその香りに思わず息を呑む。そしてリオンジラスは、頭に突然流れ込んできたそれに目を見開いた。

「これって、あの時の……？！」

風と共にやってきたそれは、彼の記憶。なぜか鍵のかかった引き出しにしまわれていた、記憶は埃をかぶることなく色新しくあった。それこそ、リオンジラスの集中力を乱す原因。見つけ出せなかった鍵は夢自体だった。

数多くの記憶が、いるべき場所に戻っていく。その多さにリオンジラスは頭を回しそうになる。そしてその記憶たちが、隠されてしまわれていた事実疑問を覚えた。

『剣の習い』の卒業の試験として、始めに言い渡されたこと。つまり走ることを、リオンジラスは一時放棄する。彼は足を止めるだけでなく、示された道はずれて住宅の多い方へ、方向転換した。

その方向には、彼の家がある方向だ。

彼の目的は摩り替わった。ずっと、足を持ち上げて試験に遅れないように、リオンジラスが出しうる最高の速さで駆け出す。

突然、かすみはじめた風景。走りながら周りをみる余裕を捨てて、一心に目先の道に集中する。

いくつもの住宅を過ぎて、リオンジラスはようやく目的の場所にたどり着いた。彼が目的として捉えていたものを目の前に、リオンジラスは息を整える。走りに少しでも全力を出せば、疲れは見えた。息が普通になってきたところで、彼はそこに目を向ける。見れば、リオンジラスが夢に見た風景が広がる。

日がまだ現れていない。そうとはいえ、真っ暗と表現するには明るい。明るさの面でいえば、完全に一致するとはいえないが、ほかはほとんど変わることがない。約五年経っても、全然変わらなかった。

彼の家の窓、それは木々の立ち並ぶところに面する。そこは程よい広さをたもっており、十歳の子供が木剣を振り回すには十分すぎるくらいである。また、易々と人目につかないこともあり、リアンビルがこの場所を選んだのは良い判断だったといえる。

ここへ来れば、何かが分かっていると思っていた。そう過信していたリオンジラスは、落胆したように肩を落とす。

「俺は何を期待していたんだ……。手がかりなんてないって、始めから分かったのに」

一人であてもなく呟いた。空に背を向け、木立を前にぼうぜんと立って。いつまでも永遠に、そうしていられるような気がした。

さわさわ、と小刻みに揺れる無数の枝。見えない風は木々の上を掠めるようにして通り過ぎる。夜が明ける寸前にリオンジラスが見たのは、薄黒い自分の影だった。

……い、……てを。

「ん——？」

ひとときわ葉が揺れたとき、誰かの声が聞こえたように感じた。聞こえるはずはない、と彼は思った。聞こえるほど近くに、人がいないからだ。

いくら彼の家のすぐそばといえど、ほとんどの住民が寝ている時間だ。それに、大きな木のざわめきのおかげで、より近くに寄らないと聞こえない。それほど寄ればどんな人間だろうと、気配が感じられる。

幻聴であつたと結論付けたりオンジラスは、首を動かして周りを見渡す。

そうすれば、自分自身の謎について分かりそうだった。けどもう失望していた。もう疑問なんてどうでもいいと、頭を振った。^{かぶり}

視界が横に揺れたとたん、冷たさを覚える。のどの奥から激しい何かが、突き上げるように押し寄せる。急に息が苦しくなつて、リオンジラスは膝から崩れ落ちる。無意識のうちに両手が首のあたりをさまよう。

口から出掛かった黒いものは、そのまま彼から出て行くように見えた。しかしその片鱗を見せたかと思うと、すっと消えた。苦しみも何もなかったように。

のどにつつかえていたものを、飲み込んでしまったかのように消えてしまった。困惑する彼は地面に座り込む。湿り気のない地面にズボンの布が吸い付き、すぐに重たくなる。

おそろおそろ首や、口元に触れてみた。何も変わらない。起きてすぐ顔を洗ったとき、何ひとつ変わった感触はしなかった。

リオンジラスは今のは何だったんだろうと、心の中で問いかけてみる。わずかに舞い上がった粉塵は、ただの埃？ かく閉ざされた扉にかかった鎖が、一瞬音を鳴らしたのは錯覚？ 強く訴えかけ

る、謎の圧迫感はただの気の迷い？

彼にはまったく分からなかった。

【第1章3】独り回想につき （後書き）

今回は短めでした。改稿、第四弾を更新しました。本当の遅くなつて申し訳ありません。三月以降息災でありますので、心配は必要ありません。単なる「遅筆」であり、時間がとれないだけであります。本編を一読された方には、お分かりでしょう事実。それについての伏線を張らせていただきました。まだ読まれていない方は、改稿がそこに追いつくまでお待ちくださいませ。きっと当分先になつてしまいますが。

今回の改稿は、ジラス（リオンジラス）の視点を外れまして、ビル（リアンビル）の視点へ移る予定です。楽しみに待っていただければ幸いです。

最後になりますが、誤字脱字等見つけましたら、作者へお知らせください。それでは。

【第1章4】悩める客人に更なる問いを （前書き）

初見の皆様には、少し楽しんでいただきにくい内容かもしれません。ご了承ください。

また、勝手ながら、前回の予告とは違う話になります。

【第1章4】悩める客人に更なる問いを

——ああ、煩^{わづら}わしい。

十四代目リオンは、そう思つてハツとした。疲れきつた心の中から浮き上がつてみると、周りに子供達がいることを思い出す。今の声が漏れてはいないか、内心ヒヤヒヤしていた。

しかし、彼女を取り巻く子供から感じるのは、妄信するような視線。リオンの素振りに、疑問を持った様子はなかった。

開かれた門の敷地が、彼らとリオンを隔てる唯一の、壁のようであつた。

ほつとするのもつかの間、笑わなければという気持ちが見れる。頬の筋肉を動かして、笑う顔を作り出した。

「おはよう、みんな」

『剣の習い』の生徒たちは、一も二もあけずぐさま挨拶を返してくる。そのずれない姿勢が、いちいち気になった。

『おはようございます、先生』

やっぱり今日は、いろいろな意味で気がたっているのかも。そう心の奥で言葉にした。

ざつと周りを見ると、成長期真っ最中の少年たちが揃っていることが分かる。それで彼女は抗^{あらが}いきれない定めに、腹をくくる。もともと、今日だった。予感めいたささやきは、夜が明けてからずっと頭に在った。

「今日は試験をやるわよ！」

口調を強くすれば、何十人もいる生徒に届くことはすでに承知している。笑顔も取り入れて、そう言い切つて。しかし彼女の胸のうちには、暗くそれでいて安心も混じっていた。

（ほんと、“先が見えると途端に安心する”っていうのは大当たり

ね。長距離を走っているときでも、それが人の道でも……ね)

リオンは驚く生徒達の顔に、ふふつと表情を和らげた。緊張状態だった顔の筋肉は、ここぞとばかりにゆるみきっている。

「さあ、どうぞ」

久しぶりの本当の笑みを続けて、腕を広げた。

「中に昼食を用意させたわ。今年中に十五にならない子も、食べちゃってね。試験と一緒にやるから」

やや開いた手のひらを、屋敷のほうへ動かす。そうすれば、今が伸び盛りでお腹もすかせた生徒達は揃って敷地の中へ。人間特有の戯れ方は本能にすりこまれている。話題を鼻先にぶら下げられたのだから、しゃべらずにはいられない。

そのため、二つの欲求を満たす行為は、走りながら口を開くという方法である。それはすぐさま実行された。

一斉に建物のほうへ向かう子供たちを見送り、自分もそこに行こうと足を踏み出した。一步出たところで、背後より声がかけられる。「リオン様」

振り向くと、無言で指された指。それは『剣の習い』の生徒たちが向かった建物とは、違う建物をさしたものだ。呼びかけた者は無口なまま、門のそばに立っていた。その男は生徒とリオンのために、敷地の境を示す門を開けた一人。屋敷のほうへ消えた後、また戻ってきたらしい。

沈黙の意味を悟った彼女は頷く。

「わかりました。私は子供たちに指示を与えてから行くわ。あなたは『彼』にそこで待つよう、伝えて」

そう言い終わると、リオンは走り出した。もう、食堂のある建物には、生徒が一人残らず入っている。生徒たちを待たせないためにも、彼女は出来る限りの速さで向かった。

“先”がどんなものであれ、もう既に見えているのだから。まだ余裕はある、まだジューディア自身がやりたいことをする時間は残っている。

これは彼女自身のわがままなのだから、せめて最後までは……。

＊

扉を前に、息を落ち着かせた。見慣れた屋敷の壁紙が、彼女にとつては忌まわしき呪縛だ。扉から目を背けるのはもうやめることにする。

昔から知っている人に会うのだとしても、この場所にいる限り彼女はリオンだ。リオンらしくあらねばならない。この屋敷にはいつも、他人の目がある。見張られた囚人^{かのじよ}は、囚人らしくあらねばならない。

リオンは木の扉をいたわるよう、やさしく叩いた。そして取っ手に手をかけ、押し開けば立った状態の男と目があう。

「お久しぶりです、ね」

男は、黒を基調とした長いコートを羽織っていた。懐かしい面影に、積み重ねた年月のしわが入っていて、それでも変わっていないように見える。

男はリオンの言葉を聞いて、一瞬で顔に鋭さをにじませる。

「久しぶりですね、リオン様」

「マクシアン様、とりあえずお座りください」

立ったままの男を、この応接間のソファにすすめた。偶然にも二人の、かつての再会もこの部屋だった。

マクシアン、と呼ばれた者は静かに黒い革のソファに座った。鮮やかさの違う黒同士が、おだやかにとけていく。男自身の髪も暗く濃い色のため、なんともいえない混ざり方をする。

リオンも『彼』が座ったソファの向かい側へ、腰をおろした。
「お茶も出せずに申し訳ありません。家の者たちに知られるわけにもいきませんので、このままで」

社交辞令のような言葉に、男は無表情なまま「いえ」と答えた。
「……そういうえば、マクシアン様は前にお会いしたときから、出世されましたそうですね」

まずは当たり障りのない言葉。それで、この機会をもたせたことを匂わせて。

男は二つのソファの間に置かれた、木のテーブルに目を落としたままであった。

「ええ、これでも特別依頼中隊の隊長になりました。部下に年上がいるのは、何とも不思議な関係だといえますよ」

「そうなのですか、よく分かります。私も、屋敷の者や一族には年上、それもかなりのお年の方がいますから」

男は雰囲気に波をたてないよう、慎重に話を切り出す。

「それで、今日はこういったご用件ですか」

その言葉を耳にすると、リオンは今にも消えてしまいそうな微笑をたたえた。ゆっくり顔をあげた、男は驚きに満ちていて。

「はい。実は、今夜私を――てほしいのです」

急にひそめた声で、『彼』ひとりだけにきこえるようにささやいた。

みるみるうちに、男の無表情な仮面は剥がれ落ちていく。文字の意味を理解した途端に『彼』は音を立てて立ち上がり、近所迷惑になるような大声で怒鳴りつける。

「馬鹿なことやってんじゃねえよ！ ジュディア！」

その行為に嬉しいような悲しいようなまなざしを、ジュディアは向けてすぐに顔ごとそらした。そして涙声になって息が切れそうに

なる前に、冷静に感情を押さえつけなければい。

「静かに。お聞きいただけなのなら、副隊長のリコール様をお呼びください」

涙という邪魔者が視界をふさぐ前に、自分でふさいでしまえばいい。

彼女の様子に男も、ストンと力が抜けたようにソファに落ちた。ひどく悲しげな表情を宿して、指同士を組み合わせた所に額を乗せる。

ジユディアは『彼』の姿を映さない。涙を滴らせるまいと、それだけは拒絶した。

「……理由を聞いても？」

「うん、めい」

目をかたくつぶり、口元に手を当てたままジユディアは、単語をこぼした。かすれる声だったが、男にはしっかりと聞こえているようである。

「そうですか。おまえは………いや、何でもない」

『彼』は首を横に振り、昔を懐かしむような言葉をすぐに消した。それをしっかりと声音で聞き取った彼女は、服の袖口で両目をぬぐった。

二人の雰囲気氣息が息をついたところで、くいつとジユディアはあごを上げる。その澄んだ視線はそれることなく、向かいの男を見ていた。

「ありがとう、ヒア」

そして、そう呟きひとつ落とした。

しっかりとそれを拾ったヒアは、この部屋で初めて笑顔になった。ジユディアのほうも、柔らかなまなざしでそれを捉える。

一瞬だけ、ほんのわずかに時に許された。遥かな昔のような時の

なか。ある時計だけが、動く針の歩みを少し止めさせた――。
「どういたしまして、ジュディーちゃん」

場所を変えよう、と提案したのはどちらだったのか。屋敷に行く
つもある空き部屋で、二人は密談を開始した。

古いページをまとめてめくってしまうように、仲がよく親密な雰
囲気はもう現れてこなかった。彼らはそれを残念がる行為を表に出
さず、実に現実的な話ばかり口にした。

彼女が『彼』らに――れることを前提にした、それはとても冷静
な話し方だった。

彼女は、リオンだ。彼女の代で十四代目になる。リオン、つまり
フェブリーヤー族の当主は、奇妙な後継によって十四代まで受け継
がれてきた。

まず、当主本人のみが次代を決められる。次代になれる最低条件
は、黒髪でフェブリーヤーの血をひいていること。それらを満たした
者なかから次代が選ばれると、後継の条件があうまで待たなければ
ならない。それは、当主自身の剣が廃されていること、あるいは当
主が虫の息であること。

二種類の条件が一致すると、当主と次代は青き瞳の継承を始める
のだ。

しかし、この言い方は語弊ごへいがあるかもしれない。当主と次代が、
言葉を交わせるくらいの近さにいればいいのだ。それだけで、一方
的に継承は始められる。

当主が先代に託された言葉を、のうのうと紡ぎ、新たなリオンと
なる者の本名を添えるだけ。

そうして青い瞳は、新しい当主へ移っていくのだ。

それほど広くもない空き部屋は殺風景である。無地の壁にもたれかかった男は、腕を組み右の人差し指だけが動く。

「……その話だと、次代を軍に引き入れることになりますね。リオンが一国に加担していいのですか？」

男は俯きがちで、落ちてきた前髪で表情をうかがい知れない。対する彼女は、部屋の隅に寄せられた木の椅子に座っていた。目線は決して逢^あわない、逢^あわせない。

「どうせ、何も起こりません。そして誰もリオン・フェブリーヤがいることを、信じたりなどしません」

「なるほど、そうですね。ですが、私は次代に会わなければならぬ。あなたが死ぬ前に、死んだ後も」

彼女が腰掛ける椅子が、ゆりかごの如く揺れた。みれば、椅子の足が弓なりに曲がった板とくつついていた。ユラユラと重心移動をしながら、少女のように幼い彼女。

「マクシアン様。あなたは知っているはずですよ、私が薄っぺらな鎧であることを」

髪が一般的な女性よりもかなり短いことも、幼さに拍車をかけている。それを利用していても、見えないことも無い。

「逆に問いましようか。次代を選んだ理由は何ですか？」

男の組まれた腕の上で、とんとんはねる指が宙を差し、明確な返答を要求した。

彼女は椅子の揺れを足で引き止めた。その反動でスッと立ち上がる。

「まだ、はつきりとは決まっていないのです」

【第1章4】悩める客人に更なる問いを （後書き）

誤字脱字などありましたら、ご指摘願います。

また、「なろう」様での記念の日が過ぎました。今までお付き合いいただき有難う御座いました。これからもよろしく願います。

【第2章1】死と剣と精霊

闇夜は寒空の下、凍えるような冷気に覆われていた。しかし、そんな寒気にも負けずリアンビルは、月光に照らされた道を白い息を吐きながら走っていた。

その時、嫌な予感が奔った。

（この気配、誰かがリオン先生宅に忍び込んだ………？こうしちゃいられねえ！）

リアンビルはリオンの屋敷の裏口から静かに入り、武器庫の鍵をブレスレッドに編みこんだ

針金でこじ開け、鉄剣を取り出し、急ぎ足ながらも軽やかに草の、砂利の、こすれあう音さえ

させず、リオンの寝泊りをする離れへ向かった。その時門のほうから人の気配がしたのでさっと物陰に隠れた。

「ここが、あの有名すぎるフェブリーヤ家の頭首の家かあ。」

「おい！無駄口叩いてんなら、剣でも投げ捨てて立ち去れ！……

…の依頼なんだぞ？！」

「わかってますってば、隊長。」

「隊長殿、ここでもよろしいのかな。確認できれば直ぐにでも奇襲をかけますぞ。」

リアンビルはさっと青ざめた。そして奴らに気づかれないようにそろそろと走り、

離れに着いた。離れの扉はもともと鍵がついていないためそっと押して入り、その場にあった

物で扉をふさぎ出来る限り時間が稼げるようにした。いつか、一度だけ入った事のある

リオンの部屋までの道のりを頭の中で地図化しながら走った。

リオンの部屋の前まで来た。奇襲をかけに来た奴らの気配がこちら側に向かってきていた。

いや、もう近かった。離れの入口近くにいます。リアンビルはドアノブを静かに急いで開いた。

「先生………」

「私はこの日、このときにこの世と縁を切られるのです。そんなこと、あなたが『剣の習い』を

始めた頃に知ったのよ。ビル、あなたは初代から今までの中でも特に秀でた者になる事でしょう。」

「せつ先生？……何を俺に託すつもりで………」

「15代目此処に生まれ変わらん。我が託す道しるべ見落とす事のないよう。」

汝ばリーディアに平和を求めん。国は剣を求めたし。汝は其の担いをわすれんことを

我求めたらん。新しきリオン・フェブリーヤよ！汝の下に栄光と輝きがもたらせん事を！」

その時リオンの瞳は青から茶色になり、リアンビルの瞳が茶色から青へと変わった。だが、

そんな事など気づきはしなかった。あの奴らが駆け込んできた。

「さあ、行きなさい！ビル、私の最期を見送るつもりじゃないでしょうね？」

リオンは声がカラカラになりながらも言った。リアンビルは、突然剣の重みが片手に

ずしりとかかしてきた。そこで両手に持ち直した。

「先生、このままただ事切れるまで外で待っているといわれる筋合いはありません！」

先生は死ぬまでリオン・フェブリーヤの名誉を背負っているんです

よ、諦めてはいけない。」

「諦めた訳じゃないわ。これは運命なのよ、絶対に変えることなど出来ない運命。」

さあ、奇襲をかけにいらつしゃったヒーディオン国突撃部隊の皆さん、これを外部からの刺客の仕業、見せかけて事件に施して。ビルは外に出して。」

リアンビルは本人が気づかない宝石のような青い瞳を潤ませた。そして大粒の涙が頬を伝わり顎を伝わり、床へ落ちた。

「せつせんせい……、最期までここに……
……いさせてください。」

「あなたはここにいて欲しく有りません。だって……だって悲しみが溢れてしまうもの。」

そういつてリオンは顔を両手で覆った。涙の水滴が手を伝って床に落ちた。

ボタボタと大粒の涙は床の一部をぬらしていった。

「リオン殿、儀式は？」

ヒーディオン国突撃部隊の副隊長らしき人が涙が枯れ始めた頃に言った。

「簡易ですが終えました。あの子は自覚してないようですが、瞳を見れば分かります。」

「では次代はどうしますか。」

「やっぱり外へ……、御願い。」

リオンが悲痛な声で言うと、リアンビルは、今度ばかりは従った。そして部屋を出る際に

振り返って、いつもの無邪気な笑顔で涙を流しながら言った。

「リオン先生、……
ありがとう！」

リオンは悲しげに微笑んで目を閉じた――。

リアンビルはリオンの部屋を出た直ぐの廊下の壁に寄りかかっていた。

窓が向かい側にあつて月光をとおしていた。

「ほれ、次代。リオン様からの最後の伝言だ。」

リアンビルはこの人たちが自分の事を次代、次代と呼ぶのに遺憾を覚えていたが、不思議としつくり来た。理由はわからない。

そういつてヒーディオン国突撃部隊隊長らしき人物は羊皮紙をリアンビルに渡した。

”親愛なるビルへ

このようにむりやり出してしまつてごめんなさい　でもこうしないとあなたは強情張るから・・・

あなたに武器庫の、純銀製の柄に青い宝石の付いた剣と様々な金属で出来た刃に柄に赤い

宝石がついた剣を授けるわ　使い道はいつか分かる時がくるでしょう　鞘はいくらでもあるから持つて行きなさい　あなたに教えたかった事は沢山あるけどそれはあなた自身が知るべきだわ

幸運がペディア・アゴーリヴの御庇護の元でさんらんと輝きますように　ジュディア”

「ジュディ・・・・・・ア？」

「リオン様が14代目になられる前のお名前だ。ああ、それとリオン様からお前をヒーディオン

軍に引き入れておけつていわれたんでな。お前を引きずつてでも軍に入れる。それと

俺はヒア・マクシアンだ、宜しく願う。」

そういつてヒアは敬礼した。

「リオン先生から言われたのなら従いますよ。マクシアンたいちよう。」

リアンビルはおどけた調子で笑った。だが、瞳は笑っていなかった。

「無理するな、ビル。ほら剣を取って来い。」

ヒアは武器庫の鍵を投げてリアンビルに渡した。

リアンビルはキャッチして武器庫へ走った。武器庫の扉を開けると前に入ったときは

薄暗かったのに対し、今は月が窓越しに光を発していて明るかった。

中に入ると2つの武器が光り輝いていた。それはリオンからの伝言にあった剣だった。

リアンビルは剣に近づき手に取った。

シャラーンツ

剣の輝きはいっそう増した。持ったのは純銀製の青い宝石の埋め込まれた剣だった。

リアンビルが青い宝石に手をかざすときらめき、輝いた。

そして、女性の幻影が実際大に現れた。

（えっ？何だろう。これは？）

<初めまして、15代目よ。わたくしは真理を担う精霊アポシオンです。この姿はあなた以外の

どなたでもあるとも見える事は有りません。一例を除いて。わたくしへの返答は思う事で

伝わりますのでそのことをご了承ください。わたくしは代々リオンの名を受け継ぎし者を

その者が思う真理へと導いてまいりました。では、あなたが思う真理とは何でありましょうか。>

精霊アポシオンは限りなく14代目リオンに似ていた。

（アポシオンよ……）。俺は本当にリオン先生の跡を継ぐ人間であるのでしょうか？

そして真理とは何に対しての真理でしょうか………？)

<14代目がお選びになり、そしてこのわたくしと通じ合っているのですからあなたはもう

リオンであることは間違いないでしょう。2つ目の質問ですが、あなたがリオン15代目として

生きる事のなかで求める真理は何か、という事です。お答え願えますか。>

(はい、このリオンという名を受け継ぐ事で与えられたチャンスと名誉で平和を世界に求める

これが生きる意味です。それを心に受け止めながら世界を知り、どうすれば平和にたどり着くか考える事が真理へと導いてくれる道でしょう。)

<15代目、あなたが初めてです。自らの真理へと導いてくれる道を自ら見つけ出すことを

やってのけられたのは。………14代目はもう少しで見つけられそうでしたが。>

その時、リアンビルの脳裏に、最後に見たリオンの悲しそうな笑みが浮かんだ。

(アポシオン、………あなたなら分かるでしょうか。リオン先生が運命といって自ら

終わりを決めた事が何の為か。)

<信頼を、絆を信じる為です。>

「えっ———？」

リアンビルは思わず声に出してしまった。そもそも予想がつかない答えをぼんやりと予想していたのだが、あまりにも単純で奥深い答えだった。

<信頼を担う精霊が宿る剣には赤い宝石が付いています。バロシオンに尋ねて御覧なさい。

信頼は、誰のためにあり、それをお互いでし合うためにはどうすればいいのか。>

アポシオンはそう伝えると消えた。リアンビルは『真理の剣』を丁度いい鞘に収め、『信頼の剣』を手に取った。『真理の剣』より重かった。

【第2章1】死と剣と精霊（後書き）

どうも笹川莉瑠です。少し解説的なものを今回載せたいと思います。フェブリーヤ家は代々茶色の瞳なんです、リオンの名を受け継ぐ者のみ碧眼なんです。

本文内に書きたかったんですが、なんとなくそれがわかるくらいにしか表現できませんでした。すいません。では、続きをお楽しみくださいよう。

【第2章2】信じるよ

リアンビルは『真理の剣』と同じく、剣の柄にはめ込まれた赤い宝石に手をかざした。

すると、今度は20代くらいの美男子が現れた。金髪に金色の瞳で顔が整っている。

＜僕は信頼を担う精霊バロシオンです。．．．．ええ、15代目よ。焦らずとも僕にだって

アポシオンにだって分かっておりますとも。

まず、信頼は誰のためにあるのかですね。それは自らの為です。

信頼は自分と相手を

信じる事ができなければ一方的に信じるだけになってしまいます。

簡単に例を挙げますね。

あなたが自我を持った剣を手に行っているとしましょう。己のみを信じていれば、自我を持った剣はまさしく両刃の剣です。自我の剣はあなたの意のままに振るう事ができなくなります。

今度は、ほとんど可能性が低いのですが挙げておきましょう。己はいまいち信じる事が出来ないが、剣は強いので信じているのであれば、今のうちには自我の剣はあなたのいうとおりに動かすことが出来すがいつの日か剣はあなたを裏切ります。

そしてお互いが信じあっていたいれば、一時はあなたに任せ一時は剣に任せるといった良い連鎖へと繋がっていきます。＞

バロシオンは一気にほとんど息継ぎをしないで話した。リアンビルはよく意味が分からなかった前半部分だが、例を挙げてくれたので分かる事ができた。

（バロシオン、ではどうすれば信頼できますか？）

＜ある程度の間、一緒に過ごしていれば個人差はありますが信頼はできます。旅をするなど、

一緒に闘うなど、修練を共にしたりしても、絆は深まりますよ。>
(・・・・・・リオン先生は絆を信じるためにあんな事をしたとア
ポシオンは言っていました、それってどういう事なのですか・
・・・・・・?)

<きつとそれはあなたを今までの先代達を超えるリオンであつて欲しいからではないでしょうか。リオンという名前の称号は戦えなくなるか、戦士を引退するかでしか代を変えることができないのです。だから、自ら・・・・・・。>

「だから、何だつて言うんだよ!?俺に譲る為に命捨てなきゃなんねえ称号なんか要らないんじゃないのかよ!第一絆とか信頼とか、戦いに何が関係してるんだよ!?!」

リアンビルは、いやもう15代目リオンは自分があっちへ逝くか老いて剣が握れなくなるまで
リオンとして生き続けねばならないことを叫びとは裏腹に悟っていた。

<15代目、それは戦う時の心の支えとなり、助けとなり、本来の実力を発揮できない時の
頼みの綱になります。仲間も信頼できる友も部下も肉親も捨てた、何もかも捨ててしまつて

負けてもどうにもならない相手がいるかもしれません。相手は何も守る必要など無いから、と

言っていて果てしなく強く、あなたが挫折そうになるかもしれません。しかし、あなたに絆が、

信頼が、誰かとの間にあるならばあなたはこの世で最強の戦士となりうるでしょう。>

バロシオンがそういうと、幻影は消えた。リオンはひどく混乱していた。

「・・・・・・どういふことなのか、さっぱり――。」

言いかけた時、武器庫に誰かが駆け込んできた。——リオンジ
アスだった。

「おい、なんでリアンビル。ここにいるんだ？」

「えっ……ああ、リオンジアス。先生に剣を持っていきな
さいって言われたんだよ。」

言い訳にほぼ近かったが、事実だった。

「何処に？」

「旅へ……出るんだ。」

これは間違いなくウソだった。

「何でまた……旅に出るんだよ。」

「強くなる為さ。心も身体も強くなって、鍛え上げてリ……」

「リオンは、あつ」と思い自分で口を塞いだ。

（鍛え上げてリオンの名に恥じない生き方をするんだ、といいそう
になっちゃった。リオン先生 や精霊たちにはそんな事言われてな
いけど、リオンジアスには、村の人には朝知ってもらった方がいい
に決まってるさ……）

「鍛え上げてリ……何？」

「リ……オン先生に負けないくらい……えっと、まあ強くなり
たいって事だよ」

苦笑いしながら答えた。リオンジアスは特に気にはしていなかった。

「あつ……ねえ、それよりリオンジアスは何で此処に？」

「えっ……あつ、まあ……そのあれだよ——。その—
家出。」

「へえ、珍しいね。理由は？」

立場が逆転した！

「……ん、そのだな。血の濃さだけで軽蔑するのが嫌になったんだよ。お前に関することだしさ、何かその……言いづらかった。特権がリオンの名を子孫につまり血縁にしか譲れない様にしたのは偽の奴が現れない為なのに……さ。」

その後は聞かずとも分かった。それがリアン（疎遠）を嫌う理由だから。

「いいよ、ジアス。俺は、お前の言葉信じるよ」

「ビル……！ありがとう。そう言ってもらえて俺、嬉しいよ。」

ジアスは瞳に涙の粒をためながら、自分の手荷物から小さな紐の付いた鈴を2つ取り出した。

「それは？」

「これ、ルーンマスターっていう魔導師がアイテムに魔法をかけてあるいは魔力を込めた

ルーンアイテム。この鈴は『魔鈴の絆』ますずのきずなっていうんだ。」

「魔鈴の絆……？」

「鈴を口の中に入れて同時に舌で鳴らしてみてくれないか？そうすれば俺達の間には絆が

出来上がる。俺の手を握って。」

リオンは無言で従った。手渡された鈴を口に入れて、ジアスの手を握った（握手するようにでは

なく腕相撲をする前に机無しで握り合っているみたいだ……）。

そしてアイコンタクトで2人は同時に鈴を鳴らした。

リリンツ

握り合った手に真つ白い光が集まり始めた。ぱあっと光がはじけると握った方の手の親指に

紐の跡のようなものが残った。

「この跡みたいのは何？」

「これは絆の証。もし、俺を裏切るような行為をしたらそこから壊えそ

疽するよ（笑）」

「え・・・・・・・・。ね、ね、ぜってえ裏切らないから外してくれない？」

「あははははっ、無理だよ。いますぐなんて、さ。少なくとも心で信頼してれば、スパイとして

動いてたって壊疽しないから安心して。」

「んなこたいったって・・・・・・・・。」

2人の距離はぐっと近まったようだった。

「ジアス、行くあてあるのか？」

「え、ああ。親戚ここに住んでるから、放浪するかもね。」

「だったらさあ・・・・・・・・ヒーディオンの犬になるか？」

「え、軍兵に？」

「実は先生から軍の世話になれって言われてるんだよ。」

「いいよ、付いてく。ビルよろしく。」

ジアスはリオンに手を差し出した。リオンはためらうことなくその手を握った。

その時、離れのほうがボウツと火が上がった。（燃えているのは離れの近くの花壇だろう）

「リオン先生・・・・・・・・。」

「どうして・・・・・・・・？」

「俺、実はリオン先生が・・・・こうなる事知ってた——。」

「どうして、止めなかったんだよ!？」

「止めたさ。けど15代目を信じるためにこうするんだって言うていた。」

「15代目は誰なんだよ・・・・・・・・？」

「——俺だよ」

リオンの青い瞳が一層深まった。

続

【第3章1】16歳の

「陛下、わたくしめが本日より名誉ある陛下御一家の外出及びお勤めの際の護衛となりました

ビリー・ヘンリルで御座います。なにとぞ御命令をお下し頂きますよう。」

リオンは偽名を名乗って、マルス王にひざまずいていた。マルス王はヒーディオン国王だ。

「ほう……。そなたが、ルーキーの癖に生意気で才能に恵まれて性格がお調子者の、ビルか。」

「おや、陛下。それはわたくしめの陰口で御座いますか。どなたからお耳になされたのかは存じ上げませんがその名で呼ばれますと、大変面倒でございますのでただのビルで宜しいかと。」

「はっはっはっは……。噂通りの口ぶりじゃのう。キャラン、こやつは噂どおり面白いの。」

マルス王はキャラン王妃に笑みを浮かべた。といってもほとんど口ひげで笑っているかどうか定かではなかった。

「そうですね、あなた。これで外出時に飽き飽きしなくて済みますわ。移動の際に声をかけて頂けますとわたくしたちも安心できますわ。ウエナ、ビルさんにご挨拶を。」

「はい、お母様。」

そういつて、国一いや東大陸で一二を争うぐらいの美少女が自分の座から立ち上がった。

「ビルさん、心から歓迎いたしますわ。母が言ったように、わたくしたちはいつも孤独を感じております。そこへあなたがいらつしゃって、とても嬉しいですね。わたくしがウエナ・ヒーディオンで御座います。どうぞ親しくして頂けますように。」

ウエナ王女はにっこりと微笑んだ。まさしく絶世の美女とは彼女を

指す言葉なのであろう。

「では、これで失礼させていただきます。」

リオンはそういつて深々と礼をすると立ち上がって、謁見の間を後にした。

謁見の間に行く廊下にはジラスがいた。壁に寄りかかってリオンを待っていたのだ。

「よう！リオン……じゃなくてっビル。」

「あのさあ、いい加減慣れない？ジラス。王女様がすっげえべっぴんで興奮してたのを

一気に冷めさせるのやめてくんない？お前はバケツに入った水かつ」

「ごめーん。お前の目見てるとリオンって感じがビンビンするんだしさ。」

「まあ、いいよ。大声で叫ばなかったらね！……それよりさ、この大佐とか着てそうな服重いんだけど、脱ぐの手伝ってくんない？」

「おまつお前まさか此処で着替えるつもりじゃないだろうな？！」

「えっ……ああ、ここ俺の部屋じゃないんだっけ。あちゃー。」

「部屋の前にここ廊下だしw」

ジラスはため息をついて手を額にあてた。そしてふと、1年と50日前のことを思い出していた（2章）。

『えっ、お前がり……オン？』

『どうして先生が俺を選んだかは知らねえ。』

『でも、俺は驚かないよ。』

『何で？実力的にジラスとかブランとかシェイさんとかのほうが上なんじゃないの？』

『もう、遙かにお前の方が上だよ。お前の努力は皆以上だったし、天性の才能もお前はちゃんと

持つてる。だから、皆のなかではお前が一番いいなって思ってたんだよ。』

『ジラス………。俺もお前も強くなっていつか——。』

リーディアでは葬式は1年と50日経った日に行われる。遺体は早いうちから燃やして灰にして

壺に保管し、葬儀の時までなくなった人の部屋に置いておく。丁度今日が葬式で、陛下ご一行

はその葬儀に参列する為に護衛が必要だった。

リオンの部屋まで来た。リオンは豪華な紋章やらなんやらが付いた服をジラスに手伝ってもらいながら脱いだ。今度は黒い軍服に着替えた。ジラスはもう着ていた。というか普段身につける

軍服だったからである。しかし、ジラスは護衛としてついていけなかった。

「先生の葬式が護衛として出る羽目になるなんて思っても見なかったな。」

「いいな、リ……じゃなくてビルはさあ。俺葬式出れないし。それに王の護衛って結構出世したなあ。」

「でも、これ以上は出すぎたまねはしない。出世もしない。」

「リオンが生きる意味ってやつ？」

「そう。それを常に意識してないと『真理の剣』は握れない。」

「あと、行く先でどんな奴でも血まみれにするなよ。」

「人をあやめるのは最小限にする。それと、『魔鈴の絆』の鈴の音、これ小さく出来ない？」

「俺から離れる以外にだったら無理！」

『魔鈴の絆』は互いの距離が有る程度はなれるとリンと音がし、離れるにつれて音は小さくなる。戦闘や危険が近づくと凄いいでシヤランッシャランっと大きくなる。

「ああ、そうですか。ジアン・マクシアくん。」

無表情でぶすつとした声でリオンは言った。名前はジアスの偽名だった。

フェブリーヤの名だけで出世してしまうため、偽名を使った。なんだかんだいっても、その名は有名で、出世すればするほどその名は重みを増してきて

バレやすく、打ち明けにくくなっていく。出世すれば一国に加担する↓平和を世界に求める割に世界征服なのか↓世界戦争勃発↓何年も戦争は続き反戦争派が反乱↓各国内は大荒れ状態、国境近辺は他国との小競り合い・・・と負の連鎖が続いていく。なので偽名なのだ。

フェブリーヤ家が集まりに集まった故郷の村はコードメモリア城とそうは離れていなかった。

馬で駆けて行けば数時間程度で、ただ人の出入りや活気が少ないので村だった。

コードメモリア城は王が住まれる城で最も装飾が多い。

陛下御一家はコードメモリア城を御出になられた。

「陛下、この先道が荒れておりますゆえお気をつけ下さい。」

「隊長、そんなこといっても対処しようがありませんよ。」

「そうはいつでもだな・・・ビル。そういうのが決まりなんだ。」

「それじゃ堅苦しくて飽きてしまいますねー。ねえ、陛下。」

「ほおっほおっほお。これなら余も楽しい旅路になりそうじゃのう。」

「

陛下御一家はにこやかに笑っていた。ビルも冗談ではなさそうな面白そうといった目つきをしていた。ほかに護衛としていた者と隊長は苦笑いするしかなかった。

（これが噂のビリー・ヘンリルか。コイツと手合わせした騎士たちの間ではコイツはリオンだとかいう噂も流れているらしいが・・・

・・・この性格と商売上手そうな口調でリオンは務まるのか。

それに、リオン・フェブリーヤであるならばなぜ一国に加担するのだ？リオンは平和のために

生きているそうだが・・・。。やはり謎は解けん。早くコイツの正体を明かしてレギオス様にお伝えしなければ・・・。。)

マルス王御一家の護衛についていたアルファス・メーギストはヒーデイオン国の敵国リスベス

帝国の間諜だった。いわゆるスパイだった。アルファスの仕事は王家御一家のニユースを

調べる事と、軍の中の危険人物を調査・あるいは潰す事だ。今はビルについて調査を主にしていた。

しばらくして村の門までたどり着いた。門には黒幕が張ってあった。門を抜けるとリオンは念じた。

(村の人が俺を見てもリアンビルだ！って叫びませんように。ジラスのお母さんがジラスは何処にいるのよー！って俺の肩を揺さぶりながら泣きじゃくりませんように。)

村は静まり返っていた。本当なら、王家を歓迎する人が何人かいるはずなのだが・・・。

「陛下、どうしましょうか。人気ひといけがありません。」
「むう・・・。」

「あの、陛下。実は・・・わたくしはこの村で生まれ育ったので、様子を探ってきましようか？」

そう言ったのはアルファスだった。リオンは目が飛び出そうになった。

(まっまさか？アルファスさんは知らない苗字だけど・・・。。俺も付いていくか。)

「あ、俺もついていっていいですか？」

「いいじやろう。のう？ヒルトン隊長。」

「ええ、まあ……では村の代表と話をつけてこいよ。」
「はっ。」

2人はビシッと敬礼をすると村の中心部へ向かった。

「最強とよばれるリオンの弔いか……。」

マルス王は1人でつぶやいた。

「あのう、アルファスさんって本当にここで生まれ育ったんですか？」

リオンは嫌味に聞こえない程度の声で聞いてみた。

「ん？あれ？本当の事を言っと……。」

アルファスは声を小さくしてリオンの耳元で囁いた。

『うそ』

「そうなら、なぜ？」

「ある奴を調べる為さ。」

「15代目を？それとも誰かの勧誘？」

「……気づいていたのか？俺がリスベス帝国のスパイだつて。」

「ああ、自分でばらしちゃったか。そう気づいてたさ。それくらいも出来なきゃ名が廃^{すた}る」

「そんなに高貴か？お前の名前。」

「誰の名前だつてそうさ。ただひとつ誇れないのは何も出来なかった頃の名だな。」

「ふっ……まあいい。それよりお前が相手した奴らでどんな噂があるか知ってるか？」

「言えば？」

「お前の圧倒的強さの秘密は、お前がリオン・フェブリーヤ15代目だからっていうな噂だよ。」

「そんな訳あるわけ？俺の瞳は青色じゃないだろう？」

「今はそうさ。だが、門番の奴が言うにはお前が今持ってる2つの

剣を握るとお前の目が深い

青色に変わるそうだ。」

「なっ！？誰がそんなでたらめを?!」

「誰がつていう話じゃないさ。で、お前は何者なんだ?」

「それは自分で掴んでもらうしかない。さ、村の代表を見つけましょう? アルファスさん。」

「・・・・・・ああ。」

リオンの口調がガラリと変わったのに戸惑いながらアルファスは歩みを速めた。

村の中央広場にある14代目の屋敷の向かい側に村役場があった（というかりオンがそこへ仕向けた）。役場へ入っていくと会議をしている様だった。

「14代目の遺体をどうやって部屋から出しますか。」

「そもそも15代目は誰なんだ?」

【第3章2】才能開花

「15代目がいなければあの部屋を開ける事が出来ない。15代目を探さなくては……。」

「あのう……。会議中申し訳ありません。ヒーディオン国王御一家がご到着されたんですが」

「人がないのでここまで入ってきましたが……。」

「なんだとっ!? 国王がいらっしやってるのに気づきもしないなんて……。。」

「それより、14代目の遺体がまだ部屋の中にあるってどういう事ですか?」

「えっあの……。その、あなた方は?」

「申し遅れました。わたくしアルファス・メーギストといいます。」

国王陛下又は御一家の護衛に まわっております。隣は——。」

リオンはヤバイと思った。

（俺の声を村の奴らに聞かれたら、俺だってバレるに違いない。）

実際はバレそうになるどころかほとんど気づかないだろう。1年以上の間があるし、変声期で 声に低さがよくかかっている、姿を見るまで気づけない。

「新しく国王陛下御一家の護衛を承りました、ビリー・ヘンリルです。」

といったアルファスが、リオンの背中を叩こうとしたがリオンはとっくに役場をでて14代目の屋敷 へと向かっていた。

リオンは『真理の剣』を鞘から抜いた。そしてアポシオンを呼び出した。

（アポシオン、姿を消す魔法を使えますか?）

くええ、もちろんです。あなたが望んで呪文を唱えればいつでも。

さあ、14代目の元へ向かいなさい！>

リオンはもう走り出していた。軒道には春に咲くポリアの花が満開を迎えていた。

約1年前、通った道をほとんど通って、屋敷までたどり着いた。

そして呪文を唱えた。

「我、リオンの名を受け継ぎし者。己の使命をはたさんとす。使命へたどり着かん道を通る

為、我、魔を使わん。己の真理を力に変え、我を生きんとする者の目からみえなくせよ！

エリオシャン 姿を消せ！」

すると波動のような物がリオンの身体を包み込みリオンは生きとし生きようとする者からみえなくなった。

『よし、これでオツケー。早くリオン先生の下へ行かなくちゃ！』

リオンは誰にも気づかれないうちに屋敷の中に入った。

いつか通った廊下を次々通り、いつか涙した部屋の前に来た。

リオンは普通に戸を開けようとした。しかし、何かにつつかかっているようでびくともしなかった。リオンはふと思い当たってバロシオンを呼び出した。

「バロシオン……」

<15代目、これはあなたと14代目の絆を妨げる魔法がかかっています。ですがこれは特殊ですね。第3者が解ける場合が多いですが今回は、絆を持つ者のどちらかが解くようです。>

村を出てから様々な事を学んだりリオンは特に魔法学に興味を持った。『初級から上級までの呪文集』という本にあった、初級の『オルフオン又 消えよ！』という消失魔法の呪文を呟いた時、周りにあった本の山が消えた。いや、視界から消えただけで背後に本が移動していた。

つまり、【剣の才能だけでなく魔法の才能もあった】ということだ

った。なにより本人が特に驚いた。このリーディアは剣と魔法がある世界であるが圧倒的に魔法の存在は薄れつつある。

さらに、剣の名手と呼ばれる名誉ある称号を受け取った剣士や戦士はあまり多くなかった。

そんな中、リオンは奇跡の人だった。才能に才能が重なり、努力が重なり、どんなに発達した

遺伝子科学でもこんな偶然を奇跡を引き起こす事なんて不可能。

そのうちリオンは精霊と共に魔法を覚え（ジラス以外は誰も知らない）、精霊と一緒に使う魔法も編み出した。そして、魔法をかけるだけでなく解けるようにもなっていた。

（これはどんな構造なんですか？バロシオン。）

<扉は腐らないように加工&魔法がかけられた木材で出来ています。きつと『ギーワス 新しくせよ！』の魔法でしょう。きつと絆を妨げる魔法を解かなくては部屋に入れません。これから言う 事に従ってください。15代目。>

（はい。承知しました。）

<まず、戸の取っ手に手をかけて、かけた方と反対の耳を戸に当ててください。>

すると、不定期的な雑音が聞こえた。

<聞こえた音に波長を合わせるように手から力を出すようにしてください。そうして、目を閉じて 見てください。何か見えますか？>

いつもならまぶたの裏は闇に包まれているのに、いまは白い光のようなものが一直線に扉へ 向かっていてさえぎるような物は見えず、扉の向こうまで光は続いていた。

<それがあなたと14代目をつなぐ絆です。もう妨げるような物はありません。ずっと部屋に 入れるでしょう。でも待って！>

バロシオンは初めて敬語を乱した。リオンが部屋に入ろうとしたか

らだ。

<15代目、入る前に注意が・・・・・・・・。>

(えっ？まだ何か？)

リオンはちよつとむっとしていた。

<この部屋の中はリオンの名を受け継ぐ者の魔法によって、14代目が息途絶えた時から時が

止まっています。そこへあなたが入れれば急速に部屋は時を今と同じにしようとし、遺体は腐り始めるでしょう。だから——。>

(入ったら直ぐたいまつでも放り投げると？)

<いえ、他の者に部屋の外に出してもらうのです。しかし、そうすればあなたが名を隠す意味が

なくなります。>

「——でも、俺は・・・・・・・・。俺、ここを出てから強くなれましたか？」

<はい。心身共に強くたくましくなられ、頼もしい限りです。でも、それが何というのですか？>

「もう、軍に名を隠すのをやめるさ。軍を辞めて平和のために何が出来るか考えてみようと思

います。まあ、なるべく公に発表するわけじゃないからおおっぴらには名を公表してもらい

たくないけど。」

<さ、どうやってこれを他の人に見つけてもらいますかね？>

(そうですね・・・・・・アルファスさん——リスベス帝国の間諜にやってもらいますか)

*

一方、こちらはコードメモリア城——。

ジアスは、だんだん『魔鈴の絆』の鈴の音が小さくなっているのを、軍所有の書物を読みながら

聞いていた。そして次のページをめくった時、鈴が激しくシャラン

ツシャランと鳴り出した。

ジアスはびっくりして本を落としてしまった。

（！？なんだ？あっそうか。魔鈴ね。ってじゃないし！リ……
・ビルに危険が近づいている？）

『魔鈴の絆』は便利だが相手の危険しか教えてはくれない。便利というより相手を深く信じていたら逆に心配になる。

（なんとかしてメッセージを送れないだろうか？危険が近づいているって）

馬でも借りられないかと、ジアスは馬小屋まで行ってみることにした。

馬小屋は軍兵の宿舎の裏にあり、裏門が近くにある。

ジアスが馬小屋に入ろうとすると裏門に何人かの人影があった。

「隊長」。今度は何処の盗賊団を懲らしめにいくんですかあ？」

「おい！何度言ったら分かるんだ？無駄口叩いてねえで隊長の話聞けって！」

「さ、隊長殿話の続きを。」

「えーっ、今日は最近のようにこの辺りの治安を守るパトロールではなく、違う事をする。」

よっしゃあ、と隊員から嬉しそうな声が上がる。

「で、それはなんなのだ？隊長殿。」

「そうせかすなって、リコール。今から話す。今日はどっからも依頼はないし、最近われわれが

盗賊共をぶったおしているので盗賊団や盗賊ギルドは動きを見せていない。なのでフリーなのだが……」

門の辺りで話していたのは、去年の冬の時に14代目を奇襲にあって襲われたと、見せかけるよう本人より依頼され、実行し、リアンビル（現在のリオン）とリオンジアスを軍に入れる手引きをした、
れた、

ヒーデイオン軍突撃部隊だった。ジアスは知り合いだと分かった、
ほっと胸をなでおろした。

「なのだが・・・?!」隊員その1がさいそくする。（隊員その1
つて；；）

「今日はいつかの依頼主の弔いだ。我々も葬式に出席したいと思う。
」

「ええっ！でも王様御一行がもう行つてて俺らバレないですか？」

「御一行の中で俺らの事を知ってるのは護衛のビルしかないだろ
う。」

ジアスはなんとなく、声をかけなくてはいけない気がした。そこで
物陰からでて、近づきながらかけた。

「あの・・・。。。」

「おや、ジアンじゃないか!？」

「マクシアン隊長お久しぶりです。」

「どーもつて。ジアン、偽名俺と重なるのやめてね!。」

「えっ、いやパクるつもりはなかったんですけど?」

「まー、いいや。何か用？」

「あの、まだリ・・・ビルが15代目だつていうのまだ、秘
密にしてもらえますよね。」

「もちろんだ!なあ?」

『おおおお!』

隊員は当たり前だとばかりに大きく頷いた。

「有り難う御座います。」

「でも、それいうだけに来たわけじゃあるまい?」

「はい。ビルに伝えたい事があるんです。直接伝えたい事が。」

「そうか、じゃあ、われわれと共に行こうか。」

「お言葉に甘えて!」

＊

「アルファスさん。」

「ん？あっおい！お前何処行つてたんだ？」

「ちよつと急に腹痛がしてですね、トイレ探して用を足してたんです。あ、それよりもあのリオン・フェブリーヤの屋敷行ってみませんか？」

「はあ？王様に伝えるのはどうするんだ？」

「それをやってからですよ。アルファスさん、宿は紹介してもらったんですか？」

「お、おう。この村の外れにある教会のすぐ近くだ。」

「じゃあ、行きましょう。」

【第3章3】陰謀の裏表

2人はマルス王の元へ向かった。その間無言だった。

「・・・・・・して、どうなったのじゃ？」

「はい。村役場へ向かったところ、村人達は会議をしておりました。会議の内容は、15代目が誰かわからなく、14代目の遺体が村人では出す事のできない所にあり、これでは葬儀ができないということです。」

そこで、わたくしらが途中をさえぎって陛下のご到着を連絡し、葬式のスケジュールを彼らに聞いたところ、宿で1泊していただければそのうち連絡する者を使わすといわれたきりで御座います。」

アルファスが一気に喋った。

「ふむ、では案内してくれ。」

「はい。」

アルファスは返事をしたものの、心配そうにリオンの顔とマルス王の顔を見比べていた。リオンが仕方なさそうに立ち上がって王一家の乗った馬車の前に行った。

「こちらです。」

協会の近くにある宿とはヤコブ神父の家・・・というか別荘だった。ヤコブ神父は

「この国の王様をこんな薄汚い家に入れるなんて恥ずかしいにも程があります。光栄です。」

家はなんとかできませんが、食事はなんとかできるでしょう。さ、さ、護衛の方もお疲れでしょう案内いたします部屋でどうぞおくつろぎ下さい。」

と、ニコニコ微笑んでリオンにはきづいていなかったように振舞っていた。

けれど、護衛の人を部屋に案内する時

「おや、あなただけ一人部屋になってしまった。皆さん、三人以上で一部屋なのですね。」

そういつて離れたシングルベットのある部屋へ導いた。

そして、リオンの耳元に囁いた。

「リアンビル君、また祈りにおいでなさい。」

リオンにとってそれは心のもやが晴れたように感じた。

リオンは、食堂にいた。護衛の人はなぜかここに集まっていた。

「あの、なんでここにあつまってるんですか」

「いやあ、おれはしらんなあ」

「何かメシでも出るのか？」

「時間帯的に違うだろう。」

「おやおや、皆さん何かお話ですか？」

ヤコブ神父が厨房の方から来た。

「お話なら構いませんが、用がなければウチの見習い剣士達と手合わせ願えませんか。うちは14代目が亡くなってから強力な先生がいなくてね。」

見覚えのある人が先頭に何人が食堂に入ってきた。

リブシア……」

入ってきたのはかつての『剣の習い』、『剣術の習い』にいた子らだった。

リブシアを先頭に丁度護衛の人数分連れてきた。

リブシアはリオンを一目見ると微笑んだ。知っているとばかりに。

「ヤコブ神父様、本当にこの方達が相手をしてくださるんですか？」

国の王の護衛という腕前の？」

「どうかね？皆さん。もしよければいいんだが？」

「いや……、我々も葬儀がいつ行われるのかわからないと動きようがないんですよ。なので、伝達がくるまでなら、いいだろ

う？みんな？」

「もちろん。」

「子供らがどうなってもしらねえぞ。」

個々に皆同意した。リオンは小さく頷いただけでバツチリ賛成というわけではないが。

「おお、ありがたい。では広さの十分な場所へ案内なさい。リブシア君。」

「はい」

リブシアはそろそろと20名弱を連れて、あの対戦場へ向かった。ほとんどあの時のままだ。

「えっと、護衛の皆さんの中で代表の人出てきてもらえますか？」

リオンは護衛の人を見渡した。この中ではアルファスが一番年長だ。なのでか、皆の視線がアルファスに注がれていた。アルファスは前に出て、リブシアと並んだ。

「では、代表の方。力が強い順に並ばせてもらえますか。こっちも例の順で並んで！」

リブシア方はさっと並んだ。見るとシェイは居たものの、ブランは居なかった。

（俺、絶対最後だよなあ……。シェイさんと全力勝負したかったなあ。）

リオンはため息をついた。シェイは1番前なのだ。リブシアはいつの間にか2番目だった。

アルファスはたぶんこんな具合だろうと適当に並べておいた。自分はモチロン1番にして。

ついでにリオンを最後にしておくのも忘れないで。

「では互いの相手の顔を覚えておいてください。では好きなようにウォーミングアップしてください。」

10分後に手合わせを御願いますね！」

そういうとリブシアはリオンに向かってきた。シェイもそれに続く。

「リアンビル。こっちに来いよ。」

「リブシア、シェイさん、俺の名前叫ばないでくださいよ。」

「神父様から、聞いたよ。お前が偽名乗ってるくらい。」

「俺からジアスの居場所を聞きだしたいだけだろう?」

「それもある。けどほかにもある。」

そういつて2人は人気のない建物の跡に来た。シェイと戦ったところだ。

「15代目はお前とジアスのどちらかだろう?」

「ああ」

簡潔に聞かれたことだけに答えた。

「ジアスはお前と一緒に来たのか?」

「いや。見ただろう? 護衛として俺と一緒に来ていない。後からこつそりでもなく。」

「15代目はお前か?」

「——ああ」

「……そうか。じゃあ、先生の体を出すの協力してくれるよな?」

「もちろんだよ。けどな、ちょっと耳貸してくれるか?」

手合いは終わった。リオンが対戦した子は今年『剣の習い』に入る年だった為知らない子だった。(そのシーンは試験とかぶるんだから、ちょっと載せません)

「アルファスさん」

「なんだ、ビル?」

「この村の子達に言われたんすよ。アルファスさんなら、開かずの部屋を開けてリオンの体を出せるだろうってね。屋敷の場所教えてもらったんで行きましようよ。」

「そつそつか？行こうか。」

（よしつ。第一段階突破。第二段階突入だあつ。）

リオンはアルファスを屋敷へ連れて行つた。

「ここがリオン・フェブリーヤの屋敷かあ」

「そうですねえ、いかにもフェブリーヤ家の頭首つて感じの屋敷ですネ。」

リオンは初めてこの屋敷を見たときに思つた事を思い出しながら言つた。

その頃はよくため息ばかりついていたものだ。

（今も、昔も変わつてない気がしてたのに……。やっぱり変わらないのは存在だけ——。）

「その開かずの部屋つてのは何処にあるんだ？」

「本棟よりも小さな離れです。此処をつつきつていけば鍵の付いていない扉がある……はず。」

「そうか」

門の外から見えづらかつたのか、門の外からでは分からないような光景だつた。

庭や建物が綺麗にされていると思いきや、寂れた状態に陥っていた。

「仮にも元頭首の家だろ！？……こりやないぜ。どんだけ嫌われてるんだ？」

「14代目は、彼女は、一人前と認められた人の中で一番の若手だつた——。」

「ほおう……？よく知つてるな。というか知つてて当然か……」

「……ほら、ここがたぶん離れですよ。」

（上手く隠すもんだ。16か17くらいのこの坊主、かなりのやり手か……？）

2人は離れの中に入ると、予想通り埃が立ち込めていた。

「部屋つての場所は聞いているのか？」

「……いや、ここにあるとしか聞いていないです。」

（これも、計画の内。アイツには時間を稼いでもらうか。）

そうリオンが思った瞬間、視界が暗闇に包まれた。

『なっ！？なにこれっ！』

声にならない。それはなぜ？

問いだけがリオンの頭の中にこだまする。

闇が支配する世界を見渡してみた。小石一つ見当たらない。

（まず、ここはどこなんだ？俺が想像した世界か？それとも俺の心の中の闇の部分？猫の目ような程、よく見える。だが俺の身体は――

――ないっ？実体が無いとでもいうのだろうか……？だから声が声にならない。）

ただ、リオンは前方を見ているしかなかった。その時、ぼんやりと何かが近づいてくるようだった。

近づいてくるに連れてそれは、信頼する誰かの姿のようだった。――

――ジースだ。

『なんで、お前が……！？』

『ビル……前……言い……事が……る』

なぜか伝わるようだった。

しかし、ジースの言っている事が聞こえずらい。

『えっ？何だつて？』

『お前……危険が……ついて……』

『危険？』

ふつと視界から漆黒の闇が薄れ、埃をかぶった肖像画がみえてきた。14代目の絵だ。

（なぜ先生の絵が？この絵が見えるん……！ここ、先生の部屋！

？)

あたりを見渡すとあるはずの彼女の身体はなかった。引きずられたような跡をみれば誰かが出したのだろう。しかし、そんな悠長な事を考えている暇はリオンになかった。

「一体誰がこんな所に？」

「こんな所？お前の先生が最後に居た場所じゃないのか？」

あざ笑うかのように見下した態度。アルファスだ。リオンはむかつて立ち上がって剣の柄に手を伸ばそうとすると、！自由にさせられていないことがわかった。

「フフンツ！リオンともあろうやつが氣い失ってるなんて笑えるなあ。」

「お前に何がわかる？！それに誰がリオンだって？」

「裏切りつてのはスパイ業やってら、当たり前前のリスクだろ？」

アルファスの背後からリブシアが出てきた。

「まあさか、君が15代目だなんて。思っても見なかったよ。」

「なっ！？リブシア、お前……。」

「昔は誰よりも対等に扱ってくれたのに」って？甘いんだよ！！お前！！僕が昔と変わんないってどうやったら断言できんだよつ！！それになあ、シェイさんや神父様はしらねえけど、他の奴らはお前がリオンジラスをそそのかして連れて行ったと思ってるんだ。つまり、お前が裏切りもんだ！！」

リオンには口をぽかんと開けたままにするほか無かった。

「ジラス……？そういえば、お前と一緒に軍に入ってきた奴はジアン・マクシアつつう名前じゃなかった？」

「やつぱり！お前だつ！お前が先生をやったんだあつ！裏切り者はお前なんだよ。ふふふつ、あはははははつ。裏切り者はこの僕が倒す。裏切り者らしい最後にしてやるよ。」

やつのことでリオンはぼうっとしていては倒されると思い、動き始めた。

腰にさしたままの『真理の剣』の宝石に手をかざし、アポシオンを呼び出す。

（アポシオン！バロシオンも呼んでください。）

精霊でも、剣に宿る精霊を呼び出すことは出来る。『信頼の剣』は肩掛けタイプの鞘に収まっているので今の状態では自分の手で呼び出せない。

アポシオンは空中にふわりと浮かびきしやなその手でバロシオンを呼び出した。その速さはほぼ、1秒。アポシオンにリオンが頼んでからものの1秒しか経っていない。

（2人で俺のなわを切ってください！）

2人の精霊はふわりとリオンの前に現れた。リオンは2人の方へ拘束された手を差し出した。

2人は手に近づくと、縄を2人ががりでほどいた。

（ありがとう。2人共、魔法を所々使うから呪文喋り始めたらフオー！御願いますね！）

「なっなぜだ？！誰がその縄をといた？」

「ごちゃごちゃ喋ってんじゃねえ！俺を裏切り者としてふさわしい最後を迎えさせんじゃねえのか！？」

リオンは2つの剣を抜いた。目が深く広い海を連想させるエメラルドブルーへ変わった。

しかし、その目には怒りの色が伺えた。

「先生をやったのは俺じゃないっ！ただ俺にこの世を去ってもらう為の口実にすぎないんじゃねえのか？もとより、アルファス・メーギスト！お前はいくら使ってた？間諜を増やす為に、裏の情報を得る為に今日の護衛のほぼがお前の息がかかってるんじゃないのか？」

「ははっ！そのとおりだよ。ビリー・ヘンリルことリオン・フェブ

リーヤ！村にいるお前の味方はいない！」
アルファスが狂気にかられたような顔で叫んだ。

【第3章4】魔法の影響力

ジアスは突撃部隊の人と共に村についていた。人気が無いので、1人でジアスは村を見回っていた。まずは役場に向かうつもりだった。

春だというのに冬の寒気がする。そのうち、前方に人影が見えた。村人かと思って駆け寄った。

「あの・・・」

「おっお前・・・！？ジアスじゃないか！」

「えっあつ？シエイさん？」

「お前がなんで此処に？」

「せつ先生の葬式——でしよう？だから・・・」

シエイはちよつと呆れ気味にため息をついた。

「ジアスー。ちよつといいかな？お前さあ、ビル並みに上手く嘘つけない？」

「え、バレてます？ていうかビル来てるのも分かってたんですか？」

「ああ、聞いたよ。ビルから。でも、お前が来てるってのは聞いてないが。」

「ビルに伝えたい事があつて来たんです。」

「そうか。あいつなら、丁度先生の屋敷に入った頃だろう。」

「え——」

その言葉を聞いた途端、寒気が走り視界が闇に包まれた。

闇の中ではなぜか走っていた。自分の体は言うことが聞かない。走っているのなら足音が聞こえるはずなのに音は聞こえない。走るうちにジアスが伝えたかった——つまり会いたかった相手が見えた。

そのうち体が止まった。

『なんで、お前が・・・！？』

『ビル、お前に伝えたい事がある』

思わず口から言葉がこぼれ出た。

でもリオンはジアスの言っている事が聞こえづらいらしい。

『えっ？何だつて？』

『お前に危険が近づいているんだ』

『危険？』

『鈴の音がい・・・』

言いかけた時にはもう暗闇が遠のいていき、だんだん元の背景が視野に入ってきた。

「大丈夫か？ジアス、体調でも悪いのか？」

シェイが心配したような表情でジアスの顔を覗いている。

「え？あれ、俺氣い失つてたんすか？」

「ああ。それより、ビルが先生の屋敷にいるって聞いた途端、顔が青ざめていったんだが何かあった？」

「なぜか・・・なぜか・・・寒氣がしたんです。嫌な予感がします。」

ジアスは立ち上がった。そして、走り出した。

「おっおい！どこ行くんだ？」

「屋敷です！先生の」

「待ちなさいっ！そうはいかないわ」

誰かが呼び止めた。その誰かの声は絶対的な命令のようでジアスは固まった。そして何処かで聞き覚えが有った。

「王女殿下・・・？」

「ご名答ですわ。ジアン・マクシアさん？」

乗馬用の服を優雅に着こなしたウェナ王女が現れる。ブーツが地面に当たる度にコツコツと鳴る。

「なぜわたくしめなどの名を？」

「・・・帝国においての危険分子又は帝国において益が多い可能性の人だからですわ。」

「ウェナ王女、いやリスベス帝国の裏スパイ訓練場の成績優勝なスパイの子供で王夫妻の養子・・・・・・・・リスベス帝国のスパイの頭領！」

「おほほほっ、見事に調べましたこと。わたくしたちのセキュリティはリーディアーなのにそれをかいくぐれた事は評価いたしますわ。」

「ま、それを教えてくれたのはビルだが。」

「あら、そうなのですか。丁度いいわ！彼ならちょうどいいところの真っ最中のはずよ！」

「なにっ！？あんたら、ビルを罠にかけたな！」

「そんな汚い言葉で表現いたしかねない事はしておりませんわ。まあ、あなたがここににいるというのは想定外ですが。」

美少女はその顔に似合わないほど腹黒かった。今やどの顔が本物の彼女か分からない程に――。

「おい、ジラス。聞いてるとお前やビルの立場やばくね？」

シェイは少々戸惑い気味ながら声をかけた。

「ビルの方がヤバイですよ、シェイさん。まんまとこいつらの思惑通りに動いてますからねえ。」

ジラスはシェイにのうのうと答える。ジラスは元々自分の事で緊張した事などないのだ。

「なにをそうのんきにしてくれるかなあ……。まあ、土壇場がちがちになるのよりはマシだが。」

シェイは安心したように苦笑いした。

「おや、となりに居るのはシェイというのですか。手合いの様子を奴に聞いてみると、シェイとやら相当腕が立つようですねえ。」

「少々腕が立つだけであって、リスベス帝国の戦力にはなりませんよ、王女陛下？」

シェイは少し皮肉交じりに言った。

「まあ、こちらにつきなさいとは言ってもむだのようですね。だって、ビル・・・いいえ15代目と言った方がよいかしら？彼の元にいるんですもの。でも、その立場を利用してそれなりの報酬で雇ってあげますわ」

「雇われる気はありませんね。そうだろ？ジラス。」

「はい。王女陛下、先に言っておきますがあなたの背後にいる護衛の方ではシェイさんには勝てませんよ。それに、俺達が2人だと思わないことが懸命ですね。———そうでしょう？マクシアン隊長」

「おうよ。どーも、王女様初めましてですねえ。いやあ、この辺血筋やら裏金やらで出世した奴らばかりだからあんまりお目にかかってないですよねえ。」

「なっ・・・・・！？なぜこやつ等がっ？」

ウェナ王女の背後からヒア隊長を先頭にやってきた突撃部隊はほぼ護衛を倒してきた。

「ほら、ジラス。用あって来たんだろ？早く行け。」

「有り難う御座いますっ！」

ジラスはその場で敬礼を突撃部隊とシェイに向かってすると、くると踵をかえし屋敷へ向かって行った。

ジラスはこれまでに無いくらい全力で走った。遠くの方で剣と剣が受けあう音が聞こえる。

「はあっ・・・・・はあっ・・・・・くそっお！」

（こんくらいで息が切れてる俺が情けない・・・・・。ビルならこのくらい楽に俺の倍の早さで行けた。）

肩で息をしながら歩き始めた。だんだん歩調を速めながら進む。すると、

シャランツシャランツ

と前よりも激しく鈴がなる。これは鈴が予測した危険に今立ち向か

っている事になる。

リリンツリリンツリオンに近づいていく。

屋敷が見えてきた。ジ阿斯は駆け寄った。屋敷は手入れされていない様子で寂れている。

鉄の門を押し開けると背筋がぞくつと逆立った。

（——！？この感覚なんだよ？まるで俺よりもはるかなる高見から大量の剣が降って来るみたいな殺気と、

怖気づいてしまいそうな力量は……まさかビルがつ？！解放したのか？！いかなきゃっ）

無我夢中で敷地内へ入り、離れに入り、あの部屋へ向かう。

「ビルっ！」

「ジ阿斯！？丁度いいや。逃げないように逃げ道塞いでくれる？」

「えっ？ああ。」

14代目の部屋は廊下の突き当たりにあるのでジ阿斯がその場を通らせなければ、逃げることはできない。壁をぶち破らなければ。

「アルファス、お前間違ってたな。ジ阿斯は俺の仲間で、親友で、絆を持つ者だ。あと、リブシアも間違ってるぞ。ジ阿斯に聞いてみる。」

リブシアは気まずそうにジ阿斯の方を向いた。

「あの、ジ阿斯さんはどうして村を出て行っただんですか？」

「父さんの考え方が嫌だった。だから、口論になったんだ。で、家を出た。けど家出つつても行く宛ないからどうしようか迷ってた。ビルに会った。そこで軍に入らないかって誘われたからそうした。」

「家出だつて……！！？僕は、僕は、僕は……どうしたらいいんだ。なんのために僕は今日までこんなことをしてたんだ？先生が報われる為に裏切り者を探して倒す為に今までやってきたのに——。」

リブシアは床にへたり込んだ。

「アルファス、お前だろ。リブシアに偽りの憎しみを植え付け、自分の計画に上手いように利用した。」

リオンはキツとアルファスを睨みつけた。その目には怒りがこもっていた。

「ふふっはははっ、やはりお前はまだ子供だな。自分の利益の為に息子を利用して何が悪い？俺が裕福になれば息子も裕福になるのは当たり前だ。息子の為にもなるんだぞ」

「お前の息子——だって！？リブシアの苗字は母方の苗字だったか・
・くそっ！情報が上手く集まってくなくて腑に落ちないのはこういうことだったのかっ！」

リオンは悔しげに顔をしかめると、目を閉じた。すると、ジアスの頭の中で声が響く。

『聞こえるかジアス？』

『えっ？——ああ。』

『これは精霊の力を借りて絆を通して喋っている。頷くだけでいい。俺に従ってくれ。』

ジアスは自信強く頷く。

『これから強力な魔法を使う。屋敷ごとぶっ壊れる程の物だ。だが広場には届かない。広場に皆を集めてくれ。』

『ビル・・・？』

『なんだよジアス。』

『スパイがしゃしゃり出てきた。突撃部隊の皆が撃退してくれそうだけどそれごと？』

『この村にいる人間全てだ。王とかアイツに洗脳されてて居なさそうだけど一応神父様の家も見えてくれ』

『わかった』

ジアスが同意すると通信は切れた。

「ジアスっ！」

「わかってるってば。リオン！お前の力に押しつぶされないようにするから、お前は・・・死ぬなよ。」
「もちろんだっ！」

＊

「いいのです？わたくしには剣など通用しませんわよ。」
「くっそお・・・。お前、魔法が使えたのかよ——。」
シェイと特攻部隊はウエナとの戦いに苦戦していた。
彼女は体術の他に魔法も会得していたのだ。彼女が物理的攻撃に対抗するシールドを半径1ポア（約50cm）の面積で体の周り中に張り巡らせている為、剣や体当たり、頭突き等その他もろもろ掠りもしないのだ。
「まあ、こんな悠長な事をやっている暇はありませんわ。一気に片付けさせて頂くわっ！」
ウエナは念には念を入れて、本当なら唱えなくても発動できるのだが詠唱付きで魔法を発動させる。

ジラスは大急ぎでさっきいた所へ戻る。同じ距離のはずなのに、今のほうが断然早く軽く走れる。
だんだん前方に幾人かの人影が見える。そして微かに詠唱を唱える声も。

「我、彼の精霊かの故郷ふるさとに生まれ育つ力を得なり。彼の精霊との血の契約により、ここに発動したまえ。眼前でも見えぬ速さを持つ光の熱よ、私の敵をその力によってこの世から消えさせたまえ。」
ジラスははっ、とした。

（この詠唱・・・ビルに見せてもらった呪文集に詠唱魔法の言葉の意味がのってたけど。光の熱？つまり——雷だ！誰かが・・・っていうか絶対ウエナだろう・・・敵つまりシェイさん達を焼死させる気だっ！ヤバイだろうっ！？）

段々人影がちゃんとした人に見えるくらいに近づいた。そして、ウエナが叫ぶ。

「偉大なる精霊ナズスよっ！我が敵に死によつての制裁をつ！クラクトル ドーシエ、雷いかすちよ舞え！」

勝ち誇つたようにウエナは空に指を突きつける。その瞬間、ジアスはいきなりダツシュして叫んだ。

「テクト オブ、守りの結界っ！」

ゴロゴロ……ズギョーンッ！ バシッバシッ

雷が落ちた。落ちた所には無残にも焼けた残骸が所々に――

――なかった。

「な……なぜ――？私の魔法は完璧だった。それを護つたですつて……？！」

ウエナは放心のあまりシールド魔法が解けた。シエイたちも呆然としている。

それはかけた本人さえもびっくりしている。

『どうして……俺に魔法が？俺は前簡単な呪文を唱えても何も起きなかった――のに？』

『きつと、それは俺のせいだ』

ジアスはぎよつとした。突然通信が入ったからだ。

『つていうか自由自在に通信できるわけ？』

『なんとというか……お前の声が聞こえるからちよつと返事をしてみたら通信してるって感じだよ』

『お前の声は聞こえないのに？』

『意識すればつていうか小声で喋れば……たぶん聞こえない。』

『そうか。でどういうこと？』お前のせい”つて

『俺達は普段、肉眼じゃ見えない紐のようなもので繋がっている。

それに俺の力が伝わってお前に影響を及ぼしたんだ。』

『んゝむしろ及ぼしたつていうか、その影響で助けられたんだけど

ね。じゃ、切るよ』

そうして自ら通信を切った。

ジアスはシェイ達に駆け寄った。皆、疲労困憊のようだ。

「ビルからちよつと頼まれたんだけど、広場に集まってくれませんか？」

「広場？なぜ？」

「彼が屋敷で強力な魔法を発動させるんですが、想定外の場所に人がいると危険が及ぶらしいんです。だから一まとめに敵も味方も関係無しに広場に集まって欲しいと。」

「ん、敵もつていうのが・・・あれだが。ひとまず休憩のために行くとするか。シェイ、といったね。案内してくれるか？」

シェイは頷いた。

そして、ジアスのほうを向いて言った。

「お前はほかの住人達を集めるか？それとも違う方？」

「ちよつと彼から個人の頼みごともあるんですけどね。習いの生徒に頼めますか？」

「ああ、気をつけてな」

2人は反対方向へ歩いていった。

【第4章1】未来は自分で変えられる

「せっかく来た味方は行ってしまったようだ、いいのか？」

「いい。俺には俺なりの考えがある。お前には関係ない。」

リオンは冷たくアルファスに言い放つと、リブシアに手を差し出した。優しい微笑みを浮かべて。

リブシアは戸惑いの色でリオンを見つめた。

「お前は悪くない。全て俺のせいだ。あとで煮るなり焼くなり、好きにしてくれ。だが、今は協力して欲しい。先生が今ここにいたらなんというか、わかるだろ？」

それはまだ、彼らが『剣の習い』に入っただけの頃の事――。

「せんせえい、今日も『こうぎ』ですかあ？」

「そうよ。入ってから半年くらいは講義ばかりよ。」

「ええ」

若い生徒達は不満の声をあげる。しかも全員。

「……………もう、じゃあ次回は講義じゃなくて剣を使う練習にするわ」

「ええー、今日はぜえつたい『こうぎ』なんですかあ？」

14代目はにこやかに微笑む。生徒達はあらかさまにがっかりする。

この光景はなかなか微笑ましい。和やかだ。

『剣の習い』に入って半年間は剣士としての礼儀やマナー、常識などを講義で教わるのだ。講義は特に重要だったりする。

「じゃあ、みんなー。この木陰にいらっしやいっ！」

生徒達は明らかに渋々移動を始めた。この頃は特に暑い季節なのだ。

木陰に居た方が涼しいに決まっている。

「みんな、空を見てごらん。何が見える？」

「たいよあーっ！」

「くーもーっ！」

口々に叫ぶ。

「じゃあ、見えたものの形とだいたいの場所を覚えて。できたら地面に座ってほかの皆を待っていてね。」

数分もすると生徒達は次々に座っていく。だが、リアンビルだけぼつんと立っていた。

「どうしたの、ビル？」

「おれえ、覚えらんない」

「——え？」

「だってえ、たいよおも、くもも、おんなじとこにずっといないんだもん。」

「ビル、それって太陽も雲もいつも動いてて場所が覚えられないの？」

「うんっ」

14代目は少し驚きに満ちながらリアンビルを座らせた。

（こんな10歳やそこらでそんな事に気づくなんて少し意外！でも、口調がやっぱり治らないかな）

「じゃあ、講義を始めるよ。今日は剣士に限らず、全ての人にまつわるテーマよ。」

そういつて、皆を見渡す。視線が集まるのを感じながら話し始める。
「皆はこのヒーディオンを、それだけでなくリーディア全土を一国に統一しようとするリスベス帝国の行動をどう思うかしら」

「かつてだと思いまーす」

「ぼくのお父さんはリスベスでーこくのしんりやくを止めるためにはたらいてます。だからそれはぼくらにとって悪いです」

リブシアはリアンビルよりもしっかりした口調で喋った。

「そうね、こつちとしてはあんまりいい事じゃないわね。でも、もし帝国の人が来て、『私たちは皇帝の政治についていけなくなりました。おかげで私たちは悲惨な目にありました。もう帝国にいるのはうんざりです。私たちは帝国に抵抗するヒーディオン国で帝国に歯向かいたいのです。これを認めてくれますか？』と言ったら？」生徒達の間には沈黙が広がった――。

「そうよね。どうしたらいいかわからないわよね。もしかして自分の身内で侵略を止めに行つた人を殺した人かもしれない。

それでも、敵対する理由が表面的に無くなる。これは私たちが生まれる前から、多くの人を悩ませてきた難題。

この問題に本当の正解なんてないわ。結局は自分がどうしたいか、団体が決めた事にしたがるのか……。自分がだした答えに自分の未来は変わってくる。

行動する時は計画する事も大事だけど、予想外や想定外の出来事があつたときはその先のことなんて考えずに、

自分を信じるのよ。未来は自分で変えられる。なら、あとで自分の好きなようにかえればいい。未来の変え方は人間に元々備わっている一種の能力。それは意識しなくても使えるわ。全て自分の未来は自分にかかつているのよ。」

幼い彼らにはよく意味がわからなかっただろう。だが、一語一句全て不思議と覚えていた。

「――自分を信じるのよ。未来は自分で変えられる。」

「そうだ。お前が決めるんだ。お前の未来は。好きなようにするんだ。あいつにこき使われるだけのお前じゃない。

リブシア、お前は強い。剣でも心でも強い。お前なら自分の望むような未来にできるはずだ。今はしたいことをしろ。」

リブシアは自分の手のひらを見つめた。手のひらには無数のまめの跡がある。

「僕は……自分の運命を、未来を切り開いてみせる。自分の手で未来を掴み取るんだ。」

リブシアはギュッと拳を握り締め、リオンの手を借り立ち上がった。ジッと父親を見つめた。

「もういう通りにはしないよ。僕は親元を離れ、独立する。父さん、いやアルファス・メーギスト、僕は今日からあなたの息子ではなく、リブシア・アークメモリアとして生きていく。今まで心の中で支えてくれて有り難う。そして、偽りの憎しみと誤解があなたのもとへ戻りますように。」

アルファスの顔が真っ赤になって屈辱を浴びせられた表情をしている。怒りと興奮のあまり、剣を握る腕が震え始めた。

「リブシア、もういけっ！そしてジアスを探せっ！きっと神父様の家に居る。」

「ビルっ！ありがとうっ！！」

そっぴい残すとリオンの脇を抜けて駆けて行く。

（……………これですくわれたのならいいのだが。）

【第4章2】操り人形の糸

その頃――、広場に向かうシェイ達は。

「この道を抜ければ広場です。」

「おう、すまん。……それにしても某王国の養子姫^{ウエナ}はあれからどうなってる？」

「あー。ジアスの魔法に圧倒されて放心状態でなんとかここまで運んでくれましたが、正気を取り戻しつつあるようで」

シェイは広場に向かう一行の後方をみた。そこにはウエナとその他護衛がいる。よぼよぼと老人のようだが自分で歩いている。

「彼女の魔法、このそういう感覚には鈍い体でも感じた威圧感はずさまじかったが、ジアスはそれを防いだ――」

「防いだ本人はめっちゃ不思議がってましたけど、危機一髪でした。しかし、彼の話によればビルも魔法が使える……」

「それも強力な魔法を。剣と魔法の才能とは……なんていう天才だろうか。しかしそのせいで早死するかもしれん」

「……暗い話をしてもしかたありません。ところで、さつきは有り難う御座いました。そのたもろもろの大勢いることが取り得の雑魚を蹴散らしてくれて。あつ、あなたの名は？　そういえば聞いていませんでしたね。」

「ああ、そうだな。俺はヒア・マクシアン。軍内であの2人の知り合い。所属は治安回復が主な特攻部隊さ。」

「改めて。俺はシェイ・グランデ。フェブリーヤの家系には一切関係ない村人だ。」

「そうか、お互い宜しくなっ」

「はい」

2人は共に握手しあった。

「ところで、なぜこの村にきたのですか？最近治安が悪いようで特攻部隊が忙しい時期なのでは？」

「ははっ、時期的にはな。だが今日は依頼がない。」

「依頼がない？それはありません。事前に入る依頼もありますが、危険が来たら依頼が来る場合があります。だから、軍内で常に待機するのが普通ではありませんか？」

「！鋭い質問だな。だが、依頼が事前に入ってきていても今日この日にこの村に来ただろう。なにしろ、依頼遂行中だからな。」

「この村に今日来ることが依頼？まさか帝国のっ？」

「・・・なんで帝国の依頼を受けなきゃならないのか、わからんな。違う、国民だ。いや正確には”だった”だ。」

「！！先生の依頼？」

「そうだ——」

*

春の風に乗って甘い果実は香りで彼を呼び寄せる

彼は無性に甘酸っぱい果実が食べたくなった

風にのって運ばれてくる香りをかきながら本を閉じて
目をつぶりながら椅子から立ち上がって御覧なさい

まぶたの裏に広がるは果実園

鼻の奥を通り抜けるは甘きにほい

口の中に味わえられるは無の触感と無の魅惑のみ

春に誘われて夢の果実 口にした者

永久とこしえに無の魅惑から抜け出せん

甘い果実は穴を用意しそこに彼を落としてあげよう

抜け出せない迷宮と這い登れない大穴と

彼はどちらを選ぶでしょう

自由と憎しみと偽りを混ぜて出来た夢の果実
希望と怒りと哀しみでできた無の魅惑

騙された者が悪いんだろう

騙した者が悪いんだろう

いやただの傍観者が悪いんだろう

永遠と一時を秤にかけて

彼はどちらが重要かはかるんでしょう

きつとそれは誰にだって分かるはずなのに

彼は誘惑に負けて永遠を手放してしまう

彼が悪いのか秤にかけさせるのが悪いのかはたまた

ただ彼を見つめ行くだけなのが悪いのか

答えはきつと誰だって知らない

秤を作った神様だって秤にかけさせた人だって

本当の答えなんていうのはもっていない

だって

すべて偽りかもしれないから

マルス王は詩集を閉じると立ち上がった。その目には温厚な彼の面影すら見えなかった。

「彼が来る。わしに影響を及ぼす奴が・・・」

*

ジ阿斯は走っていた。今にも心臓を筋骨隆々な手に掴まれている感覚を感じながらも体力の続く限り走る。

（まったく・・・村長もアレだよ。やけくそになってやがる。きつと時間稼ぎがしたいんだろうな。村の中心地より最も遠くて結構な邸宅といったら神父さんの家しかない。お陰で疲れる――
|。

さてよ。なんで時間稼ぎとかしたいんだ？この村にはよく王様とか

使節にくる。なぜ？ってそもそもなんでビルは屋敷に行ったんだろ
う・・・・・・・・・・。）

＊

「それってどういうことですか」

シェイは大声を上げそうになったが、ヒアに口の前で人差し指を立てられて小声で喋った。

「一部に俺の隊員でも知らない事が含まれているから、注目を集めたくない。あとで話そう。・・・・・・・・そうだな、一段落ついてから関係者全てに話そう。」

「・・・・・・・・そうですね。そのほうが面倒じゃないですもんね。」

「悪いな——」

居心地の悪い沈黙。シェイは自然にビルが行ってから助けに来るまでのことを思い出していた。

「さて、お仲間さんを放っておいていいのかしら？」

「この人数じゃあなたを倒せないと・・・・・・・・？」

「お前達手伝いなさい。」

ウエナは背後の護衛に声をかけた。すると護衛はどこから取り出したのか6ポア（約3m）くらいのどでかいローブをウエナにかぶせた。

突然—— バツとローブがはがされるとなんら変わった様子のないウエナ。

「何にも変わらないと、思うのは早いわよ。」

ウエナはダツと駆け出し、一人の隊員の間合いに入った。

恐ろしい速さ。まるでドレスなど着ていないかのような無駄の無い動き。

そして一人の隊員の脳天に拳を突きつけた。その隊員はその場に崩れ落ちた。

ウエナはその手にグローブをはめていた。先ほどの装飾品の手袋と

似た色だったけど、それ以外に目立つた特徴は無い。

それに気づいたヒアは声を上げた。

「そのグローブ……！！」

「あら、お気づきです事？さすがですわね。ヒア・マクシアン隊長？」

「なぜ、お前が『暗黒のBG』^{ブラックグローブ}を持っているんだ……？」

「『暗黒のBG』だって！？」

「血塗られた過去のグローブじゃないか」

「このグローブの色は元々純白だったそうよ。でも、グローブの持つ力のせいでこんな血色になってしまいましたわ。このグローブ、触った相手を操る事が出来るんですわよ？」

その言葉に答えるかのように隊員がありえない起き上がり方で立ち上がった。

足が地につき、手は大地から起き、腰が足の上に落ち着いた。最後に頭が起きてきた。

「——ありえん。そんなことあつりえるはずがないっ！」

「どうしてそういえますこと？」

「俺が『暗黒のBG』を破壊したからだ。この手で引きちぎって剣ですたずたに切りさいたんだ。それにBGの力は洗脳ではない」

「……フフツ、情報集めが十分でなかったのかしら。あんな子供にセキュリティをかくぐられたり、向こうの情報で十分でないなんて。帝国も少し頭に乗っていたようだわ。」

ウエナは仕方なさそうにグローブを外した。

「こんなところで使わなきゃならないなんて、思いもしませんでしたわ。なるべく情報は漏らしたくないから皆逝ってもらうしかないわね……。死人に口なしってね。」

「ま、冥土の土産として聞かせてあげるわ。今の二セ『暗黒のBG』の効力は魔法で行ったのよ。オリジナルのね。名づけて『操り人形』

ベクトルグローブ
の糸』。わたくしが自分で作ったルーンアイテムよ。面白いでしょ？」

「魔法も使えるのかっ……！！」

「ウフ、じゃあ、種明かしも終わった事でやらせてあげる。時間いっぱいまでこの世を楽しむことね！」

そして詠唱を始める。

「我、彼の精霊の故郷に生まれ育つ力を得なり。彼の精霊との血の契約により、ここに発動したまえ。眼前でも見えぬ速さを持つ光の熱よ、私の敵をその力によってこの世から消えさせたまえ。偉大なる精霊ナズスよっ！我が敵に死によっての制裁をつ！クラクトルドーシエ、雷よ舞え！」

いかにも勝ち誇った様子で天に指を突きつける。そのとき、叫び声と共にジアスが現れた。

「テクト オブ、守りの結界っ！」

雲ひとつ無い天から雷が一直線に落ちる。そして寸秒の差でシェイたちの周りに半透明の結界が張られる。

ゴロゴロ……ズギョーンッ！ バシッバシッ

結界によって雷がはじかれた——。

（この世界はどうしてありえないことばかり起こるのだろうか……？そもそも俺達が生きていることがありえないのかもしれない）

シェイの陰険な顔に気づいた副隊長が声をかけた。

「どうしたんですな？」

「ありえないことばかり……えっ？なんですか？」

「それを聞いているのはこちらだ。その顔はどうした？」

「いや……この世界にはありえないことばかりだなーって……。ところであなたお名前は？」

「リコール・サージュ」

単純解明に答えた。あまりにもそっけない・・・。

「俺はシェイ・グランデです。よろしくです。」

「こちらこそ」

【第4章3】環

マルス王は部屋の窓辺へ歩み寄り、空を眺めていた。
絶えず誰かの視線を感じながら。

「いい加減にしたらどうかね？　そうやって忠実に仕えている振りな
どをせずに、さっさとやって操り人形に王座を空ければいいものを。
……」

「なにをいうんでしょうか？　国王陛下、わたくしめの誠実な数年間
はどこへ行ったとおっしゃいますか。」

「ふおつふおつふお、エゴシス。お前は本当に、心、から忠誠を
誓っておったのかね？」

エゴシスと呼ばれた男は気配を消すのを辞め、サツと姿を現した。
そしてマルス王の背後に近寄った。

「このようにいつか首に剣やナイフをつきつけられるとお考えでし
たか？」

エゴシスは衣服の裾に隠していた短剣をマルスの首に突きつけた。

その首筋には薄っすらと赤い筋ができていた。

「それではお門違いで御座いましょう。本当に警戒すべき者は護衛
の中にいるではありませんでしょうか。」

エゴシスはふつと笑みを浮かべ、短剣を収めた。

「騙すのなら、そういったことはしないじゃろうなあ……」

「お分かり頂けたようで……。ところで、陛下。先ほどのお言葉、
どういった意味でしょうか？」

「なにか言ったかのう？」

「陛下が我が国伝統の選りすぐりの詩集を読み終わりになられ、椅

子から立ち上がったて眩かれた言葉で御座います。」

「……はて、なんといったかのお。最近はどうもボケておるようじゃ。悪いの」

マルスは言葉と裏腹に内心では冷たく言い放った。

（それはお前だ、エゴシス。お前の裏でやってきた事は全てこの頭に入っておるわ！）

「……そうでございますか。ではこれ以上申し上げない事に致します。あなた様に名誉と誇りによってアデイスの御庇護が……最後までありますように」

エゴシスは深く一礼し部屋から出て行った。彼の顔には冷笑が浮かんでいた。

＊

「レギオス様、ご報告が遅くなりまして誠に申し訳ありません。」

王座でくつろぐ、若干20代に見えるレギオス・ターラーは目の前に跪くスパイを胡散臭そうに見ていた。

「よい。戯言を述べる前に報告をしろ。」

「はっ、申し訳有りません」

——こちらリスベス帝国ヴェルターラ王城。他の4国よりも北にあり、その領土はリーディアー。

また、財力はいうまでもなく豊かで、他国と戦う力は着々と増える一方だった。

「レギオス様のご指名された者は着々と我が軍へ入隊またはその場で向こうに送っております。今週だけを数えましても、名の良く売れた兵8人と天才的才能の魔術師^{ウィザード}1人を我が軍に引き入れておりま

す。」

「残りはあと何人だ？」

「はい………、だいたい8人です。」

（8人か……微妙だな。戦力のある奴でなければこれほど絞れんだろう）

レギオスは片手に顎を乗せ問うた。

「どれくらいかかる？」

「2〜3週間程頂ければ………」

「それでは遅いつ！10日で終わらせる。」

「とつ10日ですかっ？」

それは結構な短さである。このヴェルターラ城からヒーディオンのコードメモリア城間を往復が約5日間かかるのだ。

「……できぬか？——ならば仕方あるまい。ジェイフェンを呼・
・。」

「いえいえっ。出来る限りやらせていただきますっ！」

ジェイフェンというのは側近であり、その仕事が好きだった。とくにkīlīが。

スパイはそういうとそそくさとその場を去った。

レギオスはスパイに与えた情報のファイリングを手を取った。

（残り8人か……）

そのファイルにはこの世から去ったor軍に入隊した人はもう抜けている。

必要ないから——。

パラリとファイルの表紙をめくる。初めに出てきたのはグレイ・ア・ナスという男。年齢不詳。

彼はかつての世界戦争でなくなった国の出身だとかいうそう。

次にはルテーナ・ダジリスという少女14歳。

さっきの報告にあった魔術師よりも才能を秘めた子供。

パラパラとめくると最後のページである。名はリオン・フェブリーヤ少年16歳。脇には『15代目』とメモ書きがある。かなり最新の情報だった。

彼には平和と言う使命を使って軍の士気を一気に上げる餌だった。(コイツが重要だ。この餌がなくてはどの魚もよりつかない。よほどおろかでもない限り……。10日、そのために俺はしななければならない。)

*

(なぜ先生は死んでしまったのだろうか……。?)
リブシアはそれを初めに疑問に思った。

彼にとってジラスは『なりたい人』であり、『憧れの人』であり、『越えたい人』でもあった。

そんな彼がいなくなったのは彼女がこの世から去った日。

そして、リオンもいなくなったのはその日。

……。実質、3人の人が村から去ったのだ。

ここまで考えれば、大抵の人間はこう考える。

”2人が喧嘩していて、あまりにも感情がたかぶったため、剣を持ち出す事態になって

そこに彼女が現れて、一時停止するものの事態が悪化して刺し違える”

だが、それならばどうして彼女の体はわざわざ部屋に入れたりするのだろうか。

さらに、そうしたのなら喧嘩のあった場所から彼女の部屋までの距離間になぜ血痕が見当たらないのかという問題が起こる。そして更に考え出された事態は、

”3人が一緒に彼女の部屋におり、そこに偶然か奇襲が押しかけ2

人を庇おうと彼女が前に出るも
部屋が狭い為、力を発揮できずに倒され、残り2人となると2人は
敵に対抗するも連れさられる”

という呆気なく馬鹿げた考えである。少年2人なら、14代目を倒
した敵にとって眼中に無いはず。
ならばなぜ手につけずさらっていったのだろうか。

そもそも2つの考えに共通する問題は、

（もしそうであるならば）次代、15代目が存在しない

という大問題である。そうならばこれからは碧眼のリオンの看板を
ぶら下げて剣を自慢する事さえでなくなる。つまり、形式上の次
代が存在したとしても真なるリオンは14代で終わった事になる。
そうなれば村も、フェブリーヤ家も終わりである。
村はフェブリーヤ家の力をほぼ頼って経営してきており、フェブリ
ーヤ家は代々排出される剣の名手による恩恵のお陰でかなりの財力
を持っている。しかしその筆頭となってきた碧眼のリオンがいなけ
ればそんな恩恵を受けられるはずも無い。

（本当に大問題を今日この日まで引きずっていたのか？僕らはそん
なに大きい事だとは知らずに――。

本当に僕は鈍い。本当に知るべきことを知らずにいた。まだ僕の知
らないことはあるはずだ。ビルとジアスが通じ合っている事とか・
・・・）

そこまで考えてリブシアはかぶりをふった。

（っ！？・・・・・・ああ、僕は何を考えているんだ。2人が通じ
合っているわけ無い。彼らはここから出て行く前には、互いを嫌
いあっていたはずなのにっ・・・・・・？）

リブシアはジアスをリオンが奪ったという感覚を拭えないでいた。

「奪われたのなら奪えかえせばいい」

低い声に振り返った。

「どうして僕の考・・・っ！？お前は帝国の者かつ。」

帝国の軍服。間違えようも無い。アルファスが連れていた人たちもこんな紋章の付いた真つ黒な軍服を身にまとっていた。

「どうしてかと聞いたな？答えてやろう。俺は魔術師だ。」
ウィザード

「ウィ・・・魔術師？」

「簡単に言えば魔法使いだ。それより計画はどうなっているのだ？この辺りを見回るのは俺の所管であつたはずだが？」

「え・・・とその。誰かがここを通りませんでした？」

「誰か？通れば俺にわからないわけないだろう？通つた奴などいない」

「確かですね？・・・じゃあなぜ彼はここにいられたんだろう？」

後半部分は呟きに近かつたが自分の事を魔術師と名乗つた男は聞こえたようだ。

「っ？なんだつて？そっちの方向に行くにはこの場所に行くしかないのだろう？」

「・・・ええ。離れの入口はすぐそこです。」

「俺はこの半径10ポア（50m）の動きを完璧に探る事ができる。そのくらいの距離をなぜ・・・？」

男が問いを口にした瞬間、男もリブシアも体に衝撃が奔つた。

（何？この感覚・・・？）
ベクトーラ

「っ！？あの高飛車女め、なにナズスの魔法を使つてやがるんだあ
っ！？」

「魔法っ？」

「注目を集めるだろうがっ？！」

男はかなり動揺しているようだった。

「あの、・・・僕見てきますね。そこに彼がいるかもしれない。」

「それなら俺が行く」

「ここの地形は僕の方が知っています。それにここの見回りがあなたのお仕事でしょう？」

「・・・・・・」

リブシアにいわれて男は冷静さを取り戻したようだ。そのまま無言である。

リブシアは用心深く背を向けると走り出した。

ようやく門が見えてきた。ほっそりした体格の割りに足は遅いのでかなりの短時間である。

門のかんぬきを開け、押す。

ギイイイー

懐かしい音がしてふと指を止めた。

（そうだ。・・・あの時の試験がきっかけなんだ。偶然じゃないんだ。シェイさんが相当疲れた様子で帰っていたり、ジアスの相手がブランさんになったり、ビルが皆の前で合格を言い渡された事も全て。全部、全部、繋がってたんだ。僕の知らない所で。

シェイさんがビルと手合わせして、シェイさんが負けてその応用力と才能の差に疲れてしまったんだ。きっと。それでそれを知った先生とブランさんが上手く回して梓に収めたんだ・・・。

本当に僕は知らないんだね。

先生にだって、ビルにだって言われちゃったよ。

自分を信じる

って。僕はそんな事ができる自尊心を持っていないのに――。

だけどやり遂げて見せるよ。僕の為にも、レベツカの為にも・・・

・・・）

【第4章3】環（後書き）

大幅更新して話数を減らして、話内の字数を増やしました。

【第4章4】平和の章

「そろそろ、俺達も決着をつけようか」

リオンが静かに言う。アルファスはもう正気に戻っていた。

「それなら、ここは狭すぎないか？」

「元々、この部屋を選んだのはお前達じゃないのか？」

「いや。お前が気絶するなんていうことは予定外だったからな。お前がリオンであるかの確認のためにここに入らせただぜ」

「っ！？この部屋にかかっている魔法も知っていたのか！」

「結構面白いんだな。見る見るうちに部屋には埃が積もり、紙は黄ばみ、血痕は乾いて消えていった。お前がリオンだと言う事は間違いないと確証された。あとは……………」

そのとき、衝撃が奔った――。

（これは！誰かが魔法を使った……………？ジアスが言っていた中に魔法が使える奴が……………もしかしたら魔術師がいたんだ！）

「なんてこった……………」

リオンは呟いた。

「何やってやがる。計画をぶち壊しやがって……………。操り人形の癖に……………」

アルファスは言いながら、リオンのことを忘れたかのように出口へ走っていった。

「あっ、おい！待てよ……………」

リオンは声を上げたが届かなかった。

声が聞こえる。

『どうして……………俺に魔法が？俺は前簡単な呪文を唱えても何も起きなかった――のに？』

ジアスの声が聞こえる。リオンはバロシオンのほうを向いた。彼は微笑んだ。

「バロシオン、どういうことですか？」

「あなたがたの間は僕が手を貸さなくても強力な信頼によって繋がっています。ある程度の思考なら手に取るように分かるはずですよ。

思考を相手に聞かせたくないと考えられる事は小声で呟く事をお勧めします」

彼は笑顔ひとつ崩さずに言った。

「あなたとの絆を持つ者に魔法が伝わったのは絆のせいかと、思われます。糸電話（もちろんの如く、リーディアでは科学と言う物は発達していません。ただ、コップに糸をくくりつけて言った言葉をあてあう遊びの時の呼び名です。あくまで、科学は発達していません。）の要領で声が伝わるのと同じように、あなたの魔力が彼に一部とどいたと思われますね。」

リオンは知りたい事は分かったというように頷くと、ジアスに返した。

「きつと、それは俺のせいだ」

ジアスは結構驚いているようだった。

（へえ、これくらいの思考は読み取れるんだ）

「っていうか自由自在に通信できるわけ？」

「なんとというか・・・お前の声が聞こえるからちよつと返事をしてみたら通信してるって感じだよ」

「お前の声は聞こえないのに？」

「意識すればっていうか小声で喋れば・・・たぶん聞こえない。」

「そうか。でどういうこと？」 お前のせい” って」

「俺達は普段、肉眼じゃ見えない紐のようなもので繋がっている。それに俺の力が伝わってお前に影響を及ぼしたんだ。」

「んゝむしろ及ぼしたっていうか、その影響で助けられたんだけど

ね。じゃ、切るよ』

彼はこれを切る方法を身につけたようだ。

リオンは部屋を見渡した。埃はたまっているものの、ほとんど変わっていない。彼女がいない以外。

「そうか、先生！」

彼女の部屋を出ようとした瞬間、気配を感じた。ゆっくりと流れる古く強い魔法の力を。

リオンは振り返った。そして吸い寄せられるかのように、机に近づいた。机の上には分厚い本が置いてあった。リオンは剣を2本とも鞘に収めると、本を手についた。知らない文字だった。

魔法が使えると知ってから、古代語なども勉強していたが、こんな線のいっぱい入った文字は知らなかった。

しかし、内容は分かる。なぜだかそれは分からない。『平和の章』。この本の題名だ。

（題名にしては『』の章』なんて似合わない。本内の章名なら疑いようも無いんだけど・・・）

＜勝手に後ろを失礼致します。15代目、そちらはわたくしたちの剣と同様、代々のリオンが受け継いできた物です。＞

（アポシオン、どうしてこの本は『平和の章』という名なのですか？）

＜もともとはこれは”章”でしたから＞

（もともと、が章・・・？）

＜その話は2代目から聞いただけなんですけどね＞

（2代目？1代目でなくて？）

＜はい。わたくしたちを剣の精霊の任につかせたのは、彼ですから＞
アポシオンがそういうとリオンの目の前に映像が現れる。

人懐っこそうな顔立ちの青年が本を抱えながらアポシオンの前に立っている。

『よお！アポシオン』

《・・・2代目、あなたがもっているその本は？》

『これ？僕のおじい様の残した本だよ。ねえ、君の精霊として生きてきた中でこんな文字読める？』

2代目は本の表紙を見せた。

《・・・？見た覚えさえありませんわ。どこの言葉ですか？》

『これ見てくれる？』

2代目は本を開いて羽根ペンにインクをつけた。

『これからここに、あ、って書くよ。・・・よく見てて』

羽ペンを持つ手に力が入る。

サラッ

ペン先が本の紙から離れた瞬間、インクが乾いてもいないのに文字が複雑に線が入り混じった形に変形し始めた。

《！これは、・・・どんな魔法がかけられているんでしょうか？》

『それが僕にも分からないんだ。一応、魔術師の端くれなんだけどもね』

《これは読めないんですか？》

『読めるんだよ。不思議な事にね。題名は『平和の章』という』

《章・・・？ということは元々は一つの本だったのですね？》

『うん。父上が話してくれた事によると、おじい様は戦争を止めただろう？そのときに5ヶ国がそれぞれ魔術師を集めて一つの本を作り、それぞれの代表に”各章”を与えたんだって。そして平和をもたらしたとされるおじい様に・・・』

2代目の言葉をアポシオンがつく。

《この本が、・・・いえこの章が本として整理されてこう渡ってきたのですね》

「すごい・・・！これが2代目！」

おもわず声が漏れた。

< 正確には、映像がわたくしの記憶を具現化したもので、2代目の声は・・・>

< 僕が吹き替えましたー♪>

「のん気にいつてる場合かつ」

< まあ、落ち着かないと。15代目、焦りは禁物ですよ>

バロシオンはさつきよりもはじけた笑顔でわらった。

リオンはため息をつくしかなかった。

（それで、なぜ彼の声は具現化できないんですか？）

< 死んだ者には事実のみしか残らない——。知っていますか？

1代目と同時期の魔術師の言葉です。>

（チェイヌですね。死んだ者にとって記憶はあいまいな感情の一部でしかない。事実のみ死んだ者に残る。）

チェイヌ。その名はリーディアにいる者なら知らぬ者はいないとされる魔術師。魔術師ギルドを振り切って大革命を起こしたとされる大革命を起こす前、死んだ人が沢山いるんだぞというギルドメンバーに言い放った言葉が

”何を言っている？彼らが死んでしまったから何というのだ？そのとき、何を決意して行動を起こしたかは知らないが、死んだ者にとつて生前の記憶など、吐いて捨てる程に価値がないだろ？

ただ死ぬ前に何をしていたかっていう事実だけが重要だろう？

俺は死んだ事がないからそういうことはわからないが、今、俺が死んだらそう思うはずさ。

だから、俺はやりたいことをやる。死んだあとに後悔しないためにな”

だそう。長い言葉がよく残っていたものだが、この言葉を言われた人には印象的だったらしい。

<彼がいうように、死んでしまった者は記憶は価値がないのか、生きている者が死んだ者の記憶を具現化すると事実しか具現化できないです>

（事実・・・）

<今やったのでは、彼がわたくしと会って話し、彼が本を開いて本の不思議な現象を実証した、という事実しか残っていませんでした。彼とわたくしの会話の内容は特にしようもないのか事実として残っていません。ですのでわたくしの記憶しか元がありません。

・・・ちょうど、過去の話題も上がったことでしたわたくし達の剣の過去もお話しましょうか。バロシオン>

アポシオンとバロシオンが片手を上げて2人で手をパチンと鳴らす。まるで、現代のスポーツで選手交代するように。

<<選手こうたあゝい>>

2人が同時に言う。

（・・・真面目にやってもらっている？）

思わず、こぼれた愚痴。

<お、やつと敬語崩しましたね、15代目。新記録達ゝ成！>

（2人共、いや、特にバロシオン。あの頃から随分とキャラが変わったように思えるのは俺だけかな？）

<気のせいじゃないです。あの頃はまだ猫かぶってましたから>
リオンは大きなため息をついた。ハア・・・。

【第4章5】それぞれ

やっと協会が見えてきた。

ジアスは走るのをやめた。そこで止まって、肩で息をする。

「ここで何をしてるのだ？」

ハツと振り返る。ヒーディオオン国の紋章の入った銀色に輝く鎧。いかめしそうな顔。

「ここの村人だな？」

「・・・・・・・・えっ？あ・・・・・・・・ああ、そうです」

「ふむ・・・・・・・・しかし、さすが！」

「なにがです？」

「さすがはフェブリーヤ出身の町！その足並みは剣士だろう？」

「・・・・・・・・いえっ、その、基礎を習っただけですよ」

「謙遜するな。その動きは基礎を習っただけでは身に付くはずもない。名でも教えてはくれんか？」

ジアスはどうしようか迷った。

（どうするか・・・・。こいつがスパイその——いや数えるのはやめよう——リスベス帝国の一味だったなら、軍で使ってる名前はやばいだろう。本名もしかり。また偽名をつくる余裕ないしね。

ジアンかジアスかなら・・・・）

「——リオンジアス・フェブリーヤです・・・・・・・・」

「フェブリーヤ！？15代目かつ！？」

「・・・・役場からの知らせを聞きませんでしたか？15代目がいないから葬儀が出来ないんですよ」

「ああ、なるほど。ところで、時間が有れば手合わせを願いたいんだが」

「はあ！？」

（もう慣れた・・・と思う。いいよ、話して。バロシオン）

<了解しました！。では、始めましょうか。僕達がリオンに仕えてきたのは2代目の頃からだといいましたね。そのためこの話も彼から聞いた話なんです。不十分な点は分かりませんがおおよその話になります。

僕達を剣に宿らせたのは2代目でしたが、その剣を鍛えたのは1代目です>

（1代目？・・・それにしても、剣に精霊を宿らせるにはかなりの魔術師でないと無理があるんじゃない？）

<2代目は剣士とあると同時に魔力も有していました。あなたのように。2代目の母親は魔術師だったのでそれは不思議ではありません。彼は一人でやってのけました。しかし、それが仇となって彼は日に増して弱っていき、2代目は・・・パロネは・・・>
いつも快活なバロシオンは目線をどんどん下げてしまった。明るい金髪も悲しげな表情を語っている。

（――ごめん。変なこと聞いてしまった。話を元に戻そう）

リオンは目を伏せた。リオンは『平和の章』を手に持ったまま、椅子をひいてそこに座った。そして2人に手で座るように勧める。2人は無言で誘いを受けた。

<・・・はい。僕達の剣は1代目が息子のために作ったものだったんですが、ご息子、つまり2代目の父上は元々病弱で剣を握っていると思えば熱を出して倒れてしまうことも多かったようで・・・、2代目がそのまま名前を祖父から受け継ぎ、剣とその本をもらいうけたのです>

（なるほど・・・）

シャランツシャランツ！ ガタツン！

「ジアス！」

頭の中に聞きなれない鈴の警告音が鳴り響く。驚きと共に反射的に椅子から立ち上がった。

<<待つてください！>>

2人の声が重なった。一拍遅れてそれに気づいた2人は顔を見合わせた。結局アポシオンが喋った。

「『魔鈴の絆』はいわゆる予知も能力のうちです。今から行っても危険を回避できると思えません。ですから、こちらはこちらしか出来ないことをしましょう。14代目の体を捜しに行きましょう?」
(そうだね。この予知は回避できないからね。先生を捜そう)

*

シェイとヒアとその一行は――。

ようやく広場に着いた。広場に着くなり、疲れきった人たちはどかつと広場のタイル敷きの道に座り込んだ。シェイはヒアとリコールに挨拶をした。

「では、マクシアンさん、サージュさん、御願いますね」

「おう。そっちも疲れてるだろうが頑張れよ。シェイ! 今度軍に引き入れてやるうか!？」

「隊長殿、無責任なことは言わない方がいいですよ」

「まあまあ。リコール、そう固いこというなって」

「ハハハハハ」

場違いのような笑い声が響く。それは広場中にこだまして、広場の全員が笑っているようだった。

シェイは役場の方へ向かった。

ノックをして扉を開ける。そこには沢山の大人が集まっていた。

人が多くてシェイが入ってきたことに気づかない。誰かが演説をしているようだった。

「・・・であるからして、15代目がいないとなればこれは大事である。もう碧眼のリオンと言う象徴がなくなってしまう。ではどうするか? それは・・・」

演説しているのはシェイの父親だった。シェイは人の間をぬって通

り抜け父親の元へ行った。

「父さん！何をしてるんだよ」

シェイの一言に室内は静まった。

「何って・・・見ていればわかるだろう？」

「15代目は存在するよ。本人に確認してきたし」

「なつなにい？なぜそれを黙っていた？」

「そうだ。そんなビッグニュースは初めて聞いたぞ?!」

「俺も知ったの今日ですから。で、その15代目から伝えられたんですが、全住民を広場に集めていただけですか？」

「「全住民？」」

「はい。そうでないと危険にあうかもしれないと思ってましたが、どうしますか？役場が動かないのであれば元『剣術の習い』生徒として生徒全員だけでもそれを行いますか・・・。役場が動いてくれるのならかなり楽になります。できませんか？仮フェブリーヤ頭首さん？」

最後にはある意味の嘲笑と皮肉とが混ざっていて、言われた本人は苦々しい顔をしていたが、今の役場を動かしているのは彼なので答えは彼に委ねられた。彼は14代目の叔父なのだ。

「・・・・・・」

「15代目の伝言に従わないということは、フェブリーヤから独立するということですよ？村が。そんな状況で村が運営されるか心配ですが・・・。では、失礼します」

シェイは軽く会釈をして誰にも視線を合わせることなく、扉に向き直った。

「ま、待て！」

「なにか？」

くるりと反転して声の主を見た。仮フェブリーヤ頭首だった。

「15代目は誰なんだっ?!」

「フェブリーヤから独立される方々には関係の無い事だと思いますが？」

「っ・・・・・・・・」

足音を床に響かせながら扉に向かった。無言で扉を開き、外に出ると無造作に扉を閉めた。

バンッ！

「おいおい、一応自分の村だろう？」

「もう村じゃなくなりました」

シェイはぶっきらぼうに答えた。その態度から怒りの気持ちがありありと表れていた。

「は？どういうことだ？」

「村は頭首を捨てました。いくらこの村に剣の素質がある青年がいまいやうとも、碧眼のリオンがいなくなった——いや、リオンを捨てた——村は今までのように生計を立てることが難しくなるはずだとわかっていながらも。でも俺はあいつを捨てません。フェブリーヤー一族でないけれども俺はあいつを、ビルを信じます。例え、身近な奴があいつを嫌味嫌っていても、信じてやります。自分が自分を信じることが出来る限り」

「・・・・・・・・俺達もあいつを、まあ意味はちつと違うが、信頼してるさ。あいつの周りにはあいつを信じれる奴がたくさんいるんだ。ただそれに、鈍感なだけさ」

「そうです。隊長殿も、隊員も、あなたも、そしてこのわたしも、ビル殿を信じているはず。いまさらどうこういっても、信じることのできない者どもが愚鈍なのですぞ」

ヒアとリコールが続けて言った。

「2人共、有り難う御座います。聞いてもらえてちょっとすっきりしました。・・・では、行きます」

シェイは2人に深く礼をして村人の住宅が集まっているほうへ歩き始めた。

ギイイイイイ

懐かしい鉄の門が開く音がして思わず振り返った。門を開いたのはリブシアだった。

「リブシア！？おまつ・・・どうしてそこに？」

「シェイさん・・・？」

リブシアがシェイのほうに駆け寄った。

「色々ありまして・・・」

「おい、シェイ。その子、誰だい？なんかどっかで見た顔がする・・・」

＊

「あのく、どういう経緯でこういうことをしなければならいんです？」

ジラスは腰に帯びていた剣を抜いて相手と向き合っていた。

「いや、お互いの時間つぶしになるじゃないか。君は神父さんに聖書を借りて、祈りをささげたいけど神父さんがいないからできない。わたしは村役場から使者がくるまでここにいななければならない。まあただの試合だ。緊張することもない」

「・・・はあ。あなたのお名前をお聞かせ願えますか？」

「ヒーディオン国軍千人隊長統括官パロネ・バクネスだ。それではいこうか」

ご丁寧にも位も付け加えたパロネも剣を抜いた。どちらも真剣である。

「ルールは簡単。相手に致命傷を与えない、それ以外ならだいたい何をやってもいい。だが今後の生活に障害をもたらすような怪我は与えない。そしてどちらかが降参するかこれ以上続けられないと思うまでやる」

「このメニューはあなた自身が考えたんですか？」

「・・・？まあ、そうだが。普通、この場合は“あなた”を“軍”に替わってるんだが・・・」

(しまった・・・！つつい、軍に無いなーと思ってたのが思わず口に出たかつ)

「ふむ・・・そういえば君の顔どこかで見たとかな——
」
「？」

【第4章5】それぞれ（後書き）

なんか今回はころころ人が変わりました。まあ、そうしないと話が進まないんですね。

【第4章6】変貌 涙

「いついやあ、バクネスさんのお知り合いに似ているなんて光栄です・・・は、は、は」

ジラスはもろにバレてしまいそうなほど、ぎこちなく笑った。パロネはそれが聞こえなかったかのようになにやらぶつぶつとつぶやきながら、考え事をしていた。

「まあ、いいか。よろしく頼むぞ」

「いえ、こちらこそ」

2人は軽く頭を下げるとそれぞれ反対方向に歩いて場を広く取った。

シンツ――

場の空気が変わった。

「我パロネ・バクネス、汝に決闘を挑まん。汝、答えよ。良か否か」

「我リオンジラス・フェブリーヤ、汝の決闘を迎えん」

「『ペディア・アゴーリヴ神のご加護において、我の勝利に祝福を
つ！』」

2人は静まる場で、『決闘の言』を唱え、最後の言葉を言い終わる前に走り始めた。

キンツ！

初めて剣と剣が交じり合う。2人は互いの息遣いが聞こえるほどの近距離で向かい合っている。

ジラスはグツと剣を握る両手に力を込める。

「グウウツ！」

余裕などジラスには無い。それなのにパロネは視線をちらりと下に向けて声を発した。

「ん！？この剣・・・軍で配られた剣だろう？」

「うつ・・・くっ！は、話は後にしませんか」

ギチギチギチッ！

剣と剣が重なりあつた所から奇妙な音が発する。一拍置いて、2人は背後に身を引いた。

「うむ。さすがだ！しかし、気になる。なぜ君は軍が支給した剣を持っている？」

ジラスはすこしひるんだ。そして剣を見下ろす。

（まさか、証拠によつて軍兵ということがバレるなんて・・・！言い逃れできないから開き直っちゃおうか——）

「話さないと何かご都合が？」

「本気で・・・いや、誰にも使つた事のない技であの世に送つてやるっ」

「それほど重要ですか？では、送ってください。あの世に」

「は？——いまどきに、命を自ら持つていけと言う奴がどれほど少ないか知っているか？」

「砂漠の中で落とした涙ほどに」

灼熱の太陽に焼かれている砂漠では、涙一粒でも落とすとジュツといつてすぐさま蒸発してしまう。つまり、直ぐになくなってしまうという例えである。

「そうだ。そういう奴はすぐさま死ぬからな」

「・・・」

ジラスはうつむいたまま、剣を見下ろしていた。

「死んでも結局、何を思つていたか関係ないしなー」

「俺が、ただ死ぬだつて？」

うつむいたままだったが、その声色は恐ろしく変貌し始めた。ジラスの明るい声がいきなり低くて暗い声に変わり始めた。

「俺が、ただ死ぬだつて？」

もう一度繰り返す。声は完全にジラスのものではなくなった。

「俺がただ死ぬという状況に陥る事は不可能だ。この剣に誓つて！」

ジラスはバツと顔を上げ、剣先を空に向けて持つ。光を受けて剣がキラリと光る。

その眼は、顔は、表情は、剣は赤黒かった。まるで血に飢えた悪鬼のように――。

もう彼ではなかった。リオンを信頼し、心配し、助けたり、笑ったり、泣いたり、怒ったり、するリオンジラス・フェブリーヤではなかった。ジアン・マクシアでもなかった。では誰なのか――？

彼はいきなり猛ダツシュしてパロネの間合いに入った。そして、大上段で大きく振りかぶってパロネに斬りつける。パロネは剣を横にしてそれを受ける。彼はその状態の位置を胸の前あたりまで下げると思い切り体重をパロネ側にのせて、円を描くように一周回る。もう二周回ると回転中に作動した動きの反動を使って力の限り前に突いた。

ガギイイイインツ！　グシャ

鈍い金属音。手先には忘れそうに無い不気味な感触。頬についた冷たい鉄の匂い。

それに気づいた彼は大きく目を見開いた。彼は、ジラスに戻っていた。

「――どういうこ……と……だ？」

真っ赤に血塗られた手。無残にも砕け散った鎧。パロネの胸に突き刺さった赤黒い剣。

『あと、3人。3人冥界に送れば、時は満ち足りん！』

さきほど、ジラスの体を奪っていた不気味な声がジラスの頭の中で

響く。

『さあ、残りはお前がやれ。やり方はしっかりと体が覚えているだろっ？さあ……！』

「うぐあああああああつ！……俺、俺、！？」

ジアスは激しい吐き気に見舞われた。足がすくんで座り込んでしまった。

「俺、オレツ……！？どう……すりゃいいんだよ？」

パロネの体がジアスの方に倒れ掛かってきた。ぎこちなくその体を受け止めた。その体にはまだ息が残っている。

「……ハア、ジツジアス君——。ひとつだけ……・聞いて欲しい」

かすれ擦れの声でパロネは言った。いや、ささやきに近かった。

「バクネスさんっ！喋らないでください。傷が……」

「もう、いい。どうせふさがらない。……わたし、いや、もういいか」

パロネはフウツと息を吐く。するとパロネの顔は若々しい青年の顔に変わった。

「魔法……？」

「僕の本当の名は、パロネ・フェブリーヤ。ゴホツ、今から言う事を……彼に伝えて欲しい」

パロネ・フェブリーヤと名を改めた彼は、咳が出始めたのにも関わらず話し始めた。

「僕はかつての2代目だ……。ケホツコホツ、僕を妬む……ウィザード魔術師が僕に何百年も続くのろいをかけたんだ。ゴホツゴホツ！」

「そんな——」

「僕にも、一応魔法の体得はあるから……。ケホツ、最悪の状態は免れたけれども呪いのせいで……帝国の裏犬とならざるを

得なかった」

「じゃあ……あなたはやっぱり——？」

「確認……するまでもない。だから、帝国の——一部だが——

裏を教えたい」

「必ず………伝えます」

「帝国は、リーディア中から……優秀な人材を引き抜いている。間違いなく………年明けと共に戦争の幕が開くだろう——

」。コホツコホツゴホツ、その中に、君や彼の名前が入っているはずだ。生き残らねばならない。君と彼は。むやみに戦って命を落としてはならない。なぜなら君達は——」
パロネはそこで間をおいた。

「^{ツインガー}二人月なのだから………」

彼はそこで息途絶えた——。

*

リオンは『平和の章』を元の、机の上に置いた。ふと気になって、机の隣にある本棚の一番上の段の左端の本を棚から出した。

『平和の章 000～000』

（これも、平和の章？）

棚から出した本の表紙を開いた。パラッ。

”世界はリーディアと呼ばれし。時は剣と剣が火花散らすばかりなり。我は

『腕達の剣士』と呼ばれし者なり。我はどの王にも申されたり。

「我が軍は指揮くれようものならば、汝の望み叶えたり。」

我はどの王にも申したり。一つ間違ふことなかれ。

「ならば、白旗をば揚げよ。とびきり大きな旗を。」

リーディアのほぼの王は従ったり。従わなかった王は明日の陸を支配する者なり。

明日の陸を支配する者ば我に特権を与えし。それば、我の子孫に我の名を語ること

許し。しかし血の繋がりのある者のば最も優れた剣士である事は。

リオン・フェブリーヤ”

そう一代目の筆跡だった。リオンは大きく目を見開いた。

<………これ！パロネの——！？>

アポシオンは驚いた様子で次のページを指差した。バロシオンも本を覗き込む。

<どういう……ことだと思えます？アポシオン！このインク！>

<まさか？——そんなはずは、ありえな………いわ>

(どうしたんだ……？2人共？)

<彼が————————生きている>

その声はやつと出た言葉だった。

「彼つて………まさか！？何百年も生きていられるなんて」

<ああっ！>

アポシオンの叫びに2人は彼の文字を見つめた。文字はまだインクが乾いていないかのようにてらてらと光っている。そして………・スウと文字は乾ききつてほかの先代の文字と同じになった。

<亡くなった………>

(………どうしてこの文字を見るだけで書いた本人の生死が分かるんだ？)

<文字は書いた人が生きている限り、黒く輝きます。その人が亡くなると、輝きを失って色あせるんです。なぜそうなるのかは知りませんが。——十五代目、しばらく呼ばないで頂きたい。僕達はすこしショックが大きいようで>

<.....すいません。十五代目、わたくしたちにとってパロネの存在は大きいのです>

（ごめん——。俺が悪かった。戻っていいよ。呼んでいい時は合図してくれ）

2人は剣の宝石のきらめきと共に消えた。リオンの周りには物音しかしなくなった。

リオンは椅子に座った。机に向かい、机の上の『平和の章』と手に持った『平和の章 000〜000』を交換した。本を開いて最後に文字の書かれたページを探す。あった。

”今日が最後の日だわ。皆に会える最後の日。人間として感じる事ができる『あたりまえ』があたりまえである最後——。ああ、このままこの世を去るのは惜しい！残りたい！けれど.....私は縛られている。その縄を断ち切ることは無理に等しい。

もし、ここをビル。あなたが読んでいるのなら、忘れないで欲しい。私たちリオンはここにいます。あなたの記憶に無くても、ここに記憶の欠片がある。いつでも頼って？

彼ら精霊には2代目からの無限のように長い記憶がある。あなたが知りたい事は彼らに聞きなさい。

.....もう行かなくては。皆が待っている。さよならをいえない皆が。唯一言えるあなたに言いましょう。

さよなら

ジュディア”

涙が溢れた。本当に伝えなかったことはもっともつと膨大な量に及ぶだろうに、こんな短くまとめてしまった。

『さよなら』

それだけが妙に心が温かくなって、心が寂しくなつて――。

（戻れるのなら・・・あの、『剣の習い』だけが・・・・・・・・・・楽し
く感じられたあの頃に、あの頃に戻るのなら・・・・・・・・）

『そんなこと言つてはダメよ？』

リオンはハッと顔をあげた。

『今のあなたはとても格好いいのに、そんな弱音吐いたら、格好悪い人弱音吐けないじゃないの』

かすかに、彼女の微笑が見えたような気がした。涙がすぐに瞳のふちにたまつていく。

「先生・・・・・・・・、さよならは哀しいよ。俺には――耐えられない」

【第4章7】また・・・（前書き）

いつになく残酷です。
気をつけなさいませ——。

【第4章7】また・・・

「・・・というわけなんです——。ごめんなさい。みんなを帝国に売るようなまねをして！」

リブシアは頭を深く下げた。今まで彼は広場にいる人に自分のしたことを伝えた。

「リブシア・・・。」

シェイはリブシアに近づくとそのまま抱きかかえた。その途端、何かの糸が切れたようにリブシア泣き始めた。

「ごめんっなさつい・・・。僕の・・・ヒックせいだよ。ほんとに・・・ごめん・・・。うぬぼれてたっんだっ・・・。」

「もういい。いいんだよ？リブシア・・・。」

リブシアの体から力が抜けていく。そのまま、道に座り込んだ。シェイも座り込んで肩を引き寄せた。

ギイイイ~~~~

また鉄門が開く。そこにやってきたのはアルファスだった。

広場にいる人は視線を音の主に集めた。彼の目は血走っていた。

シェイは立ち上がるとうつすらと作り笑いを浮かべさせた。アルファスのほうへ歩き始めた。

「どうしたんですか？メーギストさん？その様子だと屋敷内を見えてきたようですね」

「・・・。」

アルファスは広場のはしで座り込んでいるウエナたちに視線を捕らえたままだ。

「あの方達ですか？あの方達は、あなたもご存知のようにウエナ王女様とその護衛さんで、わざわざ歩いてこの屋敷を見にやってきたようです」

「それはありえない。あの魔法を発動した衝撃は？どう説明する？」

「あなたが屋敷で何があつたのか正直にそして正確に（・・・）説明して下さいのなら」

「・・・お前は知っているのか？誰が15代目であるか」

「もちろん」

「だが、お前の方がふさわしいのではないのか？」

「俺を帝国に誘うのですか？無意味ですね。誘うのであればあちらの村役場に行かれてはどうですか？」

「おい、シェイ！」

「マクシアンさん。気になさらず。ここはもうフェブリーヤから独立したのですから、俺には関係ありません。俺はフェブリーヤ家の血を引いているわけではありませんが15代目を支えていく覚悟はあります」

「・・・そうかフェブリーヤではないのか。では無理か」

「どちらから説明しますか？」

「説明する気はない」

「そうですか・・・じゃあ、ここで殺してしまってもいいんですね」

シェイの冷徹な声に「殺す」の文字を普段耳にしない者は凍りついた。リブシアはびくりと体を震わせた。

『ごめんな・・・赦してくれなくていいよ。もともと赦されてはならない行為だから――』

かすかに聞こえた気がした。リブシアには。

春の強い風が吹いた。その瞬間、風に乗るようにしてシェイの体が動く。すつとアルファスの背後に回り、手にしていた剣で肩甲骨の下あたりを突く。アルファスは突かれる前に振り向いてシェイの剣をはね返す。シェイは姿勢を低くしたままアルファスとの間合いをとる。そして剣のやりあいを持ち込まれる。二合、三合、と数が増えるうちにシェイは手に力が入らなくなってきた。元々彼は、腕

力は特化していない。どちらかと言えば技術派なのだ。一方アルファスは力で押すタイプだ。試合の時は、いまほどに力が加えられてなかったようで、手がだんだんとしびれてきた。ここで手首に剣の腹でも打撃を加えられたら剣を落としてしまう。そう感じた時、間合いから突き抜けて目の前に剣が現れ、手首を強打させようと落ちてきた。

シェイは本能的にその剣を左手で掴んでいた。指の間から血が流れる。温かいような冷たいような不思議な感覚に包まれながら、そのまま剣を放さず、動きの止まったアルファスからもぎ取ると後方へ投げた。どくどくと指の間から血が絶え間なく流れ落ち、道に血痕を残している。目を白黒させているアルファスに近づくと一気にその左胸を突いた。

『ごめんな』

リブシアへの呟きと共に――。

*

「あら？どうされたんです？」

可憐で上品な言葉遣いだった。ジラスは声の主を見た。背後に侍女をしたがえた、金髪の女人だった。

「キャラン王妃殿下……！！」

キャランはジラスよりもそこに横たわるパロネをひとめ見た瞬間扇で隠した。

「そつそのものはなぜ倒れていらつしやる？」

「わかりかねます。わたくしめにはさっぱり」

自分が殺してしまった、と告げられるはずも無い。そもそも王妃はリスベス帝国がこの国をのっとりとうとしているのを知っているのだろうか。とジラスは思いにとらわれた。それも一瞬だったが。

「そつ……あなたは何でこちらに？」

「国王陛下、すなわち王妃殿下を広場にご案内せよとの御伝えされ

まして、こうして参りました」

「そうなのですか。マルスを呼んできましょう。あなたは、待っていてくださる？」

「はい。宜しく御願ひ致します」

ジアスは頭を深く下げた。キャランは向きを変えて行ってしまった。

*

「皇帝陛下、フラン・ローシャが謁見を求めています」

「通せ。あと、他の奴は下がらせろ」

「はい。お望みのままに」

リスベス帝国の最高位は皇帝である。レギオスは前皇帝の従兄弟だった。

下僕が下がると同時に扉から一人の男が入ってきた。

「陛下、度々ご連絡させていただきましたロージャといいます。今後も宜しく御願ひします」

「いつになったら本名を覚えてくれるのだ？」

レギオスは答えを楽しみにしている様子で目を細くした。

「わたくしのお話の後で……お教えしましょう」

「楽しみは最後に取っておくということか。……まあ、いいだろう」

「ご承知頂き、感謝しています」

男は頭を深々と下げた。顔を上げると、満面の笑みで話し始めた。

「わたくしを雇っていただきたいのです」

「ほお……？」

「わたくしは陛下がこの大陸を動かした方が平和の為の得策と見たためで御座います」

「そうか。……で、なぜ直々に謁見を求めた？」

「今からお話することは陛下が一番に耳になさるべきと思っただから

です」

男はそこで一呼吸置いて、鋭く光る瞳をレギオスに向けた。

「陛下は、様々な分野で優秀な者を帝国に引き入れていると聞いております。その中にリオン・フェブリーヤの少年も入っているのでしょうか？少年が二人月の調節者^{ツインガー}ムーンだということも知っていますしやいますね？」

レギオスは内心詳しい事に少し驚きながらも、平常な顔で頷いた。

「陛下はその天使^{エンジェル}エレルでいらっしやいます。では悪魔^{デーモン}ディエレは誰かご存知ですか？」

これはさすがに顔に出たようで、レギオスの目は大きく見開かれた。「お前はそれが誰であるのか知っているのか？」

「ええ。本人はディエレであると自覚していませんので、陛下が知っていないとも不思議ではありません。しかし、本人には悪魔のさ^{イラ}やきが聞こえてくる頃。本人が自覚する前にムーンに自分が調節^{コントローラー}者であると分からせなければ、暴走しますので、ムーンが分かる前に陛下にお知らせいたします」

「——？風が何処からか入ってくるようだが？」

「この話は当事者と関係者以外聞けば、即死ぬ運命にありますのでご安心を」

「……気に入った。二人月の話は興味深い。お前を雇う事にして、この話は後日としようか」

「仰せのままに。陛下、わたくしの名は——」

*

（……こんなことしてる場合じゃない。先生の体を捜そう）
リオンは腕で涙を拭った。二振りの剣の宝石がキラキラと輝いた。
2人の声が頭の中で響く。

「わたくしたちも行きます」

「いつまでも喪にひたっていればその場で動けませんからね」

（そうか）

リオンはそれぞれの宝石に手をかざし、精霊を呼び出した。『平和の章』を先程置いた本の隣に置く。部屋の扉を開いて、彼女の部屋を出て階段を降りた。降りる途中で階段の段に結構新しい血痕があった。

（これ……）

リオンはしゃがむとその血痕を指でなぞった。

<新しいですね>

（うん。血が手に付くほど新しくはないけど）

<十五代目、ここにも血痕があります>

バロシオンが階段を降りた先のところで言った。リオンは立ち上がって階段を駆け下りると、確かにそこに血痕があった。

（きつと彼らが先生の体を運ぶ時についたものだろうね。どこにまだある？）

<こつちにありますよ>

ついていくとかすかに点々と血が床についていた。血痕を追っていくうちに離れの中で一番の大きさである部屋の前まで来た。この部屋は、いや部屋というかホールはかなりの広さで、離れの角にあたり、彼女の部屋の下にあたる。

<きつと残酷でしょうね。この扉の向こうに待ち受けるものは、魔法の匂いがするわ>

「ああ……、このホールは先生の部屋の真下だから先生に関する魔法——特にルーンの環が描かれる魔法——^{ウィザード}がかけやすいだろう。魔術師がきつという。この先に。2人共、少し力を借りるよ」

<十五代目、いちいち言わなくてもいいことです。僕らはそれを承知で何百年も生きているんです>

バロシオンとアポシオンは優しく微笑んだ。アポシオンのそれがとても、彼女に似ていたので一瞬体が震えたが。

扉の取っ手に手をかけた。弱めに押してみる。動かない。引いてみ

ても結果は同じだった。

今度は数歩下がって扉に体当たりをしたがびくもしない。思い切り引いてみても、木がキィキィいうだけだ。

「メツシュ 消えよ」

魔法を扉の取っ手に向かってかけてみた。すると取っ手は消えて、扉は難なく開いた。

「ようこそ。魔術師^{ウィザード}もどきの剣士さん」

ホールの中は少し薄暗かった。そのため人影は確認できても顔は見ることが出来ない。

「お前は誰だ？その様子から俺がくるのを予想というか予定していたようだが？」

リオンはホールの中には入らずに扉を開けた位置から動かなかった。

「まあ、ソーンと呼んでくれ。しかし、本当にいたんだな。魔法が使える剣士^{リオン}なんて」

「剣が使える魔術師^{ウィザード}なんてのはいないのか？」

「いないさ。魔術師が持つべき物は杖^{スタッフ}さ。才能に恵まれているんだな」

ソーンはうらやましそうに言う。

「望んでもらった才能ではない」

「何処で魔法を習った？師匠は？」

「お前に教える程、俺は口が軽くない」

「……つまり、キホンは押さえられてないのか」

ソーンは手を顎に当て何か考えているようだった。

「どういう意味だ？」

【第4章8】魔法講座 上

「魔法のキホンは本には載らない。全て口で伝えられる。お前の様子じゃ師匠なんてのはいないんだろ？俺が教えてやるよ」
ソーンはくるりと後を向くと数歩あるいて呪文を言った。

「デオ 出現せよ」

するとどこからか椅子が2脚現れた。

「こつちに来て座れ。従わないのなら魔法で攻撃を仕掛けてやる」

ソーンは低いトーンで言った。

（彼は魔術師だ。魔法で攻撃されたらきつと俺なんかはかなわない。座るしかない）

＜気をつけてください。わたくしたちが見えていないようなので精^{フェアラウイズ}霊魔術師じゃないことは確かですが、油断しないで下さい＞

精霊魔術師とは、詠唱魔法で精霊を呼び出したり、精霊の特性を借りて魔法を発動させるのを得意とし、仕事等にもよく使う魔術師^{ウィザード}のことをいう。

アポシオンとバロシオンが見える一例というのは精霊魔術師^{フェアラウイズ}の事を指している。因みにリオンは精霊魔術師が呼び出した精霊をある程度見る事が出来る。

（分かっている）

リオンはホールに足を踏み出した。入った瞬間、血の臭いが頭の中を一巡りした。

臭いの原因を突き止めたくて目を凝らすと、ソーンや椅子の背後に血まみれの体があった。

「先生——？」

「まあ、そつちの話は後だ。魔法のキホンについて俺が納得する程喋るまで、そつちの質問は無視する」

ソーンは椅子に深く座った。リオンは警戒していつでも動き出せるように浅く腰掛けた。

「俺が教える魔法のキホンというのは呪文がどんな系統であり、自分にあっているかということだ」

「呪文に系統なんてあるのか!？」

リオンにとってそれは初耳だった。そんなことは本に記載されてはいなかったのだ。

「すべてそういうことが本に書いてあれば、リーディア中に未確認魔術師^{ウィザード}が沢山いるってことになる。それでは魔法の被害が相次ぎ、滅びてしまうから本には載せられず、口で伝えられることになったんだ」

「……そんなことをなぜ俺に伝える?そっちに利益はないだろう?」

「関係ない質問は無視する。」

呪文魔法には大きく分けて4種類ある。『強化系』、『変化系』、『召喚系』、『消滅系』の4つだ。

『強化系』の魔法は対象物の足りない所を補ったり、今以上の状態にするときにかける系統だ。『変化系』は対象物の性質を何かしら変えたり、今の状態から悪く変化させる系統。『召喚系』はその場^に実際には無い物を自分の魔力で物質から作り出し構築しその場に作り出したり、人間並みまたはそれ以上の知能をもつ者と契約をかわし呼び出すときに使う系統。最後の『消滅系』は対象物に自分の魔力を入れ物質ごと破壊させる。対象物の物質が大きいと粉のようなものが残る事もある。また、誰かが発動した魔法も『消滅系』魔法で打ち消すこともできる」

「強変召滅……どこかで聞いたような——?」

「少し黙っている。メッシュ アクター 声よ消滅せよ」

ソーンは無表情でリオンに手を向けた。

「——!？」

「詠唱魔法は呪文魔法よりも強力だ。だが、詠唱は自ら創らねばならない。呪文魔法は既に他の魔術師^{ウィザード}が作ったものであるので利用す

るのは簡単だ。しかし、詠唱魔法は魔術師ウィザードがそれぞれ個々に創らねば、魔法は成立しない。魔法を行使する者が誰であるかはとても重要である。この詠唱魔法行使、そして詠唱魔法作成については特にそつだといえる。

詠唱魔法作成にはその元となる呪文と呪文との合成が必要となる。また、未知の魔法を作成する場合は古代語と呪文との合成となる。合成に使う言葉の意味があまりにも正反対であれば合成は成功しないが、よく似た意味であれば成功しやすい。合成が成功すればできた言葉には創った者の魔力が残る。より強力な魔術師であればあるほどに残る魔力は強く、その残った魔力を自分の名が書かれた紙に変質させて溶け込ませる。そして呪文の合成に掛かった時間の分だけ、温度、湿度、環境があまり変化しにくい所でおき、時間が経った後取り出し、紙に詠唱が書かれていれば詠唱魔法作成の過程がこれで終わる」

ソーンはそこまでいうとふうつと息を吐いた。リオンにとって詠唱魔法については聞いていた。それだけでなく、（……そうか！あの時、2人から聞いていたんだ。強変召滅も詠唱魔法についても、魔法を創った時に2人から聞いていたんだ。だから聞き覚えが有ったんだ）
「しかし……、この男の考えは分かりませんね。そんな事をなぜ教えるのか」

リオンは魔法が使えると分かったばかりの頃を思い出さざるをえなくなった。

その頃は見習いとして文献処理の文官の元で働き始めた頃だった。国に仕える文官の数は軍の官位を与えられた者つまり武官よりも少なく、軍兵の下っ端が文官の仕事をやらなければならぬほどだった。本来の文官は政まつごとに関連する仕事に専念しているため、国の雑用というか政治にあまり関係しない仕事は軍兵が引き受けることになっていた。

リオンがそこで働いていたのは一ヶ月で、それが過ぎた後は何処に配属するべきかの試験を兼ねた訓練に三ヶ月間身を費やしていた。なのでほとんど体を動かす事の少なかった一ヶ月間は良く覚えていた。

リオンについた文官は無口な男で仕事の概要と決められた規定を教えると直ぐに本が積みかねられた山にもぐりこんでしまった。彼から教えられた仕事は、蔵書の保管部屋内の本の整理とどの棚にどんな種類の本があるか覚える事だった。棚には種類の書かれたラベルなど貼つてあるはずもなく、とても古い本がなんとも乱雑に突っ込まれていた。本の整理をするため、本の内容を知るため、幾つも並ぶ棚に乱暴に入れられたというか押し込められた本を全て出さなくてはならなかった。

いつ掃除がされたのか分からないほど埃は溜まっており、本を出すたびに振動で上から降ってくる埃で頭が埃だらけになってしまった。頭についた埃を掃うと体の周りの空気に埃が漂っていて鼻がむずむずした。リオンは悟った。

（第一に掃除をしなければ仕事は一生終わるまい……。それはいやだああ！）

ほとんど締め切られている窓を一気に全て開け、空気を換気させて棚の上に溜まっていた埃をはたきで掃って、床を箒で掃いてちりとりでゴミを集めて捨てて、雑巾で床を水拭きするだけで一日がほとんど過ぎてしまった。掃除道具をひとまとめに片付けて、部屋の棚を見て大体の位置など覚えようとしてみると、荒っぽく棚に突っ込まれた本と本の間に背表紙の状態が綺麗な分厚い本が丁寧に入れられてあった。ほとんどの本が傷んでいたり大きな傷がついていたりして状態が悪い物ばかりだったので興味を持って手に取ってみた。想像通りのずっしりとした重さだった。表紙も裏表紙もページも古くなってはいたが、人の手による傷などは見受けられなかった。表紙には題名など何もかかれていなかった。内表紙にはページの周り

に飾った絵と題名がかかれてあった。

『初級から上級までの呪文集』

（・・・思いつき魔法だな。そんなものがなぜこんなところに？魔法の書物なんてのは位が上の文官が管理しているべき物なのに？）リオンは文官がいる本の山を見た。そこから出てくる気配はない。興味本位で本のページをめくってみた。ずっしりと書かれた文字は大量だった。

一瞬ひきそうになったが、覚悟（？）を決めて丁度開いた所を読んできた。

”

初級呪文魔法 その4

このページ以降で記載する呪文はその3よりも高度な物となる。行使する上では残りの体力と魔力をはかって考え、行動する事を勧める。中級呪文魔法より高度な魔法を使うにあたって、それは命の賭けひきになりうることであるからして、心するように。

消失魔法「オルフォンヌ 消えよ」

中級魔法の「メッシュ 消えよ」、上級魔法の「アドル 消えよ」という同じ意味の呪文があるが、消失の意味がある魔法は、何を消すかによって魔法のレベルも変わってくる。

手に乗る程度の重さと大きさであれば初級魔法の「オルフォンヌ」、無機物など・あるいは個体であれば「オルフォンヌ」で消える物が複数であるとき中級魔法「メッシュ」、大きさ・重さ・数が半端でない物は上級魔法「アドル」で消す事が出来る。しかし、初級魔法「オルフォンヌ」で複数の物体を消そうと思っても完全に消す事は出来ず、消すのに大量の魔力を消費したり場合によっては呪文にこめる魔力の調節がでずに魔力を吸い取られてしまう。”

そこまで読むとハッと今の状態を思い出した。もう日は暮れかかっているのだ。さっきまで読んだページを開いたまま、机の上に置

いた。そして文官が入っていった本の山へ向かった。

そのあたりだけ埃っぽかった。文官がいるため掃除が出来なかったのだ。本の山の中は誰もいなかった。床に一枚の紙とわずかな日の光を受けて輝く何かが置いてあった。リオンはしゃがんでそれらを拾った。一枚のメモとその部屋の鍵だった。メモにはその鍵で戸締りをするように、と書いてあった。文官はもう帰ってしまったようだった。鍵を握り締めて机の所へ行った。机の近くに置かれた椅子を引きずり寄せて座った。興味本位で机の上の本にかかれた呪文を呟いてしてみた。

「オルフォンヌ 消えよ」

音もなく視界が開けた。机にはリオンが置いた本以外にも数冊重ねられて置いてあった。その数冊の本が消えたのだ。本に書かれてあった事を思い出し、その本が完全に消えるはずも無いと重いあたりを見回した。背後にあった。机の上に置いてあったように重ねられている。

（ふう……。本当に消えなくて良かった——？消えなくて良かっただって？どうして呟いただけで本が視界から消えたんだ？おかしいだろ！？）

【第4章9】魔法講座 中

（ふう……。本当に消えなくて良かった——？消えなくて良かっただって？どうして呟いただけで本が視界から消えたんだ？おかしいだろ！？）

リオンはそう思った。とりあえず、背後に移動した本を再び机の上へ置き、『初級から上級までの呪文集』をパタンと閉じた。少し興奮した息遣いが部屋の中に小さくこだまする。

（魔法が使えるなんてことはありえない……。剣が使えるだけで精一杯のはずなんだ。それに魔法まで使えるという事態になるなんて、あるはずがない）

本を持つてもとの棚に入れようと椅子から立ち上がろうとした。ふらつきながらも、椅子から立てた。しかし、歩こうと足に力を入れても入らない。無理に手で動かすと前につんのめって倒れた。

ドサッ

手から本が離れ、本が開いた状態で落ちた。

「どう……。して……。？こんなに疲れて……。いるんだ？」思わず声が漏れた。体力の状態は、全力疾走で休まずに村を走り回っている感じだった。

床に手をついてよつんばいになり、そこからゆっくりと立ち上がってみた。足の筋肉が痙攣したように震える。近くにあった棚をつたって何とか立ち上がった。まだ頭がくらくらするが、何とか歩けそうだった。腰を曲げて本当にゆっくりと床に落ちた本を拾った。本を閉じてやり、もとにあった場所へ返した。握っていた手を開いて赤い光を受けて輝く鍵を見つめた。

（だんだん……。そう走った後に座って休んでいたときのような感じで、体力が戻ってきた。どういふことなのだろうか。……。2人に聞いてみようか）

リオンは再び鍵を握り締めて保管部屋を出た。部屋の扉に鍵を掛け、

自分に与えられた部屋へ向かった。部屋は保管部屋がある棟と繋がっている棟にあった。その部屋は個室ではない。相部屋だった。同じ頃に入軍した人と一緒に部屋であった。といっても年齢は5歳前後違っている。その人はまだ部屋にいなかった。きっと食堂で夕食を食べているんだろう。しかし、体力が消耗していても食欲は湧かなかった。

リオンは粗末なベットの下に手を入れた。そこには『真理の剣』と『信頼の剣』が隠してある。同室人の人にこの宝剣を見られればいいことは無い為である。そして宝石に手をかざして2人の精霊を呼んだ。

<どうされました？十五代目>

（アポシオン、バロシオン、俺・・・・・・・・どうなっていると思いますか？）

<えっ？！十五代目、どうされたんですか？事情をお話ください>
（ちよつと・・・・・・・・ね）

先程のことを手短に話した。2人は魔法を使ったということに気づくと目を輝かせた。

（え？ちよ、2人共何をそんなに感動してるんですか・・・・・・・・）
<いえ、・・・・・・・・ちよつと。十五代目も魔力の度合いが濃い方ですらっしやっただんですね！>

（度合いが濃い？それに、十五代目もってどういう意味です？）

<2代目の母上は上級魔術師トップウイズでした。そのため、2代目は少なからず度合いの濃い魔力を受け継いでいました>

（まっ待ってください。魔力についてなんて何も知識はありません。話についていきません）

<あら、そうでしたか・・・・。で――――>

リオンはそのとき気配を壁沿いに感じたのでさっと2振りの剣をベットの下の入れた。

少しして扉が開いた。同室人が入ってきたのだ。彼らは名乗りあつていなかった。

「初めまして、ビリー・ヘンリルといいます。宜しく御願います」
リオンが先に名乗って頭を下げた。

「おう。こちらこそ。俺はヘック・カーロンだ」

同室人、ヘックは片手を上げて軽く受け流した。

「ところで、おめーはメシ食ったのか？食堂で見かけなかったが」

「いえ・・・、仕事のせいで食欲湧かなくてですね。あ、ちなみに俺は文献処理です」

「俺は装備管理だ。しかし、なんで結構いい装備でも埃にまみれてるんだ？俺だったら絶対に手入れを怠らないんだが・・・」

「ここ最近で大きな争いはありませんでしたし、正式な軍兵は皆さん自分のを持ってますから軍のものは使わないでしょう」

「やっぱり、金持ちばかりだもんな。金持ちは入軍と同時に訓練期間に入るからな」

「そうですね・・・。あつ！文官さんに呼び出されてたんでしたっけ。行かなきゃ！」

リオンはそういうと部屋を出て、足早に宿舎の屋上へ向かった。もともと、古い宿舎なので屋上に人影や気配はほとんど寄り付かないのだ。

リオンは屋上の欄干に寄りかかると、手で2人に話すように促した。2人は頷いてバロシオンが口を開いた。

くでは、魔力について説明します。魔力は本来、どんな人間にもある力です。しかし体外に出る事はほとんど有りません。魔力の度合いが濃いというのは、魔力が体外にでる性質だということです。それが分かるのは20歳までで、誕生日を迎えたときまでに魔力がなんらかの形で体外に出なければ、その人は魔力の度合いが薄いという事になります。

魔力は身体・精神の状態と深く関わっています。精神が不安定にな

れば魔力は減りますし、身体に大きな怪我や障害を抱えることになれば大きな魔法が使えなくなります。しかし、身体と精神を強くすることによって魔力を増大させる事が可能です。魔術師や魔法使の素質がある者、またその職業である者があなたと同じように戦士の鍛錬を積み、魔力は増します。ですが、その素質が無い者、つまり魔力の度合いが薄い者が戦士の鍛錬を積んでも、魔力は増しません。ただ一つ、実証されていないのですがあなたのように、魔力が体外に出るのが遅い——ほとんどは幼少期にでてくるのですが——者が度合いが濃いということを知らずに、戦士と同じまたは戦士を目指した修練を積んでいればどうなるのか、わかりません。最初にあげた例の魔法使^{マジシャン}というのは魔力の増大を極限まで求める者の職です。あなたはそれに近いかもしれません>

（つまり……、俺の場合はどうしようにも試行錯誤で手探りしかないということですか）

<…….はい。なかなか、あなたの年齢でリオンになることは少なかったですし、武芸の血筋の方が濃いので魔力の度合いが濃い方はほとんどおりませんでしたから>

「どうするべきだと思いますか？軍は魔法を使える奴は首根っこ掴まれて、魔法王国ネイロの国境に放り出されますよ」

<魔法が使えるということは隠すのが一番です。2代目もそうでしたから>

<はい。僕はでも魔法の鍛錬も必要だと思いますよ。あと、絆を持つ彼にも教えておいたほうがいいかもしれません>

「そうですね……。明日はついてきますか？仕事場に」

<<ええ、是非！>>

2人は声を揃えて言った。もう薄暗い空がほんのりと暖かった。

翌日。リオンは宿舍1階の食堂で朝食を食べると一旦部屋へ戻った。保管部屋の鍵と2振りの剣を取り出し、精霊を呼んだ。剣を同じくベットの下に隠した。

（行きましようか）

鍵を握り締めて部屋を出た。2人がついてくるのを確認すると足早に保管部屋に向かった。

保管部屋の鍵は意外にも開いていた。扉を開けて中に入る。

「おはよう御座います」

文官は入口横のカウンターのような所で本に読みふけていた。リオンの挨拶が耳に入ると顔を上げたただだった。すぐに視線を落として本を読み始めた。リオンは部屋の一番奥の棚まで行くとそこにあった本を抜き始めた。ほとんどの本が装飾がされていないシンプルなもので、いずれも古くぼろぼろだった。1冊抜くたびにどちらかの精霊に渡し、精霊は中身を見て魔法に関係したものかそうでない軍事的なものかどうかにも関係しないものに分けてもらった。ひとつの棚が終わると、分けた結果を見てみた。

<圧倒的に軍にも魔法にも関係のないものが多かったですね>

<はい。逆に軍事的本が一番品薄ではありません？>

（こんなに差が開くなんて・・・）

<次の棚行きましようか>

そうしてどんどん本を分けていくうちに差はどんどん広がっていった。分けたものの8割が何にも関係しない本で、1割が軍事的本、残りの1割は魔法関連の本だった。

（すごい差ですね・・・）。残りの棚は俺がやりますから、本を調べておいてくれますか？）

残りは入口から見える棚で、リオンが宙に置いた本がそのまま移動して積み上げられた本の上にいる、というのが文官に見られれば、ネイロの国境行きである。

<はい。了解しました>

2人は快く承諾してくれた。

一人で残りの棚をやるというのは結構な重労働だった。高い段にある本は背伸びしないと届かず、本を分けておくときに腰を曲げね

ばならず、しばらく床で寝ていたくなった。

「いつう・・・」

うめき声は背伸びするたびに、本を置く時に長いため息を吐き出さなければならなかった。

しかし、それに耐えられなければ3ヶ月の訓練期間は乗り越えられないと思うと最後の1冊までやりきる気力が湧いてきた。

「ふう・・・」

（何か新しく分かった事ありますか？）

<そうですね。分かったというか、思い出したことがあります>

アポシオンは一呼吸置いた。

<2代目は魔法を使えたと、先日お話ししましたね。2代目は母上から教わった事を後代のためにわたくし達に教えてくださったのです。それをあなたに話さねばなりません>

【第4章10】魔法講座 下

（思い出したこと……ですか？）

「はい。これから言う事は、ウィザードマジシャン魔術師や魔法使の職に就いたものでも、軽々しく口にする事ではありません。それを2代目の母上は剣士であるべき2代目に、後代のためとして教えて下さいました。> バロシオンがそれを引き継ぐ。

<2代目はそれを僕たちにもお話くださり、あなたのような方に教えよといました。よく、お聞きください。一度で全て覚えてしまってください。そして滅多の事で口外しないように……>

昔の追憶が意識の中心部から遠ざかり、ソーンの声が耳に入った。

「———これが、自分にどんな魔法があうのか確かめる方法だ」
言い終わるとソーンは片手をふつと振り、リオンにかけた魔法を解除した。それを感じるとリオンは口を開いた。

「そういうことは、軽々しく口にだしてはいけないのではないのか？」

「っ！？どうしてそんな……」

ソーンはひどく狼狽した。

「だってお前、言っただじゃないか。メファド ピラ 復元再生」

リオンは魔法をかけて、ソーンが説明する前に言っただ事を再生させた。

『魔法のキホンは本には載らない。全て口で伝えられる。お前のその様子じゃ師匠なんてのはいないんだろ？俺が教えてやるよ』

「って言っただろ。ってことは師匠の弟子じゃないと、それほど親密な仲じゃないと、そういうことは教えたりしない。けどお前は、親密どころか敵も同然な俺にそういうことを言った。おかしいだろ？その裏にある考えはひとつしかない」

「……」

「だが、お前はやり方が下手だ。俺を黙らせて考える時間を与えたんだからな。だから、こんな風に下っ端の事に振り回されてるんだよ。まあ、お陰で向こうの考えのいっぱしは分かったんだから感謝しないとな」

そこへリオンの頭の中で聞きなれた声が響く。

『ビル、話せる状態か？』

リオンはちらりとソーンは見たが、ソーンは行動のひとつも動かさない様子なので答えた。

『ジラス？なにかあったのか』

『ああ……。お前に言われて協会に向かってたんだ。けど、そこにパロネ・バクネスっていう騎士の人がいたんだ』

（パロネ——！？2人共聞いた？）

<はい。でも、違いかもしれません……>

『なんだかんだでその人と決闘する事になって……その人が強くて何がなんだか分からなくなって——気づくとその人の胸に剣を鎧を突き通して刺していたんだ。すると、すごい低くて不気味で暗い声が聞こえて、その人に止めを刺せって執拗にはっぱをかけるんだ。ヤバイ——って思った時に、バクネスさんが命を削ってでも、お前に伝えろって言ったんだ』

『……』

『バクネスさんは本当はパロネ・フェブリーヤで、2代目だった』
リオンと2人の精霊に戦慄が奔った。

ウィザード

『それに魔法が使えるから、魔術師が何百年も続く呪いをかけたんだ。それで、最悪の状態にはならなかったんだけど、帝国のスパイにならざるをえなかったそうさ。帝国は裏で、年明けと共に戦争を仕掛けるつもりだ。戦争に向けてそれぞれの専門家を呼び寄せて準備をさせている。その専門家の中に俺達の名前が入っているそうさ。そして俺達はむやみに戦って命を捨ててはいけないんだそうさ。二
人月だから——』

『・・・ありがとう。ジラス、王様を早めに広場に案内してくれ。葬式はもうすぐできる』

『礼には及ばないさ。絆で結ばれた友達だろ？』

『もちろんさ！』

通信が切れた。

*

ジラスはパロネから頼まれた通りにリオンに伝えたと、息を吐いた。

（俺は、あのときどうなっていたんだろうか・・・。。そしてあの嫌な声は一体——？）

『俺はお前だ。そしてお前は俺だ。ただ違うのは死へのイメージだ』
ぞつとした。その声が自分に誘いかける。

『殺せ・・・殺せ・・・』

（嫌だ！嫌だ。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。誰も殺さない。殺さないんだっ！）

『嫌でも殺す時がくるさ・・・。フッフハハハハッ！』

『おい、その人！』

声は消えた。誰かが声を掛けてきた。

『聞こえてるのかー？』

『あっはい？』

振り向くと沢山の侍女や下僕、護衛の兵士を連れたマルスとキャランが歩いてきた。声を掛けてきたのは下僕の一人だった。

『君が、十五代目からの使者？』

「はい、そうです。これから広場にご案内します。陛下たちは何でご移動をされますんですか？」

「馬車だ。陛下方がお乗りになるまでしばし待たれよ」

下僕ではなく、兵士というより騎士という気品のある男が答えた。ヤコブ神父の屋敷の横に置かれたとても豪華な装飾が施された馬車は2台あり、1台ずつにマルス、キャランとそれぞれにつく侍女や下僕が馬車に乗り込んだ。ジアスはそのあいだ、さきほど受け答えた男に話しかけられた。

「あなたは村人か？」

「あつはいそうですけど・・・？」

「そこにある、あれ（・・・）はあなたがやったものだろう？」

『あれ』と、いいながらパロネの体を見た。

（ぎくっ！しかし、・・・なぜそんなことを知っているんだらう？）

「そつそんなことどうしておっしゃるんですか？」

「あなたが戦っているところを見た」

「——っ！？」

みたということはきつとジアスがフェブリーヤだということを耳にしているに違いない。

「どうしてそんなことを聞いたんですか？」

「どんな相手にも本名を名乗るか試してみただけだ」

「・・・」

「必要にせまられぬ限り、容易な事で本名は明かさないという事がわかった。なぜフェブリーヤの名を明かさないのかはしらぬが、興味がある」

そついつて暗い笑みを浮かべた。

（この男、きつとていうかかなりの確立で帝国のスパイだ。どれだけリスベス帝国の裏は深いんだ？）

マルスとキャランそのたもろもろが馬車に乗り込むとゆっくりと

動き始めた。ジアスは先頭で案内をしなければならなので駆けていった。さつき、ジアスに声をかけた男はエゴースだった（詳細は【第4章3】環で）。彼はマルスやジアスが気づいたとおり、帝国の一味だった。エゴースはジアスのことを考えていた。

（あの少年、リオンジアス・フェブリーヤといったな。村に住んでいるはずなのだが、軍の剣を持っていたのはなぜだ？あのリストにこそは載っていないが裏の国家機密リストに載っていた彼奴きやつと名前が似ていないか？容姿もどことなく……。本人にあったことはほとんどなきに等しいから確信をもって言えないが――。だが、あのパロネを倒したとき人格が変わった……。もしかしてあれが

＊

＜ありえないです。信じられません……。＞

（2人共、今は耐えてくれ。ソーンが動き出しそうだ）

伝えると共にホールホールの扉が開いた。

「ソーン、なんで坊や一人捕まえるのに手間取るのかしら？」

「お前は無駄話が多すぎる。だから、なかなか大きな仕事を任されないのだ」

2人の人影がこちらに向かってくる。2人共魔術師だ。ウィザード

1人、女の魔術師がリオンのほうに歩み寄り、リオンの肩に手を置いた。

「あたしはマフ。よろしくねえ、坊や」

「俺は坊やじゃない。それに記憶を引つ掻き回すのはやめてもらいたい」

リオンは冷たくその手を振り払った。親しい者にみせる声色とはとても離れている低いトーン。

「フンッ。後悔したってあたしは知らないから」

マフは鼻を鳴らした。

「一応魔法は使えるようだな。俺はファズ。気づいているようだが俺達は魔術師だ」ウィザード

ファズは床にブーツの足音を響かせながら近づいてきた。

「まあ、俺はソーンみたく無駄話や嘘を並べた美辞麗句は嫌いなんで単刀直入に言うが、冷静沈着に聞けよ。帝国におとなしく入れ」

「無理な話だ。そうすればあいつを裏切る事になる。裏切れば俺は腐って死ぬぜ？」

「……何！？」「」

3人の魔術師^{ウィザード}に衝撃が奔った。

実は『魔鈴^{ますず}の絆^{きずな}』はかなりの希少価値のあるルーンアイテムで限られたルーンマスターしか作れないものである。そんなものをなぜジアスの家にあつたのか不思議だが、それは後で聞いてみよう、リオンは思った。

「お前！そんな価値あるものをっ！？」

3人が詰め寄ってきたが、リオンはそれを手でさえぎった。

「もの？俺はそんなもの持ってないぜ？腐って死ぬっていうのは、あいつに腐らされて殺されるっていうそのまんまの意味なんだけど……」

「そんなはずはない！」

ファズはリオンの手を掴んで見た。そっちの手は紐の痕が付いている方だ。

「ほら、これを見るよ………。間違いないだろう」

リオンはそのままにさせておいた。手のほうに注目がいくようにしておき、自分はなにやら呟いた。

すると2振りの剣が鞘からひとりでに浮いたが、3人は気づきもしない。それからわざわざ大きな声で詠唱を唱え始めた。

「我りオンの名を継ぎ、御名を継いだ2代目より受け継ぎし剣を所有する者。2人の精霊の聖なる宝剣を今此処に1つに合わせん。真理を尊^{たつと}し、信賴を手にした、アポシオン、バロシオンよ、我の力よりいでし魔に飲み込まれんことを。合成せよ、『理^{ことわり}と絆の紫剣』エヴァーシオソード。発動せよ、刀身を包む紫の光よ。ボルシスグレス 合成し創造せよ！」

「剣と・・・魔法が・・・交^コわ^ワっただつて!？」

” 武と魔が交わる事なきに等しい ”

全ての魔法書にそれは必ず書かれた決まり文句である。そのため誰も武に魔法を取り入れなかった。戦うときは武か魔かどちらか一線で戦った。しかし、” なきに等しい ” 可能性からリオンは武と魔を『合成』させた。

浮いていた2振りの剣は一つになり、まばゆい光で包まれた。そして長いロングソードへと『合成』された。宝石は2つの色が混じりあう部分だけ淡く紫色へ変化し、様々な金属で出来た刃は紫の光のヴェールのようなもので包まれた。リオンがそれを握ると、剣全体を包んでいたまばゆい光が辺りにはじけ、その姿を畏怖さえ感じる姿へ変えた。エヴァーシオは古代語で『紫の光沢』という意味だ。まさに『紫^{エヴァーシオ}の光沢^{ソード}』の剣。

続

【第4章10】魔法講座 下（後書き）

第5章はリオンたちのもとを離れて新しい（？いや、前に名前だけ登場した）キャラのほうを書きます。話の時は4章終了よりも数日前のことなのであしからず。

ここまでよんで頂き有り難う御座いました！続きも（待っていてくださる方がいるなら）ぜひ楽しみにしていただけたらなと思います。・・・いや、そんな高尚な方いらっしゃるかもしれません？誤字脱字、見つけ次第ご報告ください。喜んでなおさせていただきます（＾－＾；）>では。

【第5章】兄妹（前書き）

【第4章10】魔法講座 下のあらすじで予告しましたように、リオンたちではない登場人物が現れます。（もしいるのならですが；）リオン等のファン（本当にいるのですかね？）の皆さま、5章が続く間ちらりとしか出ませんのであしからず。

しかし、5章は短い・・・と思います。ではお楽しみくださいませ。

【第5章】兄妹

ヒーディオン国北東部、魔法王国ネイロの国境付近。大陸中をまわる旅芸人の団体がテントを張り、野宿の準備をしていた。小さなテントの一つから、銀色の髪を後ろで軽く束ねた少女が出てきた。彼女の名はルターナ・ダジリス。ルターナは向こうの山に沈んでいく赤い夕日を見ていた。

（あと・・・12回日が沈んで、11回日が昇れば年が明けるわ。年を越す為に色々忙しいこの時期におば様はなんの御用かしら？）

ルターナが呼ぶ、おば様とはこの旅芸人の団体の中で最も古株のオウンのことだ。オウンは老いているも、魔術師^{ウィザード}としての勤めや予知能力に優れていたのが団長にもたよりにされていた。きっとこの時期に呼ばれるのは何かの予知のせいだろう。

ルターナはオウンが使っている大きめのテントの垂れ布を持ち上げながら入った。

「失礼します、おば様。ルターナ・ダジリスです」

「ルターナ！おば様ではなくオウン様とお呼びしろ」

その声にぎくりとした。ルターナは呼び出されたのが自分だけだと思っていたからだ。テントの中を見渡すとテントの奥の中央にオウン、その手前に団長、その斜め手前両方に団員が2人、いたのだ。

「だ、団長まで呼ばれていたのですか？」

「そうじゃ。わしが呼んだのだ。ルターナ」

ルターナはハツとしてその場にかたひざをついた。

「遅れてしまい申し訳ありませんでした。お・・・オウン様」

「うむ、こちらへ近こう寄れ」

オウンは自分の隣に来るよう手招きした。

「はっはい」

腰を上げてオウンの隣に行った。此処からは団長や団員の顔が良く

見える。テントの天井につるされたランプの橙オレンジの光を受けて彼らの顔や服が橙色オレンジに見えた。

「して団長。もう年が明けてしまうまで、此処は離れてはいかん。離れようならば大きな災厄に引き合わされん」

「オウン様の仰せのままに」

団長は返事をするそれを他の団員に伝えるべくテントを出た。団員2人がスツと前に出る。

「してエンヴィ、コルド。お主らは伴侶と2週間分の食料を持って団を出よ。年が明けるまで団に戻ってはならぬ。さすれば子が授かるであろう」

「喜んでそうさせて頂きます」

「有り難う御座います、オウン様」

エンヴィとコルドという男達は喜びに顔を火照らせテントを出て行った。

「してルテーナ。もうすぐこの付近に旅人が現れん。そ奴らが来るまでにお前を本当の魔術師ウィザードにせねばならん。そ奴らが来るのは今日を数えず、日が空を2回駆けたらじゃ。2日でお前を魔術師ウィザードにす。明日の夜明けにまた此処へ。あとポルディノに伝えよ、2日後までに旅の準備をせよと」

（?どうして兄様に旅の用意なんかさせるのかしら……。それに兄様をここに呼べば伝言を伝える事もないのに?）

思いは心の中だけに留めておいた。

「はい。分かりました、オウン様」

それが悟られぬよう、曖昧に微笑むとルテーナは立ち上がってオウンのテントを出た。

しばらくテントの中に居ただけなのに外の空気が新鮮に感じられる。大きく息を吸って口から吐いた。

「よしっ」

ひとりごとのように呟くと足取り軽く、テントが並ぶ辺りへ足が進

んだ。

ポルディノはルテーナの4歳年上で18歳の兄だ。容姿的に似ているのは肌の色くらいのものだが、雰囲気がよく似ていた。彼は他の団員と一緒にテントを使っていた。なので男の団員に声をかけた。

「あおう、すみません」

「ん？なんだいルテーナちゃん」

「ちゃんづけしないでくださいよつ。恥ずかしいですから。兄様はどこにいるか知ってますか」

ルテーナは白い肌をほんのりと赤く染めた。ちゃんづけされることを恥ずかしがっているのだ。

「テントだろ」

「ありがとうございます」

にこやかに笑って頭を下げると、目的のテントへ向かった。

（よかった。お客さんへの宣伝で居ない事が多いから。まあ、こんな国境の近くじゃあんまり人は入らないだろうし、お・・・じゃなくて・・・オウン様が言ったようにここを年明けまで動かないのなら、きつというだろうと思ったけどね）

彼女や団員が所属するこの集まり、旅芸団『青鷺団』で様々な人が助け合って、働きあつて暮らしを支えている。ダジリス兄妹きょうだいはとも幼い頃から居たのだが、それぞれの仕事は違っていた。妹は魔力ルテーナの度合いが濃く、幼い頃から大量の魔力が体外に出ていた。そのため、物心がつくとオウンのもとで魔法の技と才能を磨き、見せ物よポルディノうの魔法が自由に扱えるようになると『青の鷺団』で『ちびっこ魔法少女ルテーナ』として客に披露した。兄は、（いまのところ）魔力が体外に出ていないし、小さい頃からあまり集中力がなく小柄だったため芸人としての仕事は与えられなかった。しかし、口が上手く相手の心理を透き通して見えるかのように振舞う為、客集めや宣伝を仕事として与えられていた。また、しばらくの間客を集めたり呼び込んだりする必要がなくなると、（本人はあくまで）趣味として

弓を使つて食料を調達したりしていた。

「あの、兄様いますか？」

ルターナはポルディノと同じテントを使っている団員を見つけて捕まえて聞いてみた。すると、

「え？ポルディノ？そういえばさつき弓と矢筒もつてテントから出て行つたよ」

「え、ああ。また行つたんですね。有り難う御座いました」

*

ポルディノは矢筒に残つた最後の矢を弓につがえ、宙に目標を決めると手を離れた。

びゅうつと矢が狙い通りに飛んでいく。

「よしっ」

どことなく呟いて、小さくガッツポーズをとる。

すると、向こう側の木立が少ない辺りから、ポウツと暖かな光が現れた。その光はところどころ止まって上下しながら近づいてくる。

（あれは……ルターナだ。あれ？もう日が沈んでいる――

――）

空を見上げながら思うと、落ちた矢を拾いに光のほうへ向かった。

一本の矢を拾うごとに矢筒に入れていくと、拾う事に集中してルターナの存在を忘れていた。

次の矢を拾おうとポルディノが手を伸ばすとそれよりも早く矢は誰かに取られた。

「あつ……」

その矢を取つたのはルターナだった。ルターナはクスリと笑うと彼女が集めた矢をポルディノに渡した。

「兄様？ランプも持たずに弓の練習なんてやめてつていったのにな」

「そついうルターナこそ、僕に『様』をつけないでつていったのに変わらないね」

ポルディノは矢を全て矢筒に収めると、にこりとルターナに笑いかけた。それにルターナは気づくと、同じように笑みを浮かべてポルディノの手を取って握った。ポルディノは手が握られるのを感じる**とぽつと妹の顔を見たが、ルターナはさつきと変わらぬ笑顔だった。**そこにいつぺんの不安や迷いのない笑みを見つけると、ため息をついて声をあげて笑い始めた。ルターナもそれにつられて笑い始めた。笑い声がかすれて咳が出てくると、さすがに笑うのをやめた。兄妹はお互いの顔を見合わせた。

「ケホツ・・・あ、あ、あ。どうしたの？ルターナ、いつもだつたらもう少し遅い時間に来るだろう？」

「ん、ん。オウン様から兄様に伝言を頼まれたの。2日後に旅人がこの辺りに現れるから、それまでに旅の用意をしときなさいだつて。きつとその旅人と旅に行けつて事かもね」

「旅？！どれくらい放浪する事になるのか聞いているか？」

「いいえ・・・。具体的なことは何も聞いてないわ」

「そう。でも、それだと準備のしようがないんだけど・・・」
「会話が途切れた。2人はとてつもなく長い距離を離れた事がなかった。せいぜい、ポルディノが街へ行っていて、ルターナがそこと反対側にある森林にいた、ぐらいのものだ。ポルディノが旅に出るとなれば、かなり長い事、かなりの距離でひとりなのだろう。」

「ねえ・・・。兄様。これまで私たち兄妹はあんまり離れたことなかったよね」

「うん。そうだね・・・。どうなるんだろうね。長いことルターナに会えなかったら、僕は僕を忘れてしまいかもしれないね」

「そんなことになって欲しくないわ。兄様に会えなかったら、私は私を忘れるなんて・・・。兄様、それは例えなのでしょうけど私は怖いわ。1人が自分を忘れるよりも、1人きりになつてしまうことが怖い」

ポルディノはルターナのつやつやとした銀色の髪をなでながら言った。

「僕もだよ。君が居なくなるのはきつと耐えられないよ。でも、僕が死んでルターナが1人きりになってしまふことのほうが耐えられない。だから、僕は君を守るよ」

ルターナは先程の笑みよりも寂しげな表情で微笑んだ。

「兄様……、どうして孤独は辛くて怖くて耐えられないのかしらね」

「人が孤独をそう感じるから——かな」

「私はね、兄様。孤独の時間が一番大切な人にいてほしいけどいいからだと思ふの」

「そうかい。ルターナ、でも今は孤独じゃないよ。兄妹だよ」
ポルデイノは小さく震えるルターナの肩をきゅっと掴んだ。

「僕のために歌ってくれるかい、ルターナ？」

「歌うわ。孤独じゃないから」

ルターナはそういうと息を吸った。

君が思ふ心のそこに 海があると信じれば
きつとどんな私でも 君はすぐってくれる

貴方を包む優しさに 空があると信じれば
私は翼に抱かれて 空に抱かれて

うつむく私に差し伸べた光 あれは貴方が照らしたの？

今は孤独じゃないと 感じられるわ

貴方が優しくて大きいから 私は貴方を感じられる

どうして貴方の手は温かいのでしょう！

私の両手は凍ったように真つ白なのに！

どうして貴方の心は温かいのですか？

私の心は凍てついた氷柱だというのに……

その夜が明けようとした頃――。

ルターナは同じテントを使っている団員を起こさぬように、そつと寢床を抜け出すと物音をなるべく立てないようにオウンのテントへ向かった。テントの近くまでくるとなにかとても柔らかい壁というか、とても厚い空気の層のようなものが自分を包んでいるような感覚になった。

（これは……オウン様が作り出した“結界”？音や何かを防ぐ物かしら）

ルターナはオウンのテントの垂れ布の前まで来た。垂れ布を上げようとしたがとても重いので、魔法を使う事にした。

「ギットウラ エフィ 重さよ 変われ」

そつ囁きながら垂れ布をなでた。わずかに手元がきらめくのを見ると垂れ布を持ち上げた。すつと上がるほどの軽さに変わり、そのまま中に入れた。

「来たか。ルターナらしいの。重さを変えろとは」

ルターナはクスツと笑うと答えた。

「前は垂れ布を消滅させちゃって、新しい物にしくちゃいけないやつたんですもの。でも毎回私らしいって言ってますん？」

オウンもこれには笑った。

「そつじゃったかの？まあ、よい。座れ」

「はい」

オウンは前に居た時よりも手前で、テントの中央らへんに座つていて。天井につるされていたランプは床に降ろされて置かれている。ルターナはオウンが指し示した場所よりも遠めに距離をとって座った。

「2日でお前を本当の魔術師ウィザードにせねばならん。本当なら1ヶ月以上かけて教えてやりたいが、時の刻がそれを許さん。ああ、なんたる惜しい事か」

「オウン様はいいわ。未来が読めるもの。私がどんなことに会うかわかっていらつしゃもの。そして運命が変わらない程度に私たちの行動を動かしているのでしょうか？」

「いいや、もう未来は見えん。わしの能力よりもお前の能力の方があこがれるわい。なにせ歌を歌う事で星霊を呼ぶことができるのだから。……『星の詩歌』よ」

『星の詩歌』と呼ばれる途端、冷たい針で頭を貫かれたような感覚に陥った。それにおびえ、肩を少し震わせながら尋ねてみた。

「そつ……それは何ですか？そしてこの感覚は？」

「これはお前の魔法名だ」

「魔法名？」

「魔法名は魔術師の特性に合わせて師匠に名づけられる名だ。魔術師にしか付けられない。ごくたまに魔法使にも魔法名がある者もいるが、それはきつとその者が体を鍛えるに終わった者だ。そして、魔法名は魔術師の最大の弱点なろう。そのため、魔法名は人に教えぬほうがよい。その名を呼ばただけで悪寒が奔るのだから、敵対者に魔法名を使つて、『星の詩歌』よ、消えよ、と唱えられればお前が存在していたこと事態消えてなくなるほどの影響力はわかるじやろう？」

「シャオーペンセル……」

自分でその名を呟いてみるとなんともしえない満足感が広がった。

（もうすぐ魔術師になるんだ……！『星の詩歌』ってなんて素敵な名前だろう！）

「オウン様、有り難う御座いますっ！私、2日で立派な魔術師になりますっ！」

「ほほほ。威勢がよいことのよお。では、4句だけの歌で星霊を呼び出せるようにならねば。誰でもよいから歌ってみなさい」

ルテーナは頷くと胸に片手を添えた。

私の生まれた星座の精よ アクアンよ

聖なる聖水を掬わん水瓶手に 私目の前へいざ現れん

するとルテナの目には青く波打つ長い髪をした女人が現れた。
しかし、オウンには見えなかった。

<ルテナよ、星の精を呼び出す技術はまた向上したの。しては、
何か用かえ？>

(アクアン・・・、オウン様にも聞こえるように貴方の星座にまつ
わる逸話を話してよ)

アクアンはちらりとオウンを見やると、近寄って耳に触れた。オウ
ンもそれは感じたようであり、肩を震わせた。精霊には一般的に
は肉体を持たないが、フェアラウイズ精霊魔術師など精霊を見たり、呼び出す能力
を持つ者によって地上に呼び出されることによって半分だけの肉体
を持つ。半分だけの肉体には完全な死は伴わない。地上で出せる限
界の力まで出し切つてしまえば精霊界に戻り、それが回復するまで
呼び出すことは出来ないのだ。精霊界は水だけのような空間で、人
間はそこにいることはできない。

<では話そう。むかしむかしあるところに小さな村があつた・・・>
その声はルテナにしか聞こえないはずなのに、アクアンがオウン
の耳に触れた為オウンにも聞こえていた。

<その村には小さな井戸があつたがそれは枯れ気味で、往復に2時
間かかる川まで行かなければともに水が無かつた。あるとき、そ
の村に何人か旅人が訪れた。午前の時間に村に付いたのは国をまわ
つて視察をしていた使者だつた。使者は水がろくにない場所ばかり
を通つてきており、とても喉が渴いていた。使者は村人に水を求め
たが、村人は貴重な水を分け与えようとはしなかつた。使者は顔を
赤くして権威を振りかざして強引に水を搾り取つた。そのとき、修
道士のような格好をし頭巾を頭まで被つた旅人が村にたどり着いた。
その旅人は村に着くなり、倒れてしまった。突然の事に驚く使者は
あたふたとしていたが、こういうことが良く起こる村人達はすぐさ
ま旅人を介抱し始めた。村人の一人は使者を睨みながら言つた。『

このような緊急事態でなければ、水はお分けしない事になっていきます』と。さらにもう一人が『あなたがお奪いになった水を返していただけますか？』と声に怒気を含ませて言った。使者は何も言う事ができず、そのままにしていた。村人が介抱して1日が過ぎた頃、旅人は快復し床から立てるようになった。旅人は全快すると村人達に礼を述べ、小さな瓶を差し出した。『これはきつとあなた方の役に立つでしょう』そういうと、旅人は村を去っていった。瓶にはたっぷり入った水があり、村人は有りがたくそれを使った。しかし、その水は絶えることがない。それを知った使者は村人達が眠った隙に水瓶を盗むとこっそりと村を出た。『これで喉の渇きで死ぬ事はない』早速、水を飲もうとした途端水瓶から水が溢れ出した。使者は手で止めようとしたが、水の勢いに負けて止められなかった。水量を増し川となって、瓶は割れた>

「ありがとう。アクアン、とっても面白かったわ」

「いや、お前はいつもそういうがの。ありふれた話じゃのうて、わらわが作った話をしたいものじゃ>

ルテーナとアクアンは笑いあい、静かに精霊だけ還っていった。

「おば様・・・？」

オウンはその小さな目から涙をしたらせていた。ルテーナはそっとオウンの脇に行き、オウンの肩を抱いた。

「おお・・・！！おお・・・！！」

「おば様・・・私は『星の詩歌』シャオーベンセルでしょうか？」

「おお・・・！そうだと。ルテーナよお前は立派な——」

続

【第5章】兄妹（後書き）

12/12更新いたしました。

もう次は6章です（はやw）

誤字脱字・感想評価などをいただけましたら、
きっと飛び上がるで
しょうw

【第6章1】衝撃と真実と

村中に衝撃が奔った。魔法が使える者はもちろん、魔法などからつきし信じていない者もそれは感じられずにはいられなかった。

「これがあいつの・・・！」

「どうして——？！こんな膨大な量の魔力が生み出せるの・・・」

広場にいた人々は現場の次に強い衝撃を受けた。シェイは衝撃が奔ると同時に地面にばたりと倒れた。

それに気づくと、ヒアはあわててシェイを抱き起こした。

「くそっ・・・、今のは強すぎるぞ」

シェイはかすれ声で呟いた。

「ジラスから聞いていたが信じてなかった。だが、本物だ・・・」

広場に向かう馬車とそれに付き添う者達は移動の途中で衝撃を受けた。強力な衝撃で一頭の馬は手綱が切れて暴れ出し、足をもつれさせて転び地面に横に倒れた。馬車は止まり、付き添いの者は衝撃のせいで頭がくらくらしで動けず、止まざるをえなかった。

「なっ！？何なんだ・・・？地震か？」

「おいっ、動ける奴は陛下ご一家を馬車の外にお連れしろ！」

下僕があわてて動き始めた。ジラスは片手を額にあてながら呆然としていた。

（俺が知っているときよりも・・・、いや魔法が使えると悟られないうちに力を抑えていたときよりも・・・、全然次元が違う。どこまでいく？お前は、何処まで行ってしまう——？）

エゴースは青い顔でジラスを遠目から観察していた。

燦爛と輝く紫の光は、とても神秘的で息をするのさえためらわれるほどだった。

「なんて……美しいの」

マフが近寄ろうとしたので『理と絆の紫剣』を振るい、近づけさせなかった。おびえたように顔をリオンに向けたマフは顔を青ざめさせた。リオンの両目が綺麗な紫色に染まっていたのだ。それは渦巻き、瞳の中で環をつくっていた。リオンはかすかに微笑んで見せた。マフは畏怖にちかい感情であとずさりした。

「おい……どうしたんだよ」

ファズはマフに聞いてみたが、マフは答えずただ震える腕でリオンを指差しただけだった。ファズは視線をマフからリオンへと変えた途端、目を大きく見開いた。

「どっ……どういうことだ？ 武と魔の交わりはできないはずだ！」

リオンはふつと顔を緩めた。

「やっぱりそうか。俺は信頼できるある人（？）達から教えてもらったときから（リオンはそういいながら2人の精霊に会釈をして見せた）、不思議に思ってたんだ。魔力は基本的に増やす為には体を鍛える必要がある。その時点で魔と武には決定的に関連するということになる。だが、どの魔法書も頑なに『その可能性はなきに等しい』と否定するばかりで、かすかな事柄をほのめかすような記述も見当たらなかった。そこで俺は考えた」

リオンはそこで一息つき、色合いが常に変わる紫の瞳をまたたいた。

「……魔法界には暗黙の了解である掟があるに違いないとな」

魔術師一同は、はつとそれぞれに様々なところへ視線を漂わせた。

リオンはその様子に納得でもしたように鼻をならすと話を続けた。

「だが、魔法界のほとんどの奴らは幼少期に魔力の度合いが濃いうことが判明するが、俺は最近魔力が体外に出たばかりでな。しかも俺は小さい頃から剣を習っていた。つまり、俺は例のない存在なわけだ。魔術師は人身に対して精神を狂わせたり、魔力を自由に

動かす事のできる物質に変えて攻撃する事はあっても、自ら剣を持つて片手でモノを召還させながら戦わない。物理的攻撃はしたとしてもたらだと流血させるほどではない。きつと人に血を流させればその分以上に魔力が減るんだろうなあ。そのことを魔法使は知ってるのかなあ。きつとそういうことを知らない若者を魔法使にさせるんだろうけど、タチ悪いぜ？」

リオンは睨むように魔術師達ひとりひとりの顔を見た。

「だから俺はお前らを憎む。そいでその元凶を憎む。お前らの中には不本意な奴もいるだろうが・・・俺は世界を平和にしくちやならない身でね。悪く思ふなよっ！」

最後の言葉を言い終わる前にリオンはダツと駆け出し剣を振りかざした。

*

「えっ・・・！どういうことですか、オウン様！？」

「なぜ理由はわかっておらん。しかし、それは真実じゃ」

「だから・・・魔術師は、魔法王国ネイロは、戦わないんですね」

「そうすれば魔力を失わないからの。だが、お前は違う」

「え？」

オウンは寂しい表情でテントの天井を見上げた。

「正確には精霊魔術師は、ということだが。精霊魔術師は精霊を呼び出すことができる魔術師の総称だ。精霊が人を傷つけることで、

呼び出した精霊魔術師の魔力が減る事はない。そのため、お前は・

・・・」

オウンもルテーナもふつと目を伏せた。

「このリーディアに居る限り、戦争に巻き込まれるのは間違いないと——？」

「そうじゃ・・・。年明けと共にリスベス帝国は戦火の火蓋を切つて落とす。きつと他国はそのことを予想しておらず、対応が遅れる

じやろう。そうなる前にお前は、ここを出ねばならん。ポルディノと共に」

「兄様と！？じゃあ旅の支度って・・・？」

「ポルディノと共に脱団し、旅人と共に行くのじゃ」

「そんな・・・。兄様には知らせないのですか？戦争の事を」

「もう知っておる。そして、お前が巻き込まれる事も」

＊

「陛下、“引き込み”の報告にウォリスが参っております」

「わかった。ここに連れてきて、お前は下がれ」

「仰せのままに」

下僕は部屋からフードを深く被った男を連れてくると、そそくさと部屋から出て行った。

男はレギオスの前で一礼するとフードをとった。

「臨時報告に参りました、ウォリス・エンドラーでございます」

「・・・やはり前の偽名の方がお前らしい気がするが？」

「・・・まだ名前を気になさいますか？本名はウォリス・エンドラーです。偽名はフラン・ローシャでしたが、前の古い名前と印象が似ていましたね」

「その古い名前は何という？」

「お答えするべきなのでしょうが、先に報告をしてもよろしいですか？」

レギオスはウォリスの考えを推し量るようにして見たのち、言った。

「俺の私室でも話せないか、話したくないか・・・まあいい。先に報告だ」

「有り難う御座います。皇帝陛下、では始めさせていただきます」

元フラン、ウォリスはレギオスに雇われてから、“引き込み”計画のトップとなり度々報告に来ていた。

「残りリスト8人のうち、2人をわが国領地内で発見・引き込みに

成功いたしました。腕の良い鍛冶屋と弓使いです。それと、リオンという少年――」

そのときウォリスは一瞬顔を緩めた。ふっと笑ったのだ。それにレギオスはつけいるかのように口を挟んだ。

「ちよつと待て。お前、そいつに何か思い入れがあるのか？」

「えっ？笑ってました？気にしないで下さいよ。笑ったのは内容のせいですから」

「？」

「彼には陛下が日を決める前、またはそれとほぼ同じ時、から一味がついています。そこから連絡が入ったのですが、不運ですね。彼は。魔法が使えるそうですよ」

「そうか……。調節者の力以外に魔法もか」
コントローラー

「きつと彼は早死にしますね。こんな風に恵まれ過ぎれば」

「面白い。さて、そろそろ教えてやるかりオン自身に」

レギオスは机に肘を突いて手を組むと、黙祷するかのようにつぶ
つた。

*

「はあつはあつ……」

荒い息がホール中に響く。

（やつぱり慣れても気持ちわるさはかわらねえな……。無抵抗の相手に剣先を向けるのはばかられるし。本当に……。これで、俺なんかでリーディアに平和をもたらす事はできるのか？）

<十五代目…….>

（剣士がいる時点でその時勢はいつか揺らぐということだろう。武器が全て、人を無差別に傷つけようとする者が全て、自分の思い通りにしようとする愚か者が全て、なくならない限り――）
2人の精霊が口を開こうとしたとき、リオンの視界が真っ白に塗りつぶされた。

『っ！？これは……ジラスと……でもあのときはあたりは闇だった』

『ようこそ、コントローラー 我らが調節者ムーンよ。我が世界へ』

リオンの背後から気配もなく声がした。振り返ろうとしたが体は動かない。

『ジラスじゃない……。誰だ？俺の事をなぜそう呼ぶ？』

『事実だからだ。だが我らがムーンはまだほかの名を持っていたな。そう確か……。』

声の主は一瞬でリオンのすぐ後ろに現れ、囁いた。

『リオン・フェブリーヤ、十五代目』

リオンにひどい悪寒が奔った。なんとか首だけ動かして声の主の正体を見ようとしてみたが、近すぎてよく見えない。

『お前は……。誰だ？俺になんの用だ』

『俺か？俺は……。そうだなこの世界の支配者だ』

『は？どの世界の？この真っ白な世界か、それともリーディアか？』
『どちらもだ』

『っ！？お前は————リスベス帝国の皇帝レギオスかっ！！』

【第6章2】事実

『・・・そうだ。今日はお前に真実を教えに来た』

レギオスはまた姿を消した。リオンは動く限り辺りをみたが白く無限に続く世界が広がっているだけだ。

『真実だと・・・？それは、俺がコントローラーっていう・・・・？』

『お前もそのうち気づくだろう。自分自身ではない力が疼くのに。
お前は二人月の天使と悪魔の間にいる絶対的^{エンジェル}巨大な力の操り手、調節者だ』

リオンはぴくりと眉を動かした。

二人月とは何か——？それはジラスから伝えられた時に必死に考えるのを抑え付けていた問いだ。

（ジラスの言っていたパロネのいつていたことは本当だったんだ・・・。だが、エンジェルとデーモン？）

『二人月とは何のことだ？天使と悪魔？俺になぜそれを教える？』

『教えるのはまたの機会でもいいだろう。今度会うのは年末だな』

『はっ？どうやってたら皇帝のお前と会うことなんか・・・』

『年が明けるまでに我がヴェルターラ城へ来い。さもなければ・・・』

・・・』

白い世界に低く暗く不気味な声が響く。

『リーディアの平和は保障できないぜ？』

最後の言葉と共に笑い声が反響し、気がついた。

<どうかしました？十五代目？>

「えっ？」

今度は気絶していなかったらしい。目がちかちかしてあまり色が識別しにくい。

「えっと・・・ああ。消しておかなきゃ。アドル 消えよ」

並べられた遺体は音もなくかすかな残像を残して消えた。リオンはホールのカーテンと窓を開けた。

窓から入ってきた光でまた目がちかちかし、慣れるまで何があるか分からなかった。部屋の隅に置かれた物に気づくとすぐさま駆けつけた。

「先生っ!？」

その体を抱き起こした。穏やかな日の光に照らされた顔は微かに微笑んでおり、頬にはうつすらと涙の痕があった。リオンはジワリと瞳に涙をにじませた。

そのときバロシオンの鋭い声が飛んできた。

<十五代目っ!床が光ってます!>

「くそっ!」

リオンは彼女の体を担ぎ上げると、大きく跳躍して入口まで戻ろうとしたが見えない壁にぶつかってしまった。

「発動し始めてるぞ、これ?誰がこれを仕掛けたんだよ?!」

*

「村人、でしたよね?」

「えっ!？」

突然背後で声がしたのでとびきり驚いて反応が遅れた。声をかけてきたのは先程まで遠くからジアスを観察していたエゴーススだった。「このような地震はよくあるのですか?・・・訳知り顔のようだったようにわたしには思えたものですか」

「今の・・・地震ですか?初めてですよ。地面が揺れるというよりも、体が揺さぶられている感覚でしたがこれが地震というのですか?」

ジアスは少し話題をずらした。それを内心で気づいたエゴーススは片方の眉を吊り上げて見せた。ジアスはふと村人を広場に集めなくてはならないことに気づいた。

（そういえば。そうだったけど・・・なんだかんだで忘れかけてた。シェイさんに一応頼んであるけど、誰も移動したようには見えない。今の衝撃を利用して・・・うん、そのほうが効率いいな）と、勝手にやる事を少し変える考えに至った。

「あの、さっきのは地震なんですか？！本当に？」

ジアスは目の色を変えてエゴースに詰め寄った。

「地元の方が分からないならどうしようもないが・・・」

ジアスはエゴースの言葉を無視し、また言った。

「地震なら皆を避難させなきゃ・・・。そうだ！避難と葬儀をいっぺんにやれば、安全に且つ楽に終わりますね」

ジアスはそして、大きく息を吸って人家周辺に声を張り上げた。

「皆さーん！！聞きたい事が・・・山程あると思うけど、後で全部説明するので、広場に集まってくださーいっ！」

ある人家の中・・・あの衝撃は村の中心部から離れていても十分に伝わっていた。例え、魔法に触れた事のないものも、魔法の存在を頑なに否定している者も、魔法を伝説のように感じている者も「今の・・・何かしら？地震？」

「子供の頃からここに住んでいるが、地震なんて起こったこと無いぞ？」

「そうねえ。じゃあなんなのかしら・・・」

そのとき外から大声が聞こえる。

『皆さーん！！聞きたい事が・・・山程あると思うけど、後で全部説明するので、広場に集まってくださーいっ！』

家の中に居た2人の夫婦は顔をはっと上げた。

「あの子の声だわっ！？」

「どうしてこんな時に・・・！？」

「聞く為には、広場に行かなければならないわよ、あなた。それに行けばさっきの揺れが何か分かるかもしれないわよ」

「むう・・・。まあ、いくか。メリッサ」

「おーいつ！大丈夫か、シェイ」

「・・・ああ、なんとか」

シェイは自力で起きると周りを見渡した。広場に血塗られた剣と、地面にうつぶせに倒れて毒々しい赤いモノがじわじわと広がっているアルファスの姿を見つけると不思議そうに首をかしげた。

「アレは一体何方が？」

「「えっ」」

その場に居た護衛の兵や特攻部隊隊員は驚きの声を上げた。地面に座り込んでいたリブシアはゆっくりと立ち上がった。顔は伏せたままだったが、はつきりと言った。

「シェイさんはそのショックのせいで自分が『殺した』ということは忘れてしまうんですよ。毎回ね」

「俺が『殺した』だつて？」

「気にしないで下さい。もう・・・いいです」

「あつ！そうだ、みんなをここに集めなきゃいけないんだっけ」

「集める？」

「ああ！リブシアには話してなかったか」

『はい、そうです。彼は・・・かなりの魔法を放ったと思われま
す』

ウエナは集まりから離れた所でちらちらとそのほうを見やりながら頭の中で呟いた。すると違う声が響く。

『・・・それはこちらでも確認済みだ。ついでに報告もな。

他に何かあるか』

『はい・・・えっと、彼の友人でしょう・・・シェイという者は自分が殺した記憶を忘れるそうです』

『フフツ……』

『あの？どうかされたんですか。エンドラー様？ご報告する度、お笑いになるので気になって……』

『黙れ、操り人形^{ベクトーラ}め。無駄なことは一切口にするな。お前はただ従えばいい。無駄なことを知ろうとするならば、すぐさま斬り捨ててやろう。代わりなど幾らでもいる』

『もっ申し訳有りません……』

彼女の本当の名は『操り人形^{ベクトーラ}108』^{トワ}。ある強力な精霊魔術師^{フェアラウイズ}が呼び出した精霊を人間の姿として一般人にも見えるようにした、精霊だ。この姿で人間でいう致命傷をくらったならば人間と同じ傷^{ダメージ}を受ける。姿は人間で肉体も人間のようになり、思考のみが精霊自身のものとなる。

（なぜ私が操り人形などと呼ばれなくてはならないのだ？全ての元凶はあやつ……。紅き髪^{フェアラウイズ}の精霊魔術師のせいぞ。そもそも、有限の命しか持たない者に罵声を浴びせられるとは何事か！？）

「……そうなんですか？でも僕はビルからジアスを追えって言われたんですけど」

「そうなのか？じゃあ……協会へ行きつつ村人をこっちに來させてくれ。あと、そっちの方向に住んでる奴らを反対側へ向かわせてくれるか？」

「分かりました。それと……」

「なんだ？」

リブシアはあまり目をそのほうに向けないように顔をしゃくった。

「一応、僕の父さんなんで……皆が来る前に埋めておいて貰えますか」

「わかった。それは俺達隊員がやろう」

ヒアが口をはさんだ。

「有り難う御座います」

リブシアはぺこりと頭を下げると足早に協会の方向へ続く道を行っ

た。

＊

「あっ?!」

彼女は何かにひかれたようにばつと振り返った。けれどそこに見えるのは何の変哲もない人混みだけ。

（何か落としたのかしら？）

と、彼女レベツカは懷ふとこやポケットなどものを入れていた所をまさぐりはじめた。市場の人通りのいい・・・というより激しい交差点のど真ん中で立っているレベツカは大変な迷惑の種となった。周りの視線も気にせずに、レベツカはふと首から提げていた質素で小さなペンダントを手にとった。彼女の瞳と同じ色の緑色の宝石に縁取られた金細工にひびが入っている。もつとよく見ようとそれを顔に近づけた途端ひびが細工全体に入り、割れてしまった。宝石がペンダントからはずれ手のひらの上でコロんと転がった。

（このペンダント、結構気に入ってたんだけどな・・・）

そのペンダントは彼女の大切な人から送られたものだ。それゆえ、貰った日から肌身離さず大切に仕事の邪魔になってもならなくとも身につけていた。この宝石を見つめていると血の繋がった家族が脳裏に蘇える。

（リブシア、父さん・・・。仕事上会いにいけないって訳じゃないし・・・。会いに行こうかな）

レベツカは密かに決意し、仕事仲間の溜まり場へと向かう。それは真昼間から開いている酒場『インディア銚突き』の隅のテーブル。

「よお、ベカ。依頼、受けに来たのか？」

レベツカは仕事仲間にはベカと名乗っていた。

「ううん・・・ちょっと少しだけ休業しようかなって思ってさ、皆に挨拶よ」

「休業！？最近あたりがいいって言ってたのに？」

「うん・・・。ちょっと家族の顔が見たくなっちゃって」

「そうか、でも足洗うって訳じゃないよな？」

仲間の一人がジッとレベッカの目を見つめた。

「違うよ？だってこの仕事、楽しいもの。やめたくなんかないわ。しばらくここを離れるだけよ」

「なら、いい。だかなるべく早く戻ってこいよ」

「ええ、わかってるわ。・・・じゃあ、みんな行つて来るから」

【第6章2】事実（後書き）

お読み頂き有り難う御座いました。年末は執筆もする・・・でしょうが更新は来年となります。夏の終わりに突然現れた新参者（ww）ですがここを読んでいただいているというのは、ここまで読んだという意味ですよね？

約4ヶ月、この場で書かせていただき、皆様に読んでいただき、有り難う御座いました。来年も続けていきたいと思っておりますので、その際はどうぞ宜しく御願います。それでは、リーディアはまだ年が明けませんがww、良いお年をお過ごしくださいませ。12/30午後11時前

【第6章3】見えてきた光

「何の魔法だよ？」

< 何かが召喚される喚環魔法・・・でしょうか >

< ルーン文字の並びから、環の中心に描かれたマークからしてそう
ですね >

「何が召喚されるんだ・・・」

リオンたちはホールの床いっばいに描かれたルーンの環の端に移動した。何がここに呼び出されようとも、それに真っ向から立ち向かう気なのだ。

環の中心のマークがくると廻り始め、それにあわせるかのようにリオンが持っていたエヴァーシオソードの光は点滅を繰り返す。

段々剣の光は輝きを失い、それ自体がもつ魔力が薄れていく。

「魔力を吸収してるのか？」

そのうち、剣は鈍い金属音を響かせながら2振りの剣として分かれた。リオンはそのまま剣を鞘に収めた。

マークが廻るスピードが上がり、一周することに光が環となって天井へ昇る。そして敵かな眩き。

『我が其処へ呼ばん。我が名を呼ばん。我が名はトワン。其処の者よ、我がルーンに触れよ』

「何が来ても驚かないように・・・」

誰にいうとでもなく、リオンは言うのと腰をすつとかがめてルーン文字のひとつひとつに触れていき、ホールを一周し最後に中心のマークに触れるとすぐに精霊が居る所まで戻った。すると光の環が光の柱となり、まぶしい光でその場に居た全ての者の目に覆われ見えなくなった――。

「へ？」

それはリオンが目が見えるようになってから初めての第一声だった。

「どうして……って俺らが呼び出された！？」

そこは村の広場。

「……っ！って、それはどういうことだよ！？」

「あれ、シェイさん？それに……マクシアン隊長？」

「あれ……じゃないし！」

もともと広場に居たほとんどが静かに笑った。

コツと高い、靴の音が地に響き笑いがピタリと止んだ。リオンはそちらの方へ視線を向ける前に肩に担いでいた彼女の体をそつと横たわらせた。

「わたくしが呼び出しましたの」

ウェナことトワンはドレスのすそをつまみながら立ち上がった。美しい金髪に碧眼の生粋の貴族のような顔をしている彼女だが、邪悪な笑みは絶えず心に闇を隠していた。

「これはこれは、精霊であるはずのウェナ王女様。殿下自らここにおいでになられましたか」

リオンは相手を苛立たせるほど卑屈な態度で恭しくお辞儀をした。

「なっ！？」

「それともトワン、とお呼びしましょうか？」

「あなた、どうしてそれを……！？」

（なぜ我が精霊だと分かったのだ……？人間の姿になる魔法は完璧であるはずなのに！？）

「おー、すげえ。その魔法がかけてあってもちゃんと見えて聞こえるんだな」

「なんですって！？」

（さて、そろそろ気づくかな。あいつは・・・）

リスベス帝国ヴェルターラ城のある一室。ウォリス・エンドラーは連絡が入るのを待ちながら、愛用している剣を砥石で研いでいた。ときどき灯りに照らして刃の具合を見たり、そつと指でなぞったりした。ウォリスは机の上に開かれています手帳の何も書かれてないページを、ビリツと破りとると剣の刃に当ててすつとそのまま下に下げる。紙が真つ二つに切れると、ひとつ頷いて剣を鞘に収めた。

そのとき、頭に慣れない声が響く。

『エンドラー様、こちら操り人形^{ベクトーラ}486です。リストNo.1のグレイ・アーナスを発見いたしました。現在地はヒーディオン王国南部、アーリオ公国北東部にありますポールレ山脈地帯ふもとのアーリオの小村です。目標は小村の農家に宿を借りております』

『発見時はいつだ？』

『本日4月20日の正午前です。そのとき私が木々に紛れて周囲を見張っておりました所、小村のほうからかすかに騒がしくなったので様子を見てみますと、旅人が村に着いた途端倒れてしまっていたようで私はその旅人の風貌と顔、基本的装備を確認した所グレイ・アーナスと一致したためしばらく動きがないか見張りをしてから、今に至るまでです』

『ご苦労。村人に知れぬようそいつを連れて山脈に入れ。成功次第報告しろ。途中で目覚めたら気絶させる。以上だ』

乱雑にそれを遮りきらせた。ウォリスは疲れ気味にため息をついた。（皇帝に計画のトップにしてもらったのは有り難いが、これじゃ口^{ツインガー}クに二人月について調べられないな。・・・ツ！わざとか？これ以上当事者では無い者に知る必要はないと・・・（？））

*

リブシアは家一軒一軒まわりながら、ゆっくり協会のほうへ向か

っていた。

すると、協会のほうから広場に向かって複数の人が歩いてきた。

「おや、リブシア君じゃないか？」

「ジアスのところのおじさん、おばさん？あれ、それに……」

「さっきの揺れが何か知ってる？」

「広場にとりあえず行ってください。15代目が何とか説明してくれますから」

「そうかね？じゃあ、行くか」

と、そのグループは来た時と同じように広場へ向かった。だが1組の夫婦はそれについていかず、リブシアと同じように見送っていた。その夫婦はジアスの両親だった。

「リブシア君、さっき揺れがしたあとにあの子の声が聞こえたんだが、それについて何か知っていることはないか？」

「え？聞こえたんですか、ジアスの声か？」

そのときガラガラと大きな音と馬の小さい鳴き声が協会のある方向から聞こえ、3人は音のするほうに注目した。そこからやってきたのは豪華な装飾の施された馬車、綺麗な身なりをした従者、美しい毛並みの馬、そして先頭の従者に何処かを指差して何か言っている村人のような質素な服装をした者。

「あれ、（先頭の従者に付き添っている村人のような者を指差して）ジアス？何やってるの？」

「おー？リブシアいいところに来た……って父さんと母さんッ！？」

「……今は何も言わんが、全て後で説明するというのなら文句は言わん」

「ちゃんと説明してくれるのなら……ね？」

「——分かった。ありがと、父さん、母さん。リブシア全部聞いたか？」

「うん。シェイさんから大体聞いてきたから大丈夫。だけど、その

馬車とか・・・は聞いてないような気がするけど？」

「この一行は、王御一家とその直属の従者さんと下僕さんと侍女さんと護衛の人、あと広場に行く村人の皆さん」

首を伸ばせば馬車との間を少し空けて村人が興味津々と言った様子でこちらを伺っていたのが見える。

「へえ・・・って!？」

「もう一回繰り返し返すか？」

「いや、いいよ。ちよつと驚いただけだから。じゃあここから向こうに住んでる人皆来てるの？」

「ああ。ついでに元『剣の習い』生徒を先に反対側へ向かわせたけど？」

「よかった。じゃあ僕達は広場に行けばいいんですね」

「少し失礼」

いきなりエゴーススが2人の会話にわって入った。

「・・・?このヒトは？」

「えっと、お名前伺ってませんでしたっけ？」

「私の名はオデュ・エゴース。我が国王の側近だ。そちらは？」

「僕は・・・」

リブシアはためらった。

（どうしよう・・・。コイツ絶対僕の事を知ってる。間接的にだとは思っけど、僕がやった事は全て知っているに違いない）

リブシアは助けを求めるようにジラスを見た。ジラスはリブシアの顔を見て何かがあったと悟った。

「こいつは俺と同じ年の友達、リブシアです。何か御用でもあったんですか？」

「いや何、少し興味があっただけだ。気にするな」

馬車がガラガラと道に行く。ジラスとリブシアは馬車の先頭よりも前を行き、声が漏れないようにひそひそ話をしていた。

「どういうことだよ、リブシア。アイツと何か接点でもあるのか？」

「僕の父親がね．．．帝国のスパイなんだよ」

「それは．．．．．知っている」

「父さんに影響されてスパイを手伝ってた。それをヤツは知ってるんだ。実際会ったのは初めてだけど、僕らの存在は確実に把握していた．．．。僕の名前を全部知れば、ヤツは絶対に僕に何らかの方法でコンタクトしようとする。だから．．．だめなんだ」

「やっぱり、アイツも帝国の一味か」

沈黙が2人の間に広がる。ただただ馬車の歯車の機械的な音がする。さつきまで早く感じていた時間が、とても遅く鈍く長く薄く引き伸ばされたようだった。

ついにリブシアが広場が見えてきた頃に口を開いた。

「シェイさんはね．．．、2人が居なくなってからわかったんだけど、自分で人を『殺し』てもその記憶がショックによって消えるんだ」

「えっ——？　そうなのか．．．。そういえばブランさんは？」

「2人が居なくなってから．．．丁度今頃の去年にシェイさんと2人で、一緒に近くの村を漁りまわってた盗賊を懲らしめに行った時に．．．．．何があったのかは分からないけど、盗賊は倒されてシェイさんは記憶を失いブランさんは居なくなった。その当時、村に帰ってくる予定日よりあまりにも遅れて帰ってきてなかったから、元『剣術の習い』生徒が何人か行ったんだけど、シェイさんは気絶して倒れて盗賊もその近くで気を失ってただけで出血による気絶じゃなかったらしい。シェイさんの剣と手は血に汚れてて、ブランさんらしき血の痕が点々と落ちていたそうだよ」

「悪い、今する話じゃなかったな」

「ううん、いいんだ。僕は．．．．．」

リブシアが言葉を続ける前にジアスが立ち止まってそれを止めた。

「何かが広場で起こってるぞ。魔法とかに関係ありそうだ」

【第6章3】見えてきた光（後書き）

遅くなりましたが、明けましておめでとう御座います。本年も昨年と変わらず・・・いえ昨年よりも深く読んで頂ければありがたく思います。

サブタイトルは書き終わってから、

（ああ、やっと見えてきたな〜）

と思ったからつけた、まさしく今の心です。

【第6章4】葬式の儀

「ちよつとあなた！　どういうことよ」

「どうもこうも、お前が想像してるとおりだよ。俺はリオンという名によつて、2人’が見えるようになり、ほかの精霊も見える目になつたんだよ。トワン、見えるだろ？　俺の背後にいる、2人’が」
「・・・・・・・・」

精霊の2人はわざとおどけて飛んだり跳ねたり、周りの普通の人間に見えないことをいい事にリオンとウエナ改めトワンをつついたりつねったりe t c . . . などといろんな事をしていた。

（あゝ、2人共。はしゃぐなら場所とタイミングを見極めてもらえ
る？）

<それが今こそ、そのときでしょう？>

リオンは苦笑いしながらため息をついた。

「リスベス帝国はお前みたいなお操り人形を使いまくつてるんだろ？
報告する奴に伝えてくれないか？」

リオンはふいにジュディアのほうを向いて片膝をついた。

「俺はまだ全ての手を使い切ったわけじゃない、とな」

「え・・・？　でも——　だが、我はどうなるのだ？」

「葬儀を先に行く」

ジラスたち（そこに王家御一行も含まれる）が広場に着いた時、
広場の空気は静まり返り少しでも物音がすると皆がそのほうへ目を
向けた。ジラスとリブシアは動きの遅い馬車よりも先に広場に着く
なり、リオンのほうへ駆け寄った。

「全員来てるのか？」

「ほぼ。確認してないからなんとも言えないが、人数的には来てい
る事になる」

リオンはジュディアのほうを向いて片膝をつき、頭を下げていた。

2人が近くに駆け寄ってきて、その体勢を崩すことなく受け答える。その姿はまるで死者に祈りを捧げているようだった。

そのうち馬車も到着し、マルス王も馬車から降りた。それを待っていたかのように、リオンは『真理の剣』の柄を握ってわざと目の青さを強調させて、静かにマルスの前で一礼した。

「陛下、今まで自分の使命のためとはいえ偽りを真実と言った事お許しください。強くなるためだったのです。決して一国に加担するわけで軍に入ったではありません」

「……薄々そのような予感がしておったが、やはりそうであつたか」

「はい。わたくしがリオン・フェブリーヤ15代目であります」

この言葉に村人や事情を知らない兵士が驚いたのは無理もない。

シェイが出て行つてから外の様子をこそそこそ伺っていた村役場内。リオンの声と内容を聞くなり狭い室内は大騒ぎになった。窓から広場を見ていた女は声を上げた。

「あの子！絶対そうよ。あのリアンビルとジアスよ！」

「どっちが15代目だ？ジアスだろうな？」

「えつと……っ!？」

女は答えようとしたが驚きのあまり声が出なかった。待ちきれず窓の外を覗いたシェイの父親は息を呑んだ。彼の目に映るのは、豪華な服に身を包んだ国王の前に堂々と立つ青い瞳をたたえた、リオン。リオンは役場の方が騒がしいのに気づくと、窓辺に沢山の大人がこちらを凝視してるので近寄って窓を無理矢理開けた。

「皆さんもこちらへいらつしゃいませんか？」

「お、お前は……疎遠のはずだ！」

「ええ。確かに俺は疎遠ですけど、リオン頭首になる条件は、なんでしたっけ？」

「……っ」

「一つ。何百年も前の1代目の血をひいていること。二つ。先代よ

りも年が若いこと。三つ。さっきの二つが認められる者たちの中で、剣が優れていること。四つ。先代の教えを後代に教える事が出来る者。五つ。平和の為という使命を全う出来る者。以上……ですよね？」

リオンは不敵に笑うと続けた。

「疎遠が頭首になつていけないことはない。つまり、頭首のこともでも頭首になれるという確証は得られないということ。1代目の血をひいているか否か、が条件に入っているのは偽者を排除する為であり、リオンの継承権利が王位継承権と同じだと思つてはいけな。次代を決める事ができるのはリオンのみ。ほかの人がとやかく言つてもその権利を誰かに譲り渡すことは出来ない。じゃないと碧眼のリオンはいなくなりますよ？」

そう言い残すと笑みを浮かべたまま、無理矢理窓を閉めた。

「いいのか？あやつらは」

「シェイさんによると関係ないそうです。だからいいんですよ」

リオンはまたマルスに一礼するといつの間にか持つてきていた小さな壺を手に取り、広場の中心へ歩いた。村人や群集は広場を輪で囲むかのように広がっており、誰かが鳥の眼でこの状況を見たのならば、綺麗な人の環が見えていることだろう。

「これよりジュディア・フェブリーヤ改めリオン・フェブリーヤ14代目の『葬式の儀』を執り行わん」

リオンはジュディアの手を取りそつと口づけする振りをして囁く。

『ル エフィ 灰に 変化せよ』

彼女の体があつというまに灰となり崩れた。民衆は驚きの声を上げて近寄ろうとした。しかし、彼はそれをとどめた。

「そこから1歩たりとも動かないで下さい！環が崩れては『葬式の儀』は不完全なものとなり、死者を冒瀆することになりますよ！」

群集はひるんで身じろぎ一つしなくなつた。

リオンは灰を丁寧な手で壺に入れた。その動作が完了すると、群集

の間からヤコブ神父が出てきた。ヤコブは無言で壺をリオンから受け取り、片手で抱えた。ヤコブは懷から銀素材のナイフを取り出し、リオンの左手首に刃を当て血を滴らせると壺の中に数滴入れた。それを見届けるとリオンは片膝について神父を見上げた。その眼には深い悲しみの証として涙が光っていた。

「こうして死者と汝の一部は永遠とわになった。汝はこれ以上にアゴーリブ神に何を望む？」

「我にゆるぎない真実と平和に達することのできる決意を」

ヤコブは環の一部に居るジアスを環の中に引き入れて片膝をつかせ問うた。

「汝は彼女の死からアゴーリブ神に何を望む？」

「・・・親友に負けない強き心を」

それを聞いたリオンはジアスを見て微笑んだ。ジアスも目を合わせて笑った。

次にシェイが中に引き入れられ片膝をつかされた。

「汝は彼女の死からアゴーリブ神に何を望む？」

「ブランへの御加護を」

ジアスはシェイの瞳に映る辛く苦しく固い決心を感じ、胸の鼓動が激しくなった。

（シェイさんはこの葬式でブランさんを送っているんだ・・・）

。俺がもし——あいつを失ったら、絆で繋がっている俺はどうなる？・・・シェイさんとブランさんはいうままでになく信頼しあっていた。俺はどうすればいい？）

次に中に入れられ片膝をつかされたのはリブシアだった。

「汝は彼女の死よりアゴーリブ神に何を望む？」

「僕は・・・家族の守護を」

次々に神父は群集の環から中へと人を引き入れ片膝をつかせ、問うた。徐々に中に入った人が片膝をつくと環の中で小さい環が出来上がり、その中心にヤコブが立ち、大きい環の人々に問うた。

「汝らは何を望むのか？口に出さずとも神は既に御存知。ひたすらに祈るが良い。神へ・・・！」

ある者は手を胸の前で組み、ある者は空を見つめた。無言が沈黙を呼び、沈黙が『葬式アルオシユの儀』の魔法を発動させる。環の一部である全ての人にある魔力を少しずつつかじりとして、本人が気づかないうちに全ての人と繋がリンクがついて、死者に対する尊敬と死者を天へと還みちす路を召喚する、呪文や詠唱を唱える事のない特殊魔法『葬式アルオシユの儀』を。魔力の度合いが薄い人間には見えない、清らかな白い光が人でできた2層の環の間をはしり、ルーン文字とマークを刻んでいく。全てが完成すると、人々は一斉に空の一点を見つめた。魔力の度合いが濃い者には見えるだろう。螺旋階段のような白い路みちが空の一点へと続き、その一点へ時折笑顔をこちらへ見せながら、涙しながら彼女の昇りゆく姿が。その姿や路みちが見えようと見えまいと、人々は心揺さぶられ彼女に関する記憶が涙と悲しみに溢れてしまった。出会ったことがほんだない者たちでさえ、深い哀愁の気持ちになり涙を流していた。

リオンは目線は彼女を捉えながら、この光景をジアスに見せる為そつと呟いた。

「イレレー エフィ ア 見える目に 一時 変われ」

するとジアスは潤む目を大きく見開きながら、彼女の姿に見入った。

『ありがとう・・・』

『えっ？何か言った？ジアス』

ジアスは、もうすぐ路みちを昇り終えてしまう彼女の姿を見つめながら通信コンタクトを始めていた。

『お前が変えてくれたんだろ？先生が見える目に』

『・・・どっちでもいいじゃないか。それより先生に最後に言っておきたい事を言わなきゃ、だ』

リオンは曖昧に肯定も否定もせず、泣いたせいで少し引きつる顔を無理矢理笑顔にした。

『そうだな・・・。先生！ありがとうございます！』

『先生！また今度はもっと技を教えて下さいね！』

白い路^{みち}の終着点の一手前で、彼女が振り向かず手を振っていた姿が2人に見えたような気がした。

【第6章4】葬式の儀（後書き）

あの、サブタイトルにルビ振りたいって思うの私だけでしょうか？
ああ、振りたいw

【第6章5】訂正

雲がいたるところに浮かぶ春の青空に、ようやく赤みが差して暗い濃紺に^{むしほ}しみはじめた。屋敷へと向かう道の中でリオンは2つの事を思い返していた。

1つ目。

「陛下、俺の事がはつきりとした所で大変になるであろうことは分かっています。それに用事が出来ました。ので、軍を抜けさせていただきます」

「………よかるう。ではリオン、なにか伝え残すことはないか？」

「そうですね……。もうすぐ年が明けますが、派手に大きな祭りや祝祭は行わない方がいいですよ。北がとびきり大きな花火を打ち上げるそうですから。あ、後、ジラスお前どうする？」

「俺はビルについていきます。そこが何処であろうと」

「……承知した。では宿に戻るか」

マルスはキャランをつれて馬車に乗り込み、沢山の侍従や下僕と共に広場から去っていた。だが、エゴースとトワン、国を裏切った護衛の兵士達はそこに立ったままだ。

「我はどうすればいい……。？」

トワンがぼそりと呟く。リオンは今気づいたかのようにトワンの方を向くと口を開いた。

「報告したのか？」

「いいえ。今するわ」

トワンは片手をこめかみにあて、まぶたを閉じた。

『エンドラー様、こちら操り人形108です』
ベクターラトワン

『正体を見破られたんだろっ？』

『ッ！はい、そうです。リオンがあなたに伝えたいそうです』

『何を？』

『まだ全ての手を使い切ったわけじゃない、と』

『フンッ』

ウォリスは鼻を鳴らすと一方的に打ち切った。

「したが、一方的に打ち切られた。これでいいのか」

「ああ。じゃあいいぞ。帰って」

「「はあっ！？」」

リスベス帝国側の人はもちろん、あまり関係がない人々も声を上げた。

「だって意味無いじゃん。お前ら切り捨ててもどうせ帝国は新しい奴を送り込んでくるだけだ。命を無駄にする奴が平和を成し遂げられるかって」

リオンはくつたくのない笑みを見せた。だが、すぐに付け足した。
「こっちとして利用できるならありがたく使わせてもらっがな」

2つ目。

「おい、ビル！」

ヒアが、広場から立ち去ろうとしていたリオンを呼び止めた。

「マクシアン隊長？何か？」

「日暮れ前から使える部屋って借りられないか？」

「え？何のことですか」

「ああ、知らないんだっけな。・・・日暮れ前から話したいことが

あるんでな、お前とか色々今回の関係者を集められる部屋を貸して欲しいんだ」

「・・・どのくらいの人？」

「俺達を入れて7人・・・だな」

「そうですか。では屋敷のどの部屋でも結構です。俺も、なら何時行けば？」

「空が赤くなり始めた頃でいい」

（長い1日だったな・・・）

リオンはつくづくそう思った。気づけば魔法を多く使った事で、魔力も体力もヘロヘロだった。それになぜか頭痛がしていた。1歩踏み出すたびに頭がキリリと痛むのだ。また1歩踏み出そうと片足を上げた途端、本日3回目の感覚に襲われた。真っ白に、見えていたものが包まれていく。

*

「兄様・・・・・・・・」

「ルテーナ・・・」

ポルディノの目に映る彼女はひどく悲しげだった。

（全て聞いたんだね。ルテーナ・・・）

慰めの言葉はひとつもかけず、ポルディノはルテーナを抱きしめた。ルテーナはポルディノの服をギュツと掴み顔を彼の胸にうずめて泣いた。ポルディノも彼女に気づかれないように静かに涙を流していた。

（もし、できることなら・・・僕が代わりたい。無意味な争いにな

ぜ巻き込まれなくてはならない？どうして僕の妹が・・・？)

「兄様。すでに知ってたのね・・・」

「ごめんよ。ルテーナ、僕にはなにも出来な・・・」

「兄様！」

ポルディノははつとして赤くはらした眼をルテーナに向けた。

「もういいの。もう・・・いいの。兄様はいてくれるだけでいい。生きて、私のそばにいてくれれば、それでいいの」

「ルテーナ・・・ごめん。ずっと2人でいよう。孤独ひびにならないように・・・」

ルテーナは今出来る限りの笑顔で頷いた。ポルディノにはその笑顔がとても哀しいものに見えた。

*

今度も白い空間にいた。この空間の主は・・・。

「レギオス！何の用だ？2回もここに呼び出して・・・」

「悪いな。先程言い忘れたことがあってな。本当はもっと早く呼び出したかったんだが、そっちが取り組み中だったものでね」

レギオスは少しも悪びれた様子をみせずに行った。

今度はリオンの正面、少し距離を置いて立っている。整った顔立ちに、すらっとした長身に、特徴的な白く長い髪をしたレギオスの姿がはっきりと見える。

「お前が・・・レギオス・ターラー。リスベス帝国現皇帝・・・」

「顔を見るのは初めてだったな。ムーン」

『・・・言い忘れたこととは何だ？』
『まあ、焦るなって。その前に少しかだけ二人月ツインガーのことを教えてやるよ』

レギオスはそういいながら後ろを向いた。するとレギオスが向いた方向は、ただ白い空間が広がっているのではなく、みごとな星空が広がっていた。

『二人月ツインガーつてのは古い伝説の存在だ。天使エンジェルと悪魔デーモンと調節者コントローラーがひとつとなったときに奇跡が起こる。それぞれは新しい力を手に入れる』

『奇跡とはどういうことが起こるんだ？』

『これ以上はいえない。さ、本題に入ろうか。俺が言い忘れたのは天使エンジェルと悪魔デーモンの存在。天使のほうはひとまず置いておくが、悪魔はお前のずつと身近にいる。もしかしたらお前も気づいているかもしれない。お前がヴェルターラ城に来る際、ほかの奴も連れて来い。多ければ多いほどいいと思うが、信頼できる奴とお前デーモンが悪魔だと思っ奴を必ず連れて来い。そうするのならお前に向けた我が兵士を引き上げさせよう』

『・・・今日ここにいる奴らはどうするんだ』

『魔術師ウィザードや操り人形ベクトーラは殺したのか？』

『魔術師ウィザードは3人とも殺したが、トワンとあと、ヒーディオンの内部の奴らはやってない』

レギオスがリオンのほうを振り向くと同時に、星空が消え元の白い空間がただひたすらに続くだけとなった。

『そうか・・・。なら残りはお前に任せよう。煮るなり焼くなり勝手にしろ』

『自分の配下にあるやつを敵に処理させるのかよ』

『間違ってるぞ、ムーン』

『は?!』

『お前と俺は敵同士じゃない。お前は平和を築き上げる為に、俺はリーディア全土を手中に収める為にやらなければならない。それだけだ』

レギオスがそっくり終わると真っ白な世界は薄れて行き、元の道や景色が戻ってきた。

（どうすればいい？俺は……。何のために帝国へ向かえばいい――？）

*

リーディアの風習で1年は4月の終わり、つまり春から夏へ移り変わる頃に始まる。5月1日が新しい年の始まりとなる。

リーディアでは4月30日が過ぎると夜空に華々しい花火が打ちあがり、3日間の祝祭が開かれる。アゴーリヴ神に1年の豊作や幸運を祈る祝祭だ。

その準備のため、各国の農村や町は大忙しでそれはここ、ポールレ山脈のアーリア公国側にある小村でも同じ事。

「さつき運び込まれた旅人さん、大丈夫かね」

「顔色がそんなに悪くなかったもんで、大丈夫やる」

農家の夫婦が4月の上旬に蒔いた種の様子を伺いながら、話をしていた。

「こんな忙しい時期に倒れこむのもどうかしてるけどね」
2人の間を割るように少女が口を挟んだ。

「これっ！ニイラ、そんな口を叩くんでねえける。失礼や」

「だって・・・ほんとのことだもん！」

「世の中には、口に出してええことと口にださんほうがあええことがあるんや。ええ加減、それくらいの勘定しいや」

ニイラと呼ばれた少女はすました顔でぷいっと家のほうへ駆けていった。

妻がふうつとため息をついた。

グレイ・アーナスは始めから意識を失うほど疲労困憊しているわけではなかった。だが、正体が精霊であるはずなのに普通の人間にも見えている『操り人形』^{ベクトーラ}が、人並みはずれた速さで追ってきていたのを感じると、追っ手を撒くために農家の世話になっていた。

「ねえ、どうして皆を騙してるの？」

突然、グレイの耳元で声がした。グレイは目を閉じていても、大抵の人間や生き物の存在を感じ取れるが、この声の主が生まれつき持つ存在が感じられなかった。ただの少女。幼い響きの残る声だった。興味と不安に駆られて、グレイはまぶたを開けた。声から想像したとおりの体つき、幼さの残る顔。ただひとつ、少女に似合うことの無かった瞳が彼の心を打った。

（この娘・・・・・・・・！）

「ねえ、聞いてるの？」

「・・・いや、娘。お主、なぜ分かった？」

「だってあたしだけ、見えるもん。『^{ロディヨーフ}生命の源』が」

（やはり！この娘は大戦争が起きた頃いた民の血を濃く受け継いでいるのだ・・・！なんと、よく似た瞳をしてるか！）

「レオ・バスタス・ウェンイリ・カンレ・マバタ・ヨーフォコ・コ

オヴア」

「……………どうして？知ってるの？この言葉」

「分かるのか？意味を」

「あなたは——つまりあたし——、昔の民の血が、多く流れている・……？」

グレイは横になっていたのを、上半身を起こしてニイラの頬に触れた。

「娘、名はなんという」

「あたしはニイラ・ウェンイリ。おじさんは？」

「わしはグレイ・アーナス。寒冷の祝福という意味だ。お主は……」

「古き民、でしょ？」

「ああ、間違いなぞ無い」

【第6章5】訂正（後書き）

今まで上げてきたものとは、違う形で掲載しました。

こちらの方が読みやすいでしょうか？こちらの方でよければ、始めから手を加えていきたいと思っております。何卒、ご意見をよろしく御願いたします。

【第6章6】グレイとニイラ（前書き）

グレイとニイラ中心にまわっております。

リオンたちは全然出てません。長いこと更新してなかったわりに内容は薄いのであしからず。

【第6章6】グレイとニイラ

「どうしてグレイおじさんは、言葉知ってるの？ みいんな知らなかったのに」

ニイラが自分の顔に添えられたグレイの手をきゅつと握った。

「この言葉は、わしの国の言葉だ。今の時代でいう古代語ではないぞ。それよりも古い言葉だ」

「ええっ！ じゃあ、どうしてあたしは知ってるの？」

「それは、お主にわしの国がまだあつた頃の民の血が濃く流れ着いておるからだ。本当は今のリーディアには、お主の様な者が沢山おるが、自らが気づいておらんだけだ。ただそのような者は、魔力の度合いが濃いことが多くてな、フェアラウイズ精霊魔術師となるから、気づかないのだ」

「ふえあら・・・いず？ 何、それ？」

グレイは口元がもじやもじやのひげに覆われているのを知らないように、笑った。だが、ニイラにはただ目を細めているようにしかみえなかった。

「精霊とあつて話をしたりする事ができるウィザード魔術師だ。ただし、お主はなれんぞ」

「ええゝ。どうして？」

「魔力が体外にできることがない体質だからだ。その証拠に『ロディイ生命の源』ヨラが見えるのだろう？ お主は『レ瞳』の代わりに『ロディイヨイラ生命の根源』を持つのである」

『ロディイヨフ生命の源』とは全ての生きとし生きようとする者、植物、動物、さらには特殊な道具などにある、急所であり強みでもあるものだ。例えば、人間の『ロディイヨフ生命の源』は頭と心臓だ。どちらも剣で一刺しさ

れば、致命傷・死傷を負う。だが、頭を使って、剣を持って向かい来る剣をなぎ払い、多少の行動で苦しくならない心臓となれば、弱点であり長所ともなるのだ。

そしてこの『生命の源』^{ロブイーヨフ}を見る事が出来る目を『生命の根源』^{ロブイーヨフイラ}という。今のリーディアにはこの目を持つ者はとても稀少だが、グレイの母国が存在していた頃はそれほど珍しいことではなかった。そしてこの目に見つめられた病人や怪我人は、その前よりも治癒力が増し治りが早くなるのだ。

『瞳』とは精霊を見ることのできる目のことをさす。グレイの母国が存在していた頃は生きる民全てが『瞳』を持っていたが、今は魔力の度合いが濃い者の中でも一部しか持つ者がいない。『瞳』を持つ者は、精霊に触れてもらう必要なしに、言葉を交わしたり触れ合う事ができる。

「ついでに言うておくが、ニイラ。お主、治してくれぬか？ この腕を」

そういつて差し出した腕は、外傷は見えない。だがニイラは顔を真っ青にした。

「おじさん……、何やったの！」

「ちよつとばかり、木から落ちてな」

「もうすぐ真っ赤に腫れちゃうよ！ 貸してっ！」

ニイラはグレイの怪我していない方の腕を手にとると、怪我している方の腕の下に置いて交差させた。そして、カッと目を見開いた。その目にはドクドクと鼓動と共に波打つ血管が映っている。

皮膚の内側では、時間を早送りしたような速さで損傷した筋肉や神経がつなが合わされていく。
ふいにニイラが目をそらした。と共にため息をついた。

「大丈夫か・・・？」

「あたしはね。おじさん、折れた小さな骨が筋肉に刺さっちゃってる。あたしの治癒力じゃ治しようがないの。お医者さんとか呼ばないと」

「だが、それは無理だ」

「え？ どうして？」

「ここをすぐさま出なければ、この村にも被害が及ぶ」

「おい、いいのか？」

「いいんだもん。だってあたし、孤児みなしこだからおじさん達がしかたなく引き取ったのよ」

「せめて、書置きでも残しておく方がよいのでは？」

「ううん。そうしたくないの」

静かに首を振るニイラの頭にそつと手を置いた。小さな顔が 그레이 を見上げた。

「いくぞ」

こくつと頷いたニイラの手を取り、 그레이 は村をこつそりと抜け出した。

그레이 は忌々しげに布で巻かれた右腕を見た。怪我しているほうの腕だ。本当は木から落ちたのではなく、敵の蹴りを急所から庇うために受けたものだ。

（あの操り人形ヘクトーラと呼ばれる奴らは、なぜわしを追う？ なんとしてもこの子だけは——守りきらなければ）

左手は利き手なので特に戦うときは武器を持てるが、ニイラを庇うとなると右手は痛い弱点だ。一人きりで戦うとしても、右半身が隙だらけになるだろう。戦いで勝負を決めるのは間違いなく、この隙を 그레이 がカバーできるか否かにかかっている。

突然、ニイラが声を上げた。

「おじさんっ！」

「どうした？」

「『^{ロディーヨフ}生命の源』がおかしな人がすごい勢いで来るよ！」

「ニイラ、下がっている」

「ううん。できない！　だって、おじさんその腕じゃまともに戦えないよ！」

「まともに戦う必要はない。逃げる事ができればそれでよい」

「あたしだって！　あたしだって、『^{ロディーヨフ}生命の源』の働きを弱らせる事ぐらい、できるもん」

ニイラのぱっちりした目が二重に訴えかける。

そして、わずかな 그레이 の記憶が蘇える。

『できんだ、お前を連れて行くことなど・・・』

그레이 のまだ若き頃の思い出だ。声がしゃがれていた。

『どうして！？　わたしだって・・・役に立ちはないけど、力になれるわ！』

相手の女性の顔はおぼろげだった。霧がかかったようにぼやけている。

『どうして、俺なんか・・・』

『好きだからに決まってるじゃない！　一緒に居て欲しいのよ！』

幸せなんかいらぬ。一分一秒だけのじかんだっていい。あなたと一緒に居られればいいのよ！』

女性にしがみつかれて、揺さぶられて——それで記憶は途切れていた。

「おじさん！」

ニイラの叫び声が聞こえた。思い出に浸っていた 그레이 はハッと顔を上げた。もう『^レ瞳』に見えるほど近くに、操^{ベクトーラ}り人形は迫ってきて

いた。

「止まれ！」

「既に止まっているさ」

操り人形は単調に切り替えした。
ベクトーラ

「さて、そこにいるお譲ちゃんはどうしたのかな？」

「そんなことどうでもいい。それよりも教える。なぜわしをつけねらう？」

「それはご主人に聞いて欲しいもんだな」

「なぜ精霊がそのような格好をしているのだ？」

「普通だろう？ 不自然か？」

「……ねえ、おじさんはなんていう名前なの？」

ニイラは二人の間に割って入った。

「は？ 名前？ シエ……ってなぜ教えなければならない？」

「だって呼ぶときに、精霊さんって呼ぶのもおかしいでしょ？」

ベクトーラ
操り人形は少し大きく目を見開いた。

「このお譲ちゃんも本当の姿が見えるらしい！」

「うっん。違うよ。あたしがみえ……」

ニイラが言い終わる前に、操り人形ベクトーラ（以下シエロン）はニイラの手首を掴んで引き寄せた。そして、どこからか短剣をとりだし、ニイラの白い首筋に当てた。

「大人しく、わが主の前に来い」

「それは脅迫か」

「お前の受け答えしだいによるな」

「どうすれば、彼女が解放される？」

シエロンは肩をすくめた。

「主人による。お前を従わせる為に彼女は必要だ、と思うかもしれないな」

「なぜわしなんだ？」

「主人に聞いてくれ。私はただグレイ・アーナスを連れて来いと命令されただけだ。ほかは何も知らない」

「グレイおじさん、言う通りにして」

「っ!？」

「ティオ・アルバタウ・セルディー・ウーヴァ・ユエド」

「……クオーラ」

「レディオ! レノ・ロディーヨフ・グネ。ミイエ・フィーラ・デ
イケ・アラミル」

「ジョイ。……ウェイ・アン・ドゥーツ」

「おじさん——。ごめんっ!」

ニイラは短剣で傷が出来ても無視して、シェロンの『生命の源^{ロディーヨフ}』に
向かって瞳の力を流し込んだ。

突然シェロンは肩を痙攣させた。ニイラはその隙に短剣の届かない
場所まで走った。だけど、その行動の間も目をシェロンから離すこ
とはない。

「アドル!」

ニイラが大声で叫ぶとシェロンは、わずかな砂が舞い上がって、消
えた。

「ニイラ!」

ニイラはがくりと膝をついた。地面に体が横たわった。

グレイはニイラの顔を見て思った。

（なぜニイラは、あやつと重なる……? そもそも、あやつは一
体なんという名前だったのか?）

柔らかく艶のある長い髪をしたニイラの頬を、グレイはそつとなで
た。

そのとき、かすかにニイラが呻^{うめ}いた。グレイは静かに空を見上げた。
もうすぐ春が過ぎる。

【第6章7】語る者

「そして……」

「そしてどうなったんだ？」

「結局、その作戦は成功した。一人の死によつて」

リオンは明かりの点いた部屋の扉の前で凍りついた。その前では部屋の中で話していることが薄々聞こえる。その最後の言葉と共に苦い記憶が鮮やかに蘇った。それをさえぎるようにリオンは扉を開いた。

「あ、ビル……」

ジアスが気まずそうにリオンを見上げた。部屋に居る者は皆座っていたのだ。

「この部屋、微妙に音が漏れてるぞ」

「それなら部屋を変えようか？」

シェイが立ち上がったと言った。それにつられて皆も立った。

「あれ？ トワンも来ていたのか」

「ああ。我もあのマクシアンに呼ばれてな」

話しながら見回すと、ヒアに呼ばれていたのは、ジアスとシェイ、トワン、リブシアやリコールだ。

リオンは立ち止まった。それにぶつかつてリブシアが声をあげた。

「わっ！ ちょ、ビル急にどうしたんだ」

「みんな聞いてくれ。頼みがあるんだ」

みんなの視線がリオンに集まる。

「情報源は聞かないでほしいんだが……帝国で大きな騒ぎが起きる。それを食い止めに城へ行かなきゃならない。それについてきてほしいんだ」

すると一斉に三人が口を開いた。

「俺は（僕は）ついていく！」

口を開いたのは、ジラスとシェイとリブシアだ。

リコールはワテンポ遅れて言った。

「公務を手放す気にはならないのでね」

トワンがためらいがちに口を開いた。

「我は……どうすればいい？」

リオンは遠慮がちに微笑んだ。

「ヒーディオンの北東、ネイロの国境付近でいい。そこまで魔法で送ってくれないか？　できるだろ？」

「それなら、かまわぬ」

トワンもにつこりと笑った。

そのうち防音が期待できそうな扉のある部屋に着いた。

扉を開くと中にヒアが座っていた。

「あれ？」

「隊長殿、こちらにおいででしたか」

ヒアは明々と燃えるランプを前に床に座っていた。

「お？　遅いぞ。お前ら」

皆がランプを中心に座ると小さな円が出来た。ランプの中の灯がゆらゆらと揺らめく。

ヒアが天井を見上げるように口を開いた。

「お前ら、旅に出るんだろ？　ほらっ」

そして袋を二つそれぞれ、リオンとジラスに投げた。空中で硬貨が音を立てて、すっぽりと二人の手の中に収まった。

袋の中にはずっしりとした銅貨や銀貨が入っていた。

「これは？」

ジアスが問い返した。

「兵役の退職金だ。旅に必要なになるだろうと思ってな」

「ありがとうございます。隊長、でも俺らと呼んだのはこれを渡すだけじゃないんだろ？」

「そうだ。リラックスして聞いてくれ……長い話になる」

ヒアは首を下げた。目線をランプへと移した。

*

（どうしよつかなあ……）

レベッカは街の大きな地図の張られた案内板の前で立ち尽くしていた。

彼女が居るのはアーリア公国の隣、ネイロ王国の南にあるオメガ王国の港町。

オメガ王国は賭け、つまりカジノで栄えた王国だ。カジノで大量の富を手に入れたものは貿易に手を出し、一部のみが商才を開花させる。逆に大損をして運をつかめなかった者は上に仕える者に成り下がる。はつきりとした格差社会があるにもかかわらず、誰にだってチャンスがある。そのチャンスを生かせなかった者は盗人に堕ちていく。

彼女がなりわいとする仕事は……

（目的地、つまりヒーデイオンは数週間はかけないと辿り着けない。それだと今まで貯めてきた分でも、足りない。しかたない、盗むしかないか）

ご察しの通り盗人。

レベッカは左腕に巻かれた黒いバンダナを結びなおした。手の中には小さなペンダントの残骸がまだある。どうしてもそれは捨てる事

ができなかった。

（これ、誰からもらったんだっけ・・・？ わすれちゃったね）
指で感触を感じながら、頭の中で計画を音を立てて積み上げると、次に地図を暗記する。

忘れ物が無いか、見慣れた部屋を確認した。この部屋も返さなければならぬ。

肩に掛けたバックの中に、壊れたペンダントが入った小さな袋を入れた。

（さよなら——、オメガ・・・そして）

レベルは振り返りもせず部屋を出た。そして日が照らす水面が見える港へと駆けていった。

*

それは、俺が19歳の時だ・・・。

俺はその頃、町に住んでいた。この村から1時間ほどの所にあったんだが、今はもうない。

俺は町でバカをやっていたんだが——なにをやったか？ って聞くなよ。

それほど強い存在ではなかった。剣も喧嘩も普通より強いってぐらいだったさ。

あるとき突然傭兵ギルドの連中が町にやってきた。予告も予兆も何もなしに。

ギルドというものは拠点となる町と互いに有益になるよう契約を交わすもんだ。例えば、町側がギルド側にある程度の食料と基地となる建物を提供し、ギルド側は町側にある程度の安全を確保し、稼業

で得た報酬の何割かを町側に渡す、とかいった形でやることが多い。そのほうがどちらも安全安心だからな。

だが、奴らはそうしなかった。ただ町を下見するが如く横切って、はずれにある廃墟を陣取った。

その翌日くらいに、町は大騒ぎになった。この町にいるなかで最も強い奴が、バラバラに解体された死体となって、町の広場のど真ん中に置かれていたのだ。

文字通り、皆が震え上がったさ――。

奴らは手始めに町のお偉いさん方を牛耳った。正式的な互いに利益を出し合う契約ではなく、一方的なギルド側しか利益にならない契約を承諾させた。そしてギルドの許可なしに町を出る事が許されなくなった。

ギルドに媚びる奴しかまともに生きられなかった。

あいつらはいつも卑怯だった。

あいつらが、そう元々とはいえ悪いんだ。

どんな手を使っても心は、一欠けらすら痛まねえクズだった。

俺は――悪くない。

もし、あいつらが俺の町に来なければ・・・

そのときの俺がもっと強ければ・・・あんなことにはならなかった

・・・はずだ。

——悪い。自分の世界に浸っていた。

ああ、ちゃんと話す。終わるまで。

俺の親友がな、ジョウっていうんだが、ある夜に町を密かに脱出した。

ジョウは前もって俺にそれを話しておいてくれていた。

『ヒア、俺はもう我慢できない』

『それは町中の皆とも共通しているはずだ』

『ああ、そうだよな。だから俺は命懸けで、知り合いに助けを呼ぶ』
『は？』

俺はそのとき勢いのあまり大声を出していた。話していたのは常に監視のある酒場。

『おい！ 声を潜めろ。実行にも移していない計画だろ？ 計画の状態で捕まるのはごめんだぞ』

ジョウが含み笑いをしながら、俺の肩を叩いた。

だがそれは俺達だけの話にならなかった。

酒場でのことが、ギルドの連中にも知れ渡っていたようで、ジョウの脱出は成功とはいかなかった。

確かにジョウは町を脱出できた。しかしジョウにはギルド員がつけられていた。つまり後を追われていたのだ。

ジョウは知り合いとやらの所へたどり着く前に、ギルド員に襲われた。ギルド員は複数だった。ジョウがどんな強い使い手だろうと、

集団戦法にかなうわけない。ジョウは命からがら、瀕死状態でその知り合いの所へ着いたらしい。目的は、そうジョウが俺達の思いは叶えてくれた。だが、ジョウは……。

死んでしまったんだ――。

その知り合いはちゃんと、ジョウの思いを汲み取ってくれたわけだ。心強い仲間を連れて、町にやってきてくれた。

そいつらは町から一時間程の所にある村からやってきた。そう、来たのはかの有名なリオン・フェブリーヤ。それに数人の仲間と一緒に町を訪問した。

【第6章7】語る者（後書き）

今回も短いです。

投稿前にガイドラインを読んだのですが、これはR15に入るのでしょうか？

一応、残酷表現の表示は入っているのですが・・・

自分でこの話を読み直しますと、結構な数の間違いがありました。誤字脱字、または表現のおかしい・意味が分からない点をご指摘願えますと私も嬉しく思います。

【第6章8】隊長と先生 1（前書き）

一人称です。今までの文の調子が違いかもしれませんが、作者は同一人物です。

一人称はほとんど書いた事がなかったのですが、自信は有りません。最後まで読んで頂ければと思います。

【第6章8】隊長と先生 1

夜だった。ジヨウは秘密裏にこの町を抜け出しているはず。ただ、何の音沙汰もない。

突然、かすかだが俺の家の扉を叩く音がした。今はあの忌々しいギルドの奴らによって決められた、外出禁止時間帯だ。

俺は用心深く扉のすぐそばに身を寄せた。小さな呟き(?)というのか、それくらい小さな声が聞こえた。

『私たちはギルドの者じゃありません。あなたの知り合いの、ジヨウさんから頼まれたんです』

俺がその扉を開くと、目の前を瞬時に風が通り過ぎた。風とともに残像が横切る。

「はやく閉めて!」

少女の高い声。ぼかんとしていた俺は、扉をあわてて閉めた。
ん? 少女だって?

振り返ればそこには、さっきまでいなかった三人の男女が立っていた。三人のうち、一人は……俺よりも年上で長身の男。

残りの二人は女……かな?

一人はさつき叱声を飛ばしたと思われる小さな少女と、男よりも少し背の低いべっぴんさん。

「えーと、ジヨウに頼まれたっていう?」

俺がためらいがちに口を開くと、少女が一步前に進み出て口を開いた。

「私はジュディア・フェブリーヤ。ジヨウさんから頼まれて来ました」

ふえ、フェブリーヤだって!?

俺には堂々としたこの少女が、大戦争を止めたという剣士の末裔

だとは信じられない。

「こっちの背の高い方はドラント・ロクシー、でこっちの女顔の方はモデラン・グランデ」

少女……改めジュディアは、俺の驚きを軽く無視して、連れの紹介を済ませる。

「女顔ってちよつとひどいと思わない？」

モデランがジュディアに突っかかる。

「ねえ、ドラント。ぴつたりだと思わない？」

ジュディアはそ知らぬ顔でドラントに切り返す。ドラントはモデランの顔など見ずに真顔で頷いた。

「ぴつたりだ。一応男なのに女の面おもてしてやがるから、そういう名前に改名したらどうだ？」

「一応、のトコロを強調しないでくれる？　ボクは真正正銘の男です！　あと、改名なんかしないし」

さっきのは一体なんだったんだ——？

こいつらが……本当に、目にも留まらぬ速さで動いてたのか！？

ってモデランは男だったのかッ！！！

てつきりおんなだと……

ジュディアがじつと俺をガン見してくるのに気づいた俺は、彼女達が俺の名前を知らないことに思い当たった。

「あつ、俺はヒア・マクシアンです。よろしく……」

「そうじゃあ、ヒアは私の事ジュディーって呼んでね！」

ジュディア……あ、ゴメン。ジュディーはキャッピキャピの笑顔で笑いかけた。

なんか、男の二人の視線が・・・痛い。いや、大袈裟じゃないぞ？

もし、視線だけで致命傷（一応、殺せない程度の）を受けさせることができる、俺はすでに虫の息だ。

俺は突然、ドラントに腕を回されて引き寄せられた。

「ジュディア、悪いが男同士の話をしたいんでな、席を外してくれ」
「うん、いいよー」

ジュディアは何の疑問も持たず、出て行ってしまう。

まってくれえええ！俺が殺されるううう！！！！

俺にはまだ、生きる価値が・・・あるはずなんだあああ！

ジュディアが扉を閉めると、二人の口調は突然変わった。

「さて、ボクらが君に話したかったのは、くだらない話じゃない」

「あの子にはまだ・・・いや一生知って欲しくないんだが」

「お前はジュディアの親じゃないでしょ」

「ちょい、まで。いや、待ってください。貴方達はおいくつなんですか」

俺はふと湧いた疑問を口にした。

彼らはきょとした様子で答えてくれた。

「二十五歳で妻子共にあり。子供は四歳で名はブラン」

「同じくボクも二十五歳で妻子共にいて、子供は四歳。名前はシェイだけど？」

「いや、年を尋ねただけなんですけど・・・。あの、ジュディーは？」

「あの子はもうすぐ十三歳だよ」

「ってことは十二歳違いか。というかこの二人、若ッ！！
いや、二十代後半に見えないだろ！」

「で、話とは？」

「そうそう。えと、ヒア君だっけ？ 話ずらさないでね」

「おっと、これは失礼。以後気をつけまーす。」

「君の友達、ジョウはこの町を秘密裏に出た」

「ドラントが淡々と語る。」

「その行動は、悪知恵が働くギルドの連中に見られていたようで、俺達の住む村に行く途中に集団で襲われた」

「ドラントのそのまなざしがとても温かった。」

「モデランはそれを引き継ぐ。」

「彼は死ななかったものの、怪我がひどいまま、ボクらの村にたどり着いた。彼は運び込まれるや否や、意識を失った」

「モデランのそのまなざしがとても冷ややかだった。」

「ジョウが意識を取り戻したのは昨夜の夜中だ。そのとき俺がついていたんだが、ジョウはひたすらに『町を助けてくれ』、『俺の親友が味方なんだから、絶対に勝てる』とか、わめいてたぞ」

「俺はジョウが今更ながら、心配になった。」

「俺はジョウに相談（？）をされてから、ほとんど家から出てないけど、ジョウはどうなんだろう？」

「君のこと、べた褒めしてたよね。『あいつは自分の良さと、悪い所を取り違えている。それに気づけば、世界最強だあ！』とか」

「モデランが優しい笑みを浮かべながら、言った。」

寝言でもそんなバカな事を言っていたのか・・・。

酒でぐでんぐでんに酔っ払うと、それに似ていることをほざいていたんだが。

言われてる俺は冗談にしか取れないだろ。

「俺達が村を出る前に覗いたんだが、ジヨウは・・・・・・・・。」

「まったく、遅いよ！ 私待つの苦手なんだから
そう。いいところでジユディーによつてさえぎられてしまった。

「ごめんごめん。長話が過ぎちゃったね」
「まったく」

なんか、ジユディーが頬を膨らましている？　なんか、すげえ可愛いんだけど！？

（ああ、これを。リコンというんだな）

って今の何！？　。リコンってどういう意味だよ！！！！
というか、お前、俺の事見下してねえ？

ま、どうせ誰も答えてくれないんだろうが。
「ところで、どうして俺の家に来たんです？」

俺は、今まで長く先延ばしにされてたような、普通に当たり前
の疑問をぶつけてみた。

「敬語はやめてくれ。なぜかって聞いたな」
ドラントが妙に含んだ言い方をしたのが気になったが、答えの
ほろが知れたかった。

なぜか、ジューディーが顔を赤く染めた、乙女っぽい顔つきで答えてくれた。

「だって……だって……、ヒアに会いたかったんだもおっくん！」

という具合に、俺に飛び込めないがらな。

やっぱり、超かわえええええ！！！！！！

萌えるうううううううう！

（ついに。リコン廃になったか……。青春時代よ、おさらばだな・
・。）

え、いや。今の取り消しの方向で。

それとお前、あとでぶっ飛ばす！ 絶対に！！！！

今のは父性本能をくすぐるといった意味だ！
決して不純な心持ではない！

「いや、それだけでいい？」

俺は抱きつくジュディーにされるがままにしておいて、尋ねた。

「まあ、それだけとはいえないんだけど」

モデランが肩をすくめた。

「彼が、君の事をべた褒めするもんだから、会いたくなつたというのと」

「このとおり、ジョウに感化されたジュディアに強制されたのと、この町においての拠点が必要だったからだ」

ドラントが最後にまともな意見を言ってくれた。だけど、ジョウの言葉を真に受けなくてくれよ……。

ただの喧嘩があんまり好きじゃない野朗だつっの。

「あ、ところでヒアは、さっき私達が入ってきた時に見えた？」

ジユディーが小さな腕を放して聞いてきた。

「え、あーそれは、残像が見えただけ……だけど？　それがなにか」

今、嘘についても意味がない気がするので、本当の事を言った。そうすると、お客人の三人が顔を見合わせた。

「すごいねー」

とジユディー。てか、何が？　何に感心してんの？

「俺達の村でも、本気の俺らを見れる奴は、残像だとしてもほばいない」

ドラントより。って、本気？　俺をおだてても何も出てこないぞ？

「同感。ジヨウ君が言ってたのはあながち間違ってたみたいだね」

モデランから。いや、あんな戯言たわごとを正しいとしてしまっではいかんだろ！？

「決定だね！　やったあー！　ヒアも一緒だよ！」

ジユディーがキラッキラの笑顔で飛び回っている。はい、近所迷惑ですよ。

まあ、可愛いけど。

「……何が？」

「ヒア君って無愛想だねえ。まあ、ドラントより面白いからいいけど」

「いや、受け狙いで俺は生活しているわけではないぞ？」

はいはい。おままごとはいいですから、答えてくださいよ！

「だ・か・ら！ 何がどうなんですか？！」

「何がどうって。ヒアは私達と一緒にギルドを懲らしめに行くんだよ？」

「はいはい！！？！？？」

【第6章8】隊長と先生 1（後書き）

有り難う御座いました。（終わりませんけど……）

一人称語りはまだ続きますので、一人称についてなにかご指摘を被りたいとおもいます。

【第6章9】隊長と先生 2

えっと・・・はい？

いまいち、状況が空気中に漂ってて分からないんですけど。

え、比喻が分からんって？ 気にしない。一応コレ一人称だろ？
てか、なに説明してんだか俺。

「なんだその間抜け顔」

グサツ！

「KY奴空気読めないってまだいたんだ。時代遅れもいいところだよ」

グサツ！ グサグサツ！

「一応、まだ十代だよな？」

グハツ！

くそお・・・。むなくそ悪い。

「つまりは、強制的にギルドを潰すのを手伝って貰うということだ」
ドラントが簡潔にまとめてくれた。まあ、ドラントが俺に最初の一撃を食らわせたんだが。

「はあ、強制的に。ねえ」

「ヒアには拒否権ないからね」

「いや、ただの足を引っ張る役になるんじゃない？」

「目がいいんだ。身体能力だっていいはずさ！ たぶんジョウ君が
言ってた事は、彼なりに見た君のすごい評価。つまり、心からの賞
賛だよ！」

モデランが少年のように目を輝かせて、言ってきた。やっぱりこの
人、若い！

それにこんな顔されると、何か言い出せなくなる・・・。

「やったあー！！　ボクの勝ちいいい！」

突然、モデランが近所迷惑も程ほどな声を上げた。

「ああー！　ちよつとずるゝい！　モデラン、今の無しだよ！」

一方、ジユディーが悔しそうにした。

「いや近所迷惑だから！　あんたら追い出してもいい？」

俺はそれらをさえぎるように、言っていた。

「おーいいぞ。あいつら、腕は確かだけどうるさいから」

ドラントから許可が下りたので、二人を引っ張って扉の向こうに放り投げた。

ポイっ。

と、上手い事、運ぶはずがなく。

二人のじたばた抵抗により、追い出しは中止になった。

さすがといふべきなのか、二人は力が強く、俺一人で引っ張り出すのは無理難題だった。

「簡潔に聞くけど、二人は何の賭けをしていたんだ？」

俺がおとなしく(?) 椅子に座ってる二人に聞いた。すると、ジユディーがよくぞ聞いてくれましたとばかりに立ち上がった。

「ヒアはあ、なにかと色々突っ込むでしょ？　だから、その突っ込みを言わせなかったら勝ちなの！」

「いや意味わからんし。突っ込み癖はジヨウのせいだと思うがな。それで、勝つとどうなるんだ？」

「行動班の構成を考えられるの！　うゝ悔しい」

行動班？・・・つまりは俺がお客人と一緒にギルドを壊滅させるのは、お出かけの前から決まっていたように。そうなる、その賭けに要らん入れ知恵をほどこしたのはジヨウか。確信犯め・・・

＊

俺は何度目か分からないため息をついた。

「壊滅させるっていつても・・・ほかにやりようがあったでしょうがあつ！ー！」

「しーっ！　今、夜なんだから静かにしなきゃ」

モデランが口の前に指を一本立てた。

俺とモデランがいるのは例のギルドがねぐらとして使っている所の前。一応は廃墟なんだけど、整備して人が住めるようにすれば、問題なく住める場所だ。

俺達（もう俺が入っているんだが、そこは突っ込まないでくれ）は三人が来た夜、俺の家に泊まった。翌朝、俺が起きると既に三人は起きていて、もうギルドを潰す準備ができたそうだった。

朝飯は？　と俺が聞くと、既に食ったとのことだった。俺は急いで朝食を作って平らげ、身支度を整えて準備を終えた。

「それでどうするの？」

俺が完全武装した三人を見比べながら尋ねてみた。

「よそ者の俺達が出て行くわけにはいかないから」

「ヒア君がこの紙をぜゝんぶ町中に貼り付けてきて」

三人とも怖いほど揃った笑顔だった。

「ヒア、よろしくね」

なんで俺が。

やっぱり俺、一方的に利用されてねえ？

俺に渡された紙は尋常じゃない量。それに内容は笑えるほど幼稚な文章。

“
よう！ げん気かい

おれ達は げん気だぜえ！ あんたらがとつてもうるさいので
粒しにいくんだによゝゝ 本きよ血でまってる”

プラスめっちゃ下手糞な絵。たぶん、かいてる奴がギルドを粒つぶして
いる絵だ。うん、きつと。

これは神経逆撫でするようなものだ。早く全部貼りきらないと、俺
がボコられる！

俺が常に神経を張り詰めながら、貼っていると皆耳が早い。行く先
々でみんながひそひそと、この紙を『ねえ、あれ本気かしら』、『
あらやだ！ あんな幼稚な文に絵。ただの悪戯でしょ』、『グフフ
ッ、なんだあれ！ おもしれえ紙』、『おい、早く笑うのやめろよ。
・・・俺までわらけてくるじゃないか』云々、ぬかしていた。

俺にとつて最も危険な地域が目の前に来る。それは酒場だ！
アリスリー

酒場は男たちのたむろっている場。いつもなら（ギルドの奴らが来
る前は）昼間から開いていないが、最近は昼間でも酒場は開いてい
る。そのぶん、傭兵やら酒好きやらが集まっている。危険度MAX
だ！

人目につかないように、目立ちにくそうな所に貼っていく。
目立つ所に貼れ、とはいわれてないもんね。

「おい兄ちゃん」

ひゅげっ！ 誰だ、俺に声をかけてきた奴は。

俺が振り向くと、そこにはもっさい中年がいた。うへっ！ 口から酒のおいがする。

真昼間から飲んでんじゃねえよッ！

「にいちちゃん、おめえも飲まへん？」

「酒は嫌いですから！」

俺はその中年を一蹴すると、少し離れた物陰に隠れた。ここにも一枚貼つて、と。

「ねえねえ、その座ってるおにーさん？」

「えと、俺？」

ふざけた紙を片手に振り返ると、指の関節をポキポキ言わせているおにいさん方がいる。

「なあゝにをやっているのかなあ？」

「いや・・・あの、すいませんッ！ すいませんでしたあああッ！

！」

俺は無我夢中チリンで紙をばら撒きながら、逃走した。

いやだって、真正面からいつてこてんぱんにされるのがオチじゃね？俺だって人間だよ？ 自己中心的なのが人間ですよー！

はあっはあっ、撒けた・・・のか？

俺は自分の家にたどり着いていた。いやゝ危機一髪だったね。

俺が扉を開いた途端、三人がやらかした状態が目に入る。

「ただいま・・・で、オイッ！」

俺の声に気づいた三人が俺に視線を向ける。妙に揃ってて怖いぞ？

「あ、おかえりー」

「おかえりー、じゃねえよっ！」

「どうしたんだ、落ち着け」

「落ち着いていられるかよーッ！ 自分の家が荒らされてんだぞ！？」

俺の家は強盗に入られたとでもいわれてもおかしくないほど、ぐちゃぐちゃだった。

「おまいら、何やってくれとんねん！」

「なぜに訛ってるの？ それにボクらは、ここを荒らしてなんかないよ？」

「へい？」

「訓練っていうか、練習してたのー！」

「荒らしたも同然じゃねえかあっ！！ なぜ家の中でやる？ 器物破損で罰金だぞー！」

「キブツハソン？ 何それ」

「罰金？ 俺達、金なんかもってきてないぞ」

「ボク知らない」

くっそおお。あとで百倍返しにしてやる。とりあえずこの状況は置いていて。

「とりあえず、それは置いておこう……。あのふざけた紙は全部貼ってきたぞ？」

俺はため息まじりにいった。と、言ったもののお客人達の反応は薄かった。

「ふーん、ご苦労」とかいう、めっちゃタルそうな反応がすげえバラバラに返ってきた。

すげえ、後悔するんだけど……。俺がやったの本当に価値あったの

か？　ただ利用されただけじゃね？
その確立が高すぎて怖いんだけど・・・

「あ、じゃあ暇？」

ジューディーが思い出したように声をかけてきた。

思い出したように、って何だよッ！？　俺そんなに影薄いかぁ！？
??

「・・・イチヨウ暇だけど」

「あつじゃあ、剣出してー」

「ハイイ??」

最近、剣を使っていないので俺の寝室の隅に剣があった。（実をいうと俺はなくし物をしやすい。簡単に探しものが見つかるなんて奇跡だ！）

一番広いリビングで俺達は集まっていた。因みに散らかりようが、一番マシ(?)な部屋でもある。

「剣を鞘から抜いて構えればいいんだな？」

「うん！」

ジューディーが上機嫌で頷いた。だけど、俺は剣を抜いて構えるだけじゃ足りない気がした。それだけなら、見よう見まねで誰にだって出来る気がする。

「考えられる状況は？」

自然と低い声が、自らの口から出ていた。あれ？　こんな声なんて出るんだ。

年長の二人が顔を見合わせて頷いた、らしい（後にジューディーが語ってくれた）。俺に感心していたらしい。

「敵は前方に四人、そのうち中央の二人が手前に出てきている。装備はごくありふれた物でいい。味方は一人、信頼できる仲間。戦闘場所は・・・開けた広場で、地面はタイル敷き。障害物はほとんど

無し」

ジユデイーが淡々と、想定された状況を語る。俺は目を閉じ、言われた状況を心の中に描く。

（仲間……）

そういわれて思い浮かぶのは言うまでも無く、ジヨウ。

想像の中で、右から二番目の敵がこちらへとにじり寄ってくる。奴の相手は俺だ！ 右から三番目の奴もこちらへ来るが、そっちはジヨウがやってくれる。

奴が自分の剣の柄に手を伸ばす。俺もためらうことなく、剣の柄を握り、鞘から引き抜いた。敵も静かに刃を鈍く光らせて、こちらに駆けて迫ってきた――。

「やめっ！」

俺はハッと現実に取り戻される。

「ッ！？ あれ、今のドラント？」

「……そうだ。自分の世界にはまりすぎだ、ヒア。だが」

ドラントの言葉を、当然のようにモデランがつなぐ。

「さすが、だね。ボクらが村の出身じゃなかったら、感銘うけてたかも」

いやそれつまり、自分が上ですよ宣言でしょ……

褒めてんのか、見下しているのか分からない。だけど、俺は――

【第6章9】隊長と先生 2（後書き）

ヒアによる一人称はまだまだ続きそうです。

そういえばこのリオン、総文字数が10万文字を超えていまして、あらずじにも書きましたように、ユニークは5000人PVは2万ヒットを超えさせていただきました。更に、本作も長いことかかりましたが、残り一話分で三十話を超えます。

以上は全て、このようにつたないものでも読んでくださった方のお陰です。有り難う御座います。それをお礼というか、記念と致しまして6章が終わった時点で番外編なるものを追加したいと思えます。本作が進まないことにお詫びを申し上げますが、番外編も読んでくださると嬉しい限りです。

【第6章10】隊長と先生 3

「ジュディアー、ヒア君のタイプわかった？」
タイプ？　なんだそれ。」

ドラントが俺の疑問に答えてくれた。ていうか俺、顔に出やすい？
「ヒア、お前分かってて状況を言えって催促したんじゃないのか？
タイプっていうのは、戦闘における攻防タイプのことだ。どのよう
な攻撃と防御が戦いやすいかっていうのを区別したもんだよ」
「はあ・・・」

「ん」とヒアのタイプは、主君に仕える忠実な騎士^{ナイト}だね！」
ジュディーがキラッキラの笑顔でいう。ナイト？　詳しく説明を求
む。

「騎士^{ナイト}っていうのは、主君（仲間）を守るためにだけに実力を発揮す
るタイプだよ。どんな状況もペアで組ませた方が力を発揮しやすい
みたいだね」

疑問一。そんな簡単な動作だけで診断できるのか？

「答え一。ジュディアは特別だから。だって次期リオンだし」
モデランが当然のように俺の疑問に答えた。

疑問二。俺の心が皆に読まれてるのは何故か？

「答え二。自分で声に出してるんだよ」

「何気に、さっき大きな事言わなかった？」

「ん？　ジュディアが次期リオンだってこと？」

・・・思考ガフリーズシマス。

えっと、ジュディーがフェブリーやって名乗ってた時点で分かる

べきなんだろう。つまり、さつきから村村いつてたのはかの有名な
フェブリーヤー一族が揃って住んでいる、大規模の村。で、この三人
はその村の住人？

「ちなみに俺とモデランは、一族の血をひいてはいないぞ？ 俺の
嫁が一族の者だけど」

「ちなみにボクとジョウ君は親戚なんだよ」

「いやモデラン、それ関係ないし！」

でどうすんの？

「夜になったら突撃いー！ するだけ」

「・・・はい?!」

*

「ほかにもやりようがあるって？ 例えば？」

「闇討ち・・・とか」

「暗殺業じゃあるまいし。そもそも、ギルドを全部をぶっ潰すなら
ギルド員全員いたほうがいいじゃん」

うぐっ。それもそうだが、真正面からやらなくてもよくね？

「ほら、もうヒア君特有の面倒くさいがでてる」

「オヤジの加齢臭みたくないな！」

「ホラ、もうすぐ向こうがくるみたいだから、警戒強めて」

上手く話をずらされたような感じがするけど、さすが一流戦士。俺
は全然気配読むの上手くないからな！。

モデランが腰に差している二つの鞘を見て、俺はいった。

「あれ、モデラン二刀流だったの？」

「意外？」

モデランのニカツと笑った顔は、男らしくみえた。

「いや意外っていうか、刀はまだ存在してたのか」

「まあ剣のほうが量産できるっていう理由で、刀は一時期激減したけど、刀鍛冶にこだわる人は幸いまだいてね。それに剣より刀の方が軽いからボクに扱いやすいし」

だんだん沈んでいく太陽を見ながら、モデランは目を輝かせながら語る。

でもその肩は微妙にこわばっていた。のん気に語っていても、常に緊張して気を張っている。

すげえな。

これが一流か。

本当の一流つてのは、公私混同しないヒトじゃなきゃなれない。常に狙われる事を覚悟し、日々の日常を目一杯楽しみ、戦いにおいて理性を保ち、身勝手な理由を持ち込まない。決して揺るがぬ決意を胸に秘め、一心に自分の信念を貫く。優しさと同情の境界線を常に理解し、憎しみと愛を取り違えることのなき心で、敵に慈愛をもち悲しむ。

一流だな・・・

「ほらヒア君、団体さんの到着だよ」

「はあ・・・、いっちょやりますか」

*

「なにしてるの？ ルテーナ」

ポルディノが、豎琴をポロンポロンならしているルテーナに近づい

た。

「荷物のなかに入れる前に調律したくて」

ポルディノを見上げる彼女は、さきほどまで泣いていたとは思えないほどにこやかだった。

「ねえ、ルテーナ。今日さ町に行かない？」

「町？」

「そう。ちよつとした『青鷺団』お別れ会でもない？」

腰掛けていた椅子から立ち上がったルテーナはいった。

「二人だけで？」

「ほかのみんなに知られちゃいけないみたいだからね」

「そっか。じゃあ行くよ」

二人ともラフな格好で野営地を離れた。ルテーナは小さい袋に豎琴を入れて、ポルディノは財布と護身用の短剣を手に町へ出掛けていった。

町へ着くころにはもう完全に、空が夜の色に包まれていた。

街灯がちらほらと立っていて、夜の町を照らしているが、空の明かりたちも輝いていた。

「それでどこに行くの？ 兄様」

「んー、どこか行きたい所ある？」

「決めてないんじゃない」

クスクス。そうやって笑うルテーナが、ポルディノにとってとても愛おしかった。

「そうねえ、じゃあ適当な宿でルテーナの演奏会開いちゃおっか」

「演奏って言っても豎琴しかないよ」

「リユートでもあれば最高なんだけど」

「エーシャが居ればよかった？」

「うん！」

エーシャとは団員の名前だ。彼女はリユート弾きと作曲に秀でた才能をもつ。

二人の兄妹は一番に目に入った宿屋に入っていった。

夜の早い時間だが、扉を開けると酒のにおいがした。年明けの祝祭が近いという事で、みなが浮かれている気分なのだろう。

二人はカウンターの宿主の所へ歩いていった。

「宿泊かね？」

「いえ、僕たちこの宿で歌わせてもらいたいんですけど」

ポルディノが営業で身につけた笑顔で宿主に言う。

「・・・あんたらの申し出はありがたいが、実力とか名声のないやつならここに五万というからねえ」

「名声ですか・・・、私達理由があつて所属の団体はいえませんが、ただ、実力ならあると思います。そうですね、ひとつ聞いてください」

ルテーナは宿主の声を挟ませずに、一通りいうと、声を静かに響かせた。それは一階のたまり場になっている部屋全体に響いた。

全能の神が愛でし赤子　神と人の間に生まれし英雄は

十二の冒険へと出掛けん　後に生まれし武勇伝

永久に詩人にて　語り継がれん

最後の言葉を歌い終わると、満足そうな顔をしたルテーナは、宿主に聞いてみる。

「どうです？ 私の歌は」

宿主は救いを求めるように客の顔を見回したが、誰もルテーナの歌を聞きたいと顔にかいてあつた。

「つぐぐ・・・。いいでしょう、御願いますよ」

「貴様らだな？ あんのふざけた紙を貼り付けやがったのは」
かしら
 頭らしき男が無駄にでかい声を出す。耳がキンキンするぞ。

「そう、といったら？ どうするの」

・・・？

あれ、モデラン。女声で何を言ってるんだ。いやいや、それほどまでに女顔で細身だからって騙せるわけが

「女なんかに倒される気になられるとは、こっちも舐められたもんだなあ！」

なっ！ あったのかよッ！

「フフン」

ちよい？ モデラーン、かえってこーい。いや今はモーラか！ （

↑いまさっき命名した）

なぜ俺の顔をみて笑う？ 口元が上がりすぎて怖いんだけど！

「まあ、連れのほうは弱っちいガキみたいだな！」

むかつ！ あんな髭ボウボウに言われたかねえわ！

「やれるもんなら、やってみなさいよ。結構強いんだから」

「やってやろうじゃねえかつ！ お前ら、やってやれ！」

「「おおおおっ！」」

ああ、むさくるしい。

敵が脇目もふらずこちらへ全速力で走ってくる。にこやかなモーラは（いやもうモデランか）隙のない様子で刀を二振りとも鞘から引き抜いた。

「ボクのタイプはね」

なぜか唐突にモデランが話を振る。今そんなのん気な状況!?

「孤高の賢人だって」

「なんだその賢人って。よく出てくる昔話のアレか?」

くすりと笑いながらモデランは続ける。

「そ。ジュディアも言ってたけど、珍しいタイプなんだって」

敵がモデランにむかって大きく振りかぶってサーベルを振り下ろす。モデランはそれを手を振り払うかのように軽くあしらう。

ガッ!

「だいたいの賢人ってのは魔法使えそうだけど」

そういつている俺にも敵が向かってくる。敵はブーメランのような形をした小さな金属を幾つも投げてきた。俺の目にとってそれは全然遅い。俺の腕でも弾き返せる!

ガキンッ キンッ キンッ

「でも、見掛け倒しなんだよね。魔法が使えそう、だけど武器を扱う」

くるりと一回転して、モデランは二刀流を生かす。あとからあとから来る新手に、前の敵と共に斬りつける。

「そうか、あんたのタイプは、奇術師ビエロと、いっても差し支えないってこと?」

俺も足手まといにならぬよう、近づいてくる敵共を斬りつける。

「そういうこと! でも本業の奇術師ビエロに真正面からいっちゃダメだよ」

「誰が言っかつ!」

「お前ら! 覚悟しやがれ! お前達のギルドはぶっ潰す!」
この台詞、言いたかったんだよねえ、とモデランがのん気そうに笑

う。だけど、あいつらに挑発って、力を増させるだけじゃねえか！

しっかし強いな。そろそろ疲れてきてもいいころ、つつつても疲れてるのはこっちの方だけど。

はあ、やっぱりモデラン強いな。なんか健康のために運動せんどうしてるみたいな笑顔なんだけど。実は戦闘狂？

「あ、ヒア君まだいける？」

「忘れてたみたいに、言うな！ まだいけるって」

俺は汗ダラダラでとても余裕とはいえない。

「だけど、ほんつと騎士ナイトだねっ！」

「誰が騎士ナイトじゃあ！」

ああ、早くこいつら逃げてくれ！ そうしないと俺の体力は持たん！それに事実上、俺とモデランでギルドをつぶしたことになる。あの二人が向こうに居る意味がない！

「くそおっ！ こいつら化け物だぞ」

「多数でやつても倒れないとか、ありえねえ！」

「おいっ、逃げるぞ！！」

ああよかった！

頭がそう叫びながら尻尾をまいて逃げていく。そっちにはジューディーとドラントがいる。二人なら余裕で殲滅できそうだ。

「はあ、疲れた！」

俺は疲労の末、その場にしゃがみこんだ。

「おつかれー。ヒア君、充分な素質だね。これなら、他の討伐系の依頼が来てもボクらと一緒にだいじょう「誰が好きこのんで、あんたらについていくかあッ！」

本当に疲れた……。体力の半分は、この厄介なお客人らに突っ込むことで消費された気がする。

ああ、厄介だ！

【第6章11】隊長と先生 4

「遅いなあ・・・」

呟くジュディアは剣を杖代わりに、地面に突き刺してもたれている。
「ジュディア、今回は『剣術の習い』生徒で成り立つ精鋭部隊じゃない。時間が掛かってもしかたがない」

「でもさあー、前の盗賊の生け捕りは、この戦法で直ぐに終わっちゃったじゃん」

「それはジュディアが、先に潰してたからだろ。それに、ここは町だから魔剣とかは使えない」

ドラントは冷静にジュディアの相手をする。ジュディアはぶくうつと頬を膨らませた

ドラントには肉眼で見えないほど離れていたが、喧騒の音が聞こえていた。

（あいつらは、着実に倒しているようだ・・・。だが、この子はどうするか）

ジュディアはごくごくたまに、イラついていたりムカついていると、誰が相手だろうと怪力で押し倒し剣でざつくんざつくんと、切り刻んでしまう。

今回が野獣狩りならよかったものの、町に居座る傭兵を首尾よく立ち退かせるか、町のほうに被害が出ない程度に殲滅するかだ。

場所的には町のはずれとあって人気が少ないが、一応ここも町の区内。ジュディアが暴走して、残酷なものを残していつてはまずい。

対処法を考えるうち喧騒が収まり、段々と大きくなる走ってくる足音。

「ジュディア、もう直ぐ来るぞ」

「これくらいなら私にだって聞こえるよー。地面にすごく響いてるからね」

目を爛々と輝かせるジュディアをみると、ドラントはため息をつきなくなる。

「やりすぎは禁物だ。ジュディア？」

「もっろん。わかってるよ」

（一番わかってなさそうだけどな）

とドラントは心の中で言うしかないのだった。

＊

心地のよい風がふわつと顔に吹き付ける。それと一緒に何かくすぐったい物が顔にへばりついた。

ニイラはその何かを確かめた。それを握ると同時にブチッとちぎれる音がした。

「あれ？ ただの芝だったの」

声に出してみると、声が少しおかしいような気がした。

「ニイラ、起きたのか」

覗き込む男の顔を見てニイラは顔を笑顔を見せた。

「おじさん！」

グレイはニイラの笑顔を見るたび、なぜか胸がうずいた。

（わしの消えた記憶——か？・・・だが消えたものに興味はない）

もう完全に空は夜の装いだ。だが吹く風はそれほど冷たくはない。気持ちよく感じるほどだ。

星や月が手に触れそうなほど、空が近いような気がする。だけどそ

れらが放つ温かな光は、とてもはかないようで手が触れただけで消え入りそうだった。

「ニイラ、今夜は野宿になる。移動するぞ」

グレイが荷物などをもって立ち上がると、慌ててニイラがグレイから荷物をもぎ取った。

「あたしが持つ！ おじさんは怪我してるんだから」

「病み上がりは何をいう。足元がぐらついておるぞ」

「む！ おじさん何処で、のじゅくとかやるのか決まってるの？！」
「お主を放って、探しに行けるのか。というより、行ってよかったのか？」

「おじさんのイジワルー！」

「意地悪などしておらん」

*

俺達がゆつくりと歩いていくと、二人もかすり傷ひとつなしで無事だった。

「あつ！ ヒアだー」

ジユディーが倒れている男共を飛び越えて俺に飛びついてきた。跳躍力すげえな、もうすぐ十三歳のくせに。

「誰も死んでないか？」

「飛び道具が跳ね返って傷ついてる奴もいるけど、自業自得だよ。とりあえず残っていたのは引っ張ってきたよ」

後ろに連れてきた男たちを、モデランは見せながら言った。その男らを引っ張ってきたのは俺なんだけど。

「で、頭は誰だ？」

「あそこにいる、ひげもじゃ。ていうか、そいつに何か用でもあん

の？
L

「なぜここへ来、正式な契約を交わさなかったのか、問いたです。俺達の依頼は町を元のようにすること、つまりギルドを潰すだけでは終わらない。今後役に立つだろうから、覚えとけ」

[illegible]

さつきモデルンも同じようなことを言っていましたけど、今後一切あらんと付き合う気はないんですけど……!!

なぜ俺は敬語？ ああ、もう普通の生活に戻りたい！！

……そういえば、ジヨウは大丈夫か？
今更ながらに思い出す俺って、すげえ薄情だな。

快復してくれるといいんだけど。

まあ、今どうこういったってジョウがよくなるわけじゃないしな。

うるうると瞳を潤ませて、ジュディーが俺の顔を見上げながら言う。
手は離してくれなかったけど。

「ねえ、ヒア。さっき凄い傷つくことを考えてなかった？ 私、ヒアにもう会えないなんてイヤだからね？」

ぎくっ！ ジュディーは十三歳未満にして、女の武器を手に入れてやがる！ これに勝つ方法はほぼない（俺にとっての、だけど）。

「……なんで俺、なんだよ？」

俺は、ジュディーに向けて言つたつもりが三人同時にお答えを頂戴した。

「鍛えがあるから」

「鍛えられたくないわあッ!！」

「あの、問いただすなら早くしてもらえませんか？」

あんまり聞きなれてないがさつな声がしたので、俺の突っ込みはもろに虚空に消え去った。

えーと、しゃべったのは、あのヒゲボウボウの頭。

「あーそうか、悪いな。私事を交えて忘れていたか」

ドラントが全く反省したようすが感じられない表情で、片手を自分の額に当てた。

問いただしは、ドラントが全面的に担当しているようで。あと、残りの二人は日常茶飯事みたいなかおしていて、何をやるのか想像ができない俺なだけど。

「じゃーまず、早速聞くけどあんたらは南から来たんだよね？」

「なんで、確認、みたいな聞き方なんだ？」

俺は湧いた疑問を口に出した。俺はほぼ無知だからなー。だって巻き込まれたの今回が初めてだし。

「こいつらが使っていた武器は？ だいたいいい」

「ええーと、まず剣持つてる奴はだいたいサーベルだったな。あと飛び道具は、ブーメランみたいな形の小さい金属っぽいものだったっけ」

俺が思い出しながら言うと、ドラントや頭もウンウンというように頷いている。

てか、なんで頭もちやつかり頷いてんだよ。

「それらの武器はほとんど、オメガで作られたものだろう。あそこは決闘みたいなカジノもあるし、治安がまず悪いから、特殊な武器が流通している。まあ、あくまで国内での話だが」

「あんたの言うとおりさ。まあ、あそこの女の振りをした奴みたく騙せなかったけどよお」

・・・今更だけど、ほんとにモデランの振りは完璧だったのか？
まあ黙ってりゃ、そう見えるけど声は思いつきり男声だろ。

「じゃあ、なぜここに流れてきた？ 南の方が稼ぎがいいだろ」

「・・・事実上潰れたんだよ」

頭は切々に（？）語り出した。ちよつと目に涙を溜まらせながら、
鼻水をじゅるじゅると垂らしながら。

いや、やるなよ！！

彼らは南でギルドで普通に活動をしていたそうだ。

あるとき、近所の大規模ギルドと協定みたいなのを結んだんだが、
事実上それは自分らが手下になります的な意味だそうで。

しばらくはそれでもなんとかやっていけたそうだけど、やっぱり反
乱的なものは起こるもので。

そうになると、少数の彼らが全滅寸前まで追いやられて（なんか動物
みたいなことを言っているなー）必死に此処まで逃げてきたそうで。

そのときに前の頭がやられて、統率力も壊れる寸前だったそうで。
なんとか現頭が纏め上げたんだが、前の状態にするのは難しく。

そこでメンバーの一人が「何処かの町をのつとる事が出来れば、そ
れも早くできるだろう」といったのが禍のもとだそうで。

それにのせられて、今回にことを起こしたそうで。

「あー、結論を言うと彼らはやっぱり人間だった、でいいのか？」
俺がいうことに同意の意味で頷く三人。

三人は（というよりドラントが）、ギルドによる町の独裁を解き、
ギルドが今後しばらくの間無償で町に奉仕するということで一件落
着いたそうで。

え？　なんで人から聞いたみたいな文章かって？
まあ、俺も当事者に入るんだろうけど後始末は三人が、俺が寝ている間にやった。

んまあ、そういうことなんだけど。

「何であんたらまだいるの？」

言った途端、すごい嫌な予感がした。

「えーだつて……」

ジュディーが言いよんだと思った途端

「「「連れて行かないから!!!!」」」

三匹の悪魔が耳元で怒鳴りつける。

「あんたらなんか、連れ去られてたまるかあああッ！！！！！！」

【第6章12】隊長と先生 5

「あつ、俺思い出したかも」

シェイがヒアの話をさえぎって言った。それにヒアは腹が立って、昔の口調でいっていた。

「お前は、父親に似て俺をからかうのが好きなのかあッ！」

「いや、からかうつもりなんてないですよ」

シェイは苦笑いしながら言った。ヒアがなんといおうと本人にからかう気なんてなかった。

「ちょっと思い出しただけです。まだ親父が生きてたところに、しばらくこの村で叫びまわってた“にーちゃん”でしょう？ 隊長は」

「叫びまわってたんですか？ 隊長、軍での普段の様子から想像できないし」

ジアスが真面目に想像しているのを尻目にリオンは面白そうに笑った。

「・・・くそッ！ もともとといえばジョウがこんな村の連中に頼むのが悪かったんだ！」

「隊長、そうしなければあなたはここへは来ませんでしょうな」

「お前もかッ！ リコール！」

しばらく、雰囲気との和みが続いた時トワンが、おずおずと口を開いた。

「場違いだろうが許してくれ。・・・リオン、我に転送を頼んでいが、それは具体的にどのあたりが望みか？」

話を振られたリオンは、考えるように上を向きながら唸ると、答えを口にした。

「んー、そうだな。ネイロとの国境線に最も近い町からそれほど遠くない所、なんてところか」

「そうか。そうになると、我はその場所へ環を描きに行かねばならない。汝らをいつ運べばよいか？」

「具体的には、明日に日付が変わる時間くらいがいいんだけど。みんなの都合とかも聞いてないし」

しかしリオンがそれ程心配することはなかった。みな、大丈夫だというように頷いていた。

「ありがとう。じゃあ、頼む。トワン」

リオンがにつこりと笑うと、一瞬トワンは目を見開いたが、表情を取り戻して満面の笑みで頷いた。

「わかった！」

言うが早く、目にも留まらないはやさで飛び出していった。

わずかな間、沈黙が募ったがすぐに解散していった。

「ビル、お前一体何したの？」

リブシアが呆れたようにいうと、そうだそうだというようにヒアが頷く。

「いや、なにもしたつもりはないんだけど。っていうか続きはないの？」

「まだあるってば」

「んでまあ・・・、それが俺が初めてジュディーに会ったっていう話。俺は、あのあと――」

ヒアはそのときのことを思い出したのか、顔を歪めた。

それは思い出したくもないようだったが、ジュディアを語ることにおいてそれは欠かせない話だった。

ため息をもまじりつつも、吐き出すように言った。

「拉致されて、それから……」
ヒアの話を聞いて一同は、しばらくおなかを抱えて転げまわったそ
うだ。

*

春とはいえ、標高が高い場所に居ると風はどうしても冷たく吹き
付けるのであった。それと共に、色が沈んでいく空は沈黙を守って
いた。わずかな間にオメガからアーリアへと国境を越えたレベツカ
は、今晚過ごす事になる場所を探していた。本人は自分がアーリア
にいるとは気づいていなかったが。

彼女はすでに林というか木々の茂みに囲まれた場所におり、そこに
レベツカが求めるような丁度良い場所は見当たらなかった。暗い中
で長い間目を凝らすにも疲れて、レベツカは眉間をつまんでいた。
これは彼女の癖である。

そのとき、パチパチという火が燃える音とおぼろげな明かり、そし
て煙の匂いがここまで届いてきた。

（近くに人がいるんだ！ 助かった）

安堵したレベツカは少し足早に、それが聞こえる方・見える方・匂
う方へと行っていた。

背の低い木のが邪魔するにも関わらず、音なんて気にならなかった。

やっと見つけた場所は、野宿に適しているといえた。

崖下にある前に獣が棲んでいたというような洞窟があり、その出入
り口となる所の前には背の低い木ばかりが立ち並んだ茂みが多くあ
った。もし、グレイを追う敵が此処まで来たとしても、この茂みか
ら出てこない限りは攻撃は仕掛けられにくい。

「はあ、疲れたあ。一休みしようよ」

「いや、休むのは少し後だ。とりあえず焚き火をしなければ」

「ええ？ どうやって点けるの、火」

ニイラに火をつける方法を簡単に教えながら、心のうちでは首を傾げたいと思っていた。

（なぜか、同じことをあの女に教えたような気がするのだが・・・）

そんなことを知る由もないニイラは純粹に笑いながら、それをじつくりと観察していた。

（やっぱり、アソコにいたときよりも面白いよ！ ずうっとおじさんと一緒にいるんだもん）

ニイラは固く決意するのだった。それが 그레이 に枷^{かせ}をはめるようなことだと、知ってか知らずかそう決めるのであった。

그레이 が薪に火をつけると、ニイラは喜んで焚き火の周りを走った。

「こら、走るな。転ぶぞ」

그레이 がそういった途端、前の茂みが大きく音を立てた。

그레이 の身体に緊張がはしる。小声でニイラに呼びかけた。

「ニイラ、こちらへ寄れ」

ニイラはそれを聞いて、 그레이 の方へにじり寄りながら言った。

「女の人で、一人だよ」

音がだんだん大きくなって、火の明かりによって人影がはっきりと見え始めた。

「ふうっ。やっと人と会えた！ ってあれ？」

現れたのはレベッカだった。だが、 그레이 とニイラはレベッカのことを知らない。

「どうしてそんな警戒態勢なの？ あたしに害意はないわ」

ニイラはグレイの顔を見上げながら言った。

「嘘はついてないよ。それに疲れてるみたいだし」

ニイラにそういわれて初めて力を抜いたグレイは正面からレベッカを見据えた。

「私はレベッカ。姓は．．．いえないけど。あなたたちは？」

「あたしはね、ニイラ・ウェンイリだよ！」

「．．．．．わしはグレイ・アーナスという」

*

それは夏の夜だった。

「おい、ヒア。手紙きてるぞ」

「ん、ありがと」

俺が特攻部隊の配属にされる前で、丁度ジュデイーたちと初めて会ったときから一年ほど経ったころだった。一ヶ月に一度、手紙がジュデイーから送られてくるのであった。送られ始めはすごく恥ずかしいとは思ったが、いまではもう慣れてしまった。

宛名をみるとやはり、ジュデイーから送られていた。だが、いつも丸っこくて可愛い文字が、別人が書いたように違っている。少し不思議に思いながら、その場で封を開けた。

“ヒアへ 急いでいるので色々略すけど

前に書いた依頼が大変な方向へ曲がってしまったの

二人が追ってたんだけど、それがヒアの町へ

来れるなら早く来て！ 出来るだけ早く！
あの廃墟で

それと ごめんなさい ジュディア”

俺は内容を完全に理解した。

はやく行かなければならない！ 遅れてはまずい！

俺の状態に気づいたのか、上官は

「早く行け。二、三時間なら外出していても大丈夫だ」といつてくれていた。

すばやく馬を借り、城門を後にしていた。

鋭い風が頬から体温を掠め取っていく。だがそんな些細な事は気にならなかった。

それより、手紙の文面と、『ごめんなさい』の文字がにじんできた事が頭の中でグルグルとまわりつつづけている。

そんなこと言うなよ！

それに・・・あの二人はコンビを組めば最強だったじゃねえかッ！？
こんなことで涙流すなよ！！

二人が帰ってくるときに笑って迎えるんだろうがッ！
ジヨウが守っていくはずだろうが！！

暗闇に包まれていたはずなのに、向こうから赤々と明るい場所がある。

まさかッ！？ 焼き討ち？

馬をもつと速く駆けさせると、その全貌が見えてくる。真っ赤な炎が町を覆っていた。焦げ臭い匂いが辺り一面に充満している。

「うそ・・・だろ？」

口から本音が飛び出た途端に、鼻が嫌な匂いを捉えた。

オイルのようなものと、腐った植物のようなものが混ざった臭いだ。
バーストフラント
爆植物！

アレが爆発したんだ！

ドラントとモデランの二人が受けていた依頼は、増殖しすぎた爆
バーストフラント
植物をある程度に数を減らす事だ。爆植物は南部の地下や山奥に生
モンスター
息する怪物だ。名前の通り、爆発する気体を多く含んだ実をつけ、
主な食物をこの実で捕らえている。

バーストフラント
爆植物の繁殖はなかなか珍しく、群れで行動するも数は少ない。だ
バーストフラント
が、何故か北から南下してきた爆植物の群れはおよそ数百体だった
そうだ。

これほどの数になると、動物だけでは足りなくなり人の住む町も襲
うようになるといふ。

俺が呆然と馬の上で立っていると、ひづめの音が燃える音の合間に
聞こえてきた。

「・・・・・・・・久しぶりね、ヒア」

「ジュデイー」

馬に乗ったジュデイーはしばらく見ないうちに大きくなっていた。
俺達は何も話さなかった。

ただ勢いが増していくだけの炎が、町を飲み込んでいくのをただ見
るしかすべはなかった。

ウィザード
ここに魔術師がいればよかったのに・・・！

こういうときに限って無力な自分が恨めしい。
この近くに川があるが、短時間でこれだけの炎を消せるほど近くはない。

ただ・・・見つめるだけだった。ただ・・・信じるしかなかった。

炎の向こうから、黒くすすで焼けた顔を笑わせながら、こちらへ歩いてくる二人の姿が見えることを。

俺は誓おう。

俺のために死んだ友のため
これ以上涙は流さない事を。

俺は誓おう。

俺の隣で涙を必死にこらえる少女のため
もう弱い姿を人に見せない事を。

そして俺は祈ろう。

あの世で再会できる事を。

【第6章12】隊長と先生 5（後書き）

最後の部分はたぶん意味不明だと思っていらっしやる方が多いと思います。

いつか、何処かで、ヒアの話を一人称で書きたいと思っています。それを読んでいただければ（きっと）、この部分を理解していただけるのではないでしょうか。

それがいつかになるかと、聞かれますと困るのは私ですが……

文章を書く力がないため、他の部分も分からないかもしれません。その場合はなんと、申しつけ御願います。

【第6章13】長い日の終わり

ヒアはしばらく経つと、静かに寝息を立て始めた。

さきほどまで黙ってうつむいていたかと思うとこの有様だ。

「自分からいつておきながら、一人だけ寝るといふのは如何なるものか」

「そろそろ帰るか？ 深夜となると今から四時間ほどしかないし」

シェイがいうとリオンも頷いた。リオンは早くもいびきをかいているヒアをつつきながらいった。

「解散だな。・・・この人はどうするか」

「こちらで運んでおこう。一応軍の管轄内だ」

とリコールがいつてくれたのでそちらに任せることにした。

いびきをかいたヒアを、荷物のように背負うと、こちらを一瞥して帰っていった。

さてと、というように立ち上がったジアスは、いきなり声を上げた。

「あつ！」

「近所迷惑だぞ？」

リブシアが大きな声を出したジアスを注意すると、ジアスは謝った。

「悪い。ちよつと面倒な事を思い出して・・・」

「面倒な事？」

「父さんたちに全部終わったら説明するって断言しちゃった気がするんだよなあ」

「それは・・・かわいそうに。僕も行つてあげようか？」

「俺もついていこつと」

リブシアとシェイはニヤツと笑った。なにか悪巧みを実行するときの笑みだ。それをみたジアスは少し顔が青ざめる。

「じゃっじゃあ、ビル。またあとでな」

「ほら早くかえんないと、大変だよ」

「じゃあな、ビル」

ジラスがリブシアに押されるように帰っていき、シェイはさっきの笑みを崩さずリオンに向かって、片手をあげて二人の後を追うように帰っていった。

「リブシアのほうが、モデランさんに似てると思うけどな」

リオンのそんな呟きは一吹き息によって、ランプの明かりと共に消えた。

*

酒場中に拍手が飛び交う。ルターナは酒場内の客の心をわしづかみにし、雰囲気をも味方に変えていた。なかには口笛やリクエストする客もいる。

ルターナはポルディノから渡された飲み物に口をつけながら、ある考えを思いつく。

（兄様は、めったなことでも歌ってはくれない。どんなに頼んでも、いつもなら断固として鼻歌すら聞かせてくれない。でも、今なら……？）

ルターナは飲み物のグラスを、ポルディノに返しながら言った。

「兄様、」

否、言おうとした。ポルディノがそれをさえぎったのだ。

「ルターナ、そろそろ帰る時間だよ」

「あら、そうなの？　じゃあ、最後に兄様、一緒に歌いませんか？」

ルターナはポルディノの目をじっと覗き込みながら言った。ポルデ

イノはそれを避けるように顔を背けた。

（やっぱりそうきたか・・・）

ポルディノは今すぐにでも帰りたくなった。ポルディノは妹が歌っているのを見るのは好きだったが、歌うのが大の苦手だったからである。だから、今まで誰になんといわれようと、音符をなぞった声を喉から出す事を嫌がった。

だが、今の状況は違う。今まで相手にすればよかったのは、面倒なことをいいつけてくる客と、ときどきじゃれあうように頼んでくる妹だけであつた。それも客は団長やオウンに対処してもらえばよかったし、妹はただの遊びのようなものであると分かっているから、歌を口から紡ぎ出さなくてよかった。

今は妹（本気モード）＋大勢の客（ルテーナが本気なので本気）だ。ひとりに対処どうこういえる場合ではない。自分が折れれば、一回だけ声で歌を形作ればいいのだ。諦めたポルディノは大きなため息をついた。

「・・・わかった。なんの曲？」

「きゃ。兄様、うれしい！」

「やっぱり嫌だ・・・」

*

リスベス帝国の空では、既に夜の月が弧の頂点に来ていた。北国にも春が来ているとはいえ、吹き付ける風は冷たかった。ウォリスは、開けていた窓を閉めて、かんぬきをかけた。窓を背にして自分の部屋へと歩き始めたウォリスは、名前を呼ばれて振り返った。そこには急ぎ気味に歩いてきた同僚の姿があつた。

「ウォリス」

「どうしたんだ？ 急ぎの用か」

同僚は切らせながら、肩をハアハアといわせた。ウォリスは呆れた

ように鼻をならした。

「一応お前も、戦場に出る身だろうが。そんなことで息が絶え絶えになってどうする」

「今日一日走ってたんだよ。それより、お前。陛下に呼ばれていたぞ！ 今すぐ急げ！」

同僚に思いつきりバンツと背中を叩かれたウォリスは、背中をさすりながら足を速めた。

ウォリスは昼前に報告をしたばかりだ。それほど重要な情報も入っていたわけではない。

（どういうわけだ――？）

（何のために皇帝は、俺を呼びつけたのだ？ 別に明日でもよかったんでは？）

ウォリスは先程、報告したときからレギオスは動いていない、と考えて彼の自室まで来ていた。ノックをして声をかけると、中からレギオスの了承を出す声が聞こえてきた。

「失礼します」

と断りを入れて部屋の中に入ると、レギオスは変わらず机に肘をつき何処かを眺めていた。

レギオスがウォリスに気づき顔を動かすと、その動きはただの命ない人形のような動きだった。その動きにウォリスは、背中に伝っていく冷や汗がとても冷たく感じられた。

「ああ、ウォリスか」

レギオスが発した声もまた、人形が発した声のごとくウォリスの頭を震わせた。

「今度はどのような御用でしょうか」

「お前は俺が呼んだことに疑問を覚えているだろうな。まあ、初めて会ってから三週間程しか経っておらんが、会うのはだいたい一日に一回ほどだったしな」

レギオスの目は水晶のように透き通っていたが、ほかの者に悟らせない強い思いが隠れていた。ウォリスは読み取れないと分かっているが、相手の目を覗き込んでしまう。覗き込んだ後に、後悔すると知っててもなお。

「はい、仰るとおりです。とてもその答えを聞きたいと願っているのですが」

「お前のように焦らすつもりはない。お前に直接確認したくてな」それが焦らしているというのではないか、という言葉を君主に言いかけて飲み込む。

「わたくしにお答えできるものであれば。なんなりとお聞きください」

「じゃあ、聞こうか。ウォリス、なぜ昔の名を捨てた？」

「それは自分が望んだものではないからです」

レギオスは相手の答えを聞くと興味深そうに、顔のパーツを動かした。その顔をみたウォリスは身体を震わせた。

（まるでただの機械みたいだ！）

そのころ、機械と呼ばれるほど最新技術を駆使した物は存在していなかった。だがその昔、リーディアに住む者が全て魔法が使えていた時代は、機械と呼ばれる魔力を同源にしたモノがあった。そのモノであっても様々なものがあり、今ではどの様な構造になっていたか、ということは分かっていないが、どんな型があったのか記録は残っていた。

井戸のかわりに地下の水を救い上げる型、単純な仕事をこなす人型、

風を受けてまわることによって別のエネルギーを生み出す風車型、そして人につき従う人形型。

ウォリスはこれらのことをとある文献で知っていた。実際に見たことはなかったが挿絵をじっくりとながめたことがある。それにとてもよく似ていた。

「では、なぜ故郷を離れた？」

「世界を知らねば、自分の使命など分からんでしよう？　ただ先代に託されただけの使命を、従順に貫き通す『メテースアノ章の持ち主』などクズですよ。洗脳された魔法使マジシャンよりもたちが悪い」

それからレギオスは幾つもの質問をウォリスに投げかけた。そのなかにはウォリスにとってどうでもいいこともあったし、際どいところについてくるものもあった。

（なんのつもりだ？　皇帝は俺の前を知っているはずだ。なのに・・・）

ウォリスの思いを知ってか知らずか、考えている最中にも質問は飛んでくる。

「フラン・ローシャ、どうやってお前は二人月ツインガーのことを調べた？」

「・・・前の名前で呼ぶんですね。俺にはネイロで文献を調べられる権利がありますから」

「では、その権利はいかがして手に入れた？」

ウォリスの顔が、わずかだがかたまった。一瞬にして色あせていくようだった。

「やはり、それは魔法によって作り出された幻のようだ」

レギオスは勝ち誇ったようにいうと、銀色に光る剣でウォリスの胴体を横薙ぎにした。普通であれば胴体が真っ二つになり、血がふきだす所だが、ウォリスの身体を構成する光が、一気にはじけてウォリスの身体はなかった。部屋に無数の光の粒が、漂っているだけだ

った。

*

リオンはジアスの家に行かず、もう自分の部屋となった元ジユデアの部屋にいた。新たに油を入れたランプに火をつけて、『平和の章』を読んでいた。一番新しいものだ。二人の精霊が自分の分も書き入れるべきだ、というので先代のところを読んで参考にしようとしていたのだ。

新しい物なので、十代目から十四代目まで書いてある。

ヒアの話を聞いてきたあとなので、そのころのリオンが誰なのか気になり十三代目の書き出しから、ページをめくっていた。

（十三代目は誰だろう？）

ほかの先代たちは書き出しに自分の名を書いているが、十三代目は書いていない。それどころか、定期的に書いているとは思えない程、内容はざつくばらんで曖昧だった。

＜彼はめつたにここに書かなかったんです。僕らも書くことを勧めたんですけど、この本を放置したまま何処かへ出掛けてしまっています＞

バロシオンが苦笑いしながらいった。明るい金髪が、薄暗い部屋の中では翳^{かげ}ってみえる。

＜その本には自動書記の魔法が掛かっているんですよ。だから彼が何を成したのかは、書かれていますけど、なぜそこへ行ったのかとか、どのようにやったのかというのは書かれないんです。でもたまに、自分で書いてくれた時は決まって、ある一人の男の話ですよ＞アポシオンが本について補足説明をした。どうやら、二人の精霊もあまり十三代目のことを知らないようだ。

アポシオンが差した、自分で書いたというところに注目してみると、彼女の言つとおり決まって一人の男の話だ。

「L・F？ だれのイニシャルだ？」

【第6章14】出会い

涼しげな風が、己の髪を撫でていく。冷たく澄み切った夜空では
かなく瞬きを繰り返す星たちが、隙間なく空を覆いつくしている。
月が出ていなかった。今夜は新月だろうか。時折、空よりも黒い雲
が、風に流れていく。時刻はまだ、その日を四月二十日としていた
だが、日付が変わるのは、それほど遠い時間ではない。

ポルディノはそつとまとめあげた荷物と、矢筒と弓を手に持ってテ
ントから出た。そして誰も外を出歩いていないか見渡すと、ポツン
とひとつだけ、光っているランプの光を目指して歩き出した。

ランプの近くへ行くと、だんだんそれを持っている人影が見え始め
た。

（オウン様・・・）

その人の顔がはつきりと見えるほど近づくと、オウンは驚くほどや
つれていた。

オウンは時折、咳をしていた。

オウンは擦れ声でいった。

「はやく来れ。ポルディノよ」

オウンはランプを持って木立の中へと入っていった。ポルディノは
駆け足交じりにオウンについていく。静かな夜の中、足音がよけい
に響く。木立の中は常葉樹でもあるのか、落ち葉が落ちていた。
落ち葉を踏むたび音がする。

ランプの光が急に振り向いた。わずかな星明りも木々にさえぎられ
て、さつきよりもオウンの顔が青白く見える。

「ポルディノ、何の話かわかっておるな」

「はい」

オレンジ色の光は現実味がしない。ポルディノの身体からも、熱がさあっと冷めていく。

「この話は時期をみて話せ。よいな」

「承知しています。オウン様」

ポルディノはその場に片膝をついてひざまずいた。木から散った葉がちくりと膝を刺す。

オウンは身じろぎひとつせず、ポルディノを見つめた。

「ルテーナに時期よりも早く知られた場合は、包み隠さず全て話すのだ」

「そうします」

風が吹き付けてくる。

「のちに出会う旅人らには一足早く話しておくべきだろう」

「肝に銘じておきます」

大きい雲が星を隠してしまった。ほとんど自然に存在する灯りはもう二人の所から見えなかった。

*

“ 木曜日

それにしてもやはり不思議だと思う。我らの一族にも一応は、魔術^{ウィザ}師^ドの血は流れているが、かなり前のことだ。親戚であり我が友、（本人の希望によりイニシャルを記すだけにする）L・Fは両親ともに魔法とあまり干渉しない家に生まれている。それなのに、Lはなぜ魔法を使えるのであろうか。

Lと共に、リーディアを旅するあいだとても不思議思うことである。Lによると、血筋は関係ないという。だがネイロを訪れた時、親戚

のほぼが魔法を使える、という人と会ったこともあった。Ｌにそれをいえば頭から反論されることだろうから、これは言わないでおくに限る。

一度、魔法が使える者とそうでない者の違いを聞いたとき、彼は素質と努力だ、と答えた。詳細は俺のような者にいつてもわからぬから、いわぬと言っていた。Ｌの答えを聞く限りでは、我々戦士と同じではないか。詳細とはなんのことであるのか、俺にはあまり関係がないのだが、気になるのは変わらん。

そういえば、Ｌには子がいたな。その子にも魔法が使えるようになるのだろうか。今後とも気になることだ。”

リオンは十三代目の記述をみて口をパクパクとさせた。まるで魚のようだ。

<・・・あのぉ？ 十五代目、口に出さずとも思念で伝わるのですよ？>

<十五代目、のちの名がバカな魚剣士となって知られてたらどうするんですか>

真面目なコメントとツツコミが混じったコメントを受けて、リオンは我に返った。

（わ、悪い。このＬ・Ｆつてもしかして・・・・・・・・親父かも）

<<十五代目の父親ツ！？>>

（いや、はもるな。耳・・・じゃなくて頭が痛い）

リオンは指先が震えるのを押さえられなかった。どうして震えるのか自分でもわからなかった。

（俺の親父は、ロドニゲ・フェブリーヤ。話によれば、この記述が書かれていた頃も放浪していたらしい。イニシャルもあってるし。魔法が使えたかとかは知らないけど）

<それではまさしく、彼ではありませんか！>

仮定として考えて当てはめれば、ぴったりとはまる。まだ不可解な部分も残るが。

不可解な部分というのは、例えば実際に十三代目とリオンの父親と一緒に行動していたのかということ。例えばLⅡロドニゲならば家庭内で魔法を使わなかったのはなぜかなどと挙げられる。

「そもそも、親父は今度また何処へ行つたんだ？」

*

アーリア。そこでは細い三日月が見えていた。黒い雲も空の隅や山の向こうに追いやられて、あまり見えない。レベッカは薄っぺらい毛布の中で唯、空を見つめていた。目線を少し下げれば火がまだついている焚き火の向こうに、見張りとして座っているグレイが見えた。グレイは身じろぎひとつしないが、寝息も立てていない。レベッカの奥、つまり野宿している洞窟の奥のほうに、規則正しい寝息を立てるニイラが転がっていた。

互いに遭遇しあってから名乗った後、ほとんど警戒されることなくレベッカはグレイとニイラと共に、夜を過ごすこととなった。グレイは半ば注意をレベッカに向けていたが、ニイラが何やら話すとその注意はこの場の外へと向けられていた。グレイにとってすでにニイラは信頼を勝ち得ていた。

レベッカは思う。こんな幼い子供がなぜ、と。

（せいぜい十歳くらいの女の子を連れた、よわい 齢の不明な男。どうみたって親子でも血縁でもない。なのはどうして・・・）
幼いころの自分に重なる。ニイラがたった一つの選択を、今のレベツカと違う選択肢を選んだような、不思議な感覚がした。

容姿はもちろん、物言いや性格が違うのに――。
呟きは火花がはじけて飛ぶように、流れ星が尾をひいて空駆けるように、暗闇へと消えていく。

レベツカはとりわけ普通の家庭に生まれた。ただ、隣に仲のよい夫婦が住んでいただけだ。

――悲劇なんかじゃない。ただ、人間の性さがゆえ起きたことであるだけ。

レベツカが物心つくようになるまでは、ただの幸せだった。

――記憶がないのが少し残念に思うだけ。正気でなんかいたくない時ほど、『残念』が『残酷』にきこえるだけ。

その夫婦はよくレベツカの家へ遊びに来ていた。そのたびに自分たち子供がいらないのを寂しがる。

――あのね、おじさん。わたしはね、おじさんの子供じゃないんだよ。

そして家にきてはレベツカを可愛がった。

――あのね、おばさん。わたしはね、おばさんの子供じゃないんだよ。

レベツカの両親とその夫婦はとても仲がよくて、レベツカの両親が一日ばかり家を離れることになったときは、レベツカを夫婦に預けたりもした。恐怖の念がレベツカに色濃くうつっているにもかかわらず。

――わたし、ここに居たくないよ・・・・・・？

レベツカは首を振った。無理やり疼く胸を抑えて、目を固くつぶった。

（ただ、今を―――）

*

静かに動く時計の針が、十二を指し示した。

今この瞬間から、四月二十一日が始まった。リオンがホールの開いた扉を見やると、思ったとおり人数分の人影が立っている。

「よう」

ジアスの家に行っていた三人だ。

「遅れてない、よな？」

「さっきなつたばかりだよ。さあ入ろう」

三人が入ると、わずかに床にかかれたルーンの環が瞬く。

「今更だけど、ちゃんと装備は整えてあるよな？」

シェイが人の悪い笑みを浮かべた。リブシアが長いため息と共に呟く。

「さっき何回も確認したくせに」

「俺なら大丈夫だ。・・・そろそろトワンからお呼びがかかるだろうな」

リオンが笑いながら準備済みのリュックと、二振りの剣が腰に帯びているのを見せた。

しばらくして床にかかれた環が光り始めた。それにあわせて環の中心にあるマークが回転を始め、一周するたびに光の環が天井へと昇っていく。

そしてトワンの低い声が響く。

『我が其処へ呼ばん。我が名を呼ばん。我が名はトワン。其処の者よ、我がルーンに触れよ』

「およっ！？」

ジアスが素っ頓狂な声を出した。ほかの二人もぎょつとした顔をしている。きつと魔法なんてものにはあまり縁がなかったせいだろう。リオンは苦笑しながらルーン文字にひとつひとつ触れていった。そして最後のマークに触れる前に、忠告をしておいた。

「目をつぶっておいたほうがいいぞ？　まあ見たいなら勝手だが」
「「「？」「」」

三人は意味がわからないというように、首をかしげたがすぐに光の柱ができた。そして、何も見えなくなった。

きつと三人は目をつぶらなかつたらしい。光がはじけて、目がくらんでいるようだった。リオンたちはただっぴろい丘の真ん中に突っ立っていた。そして脇に立つトワンを見つけた。すそがぼろぼろに切れたドレスをなおも着ているトワンは、王女という地位を失っても気品があふれていた。

「これから、どうするんだ？」

「汝には関係あらぬ。帝国から追っ手が来ぬのならば、自由にするのみ」

「そうか」

丘の南側にはテントが幾つも置いてあった。そして北側には木立があった。先ほどまで室内にいたリオン（ほかの三人は無反応なので除外）にとっては風が冷たく感じられた。

「じゃあな。また会おう、リオンよ」

「ああ」

トワンはリオンを一瞥すると、高く飛び上がって自分の行きたい所へ、と飛んでいった。

しばらくリオンが余韻に浸っていると、三人の目くらまし（？）が解けた。

リオンが口を開いた途端、木立のほうから足音がした。木立を抜けてくる人影がする。

「嘘だ・・・ろ？」

赤い宝石がはめ込まれた剣の柄を強く握ってしまう。木立から出てきた人影は、小柄な老人を抱えていた。

「バロシオン——？」

続

【第6章14】出会い（後書き）

やっと6章を終わることができました。

ということと、すぐあとの更新は前に予告しましたように、番外編としてちよつとした話を書きたいと思います。番外編は長くなると思います。そのあいだ、本編はちつとも進みません（過去の話ですからw）。ですが、今まで読んでいただいた間、その片鱗さえもでなかったような感覚を覚えてくださるといいと思います。

ちよつとした次回予告をさせていただきたいと思います。

本編【第6章7】語る者の冒頭でジラスが何か話していました。その話をジラスの一人称でお送りしたいと思います。戦闘シーンになると三人称になるかも、ですが今まで見えなかった二人（ビルとジラスですよ）の成長と新しき仲間達の友情を少しでも感じていただけたら、私の喜びとなりましょう。

軍に入ってから一ヶ月が経ち、文官の見習い仕事が終わった新人の軍兵らとビル達。その後の所属を決める三ヶ月の訓練期間が始まるうとしていた。

4章の魔法講座あたりを読み返していただけますといいかと思いません。

では、今日はこのあたりで失礼させていただきますと思います。このあとも、リオンのことをご愛読していただけることを願いつつ。

【間章】とある隊長さんと死ぬることの無き魂

暗さは常にあった。

心のすみ、消えていたはずの根が　また巢食っているよう。

強かった二人の死を　信じなかった一人の青年と少女。

少女はやがて、成熟した女へと成り代わったが　弱き心は変われなかった。

少女は今、永遠の安息を得　笑っているのだろうか。

青年はやがて、歴戦の騎士へと成り代わったが　闇の中は変われなかった。

青年は今、永久の格子から出　涙で頼めらしているのだろうか。

それは、まだ日付が四月二十日だったときのこと。夜の帳とばりで大地が覆われ、常人であれば明かりなしで出歩くのは危険なほどの暗さだった。ひとりの男がもうひとりを半ば引きずるように、タイル敷きの道を担ぎながら歩いていった。

その男は荷物の入った袋を持つのみで明かりを持っていなかった。しかし、その目は月光が無いにも関わらず、鋭いふくろつのように夜目がきくようであった。

「ド・・・いや。リコール、か」

男は担いでいるもうひとりの声に立ち止まった。そして、リコールと呼ばれた男は静かに、ひとりを担ぐのを止めた。ドサツという音がして、くぐもったうめき声があがった。

「隊長殿、起きているのならばご自分で歩かれてはいかがかな」

「うぐぐ・・・、おっおま。本当はドラントなんじゃないのか？」

硬いタイルに顔をつけていたヒア・マクシアンは顔を上げながら言った。リコールは半ば身を固まらせたが、立ち上がりかけのヒアが気づけるわけも無い。

リコール・サージユは立ち上がったヒアに背を向け、静かに首を振った。

「そんなはずが・・・あるわけがない。隊長殿、頭でもおかしくなったのならいい医者を紹介いたすぞ？」

冗談混じりに聞こえた声は、まるで独り身の老人を思わせた。事実、リコールはヒアよりも年を重ねていたのだが、家庭をもっていた。ヒアは、リコールの声を聞くと、いや聞く前から分かっていたのかもしれない、淋しい呟きをもらしたのみだった。そうか、一言。

男二人、ただ黙々と道をすすんでいた。ヒアには、同じような場面が生きているうち何度かあるはずなのだが、その姿はそのどれよりも物寂しい感じを受けた。

タイル敷きの道は、住宅が集まっている部分はずれ人気がない所へと続いていった。その道なりに進むと、村の出入り口の門へ出てしまう。だから、二人は部下達を待たせているヤコブ神父の屋敷へと向かうのだった。

ビルという十五代目リオンの少年を狙ったリスベス帝国のひと騒動により、マルス王や王妃の身边を洗いなおさねばならなくなった。しかし王城から、完全にスパイがいない一部隊をこっちに來させるとなると、調べるだけに時間が掛かってしまうので、明日には王城に戻るということなので無駄足となってしまう。

そこで、かつての依頼主の弔いに来ていたヒアの隊が、護衛を任されることとなった。リスベス帝国の者だった間諜たちを倒したことで、信用するに値すると判断されたのだ。

道から外れていくらか歩くと、夜なのにも関わらず明かりのついた教会が見えてきた。まわりが暗いせいで幻想のように浮かび上がる教会は、違う次元を魅せている。

村でしばらく暮らしたことのあったヒアにとって、この光景は見慣れたものかと思いきやそうではなかった。村にいた間、このような姿を見たことが無かったのだ。

「隊長殿、これは？」

「いや、俺も知らないんだが。ちょっと気になるから、覗いてみるか」

教会に近づくにつれて、光は神秘的な色に変わっていた。ステンドグラスの窓から神が覗き込んでいるかのような、荘厳さがあった。教会の大きい扉はまだ開いており、中からあふれるばかりの光が漏れている。それゆえ、入り口に立つ人の影は色濃く見えた。

教会が目の前までにくると、その人影がはつきりとみえた。まるで二人を待っていたかのように、微笑を浮かべたヤコブ神父がたっていた。

「ヤコブ神父……、お久しぶりです」

驚き気味のヒアにも、変わらない笑みを向けたヤコブ神父。床に引きずってしまいうほど長い裾の祭服を身に着けた神父は、まさに神話から抜け出してきたようだった。

「ヒア君、随分と大きくなって。久しぶり、だね」

祭服の白銀の線が神聖な光や花、神官たちの姿を描き出していた。暖かそうでありながら目を刺すような鋭さを持つ光が、ヤコブ神父の背後から差し込んできている。それがよりいっそう、ここが別世界のよう感じられた。

リコールがさっと軽く頭を下げた。
「一年ぶり、でしょうな。ヤコブ殿」

「そうだろうね、リコール君。前に来てもらって以来だからね」

ヒアはびっくりした様子で、リコールをまじまじと見た。ぶしつけな視線に一片の反応を見せないリコールは、一步教会のなかに立ち入り視線を上に向けた。それにつられて、ヒアも視線を移した。

ヤコブ神父が中へと、案内するそぶりをみせたため、二人は中に入ってしまった。

人の何倍もの高さがある天井から、吊り下げられた大きなシャンデリアが炎ではない光で輝いていた。しばらく見ていると、目がちかちかしてくる。

「あれは、一体？ 普通の炎でないようですが」

ヒアがヤコブに訊くと、ヤコブは笑みを崩さず光のかたまりを見上げた。

「あのシャンデリアは、いわばルーンアイテムのようなものでね。フェブリーヤの名につらなる人が亡くなるたび、魔力の光を発するんだ。十四代目だからなのか、光がいつもより強くてね」

教会の奥のほうには祭壇が置かれていた。そこに、死者を慰めるためのものと思われる無数のランナの花束が並べられている。

ヤコブが祭壇のほうへ足を向けた。

ランナは死者に、心から眠ることの出来る眠りをあたえる。そう言われている花だ。ランナは、今の時期に咲くポリアとは違う形の花を持っていたが、優しい色はほぼ同じだ。

祭壇の奥にはリーディアのほとんどの人々が信仰する、ペディア・アゴリヴ神の御姿をなぞらえた像が立っていた。毎日手入れされているであろうその像は、高価な白い石でできているためか、隅々までいきわたる光を受けているためか、それ自体が白く輝いているようだった。

像の手にランナの花が一輪、持っているように見えるように、手

の中に置かれていた。ヤコブは像に近づき、恭しくそのランナを取った。そして、シャンドリアの燦爛たる光を、ランナが受け止めるように、ヤコブはランナを持ち上げる。

ヒアにはそのヤコブの姿が、信じられないくらい人間臭いと思えた。事実、ヤコブは真正正銘の人間なのだが、さっきまでの天使のような姿が目にくびりついていて、おかしく思えたのだ。

「ヒア君リコール君、今日天上の楽園へ旅立った彼女の墓はここにないけれど・・・」

二人とヤコブの間の距離は離れていたのだが、音がこもりやすい建物ゆえ、ヤコブの声はちゃんと聞こえた。

「彼女や君の兄弟のようだった、あの二人の墓にいつてやってくれないか？ 墓地はこの裏にある」

ヒアにはすぐ二人とは誰のことを指しているか分かった。だから、言おうと思った。『俺は、ドラントとモデランが死んだなんて、信じていない』と。

しかし、それをヤコブが手で制した。

「知っているよ。君が、二人が死んだのではなく違う所にいつてしまったのだと言っていることは。ならば、君は彼らに呼びかけ『戻ってきて欲しい』と正直に言ったのですか？」

ヒアは言っていないかった。彼は言うことを思いつかなかった。彼はかつて過ごしたおだやか（？）だった日々を思い返すことや話題にしたりしたことがあっても、独り言のように本心や自分の望みをいうことはできなかった。

「信じたいのなら、お話しなさい。呼ぶ声は人をとらえてくれます。そして自分の願いも、ね」

ヒアの本心を見透かしていることをほめかす発言に、ヒアはぐつとこぶしを握り締めた。そして、震えないよう注意して絞り出した声は、自分のものとは思えなかった。

「——わかりました」

ヤコブのいつていたとおり、村の墓地は教会のすぐ裏にあった。しかし、すぐ近くにあるといっても墓場は案外広く、教会のシャンデリアから発する光が隅々までいきわたっていなかった。ところどころ、石碑というか墓碑がいくつも置かれている。

二人はまぶしすぎる光の中にいたが、夜目がきいていた。

墓地と、そうではない土地の境として柵が地面に刺さっていた。それを軽く飛び越えた二人は、影しか常人が目にすることが出来ない闇の中で、静かに墓地を見渡した。

「あつちだ」

ヒアが目星の方向に歩き出して、その一歩後ろをリコールがついていく。

ヒアが指差したのは、墓地のすみだった。そちらの方には、あまり墓碑が立てられていない。もちろん、光はほとんど届かない。

墓場を囲む柵の塗装がひどくはげていた。村がある側の柵はまだ新しいものだったが、この反対方向側ではぼろついたものを使っている。この、村の墓地の柵を越えれば、背の高い木が並び立っている。そこはヒーディオンの国土だ。（この村は本来ヒーディオンのものだったが、フェブリーヤー族が住む場所が必要とのことだったため、村を自治区として彼らに自治権を預けたのだ。つまり、事実上別の国のようなものだったわけだ）

ヒアはずんずんと隅の隅へ進んでいく。どんどん隅に行くに連れて、周りの暗さが濃くなっていった。そして、唐突に立ち止まった。

いぶかしげに思ったリコールは、ヒアの肩に手をかけた。ヒアの体が震えていた。まるで信じられないことが起こったように……。

「隊長……殿？」

「モ、デラン——？」

ハッと、リコールは身をかくした。ヒアの震えはさらに大きくなる。息を何度か吸ったかと思うと、深夜に村人達を起こしてしまうほどの、大音量で叫び始めた。

「うわあああああああああああああつっ！！」

それにあわせていきなり、全速力で駆け出したのだ。ヒアの肩に手をやっていたりリコールは、すばやく手を放してヒアの猛スピードと並んで走り、ヒアが止まるのを待った。

無意味と思われた叫び声と急な走りは、並び立つ二つの墓碑の前で静かに止まった。ヒアは、墓碑の前に膝をついた。リコールはヒアの後ろに無言でたたずんだ。

墓碑には所々苔が付いていたが、他に目だって汚れた部分は無かった。名前が刻まれた直ぐ下に、何か言葉がかかれていた。ヒアはそこに注目する。リコールが、二つの墓碑それぞれに書かれた同じ言葉を読み上げた。

「死ぬること無き、魂を持つ者、疲れたり時はここに来たりて、その傷を癒すがよき」

「ど、どういうことだ・・・？」

ヒアは片方の石に手をやった。

——ひどいなあ、ヒア君。そんなに怖がっちゃって、もしやビビリちゃんだったり？

ヒアの驚きに見開かれた目が、手をやった方の墓碑に向けられた。この二つの墓碑の前にいる二人に聞こえた声。ヒアにとって忘れようがない人の声だった。リコールは驚きながらも、なぜかかすかに口を緩めさせていた。ヒアが目にした墓碑には、『モデラン・グランデ』という名前が刻まれていた。

懐かしい声に、ヒアは恐る恐る、確認してみた。

「モデラン、なのか？」

——今更確認するー？ やっぱりヒア君KYだよね。ボクはほんとーに、モデラン・グランデだよ。

一部むかつときたヒアだったが、その口調は変わりのないモデラン・グランデのもので、嬉しさに目が輝いた。無性に胸の奥が熱くなつて、ドラントやモデランそしてジュディアと過ごしたかけがえのない日々が、すぐ懐かしいようでつい最近のことだったように感じられた。そのうち、ヒアの視界がかすみはじめた。顔が熱くなる。

「俺が言つてたのは本当のこと、だったのか……。じゃあ、ドラントは！？」

——変わらず君つて、バカだよねえ。もう隣っていつか直ぐ傍にいるじゃん。

えっ、と薄れた声で顔を向かせると、ドラントの面影が残る微笑み。

「リコールが、ドラント？」

「さっき、俺のことをドラントかって聞いてきた時、正直けっこうビビッてたんだぞ？」

そういうと、リコールの顔からドラントの笑みが消える。ドラントらしいのではなく、普段のリコールの様子にもどった。当然の疑問を投げかけるヒア。

「どういうことなんだ？ もともと、ドラントとリコールは別人なんだろ？」

——元は、な。……詳しいことを言うと、お前きつと寝るから今は省略するがな。

ドラントの声が、リコールの中からではなく、モデランと同じように虚空から聞こえた。ヒアは、この二人の超人というべき離れ業を幾つも見てきたせい、あの二人ならそれも当たり前かとホッとするのだった。

ホッとしたせいで、いい年しているのに涙が出てきた。『葬式アルルオの儀』で感じた引き裂かれるような痛みが、今更こみ上げてきた。

二人に体と呼べるものがないのに、二人がヒアを包み込んだように感じた。

——そもそも、ここには何の為にきたんだヒア？ ジュディアのためだろう。

——そうそう。あの子と君の関係は、ボクらがいたから成り立っているんだよ。

二人の言葉を聞いて、涙を流しながらヒアは笑い始めた。ドラントではないリコールが、真面目な声で言った。

「頭でもおかしくなったのなら、いい医者を紹介いたすぞ？」

さつきと同じ台詞だったけど、全然違う意味に聞こえた。そのせいか、ヒアはもつと笑った。笑いながらリコールに言う。

「いや、いいんだよ。俺が狂うのは、今だけなんだからさ。ただ見てくれよ」

いや誰に言ったのか、ヒア自身でさえも分からなくなる。

「ジュディー、俺はお前のことが好きだったんだ。だから、今度はお前が俺を好きになれよ」

ヒアやリコールには見るのが叶わない、ドラントとモデルンの姿。だけど、今は見えない二人は見えなくてよかったと思うのだった。

——あれ、プロポーズか？

——いやあ、なんだか聞いたことある気がするんだけどねー。

見えない二人はそれぞれの墓碑に座っていた。思春期の少年如く、ヒアの本気(?)の告白を聞いた二人は、顔を赤くして空を見上げるのだった。動作までも若々しい二人であった。

——まあ、ヒアにならやってもいいがな。

——ちょっと、ドラントはジュディアの親じゃないでしょーが。

【間章】とある隊長さんと死ぬることの無き魂（後書き）

章わけのため、こちらへ移動となりました。ご了承ください。

【番外編 1 - 1】三ヶ月の訓練期間

ビルは目の前にあるものを指差し、言った。

「こっこれで行くのか？」

それはそうだ。だって目の前にあるもので移動するんだよ。ていうか、俺たちみたいな新兵が、もっと高級な乗り物に乗れると思ってたのか？ そんなわけないよなあ？

「俺にコレは無理だ！」

「コレよわばりは馬に失礼だ！！ いい加減慣れろ！」

「ジアン〜！」

ビルがすげえ怖がっているのは、そう馬だ。いたって普通の生き物だ。ビルもほかの生き物は普通に触れる。

それなのに、なぜか馬を（？）怖がっている。俺はそれが不思議でたまらん。

あとそれをいじるのが楽しくなっている。面白いから！

「お前が、性格変えればいいんじゃない？」

俺は何気なくいったつもりで、そこにはなにも魂胆なんていうものはないのだが、ビルは「あ、そうか」といって表情と態度、それに声の調子を変えて馬に掴みかかった（？）。馬は必死の抵抗をしているようだ。

「馬！ 噛むなよ、踏むなよ、動くなよ！？ おい」

くつくそおっ！ お、おもしれええっ！

俺は吹き出さないように口を押さえていたが、腹が九の字に曲がって痙攣（けいれん）（？）していたので笑っていることは、一目瞭然である。

「ジアン、何やってんだよ・・・」

必死に笑いをおさえて、振り向くと俺の同室者、エリム・マドウ
力が馬を連れていた。

「エリつぶはははっ！」

「言いかけながら、笑うのはやめてくれない！」

エリムは俺に突っ込んでおいて、自分は連れていた馬の背にひら
りと乗った。その姿勢は軽やかなもので、長年馬に乗ってきたこと
がわかる。

馬がすきだ、ということは前から聞いていたから、そうだろうな
とは思っていたけど、予想以上にきれいな動きだった。

「そろそろ出発らしい。荷物を乗せて、騎乗したまま門へ集合、だ
つてさ」

「了解つと。あいつにも言つとかなきゃ、だな」

エリムはここへ来た理由を言いながら、馬相手に悪戦苦闘してい
るビルに目を向けた。

やべ。俺が見たら、またわらける。そういうことで俺は、目を向
けなかった。

「向こうにいるのが、話してたビリー・ヘンリル？」

「うん、そう。あいつ、剣は上手いんだけどなあ・・・」

エリムは騎乗したまま、馬をビルの方向へと向かせると、歩き出
した。馬の蹄が地面の砂に跡を残す。

俺も自分に割り当てられた馬の鼻面を撫でてやり、ぎこちない手
つきで鎧へと足をかけ鞍の上へとのった。

えーと、どうやって歩かせるんだっけ。マクシアン隊長に教えら
れたのを、思い出しながらエリムの後を追う。

「ビル、こっち振り向きやがれ」

俺が声をかけてやると、ビルは面倒くさそうに振り向いた。

「なんだよ。こっちは忙しいんだ」

「俺の同室者、エリム・マドウカだ。エリム、騎乗と進ませ方を教えてやってくれない？」

エリムは「よろしく」といいながら、馬から降りた。彼の顔には実家のことでも思い出したのか、優しい笑みが浮かんでいた。いい友達になってくれそうだ。

『俺は、お前の言葉信じるよ』

俺がビルに、リオンに、こう言われてから一ヶ月近く経っていた。そして、俺が父さんから無断で持ち出した『魔鈴の絆』^{ますず きずな}で絆を結んで一ヶ月――。

ビルは、村を出る前の自分が思っていたのとは、全く違う人だった。努力家で、おおっぴらに自慢はあまりしない。実はあいつの周りは、とても近づきやすい。誰とでも仲良くなれるが、自身はそれに気づいていなくて、孤独だ。

そしてさらっと俺が一番大切にするものを勝ち取った。

俺はあの時、その言葉が心に響いた瞬間、生まれ変わったのかもしれない。そのとき気づかなかった深い青の瞳が、それにビル自身が変わっていたせいかもしれない。ただ俺が前と少しでも変わったことを、よかったと思っている。

俺はビルが好きだ。友達として、人として、俺は尊敬したくなる。ただ、ビルはどうなのだろう？

俺に『ビル』と呼んでもいいと言ってはくれたが、それはただの友達だ。^{はた}傍から見るとあいつは誰にでも平等に接しているように見える。ただの友達なんて、沢山いるのかもしれない。

「ジアン」

エリムの明るい炎のような髪が揺れる。エリムのほうを向くと、落ち着かない様子で馬の背にまたがるビルの姿が見えた。

「おー？ やつと乗れたな、ビル」

「くそ・・・死ぬほど疲れた」

エリムは笑いながら、馬の尻をペシンと叩いた。

「うん、これでいいよ。手綱、ちゃんと握っててよ」

「？」

ビルは何かわからずエリムを見つめ返したが、すぐ何を意味したのかわかるようになる。

馬はいきなり走り出した！

「ちよ、え！？ エリム~~~~~！！」

ビルは大きい声で叫んでいたが、馬はそれを問答無用完全無視で走り去っていった。

「あれでいいのかよ」

「うん、師匠直伝だよ？」

エリムが馬に再び飛び乗ると、城のほうから一頭の馬が駆けてきた。馬の背には俺たちと同じような格好をした新兵が乗っている。

新兵は俺たちの手前で馬を止めさせると、くちを開いた。

「おめーら、ビリー・ヘンリルって知らんか？ 俺んとこの同室者なんだけだよ」

そういえば、ビルの同室者って・・・

「もしかして、ビルの同室者の、ヘック・カーロン？」

馬が少しいないいた。新兵、いやヘックは声を上げた。

「おお？ možy、奴^{やつ}さんが、ジアン・マクシア？ そいでそちらさんが、エリム・マドウカ？ けったいなことやなー。おうよ、俺がヘック・カーロンさよ！」

俺たちは互いに名乗りあって、ヘックがビルのいうとおり、人の

いい性格だと思った。

ヘックが思い出したように言う。

「あ、そうや。ビリー探さねいと」

「ビルなら、先に城門へ……って！ 集合かかっているんじゃないかかったか？ エリム」

「えっああ！ ごめん僕忘れてた！ 急いで向かわなきゃ、間に合わない！」

互いに大きく笑いながら、馬を急がせた。あとから、ビルにこんなことを言われそうだった。

『お前ら！ 俺に馬のこと教えるよ！』

*

新兵訓練の監督を務める中級騎馬隊第一班班長を先頭に、馬で俺たちは数時間西にただっぴろい道を走っていた。訓練場というのは、主城から俺とビルの村までの距離よりも遠いらしい。集合するのが遅かったせいで、俺たち四人は結構集団の後ろの方を走っていた。後ろというのは結構きつかったりする。集団が撒き散らす砂埃を直に受けてしまう。現に俺は咳がよくでてしまう。エリムは微妙に背が低いので、目にも入ってしまうようだ。

それに見通しが悪い。人が多くて前になにがあるかわからない。

先頭が、今まで一本道だったのにも分かれ道についたとき、前から歓声が伝わってきた。訓練場が見えてきたらしい。

「まだ遠いぞ〜！」

と、監督の声も聞こえてきてその歓声は、げんなりとした声になりかかった。正直、長い間馬の背で揺られているのは、とても疲れる。特に腰とか。

分かれ道の片方をまた一時間半ほど行くと、後ろのほうの俺たちにも訓練場が見えてきた。訓練場はとある將軍の主城であるらしい。その將軍というのは貴族らしく、王家の恩寵を受けているらしく、それまた豪華絢爛な城であった。王城よりは勿論のこと控えめではあったけど、貴族というものは派手好きらしい。

因みに、俺達新兵は王の住まれる王城内に入ったことはない。城門の内側といっても、兵士用に建設された宿舎と、文官たちが働く棟を歩き来したぐらいだ。

もう夕暮れに差し掛かったころ、俺たちはやっと訓練場の城についたのだ。門を城門に立つ見張りに一応礼儀として会釈をしながら、くぐった先にそびえ立つ城。最後の人が門をくぐると、門は見張りによって閉められる。それを確認した監督は声を上げた。

「お前ら、馬から降りろ」

俺たちはそれに従う。ビルはなぜか降りるのが上手かった。

馬の背という高い視線から降りて、見る城はとても大きく感じられた。

「でかいな」

ビルが一言感想をのべた。うん、俺もおんなじ気持ちだ。ただビルの顔色が微妙に悪いような気がしたが。

「おうよ。王城ほど、とまではいかねえけど、結構でかいと思うぞ」「僕の実家の近くにある城よりも大きいかも・・・」

それぞれこの城に圧倒されているようだった。俺はされてたけどね。

すると、城の影から何人かの騎士を連れた男が現れた。監督はそ

の男に向かって深く礼をした。

「アドボワール・リク・ド・ディオオン將軍様、この度は新兵訓練のためこのようなご立派なリク城の施設をご提供いただき誠にありがとうございます。これより三ヶ月間よろしく願います」

そして最後に敬礼をした。俺達新兵もそれに習い、敬礼をする。

「いやいや、ザナイス・イ・ヒスタ中級騎馬隊第一班班長、この国の未来を担う新兵の訓練に力を貸すことができ、こちらも本望だよ。こちらこそよろしく。諸君、頑張ってくれたまえ」

ディオオン將軍は偉そうに早口にいうと、連れた騎士を残して何処かへ行ってしまった。

ふうん、あれが貴族か。結局は血筋なんだよな。
血筋といえはいやでも思い出す、フエブリーヤー族。

そうか、なんか見覚えというかそんなものを感じたのは、俺らフエブリーヤーが同じことをやっていたからか。

子供は生まれてくる場所や親を選べない。すべて偶然なのに、生まれた家が違っただけで扱いが違っるのは不当だ。人間はすべて平等ではないのだろうか。

生まれ持つ資質とか才能はたぶん、皆一緒なわけがない。だけど、生きるっていうことにおいては平等なはずじゃないのか？ 生きたいから俺たちは呼吸をするわけで、食事をするわけで、その点においては血筋だろうが、関係ないんじゃないのか？

——そうか、俺が父さんに逆上したのは、これに気づいたからなのか。

時間が目の前を通り過ぎていく風のように、流れていく。

俺たちが寝泊りする宿舎に案内され、食堂で食事を食べ、それぞれの個室の寝室で布団を被っても、俺の頭はもんもんと働かなかった。

俺の頭が正常に動き出したのは、翌朝日の出もままならない時間帯に起こされたときだ。これには『剣の習い』のおかげなのか、ぱつと目覚めることができた。『剣の習い』の集合時間は朝食の前だ。俺らの村では、その準備が日の出の頃に行われるので、これくらの時間に起こされるのが、しょっちゅうだった。

「え。なに？・・・習い」なわけないよね」

「何寝ぼけてんの。集合がかかっているんだよ、ジアン。今すぐ着替えて食堂に下りて」

起こしにきてくれたのはエリムだった。エリムはほかの人も起こさなきゃならないのか、じゃと手を上げて部屋から出て行った。

急いで顔を洗って着替えて、帯剣をして食堂に下りていくとすでに沢山の新兵が集まっていた。たいていの新兵は眠そうだ。食堂の前には、ディオオン將軍の騎士と監督。エリムがしばらくして帰ってきた時、監督は声を張り上げた。

「これより、かくれんぼを行う！」

【番外編 1 - 1】三ヶ月の訓練期間（後書き）

この番外編はとても長くなると思います。それでもお付き合いください。

また、更新も不定期ですがなるべく早く書けるように、努力いたしますので、今後ともよろしくお願いします。

番外編が1 - 1となっているのは、違うバージョンもいつか書きたい、というか書かせてください、という願望が隠れているというのは、ここだけの話ですよ。頑張って完結を目指しておりますので、応援よろしく願います。

最後となりましたが、本編を楽しみにしていらっしゃる方（そのような方がいるのか不安ですが）、自分の身勝手のせいで本編が微妙なところで途切れてしまい、申し訳ありません。ですが、この番外編がこのさきの展開の伏線となるよう努力しますので、お読み続けてくださいませ。

それでは、このあたりで。

「番外編 1 - 2」かくれんぼ

「これより、かくれんぼを行う！」

いきなり素っ頓狂なことを聞いた俺たちは、固まった。いや正確にいうと俺は、多分ビルもだろうけど、今日はかくれんぼかあ・・・とか普通に考えていた。『剣の習い』がある生活がすっかり身になじんでいたようだ。

ただ、あの日の朝咲き乱れていた花壇が、火にまみれて音をたてていた、その時にビルに思い知らされた事実が、遠い日のように思えるだけで。

「鬼は我々正騎士が行い、新兵諸君らには逃げてもらう役だ。範囲はこれより移動するリク城内で、やってもらう。朝食は後だ」

どうやら俺の頭が正常に動き始めたのは、リク城についてからのようだった。

初めて入った城というものが目に入ったおかげかな。

新兵たちが、リク城で最も広い広間で緑の間というらしい（後で知った）ところに集まると、何段か高い中心の舞台で監督とデ-ion 將軍の騎士が立っていた。そして手のひらサイズの小さなベルを高く上げ、鳴らしてみた。カラアン、軽い音がする。

「制限時間はデ-ion 將軍が起床なされる午前八時までの三時間とする。時間を過ぎれば、城の鐘がなる。それまで見つからなければお前たちの勝ちだ」

デ-ion 將軍の騎士はにやりと笑みを浮かべた。監督もその騎士と同じような表情で、新兵たちに問いかけた。

「質問なんてあるか？」

質問？ あやふやな部分が多くて困るぞ。

「監督ー、もし見つかったらどうするんですか」

お、ビルが聞いてくれた。まずはそこだな。

「見つかったら、この間に戻ってもらう。ああ、そうだからこの間に隠れることは禁止な」

「俺も質問です」

そうして質問を新兵たちがそれぞれ質問をしてきた。

質問で分かったことをまとめるとこんな感じになった。

まず俺達は、リク城の緑の間と将軍が寝起きする部屋以外で隠れること。鬼の騎士や監督に見つかっても、逃げ撒いてまた隠れればよし。鬼に見つかってタッチされれば、脱落として緑の間に戻ることになる。

それと、この城に仕えている侍従などに触れられても、脱落とはならないが鬼の騎士などに問われれば、侍従たちは素直に答えるので隠れていても無駄だということ。一人脱落することにベルが短く鳴らされるということ。また、全員脱落すれば俺達の負けらしい。

「抜け穴とかないよな？」

ビルが俺に聞いてきた。抜け穴っていうのは、俺たちが見落としルールがないかということだ。

「多分。あ、でも鬼がどれくらい待つか聞いてない」

「そりゃ、きついわ」

かくれんぼが開始されたと同時に、俺たちは逃げるようにこの間から出て行くとして、鬼が同じように俺たちを追ってくれば直ぐに追いつかれてしまう。

「それで、これ以上質問はないな？　じゃあ早速はじめようか。第一位騎士のウル殿、合図を」

監督は、俺たちが聞いてないことがあることに気づいたのを知ってか知らずか、隣の騎士に合図を頼む。

わっ、まずい。開始と同時に走れるように準備しとかなきゃやばいぞ。

俺は近くのエリムとヘックに一応声をかけておいた。二人は頷いてくれたが、ビルは？

お前はどうするんだよ。

俺がビルに目を合わせると、ビルは“俺に構うな”とでもいうように、首を横に振った。

は？ どういう意味だよ？

「では………始めっ！」

叱声が耳に届く瞬間、新兵たちは緑の間唯一の出口である扉に向かって殺到した。

「ジアン、早く！」

俺はエリムに手を引かれて人ごみの流れに巻き込まれていく。だけど、俺はビルから目が離せなかった。

ぎゅうぎゅうに押し寄せる肩が、いくつもぶつかって痛い。エリムに手首をつかまれていたと思うが、八方が人人人な状態ではそれも定かではない。

「ビルっ！？ お前はっどうするんだよ」

後から後から押し寄せる人影の間から、見えたビルはただ微笑むだけだ。返答は返してこない。騒音がすべて消えたように、頭の中に軽い鈴の音が響く。

リンッ。

「ビル！！」

そして扉が、鈴の音を掻き消すように、大きな音を立てて閉まった。

ガシャガシャと鎧が音を立てた。

俺たちは壁に張り付いて、直ぐ傍の廊下を走っていく騎士に見つからないように息を潜めた。音が遠ざかっていくのを感じると、緊張を解いた。

「はあ、緊張すんなあ。これ」

ヘックが大きなため息をつきながら言う。

「それより、俺はなぜビルがあそこに残ったのか分からない。これも訓練の一部だろうに」

「でも、ジアンが一番付き合い長いんじゃないの？」

エリムがちよつと痛いところをついてくる。

「はあ、ビルはこっちに来てから様変わりしてるんだよねー。といつても、俺は前のビルのことだって少ししか知らない。」

「・・・まあ一応そうなんだけど。ここに来てから、よく分からない行動ばかりなんだよ」

「まー、ビリーは不可解だからな。とりあえず逃げきらんと、どうにもらんとさ。移動してからにしようや」

「まあ、そうだよ。ここで止まって考えるよりはいいんじゃない？
だって・・・」

エリムが妙に声を潜めた。・・・そういえば人の気配が、おかしいほしくない。

「まずいつ！」

「鬼が来てるんだしッ！」

「ダッ！」

俺たちはエリムの声を最後に、それぞれ絨毯のひかれた廊下へ走り出した。

鬼に触れられればそのまま脱落——。ここの通路が十字路でよか

った。

俺はヘックと一緒にそのまま右の廊下へ、エリムはそのまままっすぐ進んでいった。

「エリムっ！ 脱落すんなよー！！」

ひとつ壁の向こうで、強く床を踏みしめる音が聞こえた。

俺とヘックはさつき逃げた所から、階段を下り緑の間より小さめな広間に出ていた。小さなダンスホールのようだ。

ホールという部屋の性質のせいで、支給された靴の足音がよく響いた。

天井は普通の個室よりも高く、きらめくガラスでできた装飾の付いた、シャンデリアがかすかにゆれて透き通るような音をなびかせる。

部屋の南側に白いレースのカーテンが取り付けられた窓があり、朝の心地よい空気をダンスホールの中に送り出していた。カーテンがゆっくりとはためき、俺の頬に涼しい風を送った。

ダンスホールの四方には立派な柱がたっていて、そこからかすかな息遣いが聞こえたような気がした。

そして不意に肩を叩かれたっ！？

「ッ？！」

すばやく振り返るとそれが誰だか視認する前に、まぶたに触れられてその冷たい感触にヒヤリとした。咄嗟とっさに飛びのくとそこに——もう見れないと思っていた、顔が見えた。

服装はずいぶん違うけど、間違えようがないほど似ていた。

「せん・・・せい？」

呟くその声はかすれていた。

その姿は微妙に薄く透き通っているようだったが、それはきつと

勘違いだ。

先生は、口を開いてぱくぱくと何か言っているようだった、けど何も聞こえない。

そして、先生は「そうか！」とでもいうように手を打つと、俺のほうに手を伸ばした。

え？　せんせい・・・？

思わず後ずさりしそうになったが、その顔が動かないでと言っているようで、動けなかった。

先生の白い指が俺の耳に触れた。やっぱり先生の指は冷たかった。

「先生・・・？　先生なんですか？」

先生は首を横に振った。その様子がどことなくビルに似ていて、脳裏にあの意味深な微笑がよみがえった。

「わたくしは、十四代目リオンのジュディアではありません。十五代目の使いでございます」

「・・・ビルの？」

俺が半身半疑で尋ねると、彼女は上品にはいと答えた。

「わたくしのことは、お気軽にアポシオンと呼び下さい。そして、貴方は十五代目との絆を持っていらっしゃるリオンジラス・フェブリーヤ様でよろしいでしょうか？」

どうしたらいいか迷いながらも俺が頷くと、アポシオンは優しく笑みを見せた。

「返答は心の中でしていただいて構いません。そのほうが、あちらの方にも都合が良いでしょうし」

あつ！　ヘックのことをすっかり忘れていた。何か奇妙なもので見るようにこちらをチラ見してきていた。

あとで弁解しておかないと変人扱いだ！　それはごめんこうむる。アポシオンが俺の心を読み取ったのか、声を上げて小さく笑った。

<うふふ、大丈夫です。彼にもわたくしがお会いしなければなりませんから>

そういえば、あなたは一体・・・？

<あの時、村の武器庫で十五代目とお会いしましたでしょう？ その時二振りの剣を持っていたと思います。その剣は代々リオンが受け継ぐもの。わたくしはその剣の片方に宿る、精霊なのです>

そうなんですか。・・・って、それよりビルの使いで来たんでしょう？ 何かあったんですか？

<いえ、十五代目に危険はありませんよ？ 自ら投降いたしましたから。十五代目は、あなた方三人を脱落させないようにわたくしを使わせたのです>

・・・でも、エリムと分かれてしまったんですよ？

<ご心配は最中です。ですが、わたくしは二振りの剣のうち、一振りに宿る精霊。もう一方の剣にも宿っていると考えられませんでしょう？>

なるほど！ ありがとうございます。それで、ヘックはどうするんです？

アポシオンはにっこりと笑った。やっぱり、先生に良く似ていた。

<これからご挨拶に向かいますわ。リオンジラス様、ご一緒いたしますか？>

様って・・・。

様がつぼで俺の笑いが止まらなかったのは、本当に封印したい話だ。

そのときは鬼のこととか、かくれんぼとか、あまり考えずにケラケラ笑っていたかった。

あ、ヘックが、どうびっくりするか楽しみであったりする。

【番外編 1 - 2】かくれんぼ（後書き）

週一を目指している笹沢です、どうも。

番外編書いていて思ったのですが、リブシア影薄っ！！

初登場で僕っ子はただ一人だったのですが（精霊なしで）、増えて、まずポルディノ、モデラン、エリム、（あとバロシオン）と僕っ子は意外に作者好みということになっています。すみません。

シェイも微妙に影薄いですね。はい、当初はブランとシェイとポルディノぐらいでお兄さんグループ的なものを作ってもらいたかった。
・
・

今回は、ちょっとエリム視点（三人称）で新キャラは登場しますよ！。

リオンでは需要の少ない女の子です。ですけど、期待は過度にしないでくださいね！。

あとがきの口調が明らかにおかしいと思った方、すみません、微妙におかしくなってもスルーの方向で、よろしく願います。

【番外編 1 - 3】エーシャ・アデシヤ

扉の向こうで、なにかを置くような音がした。

あまり寝ていないエリムはむくりと起き上がり、窓を見た。空の色の明るさは、薄暗い。真夜中ほど暗くはないものの、太陽が十分に昇っていないせいで空が青く感じられない。それに、エリムがいる宿舎からは空を見渡せるほど高くない。城壁の隙間から見えるだけだ。

エリムは寝台からおりて手早く服を着替えると、扉をそつと開けた。本格的な冬が過ぎてからそれほど経っていないから、朝の空気は冷たかった。かすかに白い息が自分の腕に触れていく。

扉の前にはキンキンに冷えた水の入った桶がタオルと添えられて置いてあった。廊下に出てみると、ほかの部屋の前にも桶と粗悪品のタオルが置いてある。

（これで顔を洗え、ということか）

エリムは桶とタオルを部屋の中に持ち運んだ。それぞれ割り当てられた個室は似たような作りだったが、手荷物の少ないエリムにとってその部屋は無駄に広く感じられた。

とりあえず桶とタオルを小さなテーブルの上に置き、冷たい水の中に手を浸した。

水が手の温度をじわじわと奪っていく。手のひらで水をすくって、顔に水をたたきつけた。はじけて水のしずくが床の木板に落ちた。

ドンドンッ。この部屋の扉はがたがたのボロボロなので、そんなに強く叩かないで欲しい。そんなエリムの思いもむなしく、静かに音が部屋中に響き渡った。

エリムは仕方なくタオルで顔を拭きながら、扉を開いた。監督だ

った。

「一番早く起きたのはお前か、エリム・マドウカ。悪いがみんなを起こしてやれ」

う、という声が漏れたのは秘密にしてもらいたい、とエリムは考えるたちである。

（はあ・・・）

声にならないため息を盛大に心の中でついたエリムは、ビルの部屋を後にした。

次で最後だと思えば、氣力がわずかに湧く。

エリムは自分の好きなこと以外では、面倒くさがり屋だったりする。

最後に残った部屋の扉を叩いた。

・・・沈黙がしばらく過ぎたので、一応声を掛けてから扉を押し開けた。

「ひっ?!」

中にいる今まさに、着替えようとしている途中の少女が、顔を真っ赤にさせてこちらを見た。一瞬遅れてバツと服で身体を隠したが、エリムのいい動体視力が仇となって、エリムにはちゃっかり見えていた。

「し、ッ失礼しましたー!!」

さっきよりもとてつもなく大きいため息が口からこぼれる。壁にもたれかかりながら、手を頬にそえた。なんだか、熱くなっていた（・・・見えたのは気のせい、気のせい、気のせい気のせい気のせい）

自己暗示をしてみても、一瞬のあのシーンだけが脳裏にくつきりと色濃く残ってしまっている。

やがて扉がゆっくりと開いた。エリムは律儀に謝ろうと、彼女に

近寄った。

「あっあの、さっきはごめんなさい。僕知らなくて・・・」

「えっあっ！ いえこちらこそ・・・？」

彼女も同じようにぺこりと頭を下げた。少しとまどったエリムはとりあえず自己紹介をすることにした。

「あの、お名前は？ 僕はエリム・マドウカ、十六歳です」

「あっ名前ですね。私、エーシャ・アデシヤといいます。もうすぐ十五歳です」

エリムは朗らかに笑った。

「じゃあ、エーシャだね。新兵の集合がかかっているから、早めにおいでよ。じゃ、先に行ってるから」

「はい！」

言葉がくだけで安心したのか、エーシャも輝くような笑顔で頷いた。エリムは自分の鼓動が大きく聞こえるような感覚を覚えた。

かくれんぼの開始からしばらく経った頃。エリムはヘックや吉安と合流していた。

エリムにはこのリク域にいる鬼の割合は多いと思える。なぜなら、合流するまえから鬼に出くわす確率が高いような気がしてならないからだ。実際合流したての今でも、騎士の重い鎧の音が耳の横を通り過ぎていく。

「はあ、緊張すんなあ。これ」

「それより、俺はなぜビルがあそこに残ったのか分からない。これも訓練の一部だろうに」

吉安が不思議そうに天井を見上げた。エリムは率直に疑問に思ったことを聞くと、吉安は少し傷ついたように微笑みながら言った。エリムにはそれはなぜかビリーが浮かべた笑みとよく似ていた。

ように思えた。

「・・・まあ一応そうなんだけど。ここに来てから、よく分からない行動ばかりなんだよ」

「まー、ビリーは不可解だからな。とりあえず逃げきらんと、どうにもらんとさ。移動してからにしようや」

ヘックがジアンの肩をポンツと叩きながら足で床をつついた。

「まあ、そうだよ。ここで止まって考えるよりはいいんじゃない？
だって・・・」

音を立てぬように歩いてきた騎士の気配を感じたエリムは妙に声を潜めた。

「鬼が来てるんだしッ！」

自分の意図が分かってくれるように祈りながら叫んだ。

（鬼をひきつけるッ！）

エリムは視界の端で二人が右へ曲がるのを捕らえながら、駆け手を剣の柄に置いた。

自分を追ってきている騎士が、ちゃんと追ってきているか、わざと視認して開けた場所を探した。

（触れなければいい、それなら・・・）

エリムは、室内訓練に使うであろう広く強度の強い部屋を見つけた。扉を蹴り飛ばし、振り向きざまに自分の剣を鞘から引き抜いた。普通の剣よりも細い刀身が光る。

「触れなければいい、そうですね？」

剣を構えるその目は射抜くような力強さがある。騎士もエリムが何をしようというのか、理解して剣の柄をつかんで鞘から抜き出した。

「まあ、端的に言えばそうなるな。だが、簡単にできるだろうか？ 経験の違う相手で」

騎士は偉ぶった様子で腰に手を当てた。騎士は貴族であろう顔で、鼻をならした。

「経験？ まあ、それも実力のうちですけどね。だから僕に感じられるあなたの力、同じように僕の力が分かりますか？」

「はっ！ お前なんか私に勝てるわけが無かるう。お前からは何も感じないよ！」

騎士は勢いよくエリムに向かって駆け出した。装飾が無駄なほど派手に飾り付けられた剣が、そばかすのあるエリムの白い顔に落ちてきた。エリムはそれに動ぜず、静かに剣を顔の前に上げた。

キンツ、音を立てて剣同士がせめぎあう。だが、剣を持つ腕が激しく震えているのは騎士の腕だけだ。

「それを言うなら、あなたこそ蚊ほどの力を持たない！ あなたは自分の実力と相手の実力を測りきれない愚か者ですかっ！」

エリムは軽く剣を横にはらった。それだけで騎士は横に飛ばされてしまう。エリムは無様に後ずさりする騎士に近づきながら言った。「あなたは、僕らの足元すら及ばない弱者だ。貴族だという特権意識以外に自分が得意になれることでも見つけることだ」

そしてエリムは剣を鞘に戻し、鎧で覆われていない騎士の首を鞘に入れたままの剣でしたたかに打った。

「がっ」

急所を打たれて力が抜けた騎士は、床に崩れ落ちた。エリムは剣を腰のベルトにまた差しなおすと、改めて訓練室なるものを見渡した。

広くきれいに整頓された室内に、ゴミといえるものはエリムが蹴り飛ばした扉の木屑くらいだった。部屋の両隅のベンチや大きい窓、

荷物でも入れて置くようなロッカーが壁にくっつくように置かれていた。

どれも庶民にはため息が出るほど高い品であろつ。

ここから出ようと振り向きかけ、奇妙な気配を背後に感じたエリムは、いつでも抜剣できるように手を剣に伸ばしかけた。

「ッ！？」

耳とまぶたに冷たい感触がして、おもわずその場にしりもちをついてしまう。何事かと見上げると、金髪に金色の眼をした美青年がエリムを見下ろしていた。

<大丈夫ですか？ エリム・マドウカさん>

耳、というより心に直接響いてくるような美声が、エリムを安心させた。ほつと息をついたところで、その青年の正体を聞くことにした。

「あなたは何者ですか？ この騎士でも新兵でもないようですが、それを聞いた青年はパツと顔を輝かせた。

<あなたは気配、というよりそれぞれが持つ力を感じることが出来るんですね！ パロネもそうでした！>

パロネ・・・？ とエリムは戸惑ったが、まだ質問に答えてもらっていない。

<あ、ごめんなさい。僕はバロシオン、ビルの使いとして来た精霊です>

（精霊かあ、初めて見るなあ。だから、僕が知らない力を感じたんだ）

それを読み取ったバロシオンは、やわらかく微笑んだ。それにつられてエリムも微笑んだ。

<本当にあなたはパロネとよく似ている>

バロシオンは昔のいい思い出を懐かしむように目を細めた。だが、

次の瞬間にその表情が消えることとなった。

「誰・・・？ ポ、じゃない。あなたは数百年前、精霊界から姿を消したバロシオン？！」

かすかな興奮と驚きのまじった高い声にエリムは振り返った。エリムが蹴り飛ばした扉の上にエーシャが立っていた。

「エーシャ・・・？」

エリムの口から名前がこぼれたが、気にせずバロシオンは目を大きく見開いた。

「あなたは、『瞳^レ』をもっているんですか！ それにどうして精霊界のことを・・・？」

「すごい！ 一生あなたと会えないと思っていたのに。じゃあ、アポシオンも人間界^{こうち}に来ているの！ やった、うれしい！」

エーシャは朝とは全然違う様子ではしゃいでいた。エリムはわけが分からないというように首をかしげていた。バロシオンはエーシャの言葉に何か引つかかったようで、渋い顔をしていた。

「あなたは・・・騎士を目指しながらも召喚魔法を行っているんですかッ！？>

「え、そうだけど・・・？」

真剣な面持ちで鋭い声を発したバロシオンは、エーシャにつかつかと近寄ってその頬を叩いた。

ピシャッ。

「無知は災いと呼ぶ。魔法のことを何も知らないくせに、召喚魔法ができるくらいで調子に乗るなッ！！>

エーシャは何が悪かったのか分からないという顔で、バロシオンとエリムを見上げた。エリムも魔法なんてものに関わりが無かったせいで、バロシオンを見つめることしかできない。

ふと、ポロツとエーシャの新緑の瞳から涙がこぼれ落ちた。

バロシオンは顔を背けた。

【番外編 1 - 3】エーシャ・アデシヤ（後書き）

朝っぱらからどうもすみません。バロシオンが病んでいます。

ちなみに、エーシャが言いかけた、「ポ、じゃない」。さて何を言いかけたんでしょうか。ヒントは6章の最後に、ビルが口走った「バロシオン！」辺りですよ。

あと、アポシオンは誰かとそっくりなんでしょう。

おっと、宅配便のようです。

5 / 3 1

「誰・・・？ ポ、じゃない。あなたは数百年前、精霊界から姿を消したバロシオン？」

のあとに、エリムがエーシャの名前をいう部分を追加しました。

追記になりますが、次回更新はビル視点から始まりますので、混乱しないようにお心を準備くださいませ。

【番外編1・4】『青鷲団』の女の子

ときどき、緑の間の壁に立つ騎士が身じろぎする。

ビルはそれに構わずあぐらをかいたまま、柔らかな絨毯の上で黙す。見る者が見れば、ビルの周りを覆うような魔方陣が絨毯に、浮かび上がっているのが見えるはずだ。そしてさらに、ビルが脇に置いた二振りの剣がわずかに輝いているのも見えると思う。

ふと、二人ほどの足音が聞こえた。扉を開く音ともに、一人の新兵を連れた騎士が現れ、騎士たちが歓声を上げた。

「また、一人脱落したぞ！」

「これで脱落者は三十五人だな。残りは十五ほどだ」

先ほど新兵を連れてきた騎士が、緑の間の真ん中で堂々と座っているビルを見て、同僚に尋ねた。

「あいつ、何やってるんだ？」

「さあな。開始と同時に、自ら脱落したらしいぜ」

ビルは実際、周りの音があまり聞こえていなかった。なぜなら今、ビルはジアン達が最後まで鬼に捕まらないように、精霊を向かわせていたからだ。

あの三人が常に一緒とは限らないので、アポシオン・バロシオンそれぞれが別に探しに行ってもらった。

ビルは静かに、己の中にある精霊との絆を見つめた。そうするとすると長い紐のようなものが二本、自分の手のひらから精霊へのびていく。もちろん、この紐はビルと精霊達にしか見えないが、周りにいる新兵も騎士もなにか感じているような顔をしていた。

ビルは意図して魔方陣をだした訳ではない。精霊とジアン達の方角やらを調べようと、自分の周りに指で円を描き方角をあらわす文

字を書いていたら、魔方陣ができていたのだ。それに本人は気づいていない。そして魔方陣が何かを、彼はまだ知らなかった。

あの書庫で過ごした一ヶ月は無駄ではなかったものの、魔法に関する本をすべて調べるのは困難で無理であった。

魔方陣とは、ものや生き物を探すときに便利な魔法の環である。一人が十分に入れるくらいの大きさの環をかき、正確な四方に方角を意味する古代文字を書き加える。そこに探すものの名前と中心が何処であるか示すマークを交互に書いて、環の外で一回り大きい環ができれば、さっきの四方の間を突くような線を内側の環の中心まで引く。これで魔方陣は完成する。

そして探したい物を呟きながら内側の環の中心で、四方のひとつに指を指せば、目的の物がそこにあるかないかを教えてくれる。

ビルは、誰に教わるでもなく思いつきで魔方陣を作り使っていた。ただ緑の間にいる人には環の一片すら見えていなかった。

（二人は見つけたかな・・・？）

先ほど反応があった方角に指をおきながら、探す者の名を呟く。ただしこれは本当の名前で無いと効果が無い。

「リオンジラス・フェブリーヤ、ヘック・カーロン、エリム・マドウカ」

特にジアンの名前は自分だけに聞こえるように、低く小さく。

するとさっきよりも弱い反応があった。さっきから遠い位置にいるようだ。ただ、二人分の反応しか返ってこない。

（誰か分かれた？ 一応連絡をしておこうか）

無意識のうちに剣を近くに引き寄せていた。ビルがアポシオンの顔立ちと、凜とした声を頭の中に描くとそのうちに、『真理の剣』の輝きが目に痛いほど増した。

——互いの思念が聞こえないとき、声をかけたい精霊をよく思い浮かべてください。顔、声、性格、思い出せる物ならばどんなものでも構いません。

——そうしたら、どうすれば？

——言いたい言葉を心の中でよく響かせてください。ひとことずつ、耳の遠い人に語りかけるようにはっきりと、何度も繰り返し心で文字として浮かび上がらせてください。遠い精霊に伝わるように。

——必ず僕達はあなたの呼びかけに答えます。力強く僕達に伝えてください。絶対にあなたが望む答えを導き出します。だから、伝わるのに時間がかかったとしても、僕らを信じて呼びかけ続けてください。あなたの力は僕らを導いてくれる。

すつと息をすいながら、目を閉じた。そして心の中で呼びかける、彼女の名前を。

*

バロシオンは不機嫌な様子でエリムとエーシャから離れていく。どうすればいいか分からないエリムは、バロシオンとエーシャを交互に見てどちらにいるべきか、戸惑っている。

ただエーシャの瞳が潤んでいるのを見て、エリムはこちらで話を聞くことにした。

「エーシャ、大丈夫。意味もなく彼は怒ったりしないと思うよ。だから、涙拭いて」

エーシャはさつきとは打って変わった、朝と同じような様子でこくりと頷いた。そして自分のポケットから出した、ほのかに香るハンカチで顔を拭きはじめた。

エリムは、エーシャの綺麗に整えられた緑色の髪を撫でた。そしてなるべく優しい声音こわねに聞こえるように、エーシャの耳にささやいた。

「エーシャ、君は魔法が使えるの？　すごいね。いつから使えるようになったの？」

静かに唾を飲み込んだエーシャは少し口をもごもごさせながら、エリムを見上げた。

「エリムさん、少し話が長くなるけれど聞いてくれる？」

その真剣な顔にエリムはハツとした。心臓がさつき戦ったときよりも、走ったときよりも、早く鼓動を打ち始めた。エリムはその音なんて聞こえない振りをしながら、肯定の意を示した。

「そう、よかった。あのね、私ずっと田舎のほうに住んでいたんだあ」

エーシャは、大戦争によって滅ぼされた国の民の血を濃くひいているらしく、それで赤銅色の目と緑髪を持つているそうだ。エーシャが住んでいたところではそういう人は多く、たまにリーディアとは違う世界から来た者を見ることができ『瞳』を持つている人も生まれることもあるそうだ。

エーシャもその一人らしかった。もともと田舎で、そういう人が少なくなかったことで、差別されたりなんていうことはなかった。

あるとき、エーシャが十二歳の頃、住む所の隣にある村に旅芸人団なるものが訪れたらしい。その名も『青鷺団』。さまざまな国を巡り、方言や多国語を話し、いかなるときも人々に感動と笑みをあ

たえる。

旅芸人なんてめったに來ないから、エーシャはほかの大人に内緒で隣の村へと出かけていった。

夕暮れの闇にまぎれながら、村の人が話していた旅芸人達が野営している丘へ、エーシャは歩いていった。

いくつものテントが丘に立ち並び、夜のショーのために沢山の人々が忙しそうに動き回っていた。その動きから離れたところで、きらきら煌く髪を肩に垂らした女の子が歌を歌っていた。

目を閉じて口から紡ぎだす声にエーシャは、強く惹かれた。隠れることも忘れ、思わずその女の子に近づいていた。

近づくエーシャに気づいた女の子はにこつと笑った。邪気のない笑みを見せられて、エーシャは嬉しくなった。初対面の人に気味悪がられることがよくあったので、とてもエーシャにとって気持ち良かった。

「わたし、エーシャ。あなたは？」

「わたしの名前はルターナだよ」

銀髪をした女の子は歌うように言った。つられてエーシャは声を立てて笑った。

「うた、上手だね。ルターナちゃんは」

「うんっ！ でもねお兄ちゃんはお、ぜんっぜんおうたうたつてくれないの。エーシャお姉ちゃんはおうたつてくれる？」

お姉ちゃん、と聞いてエーシャはちよつと赤くなった。

「お姉ちゃんじゃないよ。だってそんなに年変わらないもの」

そっか、とルターナは小さな両手でエーシャの片手を包み込んだ。エーシャはそのぬくもりにどきつとしながらルターナの瞳をみつめた。

「じゃあ、エーシャちゃん。いつしよに、うたお？」

「いいよ。楽しく歌お」

ルテーナは顔をほころばせ、嬉しそうに目を細めた。

「私がルテーナと会ったことで凄く、未来が変わったと思うの。実は彼女、私と同じように『瞳』を持っていてその上、魔法がちっちゃい頃から使えたんだって」

それほど昔の話ではないはずなのに、とても懐かしそうな顔をしている。エリムはバロシオンが行った方をちらと見やりながら、近くにあったベンチに腰掛けた。片足は曲げてベンチのへりに引っ掛けた。顎をひざに預けながら、エーシャの高い声を聴く。

「それをルテーナから打ち明けられた時、私も『瞳』を持ってるって言っていた。一緒だねって笑いながら歌ったとき、私の魔力がなぜか体から発したの」

「魔力が？」

エリムが不思議そうに言うとしり微笑みながらエーシャは言った。
「普通の人にも魔力はあるんだって。血とおんなじように身体を巡っているんだよ。だから、魔法を使える人と使えない人の差はちょっとしかないんだって」

エーシャはエリムが目を丸くするのを笑って見つめた。エリムは顔が赤くなったのを感じて顔を伏せた。

「私、召喚魔法はルテーナから教わったんです。ただ——最後の日に、彼女何か言いかけたんです。それがバロシオンが怒ったことに関係あるのかも・・・」

<あるかも知れませんか>

エリムはハッと顔を上げた。エーシャのすぐ後ろに長身の美青年が立っていた。

<先ほどは訳も聞かず手を上げてしまい、申し訳ありませんでした。話をよく聞くべきでした>

金色の髪を顔から垂らしながら頭を下げたバロシオンに、エーシヤはしゃがんでバロシオンの手をとった。あのときのルテーナと同じように。

「私の言動に何か悪いことがあったんでしょう？ 教えてください。ルテーナが言いかけたことを」

<知らないのですか……。ならば代わりに教えましょう。魔法を使える者は、人を傷つけてはいけません。下手に傷つけられれば、魔力が激減し魔力の枯渇で死にいたってしまいます>

【番外編 1 - 4】『青鷲団』の女の子（後書き）

一週間ぶりです。なんとかまた更新できました。

かくれんぼが予想以上に長くなりそうです。全体的に番外編が6章ほどの長さになるかもしれません。読んでくださる方が楽しめるようがんばりますので、よろしくお願いします。

10' 6' 19

一部、次の更新で矛盾してしまう部分を変更しました。

【番外編 1 - 5】出会ったのは・・・

「魔力が枯渇して死ぬ・・・？」

エーシャの顔はさつきと相反して青くなっていた。怖くなって膝がかすかに震え始めた。エリムはそつと椅子から立ち上がって、エーシャの肩を掴んだ。バロシオンを見上げると、バロシオンは目を伏せていた。

「やはり、あなたは知りませんでしたか。はやく決めたほうが良いですよ。——僕らと違って、あなたには選択肢が与えられたのだから」

「僕ら？」

エリムが意味がわからないというように、聞き返すとバロシオンは首を振った。聞くな、という意味なのだろう。

「・・・でも、あなたはビリーの使いつて言っていましたよね？ ビリーはどうなんですか」

「ああ、彼ですか。僕達はビルの剣に宿っている精霊です。正式な所有者であるビルなら僕とアポシオンを呼び出せます。そこに魔法^{うんぬん}云々は関係有りません」

「なるほど」

エリムはバロシオンの答えに相槌を打つと、震えがひどくなったエーシャを先の椅子に座らせた。

「バロシオン・・・さん、」

ためらいがちに開いたエリムの口を、バロシオンは和やかにさえぎった。

「呼び捨てで結構ですよ」

「じゃあ、バロシオン。精霊が人間に触れるとその箇所が、精霊の多くを普通の人間でも感じ取ることができる、解釈はこれであって

いますか？」

バロシオンは目をぱちくりさせたが、エリムの質問の意図に気づいて頷いた。

<はい>

「では、剣の所有者であるビリーに話しかけることはできますか？」
<距離が少し遠いですが、十分に話せます。先ほども話していましたし>

エリムはそれに少し驚きながらも、うんうんと相槌を打つ。

「それなら、しばらく僕達はここに留まる、と伝えてくれませんか？」
彼女、動けそうにないので

<わかりました。・・・それにしても、あなたの頭の回転のよさに舌を巻きます。アポシオンと話があいそうだ>

そういいながら、バロシオンはまた蹴り飛ばした扉の向こうへ行ってしまった。

エリムは、静かに震えながら自分をかき抱いたエーシャの頭を撫でた。涙をこぼす音、ひとつひとつに耳を凝らしながら、ゆっくり目を閉じた。

*

開け放たれた窓からさわやかな風が入ってきた。音もなく風は空の香りを運んだ。カーテンが少し揺れ、俺達の間には緊張の糸がはりめぐらされる。

<鬼のようです。柱の影に隠れたほうがよいでしょう>

見えないことをいいことにアポシオンが堂々とダンスホールの真ん中に立っている。音を立てないように俺とヘックが言われたとおりにする。

俺はアポシオンに言われる前から複数の鬼が近づいていることに気づいていた。確か前に『剣術の習い』生徒と合同で隠れ鬼ごっこをやったことがあった。そのとき、どちらの役もやったけど、あの頃の生徒の気配の消し方に比べたら、こっちの鬼は気配だだもれだと思う。

やっぱり質が違うのかな。

やがて、かすかなきしむ音と共に扉が開いた。それと同時に叫ばれた第一声。

「ど〜〜もっ！！」

<プハッ！>

挨拶とも奇声ともとれる大声に、アポシオンは（鬼達に）聞こえないことをいいことに吹き出した。誰かが思わず吹き出すと、やっぱりつられて笑いたくなると思う。うん、ほんとに。

「気づいていると思うけど〜うん、自分達は鬼役の騎士だよ。だけど、ちよつと普通の鬼とは違うんだよねえ」

アポシオンはさつと顔をくもらせた。たぶんビルから連絡？が来てなかったんだと思う。

叫んだ風変わりな騎士は後ろにもう一人の騎士を従えながら、ダンスホール内に立つ柱に目を走らせた。

「出会ったらルール、っていうんだよ。自分達、赤いバンダナを身体に巻いた鬼はその出会ったらルールが適用される。それでさあ、出会ったらルール？ 何のことが知りたくないかい？」

そしてその変ちくりんな騎士は宙に向かって手を差し出した。

「自分は普通の鬼じゃないよ、ジアン・マクシア君？ それにヘック・カーロン君、出会ったらルールは自分と、自分に出会った新兵全てに適応されるからね」

ッ！？

あそこの妙な騎士はここに誰がいるか分かっているのか？

アポシオンの顔を見ると、静かに返してきた。

「どうやら、それは嘘ではないようです。大人しく出て行くことをお奨めします。わたくしは、ビルに連絡しておきますゆえ」

ヘックもそれでいいか、という意味をこめて見やると、満面の笑みで返してきやがった・・・失礼。返してきた、だな。

俺らが大人しく、二人の騎士にも見える場所へと歩いていくと、精霊は俺達からも見えない位置へ移動していた。

「よかった！ 気配の消し方の独特さで君らは特出しているからね。見つけやすかったよ、そうだろうワイス？」

「いえ、副班長の嗅覚が犬以上にあるだけです」

「答えにならないじゃないか、ワイス」

「十分な応答だと自分では思っていますが、何か不足しているというのなら補足をどうぞ」

「まあ、いいけど」

・・・ちよつと変わりすぎだ。村にこんな個性的な人間というか人種いたか？ いやいない！ 世界は宏、ちがつ広しとはいえ、変わりすぎではないだろうか。

「すまんのだけど、鬼さんよお」

おつ、ヘックは冷静に話し戻してくれるのか。

「出会ったらルールつとや何のことですかいな」

よかった。期待を裏切らんかったヘック、よくやった。

ワイスと呼ばれた堅そうな騎士が事務的に答えた。

「我々赤いバンダナを体の一部に巻いた鬼と、その鬼に遭遇したかくれんぼをしている人物全てに適応されるルールだ。簡潔に述べると、出会ったら、鬼の決めた決まりに基づいて脱落か否かを二人だけで争うということだ」

「鬼が決めた決まり？」

出会ったらルール、やっぱり分かりにくい。

「そう！ 自分が決めたのは、『自分に出会った人物はこのルールに従うこと』と『決着がつくまで、鬼が触れたら脱落という法則を無効にすること』、それに『脱落は両者の同意を得た対決によって決める』、そして『このルールを相手に理解させること』この四つだ」

『決着がつくまで、鬼が触れたら脱落という法則を無効にする』と？ つまり、対決が何であろうと鬼に触れても、脱落にはならないってことだな。それに『両者の同意を得た対決』、ってことはこつちにとって不利な条件を出してきても、俺達には拒否する権利があるということ。

「そのルールは取り決める鬼によって違うんですか？」
俺が聞くと、副班長と呼ばれた頭のおかしい騎士は嬉々として答えた。

「もちろんだよ、ジアン君。ただ、すでに設定されているルールを適応させるわけにはいかないけどね」

なんか、そう言われるとムカつく。暴言を吐きなくなったが、すんなりのところで押し留まった。

「じゃああなたの名前は？」

「えー、自分？ 男の名前聞いて楽しい？」

「・・・前言撤回」

「は？」

「黙れ、この糞へんちくりんクルクルパー」

「せめて副班長だよ、ジアン君。おさえておさえて」

「なにが、ジアン君だ。気持ちわるいわ、しまいには吐くぞコラッ！」

口をポカーンと開けたヘックは驚いたようすで言った。

「ジアンってこんなキャラだったかな！ 人は見かけによらんねえ！」

それってどういうことだよ。なんか外見で判断されてるんですけど！

「すまん。君達が新兵の割に少々骨がありそうなんで、副班長は浮かれすぎている。――まあ、それは自分とて同じこと。問答無用に脱落、などという無粋な真似はさせん。故、^{ゆえ}自分は対決に決闘を望む。負けたほうが緑の間へ戻る、そういうことでお相手所望する、ヘック・カーロン」

あれ、なんか堅そうなワイスさん。実に悠長におしゃべりなさいますね。で、それでヘックはワイスさんとやると。じゃ、俺は？

あの鬼畜馬鹿騎士？ 断固拒否する！

「いいっすよ。何処でやるんでえ？」

「うわああああああっ！ 何実にテンポよく話が進んでんじゃー

！！

「そうなると、自分とジアン君でやるんだね」

「そうなりますね、副班長」

「そうなるなア、ジアン」

三者三様で認めてるー！！ 認められたくねえー！！

「では、ヘック・カーロン、離れた場所へ移動しますか」

「おう」

「があああああああ！ 俺の意見を聞いてくれー！！！！！！

「さてどうするか、ジアン君」

自然に俺の肩に手を置いた変人騎士。

どうするかだって？ それじゃあ、とりあえず。

「とりあえず、ジアン君は止める。気持ち悪い」

「じゃーアンちゃん？」

「気色悪いわ！」

なんとというか条件反射で、きもい変な趣味有りそうな騎士の顔に渾身の一発を叩き込んでいた。

パシッ。軽い衝突音、耳に届いたのは顔の鼻やらが、折れる醜い音ではなくて。

しっかりと握っていた拳は誰かの大きい手に掴まれていた。状況を把握しようと顔を上げると、変人美形の騎士が満面の笑みで、俺の拳を片手で捕らえていた。その目とあった途端、言われようのない威圧感というのか圧迫感？ が俺に向かってびっしりと突き刺さった。

強い・・・、もしかしたら先生よりも。でも、先生の本気は見たことがないから、わからない。

「驚いた・・・」

ぽつんと呟いたのは鬼畜眼鏡・・・って眼鏡って何だよ、鬼畜変人野郎だった。

「ジアン・マクシア、自分に拳を受けさせるとは・・・」

すみませーん、やっぱり脳ミソ逝っちゃってますかー。ちよつと殺気にピリッときて、いいこと思ってたのに。更に意味わかんないし。

「いいだろう！ 今のは宣戦布告としておこつ。自分達も対決といこうじゃないか。こつちも決闘、剣で一本勝負！ どちらかが参つたというか、將軍の起床時間になるまでだ」

はい、すみませーん。モニターの前に座っているあなた、小さい機械の画面を見ているあなた、誰かー此処の席と代わってくださいー

い
!

【番外編 1・5】出会ったのは・・・（後書き）

なんというか、ヒアの語りだった頃よりもテンションがおかしいです。

来週は、私事わたくしごとで更新ができないかもしれません。今週といってもあ
とわずかですが、土日を使って書き溜めておきます。なんか最近、
うえぶ上うへぶじやうが（自分の周りだけですけど）寂しい気がします。

批評（内容が荒らしではない物）でも全然かまいません。ちよつぴ
りとげが刺さっても、抜ける程度ならがんばりますので、応援よろ
しくおねがいます。

（あ、でもこれは鬱陶しいのかな？）

【番外編 1 - 6】僕の姉さん

ヘックがワイスの後をついていくと、ワイスはダンスホールから出、隣の部屋の中へ入っていった。

単なる寝室かと思いきや、華美に飾りつけられた部屋だったが、ごちゃごちゃした感じがぬぐいきれない。まるで部屋の家具の置き方なんてどうでもいいようだ。

タンスが部屋に入って直ぐのところに、進路妨害のように置いてあったり、埃のかぶったベッドの上に家具がぐちゃぐちゃに置いてあった。まるで物置だ。

（こんな狭いトコでやんのかア？）

ヘックが首をかしげたとき、ワイスは身軽に窓からひらりと飛び降りた。あわててぶつからないように、駆け寄って下を見ると二階から飛び降りたワイスが、まるでさっきから立っていたかのようにたたずんでいた。お前も飛び降りろ、とでもいうように部屋の窓の直ぐ下からワイスがどく。

（俺エ、ンな高いトコから飛び降りたこつてないんだけど）

仕方ないと息を吐きながら、窓のふちに足をかけた。なるべく下を見ないよう、足を蹴った。

下から風がヘックを包むように吹いてくる。自分でも知らず知らずのうちに目を瞑っていた。そして足首に感じた力強い地面の硬さをちゃんと立って確かめた。目を開くと、飛び降りた短い時間がよみがえる。

少しだけぞくり、としながら笑みをヘックはたたえていた。

だが、その笑みはワイスを見ることによって消える。

飛び降りた先はリク城の広い裏庭、いつの間にやら適度な距離を

保ったワイスは静かにバンダナの巻かれた片手を上げる。ただそれだけの動作ならヘックは、まだ笑みを浮かべていられていただろう。だが、その動き一つにしてもワイスの力の一端があふれているように見えた。さっきは戯言を並べていた奇人騎士に呆気に取られていて気づかなかったが、ワイス自身相当な実力者だった。

ワイスは上げた手で一、をつくった。

「自分が決めたことのひとつめ。『自分と相手以外の他人に干渉されない場所で行うこと』」

さらに指をもう一本伸ばして、二をつくる。

「ふたつめ、『騎士道精神にのっとって、正々堂々で行うこと』。みつめ、『年下であろうと、下賤な身分であろうと相手に礼儀をつくすこと』。よっつめ、これが最後だ。『終わった後で怨恨などを残さないこと』、以上だ」

ワイスはあげていた手を下ろした。しかし、そのまま手は使い込まれた剣へ伸びていく。ヘックも柄を握り締めた。衣服と同じく軍から支給された剣だ。妙に感じるざらつきが、しっくりこない。

ワイスは刀身の真ん中に縦に溝がある剣を抜いた。溝にはかすかに乾いた血がついていたが、間近で見ないとわからなかった。

「我が名はワイス・ル・ヴォーク。我、汝に決闘を望まん。答えよ、良か否か」

鋭い剣先をヘックに向け、朝日を受けて輝くワイスの髪。

ヘックは決闘の礼儀なんて、よく知らなかったが、自分なりに答える。同じように剣を抜き、研ぎたての剣に負けぬほど鋭い目でワイスを射抜く。

「俺の名前はヘック・カーロン。そっちが望むというのならば、喜んで受けてたつ！」

フツと一瞬ワイスが顔を緩ませたが、気のせいではないかと思え

るほどそれは本当にかすかだった。

「ペディア・アゴーリヴ神のご加護において、我の勝利に祝福を」

「勝つのは、俺のほうだ！」

それをきっかけに、向かい合う二人は風と共に駆ける。宙を駆ける風はそのうち、二人から離れて土ぼこりを巻き上げる。朝日が高い城壁から漏れてきそうだ。

*

「毎年お馴染みのアレ、話によるともう投入されたりしいぞ」

「マジ？ 去年は七時すぎじゃなかったか？」

「お前は去年こっちに來たばかりだろ？ 残りが全体の三割になったらだいたい投入されるんだよ」

「はあ？！ もうそんなに脱落してんのかよ。ざこいな！」

緑の間では相変わらず暇そうな騎士がしゃべっている。

話の内容から分かるとおり、新兵のおおよそ七割がこの間にいる。バロシオンからエリムの伝言をきいたビルも相変わらず中心で座っている。ただ、ビルの頭の中には綺麗に澄んだ声が響く。その声はいささか、震えているように感じられた。

アポシオンの声がしばらく途切れ、その話の内容をかみ締めると、声が漏れる。

「なんだって——！」

一歩退いてこれらを見ると、次のように思える。

騎士たちが「アレ」について話している

←

一人の「新兵、ざこいな！」発言

←

「なんだって！」それにビルが触発される

事実、彼らに何のかかわりも持たない新兵達はそのように思っていたのだが、「ざこいな！」発言とビルの「なんだって」は無関係である。くだらないことなので二回言おう。「ざこいな！」発言とビルの「なんだって——！」という言葉動は、一切関係などない！

ビルの頭の中で、アポシオンの声が繰り返される。

《ジ阿斯殿とヘック殿の所に特別な鬼が来ました。相当な手練れ^{てだ}のようです。ルールに穴があつたんですよ！》

（特別な鬼・・・、手練れ、穴。アポシオン、バロシオンにも伝えてくれますか？）

半ば、さっきの勢いで膝を立てていたビルは立ち上がりながら伝える。アポシオンは快く受け入れた。

くはい、了解いたしました。情報はそちらでも集めてくださいませ>（わかりました、お願いします）

ビルが一步、見えない魔方陣から出ると、魔方陣は砂のように崩れて消えた。ただそれに書いた本人さえも気づくことはなかった。

一步。動くともわりにたむろっていた、新兵も騎士もビルに注目した。

この声は届くだろうか 何か託された鐘のもとへ

精霊や自分、仲間の声、その全てと違う何かが、文字として浮かび上がった。ビルの頭の中に。

「あの、騎士殿」

この音は響くだろうか 何か告げられた歌姫のもとへ

ビルはさつき話していた騎士たちのところへ近づいていた。傍からみれば、さつきの勘違いされたやり取りの続きが始まったように思えた。

この詩は届くだろうか 何か沈んだ友垣ともがきのもとへ

「なんだ、新兵」

この水は響くだろうか 何か埋もれた土のもとへ

「先程から話されていた、アレとはなんのことなのでしょう？
教えていただけませんか」

ただ詩のようで、何を暗示したのか。気にしないように言葉をつむぐ。

この風は届くだろうか 何か消えた燭台しょくだいのもとへ

「ハハッ、気になるか」

この環は響くだろうか 何か途切れた夜のもとへ

「はい、とても。教えていただけるなら、俺もなぜ開始と同時に自ら脱落したのか、お教えしましょう」

ビルはにやつと笑った。騎士もつられて笑う。

この命は届くだろうか 何か失った月のもとへ

「いいだろう。教えてやるよ」

この時は響くだろうか 何か狂った悪魔のもとへ

＊

気配、というか力持つ者の力に鋭敏なエリムは、エーシャの傍ら^{かたわ}を離れた。鬼の騎士ともバロシオンとも違う気配。バロシオンはまだ帰ってこない。

一応、エーシャに話しかけておく。

「エーシャ、多分鬼が来たんだけど、普通の鬼とは違うみたいなんだ」

まだ気を失っている騎士をちらとみながら優しく語りかけた。エーシャは聞いてくれているようだった。

「危険かもしれないから、僕はここを離れるよ。もし、バロシオンが帰って来なくても、僕がここを出たあとに、ここから離れるんだよ。いいね？」

エーシャが仕草で了承の意を見せる前に、エリムは背を向けた。そして急いでこの訓練室を出た。

そして駆けて、力を放つその根源を探す。その力に惹かれるように身体はすいすいと動いていき、途中でここがどこか分からなくなつた。

「よっ、エリム。何年か見ないうちに大きくなったなあ。それに、気配サーチ能力は今も健在だね」

力の根源にたどり着いたエリムの前に立つは、赤いバンダナを剣の柄に巻いた騎士。ほかの騎士と同じようにヘルムをかぶらず、後ろでまとめた赤い髪が背中に落ちている。

長く赤い髪、白い陶磁器のような肌にそばかすがある頬。
「フェリ姉さん・・・」

エリムの姉、フェリアーノ・マドウカは、エリムの頭に手を置いた。

「あつ！」

触れられた瞬間、『脱落』という文字が浮かび上がって、飛びのいた。しかし、がしつと肩もつかまれてそれもできなくなった。エリムの頭をぐしゃぐしゃとかき回しながらフェリアーノはにかつと笑った。

「あはははっ！ 大丈夫、だいじょうぶ。あたし、普通の鬼じゃないから」

「フェリ姉さん、家出してからこの国の騎士になっていたんだね」
エリムは自分よりも背が高い姉を見上げた。そして、頭の上に乗せられた手を掴んだ。

「あの頃からずっと強かったけれど、姉さんはもっと強くなったんだね」

幾つもの汚れのついた手袋ごしでも分かるほど、フェリアーノの指や手のひらは硬かった。たこやまめができてつぶれて、またできて・・・皮膚はともかたくなっていた。

「・・・そうよ。あたし、あそこから出て初めて認められたんだから。エリム、あなた以外に」

「姉さん、よかった。僕も姉さんと同じ道を行くよ。さあ、姉さん説明して？」

涙で瞳を潤ませたエリムは、笑いながら若草色の瞳を見つめた。
「なっ何を？」

エリムは涙を頬に流しながら、細い剣先をフェリアーノの鼻先に向けた。

「——ねえ、僕の姉さんは何処？」

【番外編 1 - 6】僕の姉さん（後書き）

たっはっははっははは・・・

すみません。エリムも病んできました。

途中の詩、あれは何なんでしょう？ 伏線として生きられるように頑張ります！

なんだかんだ、先週言っても通常通りできましたね。

この三ヶ月の訓練、ひとまずかくれんぼ編が終わり次第、七章へ移りたいと思います。なんとというか、この訓練verが長くなりそうなので。

こんな感じになります。

かくれんぼ編終了

←

七章で本編続行

←

七章終了

←

かくれんぼ編の続き

とりあえずかくれんぼ編が終わるようにしますので、今後ともよろしく願います。

6 / 20

追記です。今日、アクセス数をチェックしたらなんと！

この更新した日に百人という大記録がつ！ たった一日でPVが29000になっていました！

数えてみれば字数は十五万をこえ、計算をしてみればおよその読書時間が五時間ちかくにあてはまるわけで。

このような機会に、たくさんの方々に読んでいただけるのは幸いです。もっと今まで以上に、リオンを「面白い」と感じていただけますよう頑張りますので、応援よろしくお願いします。

【番外編 1 - 7】疾風の斬撃

嗚呼、なんと言うか将来同じことになりそう。

今俺は、自称変人なわけがあるか！ 騎士のとんでもない勘違いの真っ最中です。

「君の宣戦布告は痺れるねエ」。それに免じて、特別に自分の本当の名を教えてやんよ」

なぐにが、痺れるねエ」だ！ やんよ」っとか、聞いたことのない言葉だっつーの。

というか、もう名前なんか、興味失せた。どうでもいいんですけど。

「自分は——ツイード・半田。リーディアに生まれた人ではないんだ」

わお！ って驚くかつ。ハンダってきいたことのない苗字だけど、それはきつと冗談であるはず。

「……あ、そ」

「うん、それで」

につこにこと、城下街を女を口説くのに使うような笑みで、自称ツイード・ハンダ副班長は俺に一步近づく。俺は一步後ずさる。

この声は届くだろうか 何か託された鐘のもとへ

突然、老いた人みたいにしゃがれた声が、詩を紡いだ。不思議なことに、目の前にいる喜色満面の男に聞こえていないみたいだった。だけどその声は、精霊の体の芯を震わせるような声と違い、『魔鈴の絆』の鈴の指先に雷がはしるような音でもなく。

この音は響くだろうか 何か告げられた歌姫のもとへ

「君も隠しているんだろう？ 自分に本名、教えてくんない？」
笑みの意味が違う。さっき、眼前の馬鹿野郎の笑みが、女たらし
みたいなじゃなくなった。どうしてそう感じたのか、分からないけ
ど。変な詩のせいかもしれない。

この詩は届くだろうか 何か沈んだ友垣のもとへ

「ペラペラと他人に喋りそうだから、拒否っとくわ」
瞬きを^{まばた}するたびのしかかる、しゃがれ声の詩によって。頭の上
おもりでもくくりつけたように、クラクラする。特にさっきの二
つの詩よりもこの三つ目、そのクラクラ具合がひどい。

この水は響くだろうか 何か埋もれた土のもとへ

「そつかあゝ、残念。あつ、でも自分が勝ったら教えるんだぞ」
とりあえず、このどうしようもない阿呆の戯言は聞き流す。
今は何とかこの不思議なクラクラ、我慢していられるけど、もっ
とひどくなれば決闘なんてもってのほか。

この風は届くだろうか 何か消えた燭台のもとへ

「ハンっ、誰がやるか」

この環は響くだろうか 何か途切れた夜のもとへ

急に声のトーンを低めた頭の逝かれた野郎は、表情がさっと消え
ると真面目な奴に見える。声を高らかに上げたりしなきゃ、俺も
んな態度とらなかつたっていうのにさ。

「いや、君に逆らうことはできないよ」

この命は届くだろうか 何か失った月のもとへ

そんな訳がない。俺に弱みなんて……ってアレ？

「君は何のためにここへ来たというんだ？ 思い出しな、君がここに来るためのきつかけ」

この時は響くだろうか 何か狂った悪魔のもとへ

俺は何のために——？ 俺は詩を謡^{うた}うしゃがれ声が途切れたことに気づかず、馬鹿の言葉について考えてしまっていた。

最初は、行くあてなくてどうしようか正直迷ったところを、丁度ビルに出会ってなんか勢いでついてきてた。だけど今は、いやビルの独り言を聞いて以来、俺は『魔鈴の絆』を結んだことを後悔していないし、むしろ俺達が特別な絆でつながっているってことが、心底うれしい……。

『ジアスがいてくれて、よかったよ——』

俺は、あいつに必要とされる限り、ずっと強くいたいと思う。あいつに頼りにされるように、強くありたい。

思っうち自然に、手に力が入り無意識に剣を握んでしまう。新兵として採用されたときに渡された剣は、一ヶ月の文官見習い期間の合間で慣れ親しんでしまっている。夜などを寝室を抜け出して、屋上でビルと二人で素振りを行ったり、剣が持ち出せなかったときは素手で取っ組み合ったりして、常に身体を動かしていた。

もう、何度も抜いた剣が、すらりと鞘から刃を見せた。久しぶりに日がでてるうちに抜いたと思う。手入れ以外であまりださなかったから、余計にそう思える。

「そうそう。君が、そう率直でいてくれてよかったよ！ さ、始めようか」

頭の中だけ爆発する実でも入れられて、からつぽになった馬鹿な天パーは、不思議な剣を抜いた（天パーって何だろ）。

正直、それを構えた銀色の自然にカールした髪をした騎士は、大戦争時代の伝説からひょっこり現れたように、絵になっていた。

漆黒に染まって、傷一つすら見当たらない刀身に、朝方のまだ薄暗い光が丁度当たって、髪とともに輝く。リオンのような色を思い出させる好戦的な蒼い瞳。

今の自称ツイード・ハンダはさっきみたいな馬鹿阿呆とは呼べそうにない。キャラが違う。もしかして性格が二つあるとか！

「自分は……ツイード・ジョーエル。神よ、仮名を名乗ることをお許してください。ジアン・マクシア、自分の決意を受けよ」

俺は遠いようで近い、先生の講義を思い出しながら、『決闘の言』を自分なりにいってみる。

「俺ジアン・マクシアは、ツイード・ジョーエルの決意を身をもつてして受け止めん！」

「『ペディア・アゴーリヴ神のご加護において、俺（自分）の勝利に祝福をっ！』」

俺達は駆け出した。同じように疾駆する眼前の騎士を、目から離さないようにしながら剣を振り上げる。もう何にも考えられねえ。

ギンツ！ 黒い刃と銀の刃が交差し、互いの純粋な力がせめぎあう。ここはダンスホールであるはずなのに、草原の風を感じた。青々しい草の香り、何処までも続いている広大な空。

「君に言っておこう。自分は魔法使いではない」

「は？」

やっぱり戻ったのか？ 阿呆面が。

『人間の感覚は、およそ五つと言われている。視覚、聴覚、嗅覚、

味覚、触覚。もつとも敏感とネイロの学者達が考えるのは触覚であり、もつともたましやすいのは視覚だと思われる。付与能力オブシエルは魔術師の扱う魔術に良く似ており、第六感をもつものには効かない。これからして、今の相手である少年は第六感シックス・センスを持たないと考えられる・・・」

え？ 今のは何、詩でも鈴でも精霊でもない。強いて言えば精霊の声に似ている。

うん、なんでかな。俺の頭の中、他人の声でいっぱいだね。

でも、オブシオルってなんだ？ あゝもう！ どうでもいい、俺は俺だ。他人の声やら音やらに頭の中を占領されようと、心の奥までは入り込めない。

「典型的なヒーディオンの平民、黒髪黒目。だが、みなぎるこのエネルギーは・・・？」

俺は、今はジアンって名乗っているけど、リオンジラス・フェブリーヤ。大戦争を平和へ導いたリオン・フェブリーヤの子孫で、卑しくもその名をもらっている。

どれだけ時が経とうとも、性格が変わったとしてもそれだけは変わらない。過去だけは変えられなくて、未来は絶対に変えることができるはずだ。今の俺が望むのは、関係のない奴に影響されずに、ただ思い通りに。

ただ思い通りに。その為ならば、どんな———どんなギセイもいとわない。

頭の中に浮かぶのは、細い青草が茂る草原。ただ、それは俺の記憶にないもの。隅や端っこを意識すれば、一枚の絵を描くと途中で風景が切れるように、鮮やかな二セモノはほころびがある。

「意味がわかんねえよ。あんたがいうオブシオルやら、ミネルギだとか」

対抗しあっていた刃が、離れ再び距離を置く。

俺は静かに手首を下に向けさせる。だけど、構えは中段のままで下段に下ろさない。

「オブシエル、エネルギーだよ。って、君、付与能力オブシエルの自動整理が聞こえている？^{シックス・センス} だったら第六感をもっているということになるはずだ。付与能力オブシエルの自動整理が間違えたなんて初めてだね」

「黙りやがれ、俺にとって魔法とかは興味ない。始まった以上手早く終わらせる、それだけだ！」

俺は静かに二重人格野郎を見つめる。目の前のおかしい奴は、へらりと笑いながら横に漆黒の剣を薙ぐ。

奴の剣を俺は軽く飛んでかわす。奴の目が無意識のうちに動いた俺を追う。俺の着地先を見計らって奴が深く踏み込み、俺はその肩を蹴って後ろに飛ぶ。

「そつえば、君。さっきからその剣、動かさないね」

「いやでも動かしてやるよ」

俺は奴から遠ざかるように、三つ飛ぶ。そしてその三つ目で剣をひらめかせ、下から上へ切り上げた。

俺が飛んだ先には大きく開いた窓がある。丁度良く風が入り込んでくる。

「疾風の斬撃！」

見えない斬撃が空気を切り裂いて、空気が悲鳴を上げる。キールルルウ。

奴は青空のような瞳をおおきく見開き、切り裂かれた空気が奴の顔にかかった髪を横へ払わせ、奴の動きが完了される前に、斬撃が整った鼻先に迫る。

一瞬の本能で脇に飛びのいた奴は息を荒立たせながら、こちらを見つめた。

俺のほうも息が絶え絶えになっている。

え？ 今のテンプレ技はなんだって？

俺と立場変わってくれなかったのに、答えるとあなたはおっしゃるんですか！ あの馬鹿より、鬼畜ですね。

え？ いますぐブラウザ切る？ んなこといわないわない。創造主である作者が悲しむだろうが！

はあ？ 俺が答えればそんなことはしない？ ……はあ、モニター越しにも弱みにぎられてるしねえ。はいはい、わかりましたよ。ちゃんと奴に聞こえないようにしますから。

今のは、その名も「疾風の斬撃」。

俺は魔法なんて扱えない。剣術の応用だ。

ああ、剣術でそんなことができるのかって？ モニター越しじゃできないでしょ。次元違うからね。

でも、こっちは気を利用することによって、一見すると魔法のよきな技ができるんだ。だけど、ビルの「上空越え」はちがう。剣術、というより自己流の技だ。

！
これ以上教えて欲しかったら、来週もまたチェックしに来いよな

【番外編1・7】疾風の斬撃（後書き）

はい、すみませんすみません・・・。

勢いに乗る、というのは心地がいいのですが、書き終わった後すつきりするのですが。

よくよく後で見直したときに「やりすぎだよなあ」と後悔するものなのです。

そういえば丁度一年前、いえ正確には明日で丁度一年になるのですが。

このリオンのモトを書き始めた日です。とある別サイトであの序章をアップしていた・・・。

そのころは、学園物語が書きたかったのですが学園、というと今の平和すぎる日本しか思い浮かべられず、中途半端な設定しか作れませんでした。

やがて、視点を少しずらして教えられる、という点は学校ではなくてもできるということに気づき、塾にたどり着きました。

塾。My magicはその頃、構想を立てていたモノの片鱗です、ぐしゃぐしゃですけど。

そのうち、私の好むジャンルがファンタジーと定まってきた、欠かせない物は剣と魔法。

考えたばかりの頃は普通に最強系主人公でした。あの村の『剣の習い』とフェブリーヤ一族、そしてちよっぴり魔法。それだけしか関わる予定じゃありませんでした。

だけど、今も直らない『思いついたら直ぐ入力』によって物語はどんどんリーディアの狭い大地に手を伸ばしてしまい、いつのまにか早一年！

これほど長くなるとは思いもしなかった物語は、今も留まること

を知らず頭のなかで動き続けます。

——いつかくる、最後の一文まで応援して頂ける事を心から願います。

7 / 18

一部、1 - 10で更新される部分と矛盾してしまうところを修正しました。

【番外編 1 - 8】ワイズvsヘック 決着

言葉は必要でなかった。彼らは剣を交えることで、語り合い己をさらけ出す。

長年、共に連れ添う伴侶にすら分らないことを、初対面の彼らは互いに知り合い、互いの技の連続に夢中になる。

もう、周りの風景だとか境遇は頭からすっかり消え去る。全てはこの剣と腕だけ。

まるで別世界に入ったように、一人の前には一人だけ。剣をもつ真正面の相手だけ。

（くっ！ こんのお、アツチの奴らよりも強ええ奴いんじゃないけ。どしたら、有利な位置につけっかな！）

時間も忘れ、ヘックはただひたすらに剣をくりだす。時に蹴りやパンチ、フェイントもいれて互いが一瞬の隙をあらそう。それを続けていくと、それが十分に思えてもじつは数十分だったりして、体力は徐々に削られていく。

自分が肩で息をしているのに、気づいていないような素振りを見せるワイズは、動きを止めずにいう。

「自分が予想していた以上だ、君は。このような場で、手合わせできることはとてもよい機会だ。たたずまいからして、あちらの方も期待を裏切らんだろう」

ヘックは喋っている間の隙を見つけようと、動き続けるワイズに目をはしらせたが無駄な隙がない。と、逆に隙をつかれワイズにわき腹を蹴り上げられた。

「ぐあっ！」

体が宙に浮かび、手から剣が離れる。剣が弧を描いて離れた地面

に転がり、ヘックは地面に音を立てて落ちる。

一番、今が無防備であるはずなのに、ワイスは近寄りすらしない。地面に転がってしまっているヘックには見えないが、ワイスは一步遠ざかりながらなにやら呟く。

ヴォン、と不思議な音がしたかと思うと、ワイスの剣の溝に赤い光が灯る。

「あ？」

口の中に入った土を吐き出しながら、体を起こしたヘックは自分の目がかすんでいるのかと思った。

「剣をとれ、ヘック・カーロン」

ワイスはヘックの見開かれた目をすつと見つめた。つり上がり気味の鋭い目には何の感情が浮かんでいる？

ヘックはふつと笑った。そして土にまみれた体をはたきながら立ち上がった。

「俺んトコのししょーとおんなじじゃねえか。あんたも」

本人は呟いただけだったが、非凡な聴力も持つワイスは顔を緩ませた。まだ剣は構えていない。

「そうか、それならば会って見たいものだ」

ヘックの瞳にまだ戦意は残っている。いや、はじめよりも増した。息が絶え絶えになっても、戦意はなくしていない。

一步、剣の落ちた方向へ歩くと、さつき蹴り上げられたわき腹がジンジンする。微妙に蹴られたほうの足も引きつり気味だ。ヘックは体が悲鳴をあげたのを、無視する。わき腹を無意識にかばってしまつたため、足取りが重くよたよたとなる。

剣を拾うとき、わき腹がひどく痛むため腰を折って拾えない。仕方なくゆっくりとかがんで拾うと、かなりの痛みだったが我慢できないほどではない。

もう一度立ちあがると、ぴくぴくとわき腹が麻痺し始めた。

「いつてえな・・・」

思わずこぼれた一言に、ワイスは笑みを深くした。

「君はずいぶんと強したたかなものだ。自分の蹴りを受けて痛い、程度で済んだ者はほほいない」

「ハッ、それは光栄なことて」

二人は笑いあった。剣を持っていることを別に置けば、親しい友人のように思える。

「ふ、その強かさに敬意を示して自分は、この『デモラッシュハクスイ 紅血・白水』を起こさせよう。さてヘック・カーロン、そろそろ終わりにせねば」

ヘックは聞きなれない銘めいをきいて、おやつと思ったが終わりという言葉で違和感を忘れた。にやつとしてヘックは剣を構えた。

「ああ、いいつすね。朝っぱらっていうのにさあ、ぐだぐだ疲れんのも嫌だかなあ」

赤く光る『デモラッシュハクスイ 紅血・白水』をワイスは顔の前にかざした。高い城壁

から、ゆつくりと眩しい朝日がもれてきた。

二人ともそれに気づかない。じっとただ相手を睨んだ。

「行くぞ」

「いつでも来い！」

二人は刹那、駆け出し剣を大きく振りかぶった――。

常人には目で追えない神速の如き速さで、二人はすぐに交差し決着はつく。両者は苦しそうに息を吐き出し、そして片方。力抜けて剣が手からこぼれ落ち、どさりと体もつられるように地面へ落ちていく。

「ああ・・・力ちからが」

それはどちらが発したのか。

ビルは不敵に微笑んだ。ジアンに見せたのとは違う笑みだ。

「まずはそちらからお願いしますよ。アレについて教えていただけ
るんでしょう？」

「ふっ（ワイスの『ふっ』とは全然違うことに注意！ by 三人称
の語り手）。いいだろう」

騎士は偉そうに胸をそらせた。だが、ビルはそれを冷めた目で
見る。

（俺にとって興味があるのは、アポシオンのいう変な鬼のことだけ
だ）

「アレ、とは普通の鬼とは違う鬼のことを指す。体の一部に赤いバ
ンダナを巻いた鬼、なので赤鬼と呼んでいる」

（うわぁ・・・ネーミングセンス皆無！）

ビルが内心でひどくけなしているのに、気づかない騎士は話を続
ける。

「赤鬼に触れられても、その新兵が脱落になることはない。赤鬼と
それに会った新兵に、出会ったらルールが適用されるからだ。出会
ったらルールは赤鬼個人が決めるが、その中に『脱落は鬼ごっこで
決める』というルールを含むことはない。それを含んだら赤鬼が特
別じゃなくなるからな」

「へー。じゃー、どーして残ってる人数が一定になると赤鬼さんと
やらがー、投入されるんですかー」

ビルの棒読み具合に騎士は気づかなかった。周りの新兵は、ビル
がすでに興味を失っていることがありありと分かるのだが、会話を
手の騎士だけにはそれが違うらしい。

「赤鬼が投入されることによって確実に脱落者が増え、残っている
者が絞られるからだ」

「はい、そうなんですか。じゃ、約束どおり教えましょうか」

なぜかビルは話の主導が自分に回ってくると、先とは打って変わった様子で話し始める。周りの新兵は、「こいつ、役者じゃね?」
と思ってしまうほどである。

「俺が、ジアン・マクシアとヘック・カーロン、それにエリム・マドウカと仲いいのは知ってますよね?」

「よく固まっているな。それがどうした?」

(王城から使わされてきた) 騎士が(リク城付きの) 騎士とビルの会話に入ってきた。

「俺達、チームを組んでいるんですよ」

「チーム?」

「で、今回。かくれんぼで、このよく知らないリク城全体が範囲、それに新兵以外はほぼ敵のような状況からして、隠れることに特出した者が運のよい者しか勝ち残れない。でも、それは個人での話。チームで連絡する方法と、現在の状況や城の様子がわかる物でもあれば、攻略できることになる。」

そこで俺は諜報役として、最も状況が分かりやすいこの間にいるわけです。さて、これでいいですかね?」

ビルは長く喋って疲れたのか、息をついた。自分が、緑の間で結構な注目を集めていることに気がつかずに。

精霊の言葉が伝わったので、そちらに気をとられていたからだ。気配などには凡人より遥かに敏感なのだが、自分を(悪意あるもの以外が) 見つめる視線には鈍感であった。

<十五代目、バロシオンです>

急^せいでいる様子のバロシオンが語りかける。

(バロシオン? ちゃんと伝わっています。どうかしたんですか?)

<エリムが、エーシャ・アデシヤの傍を離れています。ですが、僕には探せません>

ビルは、これほどあせったようなバロシオンの声を聴いたのは初めてだった。さっき聞いたアポシオンの声も些か震えていたが、それは距離が遠い故だろうと考えていた。

（なぜ？ バロシオンならそれ位の距離、気配を察知できるはずでは？）

<何者かが、気配を悟らせないように結界を張ったのかと思われる。す。そちらで探せませんか？>

（やってみます）

急いでその場に座り込んで、円を描く。方角のしるしをかきいれて、（本人は意図していないが）魔方陣を作り出した。そして、まずはバロシオンを探索する。

「バロシオン……」

反応はさっき二人分の反応しかなかった方角とは、違う方向に反応が返ってきた。次にエリムを探す。

「エリム・マドウカ」

バロシオンの反応があった近くを探してみる。が、どこも返ってこない。無反応というより、不思議な何かに反応の波が吸い取られたような……。

違和感を解明するべく、細かく探してみた。すると大体の方角がつかめてきた。だが、妨害する何かが詳しい位置を分からせない。

（バロシオン、やっぱりその類があるみたいです。方角しか分からないですが、エーシャを連れて行ってもらったほうがいいですね）<彼女も？ どうしてです？>

（きつと魔法に関係していると思いますから、そのほうがいいでしょう？） それに、エリムは彼女を守りたいからそうしたんだと思い

ますし)

くなるほど……。分かりました>

少し不服そうな声は途切れた。

すぐにビルは魔法について、あの妨害された結界？ とやらを考
えてしまう。

このヒーディオンは、魔法の能力がある者はネイロへ送るだけ
ある。保護し、自国の戦力にしようとしな。ビルは、魔法は便利
だから、いざという時に結構な戦力になると思っているが。話が
ずれたが。

だから、ヒーディオン軍に魔法兵は存在しないはずである。

(それなのに、探索することを妨害する結界。どうみたって剣術と
か武術の技じゃない)

情報漏洩を防ぐ、いわば防御の技。魔法には、何かを防ぐ魔法が
多くあった。

(やっぱり魔法かなー?)

ビルの魔法は少しさわった程度。どうやっても知識が少ない。す
ると、あの書庫にもう一週間ほどいれば、と思ってしまうている。

緑の間に日時計を見に行った騎士が帰ってくる。どうやらもうす
ぐ七時らしい。

かくれんぼ終了

まで残り一時間――。

【番外編 1 - 8】ワイス vs ヘック 決着（後書き）

すみません、時間軸がぐちゃぐちゃです。

← のようになってるつもりですが、どうでしょうか。略語が分からない場合は言ってください。（フリーメモよりコピペしました。）

ビルがアポシオンに連絡

←

エリム倒す ダンスホール

←

バロ・エーシャ アポシオン

←

←

バロ連絡

↓ 連絡と伝言を受け取る

エリム伝言

変人・ワイス登場

アポシオン

↓ 「何だつて？」

←

←

変人問答 ↓ 「教えてやるよ」

ワイス vs ヘック

↓ 七時

ツイード vs ジア

疾風の斬撃

姉さん

決着

【番外編 1 - 9】暗黒のヴィデルタ

フェリアーノ、いやその偽者にはんまりと笑った。

「正解、気配サーチ能力は伊達じゃないね」

エリムは冷たく、掴んでいた手を振り払った。その頬には流れ落ちる途中の涙があつて、振り払った拍子にきらきら輝きながら落ちた。

ほんのすこし、目が赤くなっているのは泣いていたせいだろう。

エリムとよく似た緑色の瞳の偽フェリアーノは、髪を揺らした。エリムは静かに目を閉じた。

「まあ、いいよ。あたしの今日の目的は達成されたから」

「目的？」

「あなたに、あたしの存在を知らせること。ああ、そういえば。出来るなら言っておけていわれてたんだっけ・・・」

先程までのフェリアーノらしい態度と一変して、ただ容姿が似ているだけの他人のようだった。

「ねえ、あなた。結構冴えるらしいし、その能力も便利なことだし、ジアン・マクシアの傍にることだし、こっちにこない？」

いたずらっぽい目つきでエリムをちらりと見やるその姿だけ、フェリアーノそっくりだった。

「そんなことが出来る訳ないだろう！ ジアンは僕の友達だ。何処に友達を売る馬鹿がいる！？」

そのせい、エリムの怒りはいくらか大きいようだった。

それをただの子供の茶番と見下す、偽者は不敵に微笑んだ。気づくと、偽者の唇に真っ赤な口紅が塗りつけられていた。だんだん、そばかすがある肌は水晶のように透明へ。燃える炎を連想させる赤

い髪は光沢のある長い黒髪へ。今までフェリアーノと瓜二つの姿だったはずなのに、急に姿が変わり始めついには服をも変えた。露出の多いシンプルなドレスが丈長く床になびいている。

「おどろいた？ エリム・マドウカ」

女性にしては低めの声に、なぜかびくつとさせられた。

それに、姿が変わった途端、偽者が放つ力の大きさが異常なまでに大きくなった。エリムは驚きを隠しきれない。

「あたしは——、そうね“暗黒のヴィデルタ”。レベッカと呼んでくればいいわ。前にいった暗黒の〴〵は称号みたいなものだから気にしないで。

それで、本題なんだけど。あなたがジアン・マクシアとの友情を大事にしたいという気持ちは幾分か理解したわ。それなら、全く関係のないリオン・フェブリーヤを売ってくれないかしら」

“暗黒のヴィデルタ”、レベッカは妖艶な姿で椅子に座った。

そう、何処からか椅子が現れたのだ。まるで一国を治める女王の如く、我が物顔で椅子の肘掛にひじをついてふんぞり返った。

エリムは開いた口がふさがらない、とばかりの顔だった。

（もしかして——僕ら新兵の中に、リオン・フェブリーヤが？）

*

空気を切り裂いた斬撃は、壁をも大きな音を立てて破壊する。

音がこもるダンスホールの壁にひびが入り、見事な装飾が一部粉々になっているが、俺には関係ないね。だって、奴が避けたから壁にあたっただけでしょうが。

気づくと、奴の透き通るような肌に一筋の傷が出来て、血がたれている。はっ、いいざまだね。

「君は……………」

ついさっきまでハアハアいつていた息が、もう元に戻った氣にくだらない美形が真摯しんしな様子で続きをいう。そう本当にいけすかないが、奴はびっくりするような『いけめそ』であるらしい。

あー、俺としてはうん。同じ美形のシェイさんのほうが、年相応・親しみやすいよな。

「フェー——いやなんでもない。君は剣術使いだったのか、そうか・・」

うをい、『いけめそ』であるらしい馬鹿は何を言いかけた？ 俺の記憶に間違いがなければ、このように発したはず。

ふ、に小さい、え。つまり、『ふえ』だ。

そして、『ふえ』と言いかけた、その短い間奴は口をすぼめなかったか？ う、うが母音であることば、を言うときみたいに。

つまり、『ふえ』＋う行。

俺が思ってしまうのは、『フェブリーヤ』。これならぴつたりだし、言いかけたそれが、「君はフェブリーヤなのか？」の類たぐいだったら大当たりだ。

「なんなんだよ、もう戦意喪失かよ」

奴に、言いかけた『ふえ』について考えていたと感づかれないように、大振りな態度をとってみた。すると、奴は態度を一変させて変人に戻った。

「ああ、ジアン君ー。よかったよ、自分の期待を裏切るほど君が強くて。これなら思う存分・・いやそれはちよつと無理かな、氣持ちよく『碧血・黒水』ヒレネッシュ・コクスイを起こせるよ」

ぴねっしゅ　こくすい？

変な剣の銘に俺が首をかしげると、嬉々とした馬鹿が持つ黒い剣に、青く輝くもやのようなものが刀身に漂い始めた。奴からも不可

思議なオーラを感じてならない。

「白き川は人を濁らせ 人は黒き流れを掠め取り 黒き流れは紅^{あか}を流れ去り 真紅の紅は碧^{あお}を染め 気高き碧は白き川を追う」

高らかに謎の詩をうたいあげる奴に、俺はもう一度言う。

「なんなんだよ」

明らかに詩を言ったあとと前では、黒に隙間無く染められた剣がもつ青い輝きが違う。言う前では、細かい砂が光る程度の輝きだったが、言ったあとは夜空の一番星並みの輝きだ。

「ただの呪文と思ってくれて構わないさ。ところで、ジアン君」

「ジアン君言うな」

「うん、そうじゃなくてね。自分、魔法使いじゃないって言ってただろ？」

あー、普通にスルーされたわ。軽く避けられるのって結構ムカつくんだな。

「それ、撤回するよ」

「はあ?!」

いきなり爆弾発言。・・・今更だけど俺、この変人に振り回されてやいないか？

大きく頷いた奴、後でシバくぞ？

自分は魔法使いだ、といったも同然じゃないか。でも、なんて言ったり、撤回したりすんだよ。

「君が剣術使いなら、自分は魔法使いだよ。なんせ、自分は普通の人達という魔法を使えるんだからねー」

ん？ なんか変なことを頭がおかしい子が言わなかったか？

『自分は普通の人達という魔法を使える』

魔法は普通の人^{自分}が言おうと、そっち方面に特化した人が言おうと、変わらないんじゃないの？ そりゃまあ、価値とかは違っただろうけ

どさ。

そーいえば、文官見習い期間のころ。ビルに聞かれたことがあるかもしれない。

『なあ、ジアン。魔法って何だと思う？』

『はあ？ いきなり何だよ。魔法？ 伝説化してる大戦争時代の魔法とか？』

夜、普段とおなじように割り当てられた部屋を抜け出して、屋上でビルと素振りをしていたときだ。夜の冷たい風が吹いていたのにも関わらず、俺達は汗をかいていた。

ビルは俺の答えを聞き、ふーんと言ったあとに俺の背後の闇を見つめていた。

『じゃあ、剣術は？』

剣術についても聞かれたんだっけ。でも俺らは『剣の習い』どまりだったから、『剣術の習い』に行っていない。

『えー？ 何だろ。剣士が使う独自の業、^{わざ}かな』

俺がそう答えると、ビルは笑った。

『じゃあ、さ。俺達で剣術編み出そうぜ！』

『え？』

『お前にとつての、剣術は自分だけの技。それなら、自分でつくるしかないだろ？』

笑いながらいうビルは、今までよりも楽しそうに見えた。心から自然に笑うそんな姿が、すごくうらやましくなって。だから、手を伸ばした。

心を縛り付けていた錆びついた鎖が、粉々になっていくのを感じた。心が軽く、いや全部俺自身が、空とぶ鳥のように軽くなった。

俺は気づかぬまま、心から笑った。

『いいな！俺だけのカッコイイ技を編み出してやる！』

回想から現実に戻された俺は、ビルが『魔法』と『剣術』を並べて質問した真意と、ムカつく野郎が言った『普通の人達が言う魔法』が何か関係していると思う。それは何だろう？

「どつという意味だよ」

俺は思わず聞いていた。なんの知識も興味も無かった俺だけど、今興味がわいてきた。

奴は眉をぴくつとさせたが、そ知らぬ顔でひょうひょうと言う。

「そのまんまの意味だよ？まあ、ジアン君が興味を持ってくれたのはうれしいけど、自分はちよっぴり急がなきゃいけないみたいなんだよね」

「あ、そ。ならお前が、この対決をやめればいいんじゃないの？あと、俺へのふざけた呼び名も」

「それはどっちもちよつと無理な相談だね！。だから、第三の答え」
くそ・・・、また軽くスルーされた。こいつスルースキルが並外れてレベルが高い！

「次で決着つけよう」

怖いほど口の端がつりあがった笑みを奴はした。笑みのはずなのに、につこりと目が細められているのに、そこに楽しいとか幼稚な表情がない。この戦いと俺との会話を心底面白がっているようにも見えるけど、笑う寸前に目が見せた表情がそれを否定していた。

ときどき、『剣術の習い』生徒の練習を見ることがあった。一瞬、年上の生徒と目があつたことがある。その目と同じ色だった。殺意の色。濃さは違っけど、人の核なるものを消し去るような明確な敵意は俺を震え上がらせた。

「へえー、そんな目すんだな。お前も」

俺がゆっくりというと、奴はもつと笑みを深くさせた。

「本当に君は……、自分の鼻に間違いは無かったね。了承、と受け取ってもいいかな？」

「ハッ、好きに受け取れば？ 俺がどうせ勝つけどね！」

——残

り時間数十分。

【番外編 1 - 9】暗黒のヴィデルタ（後書き）

今回、通告なしに遅れてしまった上通常より、少なめとなっていました。申し訳ありません。

次回の更新は予定通りできるよう、頑張りますのでよろしくお願いします。

【番外編 1 - 10】八時の鐘 1

「大丈夫か？」

身体の安否を尋ねられたヘックはゆつくりと首を上げた。と、いつても地面に伏しているので大して上がらないが。

「まあ、何とか生きとるわ」

ヘックは土に汚れた顔で弱弱しく微笑んだ。ワイスは腰をかがめて手を差し出した。ヘックはその手を借りてよろけながら立ち上がったが、ワイスの助けが無ければ一步も歩けそうにない。

「自分の見込みは確かだったようだ。君のしたたかさは、群を抜いて優れている」

「伊達に師匠^{だて}らに連敗しとらんさ。それで鍛えられとったよ」

ヘックはさつき飛び降りてきた窓を見上げた。びろびろに破られたカーテンが揺れているのが見えた。

「どうやら、戻れっかな？」

独り言ともとれる言葉に、ワイスは反応した。ずっと自分が蹴ったわき腹と反対側について、ヘックの腕をワイスの肩にかけた。

「案内をしながら、肩を貸そう。君がいくら頑丈であっても、時間内に緑の間に戻ることは難しいだろうからな」

「そりゃ、どーも。ところで、今何時か知ってんか？」

ワイスは空を見上げることはせず、ただ剣の柄に目をやって答えた。

「午前七時十五分弱だ」

どうして時間がわかるのか、ヘックは疑問に思うことはなく、手助けなしで緑の間に四十五分以上かかる、ということにちよっとげんなりしていた。

ワイスの手元には小さな鐘。鬼に渡された鐘だ。本当にさりげなく、雑音に混じるように小さく鳴らした。

＊

カラアン。静かだけど、さりげない音を俺の耳が捉えた。だけど、俺と奴はそれに反応せずに、この距離をつめることに専念した。

奴にも聞こえたはずだ。それは紛れも無い、鬼が新兵を捕らえた証拠。だけど、出会ったらルール？ だっけ。それに縛られた俺たちには、他の鬼の介入が有効じゃない。だから、関係ない。

俺と奴の距離がおおよそ八ポア（約四メートル）になった刹那、

奴が叫んだ。

「幻想・閃光！」

叫びのはじめに天井へ向けられた、奴の黒い剣先から白い光が出て、ずっと高く飛び上がった。そして視界は音も無く白い光で埋め尽くされた。

っ捉えた。奴が風を斬る音。

条件反射で体が動く！ 目がくらんで見えない状態のまま、感覚を頼りに剣を持ち上げた。

俺の剣が奴の剣から伝わる衝撃を感じる寸前、頭の中が黒になった。

殺セ

白く浮かび上がる文字。腕の受けた力と互いの金属を蝕み合う音でそれは掻き消える。

奴が軽い足運びで移動した。感覚のままに体勢を立て直し、次なる奴からの攻撃を待つ。

つきた！ 目もおぼろげに見え始め、確かな動きになっていく。
風の悲鳴。目に見えない埃の舞い上がる音。剣のうなり声。

切り刻メ

また黒になった。うつとうしい！

目が周りを見渡せるようになった。今まで使った感覚を限界まで
鋭くして、奴がいる場所を探す。

いな、い？ 視覚・聴覚・嗅覚・触覚、全てが奴の存在を否定す
る。味覚は論外だから、排除！

・・・さてよ。あいつは、オプシヨルだか知らないけど、シックス
センスがないと、あの真つ黒な剣の声は聞こえないと言ってた。
つまり、シックスセンスを俺と奴は少なくとも持っていて、黒剣の
声を聞くことが出来ない人は、そんなんを持つていないことになる。

俺が、いま使ったのは四感。だけど奴は『普通の人がいう魔法』
を使えた。実際さつき光を発生させてたし。それを使えば、俺の感
覚を惑わせるかもしれない。

それなら、どうやって奴を見つける？ 奴は言った。『君が剣術
ならば、自分は魔法だ』と。

魔法に対抗するために、剣術を使う？ それは・・・つまり剣術
の基本の『気』を使え、ということ？
だけど、シックスセンス云々は何？

あつ、もしかして『気』とシックスセンスは実は、同じものだっ
たり！？

それならば、気を使えば奴を見つけられるかもしれない。

・・・はい？ 気について説明しろと？

はあ。じゃあ、説明しますよ。はいはい。

ビルが俺に剣術について言い始めた頃、注目したのは、『ピンチになったときに突然わいた力』について。

全くもって判りにくい？ すいませんね、書いているのが未熟者なもんで。ってなんで俺が作者についてフォローしてんだよ。

そっちの世界にことわざがあるだろ？ 『火事場の馬鹿力』って。それのことだよ。その力にビルは注目したんだって。

（今、思い出すと前々から、ビルが剣術の気について知っていたような気がするけど。まあ、今はつつこむのをやめよう）

で、なんでその力はピンチにならないと出てこないのか。それはきっと俺たちの体について、ほとんど知らないからじゃないのかって俺は思っている。

意識すれば腕が動くし、物をつかめる。だけど無意識のうちに、息をしていたり癖がついていたりする。息は、しないと生きれないからしている。だけど、癖はどうだろう？ 生きるためには必要がないと、思えるはずだ。なのに、俺たちは癖を受け入れ、そこに疑問を抱かなかった。

そういう風に、人間っていうのは適応しすぎて自分自身が持つ力について、気づかなかったんじゃないかな？

って何、話ずらしてんだ俺。

その力を引き出すためには、自分がもつ力があるということを確認しなきゃいけないらしい。実際、俺はそれを確信して、『気』を扱えるようになった。誰だってやれば気が使えるみたいだし。

気は自分の内なる力だ。気は自然の力でもある。『火事場の馬鹿力』の馬鹿力は『気』だ。普段は人間が形を保つために、体中に散らばっているらしい（普通に自然の中にも気はあるけど、人間が使うのはむずかしい）。だけど体が大きな損傷を受けたり、自意識で危険でも行いたいことをしようとする状況に合わせて気は、さまざまな場所に集まり始める。

例えば、俺がへばっている状態で左腕に大きな怪我を受けたとすると、気は患部だけでなく体全体の筋肉に集まり始め、さらには頭でも集まる。そうなれば、体力とはまた別の気が体を立つために支え、状況把握のために使う頭がすっきりする。

それに、『火事場の馬鹿力』をたとえにすると、火事で家が燃えている。そこにとおりすがった俺は危機を感じてそこに飛び込んで倒れた重い家具の下敷きになっていた子供をたすけた。この場合、気は俺の腕に集まって、一人じゃ到底持ち上げることすら叶わない家具を持ち上げて、子供を移動させた。

気は無意識に集まるし、意識的に集まることもあるということ。

たとえばイマイチだったけど、それは俺のせいじゃないからな。まあ、これからも読んでくれればきつとわかってくれるだろう。と、いうことで俺からの気についての説明終わり！

気は意識を自分の内側に集中すると見つけた。皮膚の下でこの形を保たせてる。

そいでビルは、気を発見したあと、意識的に気を一定の場所に集まらせようと言った。とりあえず、座って気を確認する。そしてその気を、この腕を持ち上げるために動かそうとした。一時間ぐらいでクリアしたよ。次にビルは、じゃあ今度は剣に気を集めてみようぜ、って言った。

無理じゃね？ と、俺は思ったけど現に今できるんだよね。剣をもつて気を確認。それで、まずは気を剣握る手のひらに集めてそれから、剣を体の一部だと考えながら剣へ移動させる。十数分でできたよ。

最後に、ビルは言った。それじゃー、剣先から気が放出っていうか出て行く？ のを想像して出させてみよう。

はい、ここまでこれば分かるかなー。想像の部分をどう変えるかで、剣術は変わるんだ。はい、これで剣術の作り方終わり！

ということで、まずは気を体内から体外へ出してみよう。

すでに本来俺のからだの一部ではない、剣から気を移動させて放出できるんだから、すぐにできた。なるべく全体に広がるように、俺から出た気をホール中に移動させた。そこに気が感じ取れるものがあれば、すぐにわかる。

あつ、見つけた！俺はすぐさま気を取り込み、駆け出した。

奴は魔法らしきもので身を隠していたが、気づかれたと知るやいなや、また叫んだ。

リアリティ
ファイヤ
「現実・火炎！」

奴が黒い剣を横に振るうと、炎の波が襲ってきた。床が微妙に焦げている。

「疾風の斬撃！」

俺の剣術でそれを打ち消すと、奴はものすごいスピードで間合いをつめた。

風の音とともに、黒の軌跡が俺に向かって迫る。俺はそれに飛び込むように床を蹴った。

黒い剣筋を受け止めるかのように、俺は剣を滑らせたが体をひねってそれを避ける。俺たちが交差したとき、俺は振り返って技名を叫ぶことなく疾風の斬撃を発動させる。

奴も空中で回転し、こちらを向いて手を突き出した。

プロテクト
シールド
「強固・防御っ！」

手の平からうすい膜のようなものが現れて、見えない斬撃がもろに当たったが、奴は無傷。

だけど、斬撃の威力に押されて床に奴の足跡がある。お互い様だ。さあ、これから！絶対に勝ってやる！

思った途端、このダンスホール、いやリク城を震わすほど大きな音が聞こえた。

キーンツカラーン、キーンカラアーン。

「……あーあ、鳴っちゃったね」

え、もしかして今のは。まさかの？！

「もしかして、今で八時？」

「そ。残念ながらジアン君は、合格です」

[illegible]

「俺は一生、主人公に手柄を横取りされる脇役かよ!!」

【番外編1 - 10】八時の鐘1（後書き）

それがかわいそうだから、ジアン（ジマス）を番外編1の主役に
すえてあげたのに・・・。

はい、一度呼んでいただければ判るはずですよ。つまりジアン視点の
ところで四十五分も掛かっているわけなんですよ。ジアンの中では
ほんのちよつとなんですけど、実際は何十分もかかっていた、とい
う感じです。

わからないですよね、はい。では、また来週たのしみに待ってい
っしゃってください。もうすぐかくれんぼ編が終わりますので、本
編ももうすぐですよ。

7 / 19

お気に入りにも十人も！ 本当にありがとうございます！

まだまだいたらないところばかりですが、自分なりにやっていける
ように頑張りますので、引き続き応援よろしく願います。

【番外編 1 - 1 1】 久しい人

さくさくさく、と青々と短く茂った芝生の上を、二人の男が歩いていく。厳密にいえば、ひとりの方はまだ二十代を超えていないが、十五の成人は四年ほど過ぎている。つまり十九歳。その曖昧な年代の青年はわき腹をかばう様に、もう一人の男に肩をかりて歩いている。

青年に肩をかす男は、典型的なヒーディオンの貴族らしい風貌であつた。綺麗に整えられた短い金髪にやや細い青の目。外見だけを聞けば、貴族の令嬢達がうっとりため息をつくほどである。しかし、その姿がワイス・ル・ヴォークだと聞けば、おしとやかである令嬢達は優雅な微笑を固めてしまう。

・・・コホン、失礼。わき道にそれてしまったようです。

つまり、ヘックとワイスは豪華絢爛な中庭こうかけんらんを歩いていたのだ。おそらくこのリク城の城主、アボドアル・リク・ド・ディオンの正妻やその娘などの為に作られたものだと思われる。

実際、お茶会などを楽しむためのなか、丁度いい広さと場所のところにテラスがある。

ワイスは口をぎゅっと引き締めると、その方向へ歩いてく。肩を貸してもらっているヘックからすれば、なぜ？ である。

それに気づいたワイスは、堅い声で言った。

「中に戻るには、近道だろう」

なぜかヘックは背筋に恐怖を覚えた。気を緩めていれば、背中からグサツと剣にでもやられて、腹に穴が開いていそうだ。ワイスがそんなことをする人ではないと、わかつてはいても。

「勝手に入ってええんすか？ なんか場あ違いな気がすんのだけんど」

ヘックの体を支えるワイスの肩が、ややこわばったような気がした。

自分のなかにある迷いをも断ち切るように、ワイスはずんずんときらびやかなテラスに向かっていく。

白いテーブルや椅子は清潔そのもので、毎日手入れされている物だった。野外においてあるとはいえ、屋根つきなのでさほど汚れはしない。

ふと、ヘックは気づいた。室内の影に、侍女らしき人がいることに。ワイスも、気づいているが自ら近づいていつている。

「久しいな、マリ」

テラスに一步、足をかけた所でワイスは声を、侍女に向かって発していた。マリというめずらしいファーストネームで呼ばれた侍女は影から現れた。

ヒーディオンではあまり珍しくも無い黒髪黒目だったが、いち將軍の城付き侍女としては若干めずらしい。王城などはもちろんだが、貴族の住まう城や屋敷では貴族の血を引くものが侍女として働いていることが多い。洗濯やところどころの掃除などをする下女・下男などは平民が多いが、主人専門の世話をしたり主人の婦人の部屋のみの専門だったりする侍女は上に挙げた通り、貴族多い。

以上、閑話休題。

「ワイス・ル・ヴォーク……」

侍女らしからぬ、低い呟き。だが、それは自分にしか聞こえない。

「ここを通っても構わないな？ マリ」

ワイスの声が届いた途端、侍女のスカートが揺れた。侍女は胸元で手をきゅっと握り締めた。凜とした声で、ワイスに言った。

「ワイス様、そして新兵……の方ですね。我が主であるお嬢様が、お呼びで御座います。許可はすでに取つてあるとのことですよ。どう

ぞ、こちらへ」

ワイスはおどろいた様子だったが、マリという侍女についていく。ヘックはワイスに肩をかしてもらっているので、嫌おうなしに行動を一緒にすることになる。

＊

バロシオンはエーシャをつれて、ビルから教えてもらった方角を目指していた。

<このあたりのはずですが・・・>

『瞳』をもつエーシャには、精霊の声が聞こえ精霊の姿が見え意図して精霊に触られる。

（あの、バロシオンさん。時計ありますか？）

おそろおそろ、心配そうな目でエーシャがバロシオンを見上げるとバロシオンは少し頬をゆるめた。

<バロシオンでいいですよ。ええ、ありますよ>

そういつて懐^{ふし}から取り出したのは、リーディアの技術ではまだ到達できていない仕様の金時計。ぱちり、と音をたてて時計のふたが跳ね上がった。バロシオンは時計盤をみて眉をよせる。

エーシャはその様子をみて、時計をのぞきこんだ。

（なにこれ！）

文字らしきものがゆがんで、白い時計盤ににじみ出ていたり、あざやかな色が時計盤をうめつくしていた。針はぐにやりと折れ曲がり、狂ったようにまわり続けている。

<狂っている……。体感時間をも妨害されているようです>

（でも、方向は間違っていないということになります。進みましょう）

<はい>

ひたすらその方向をめざして、二人（いや一人と精霊一体）は歩き出した。ときどき曲がるたびに感じる、歩いていると突然床が無いような一瞬の恐怖がエーシャを不安にさせた。しかし、その不安を顔にだすような真似はしなかった。ただ、きゅっと手を握り締めた。

それからどれくらい経ったであろうか。バロシオンは時計を覗き込んだ。時計盤の色はもはや芸術並みに意味がわからないほどごちゃごちゃしているし、時計の針はひねられて直角に折れてまわる速さが尋常でなくなった。

バロシオンが時計を見ているとき、エーシャはなんともいえない空気の動きに気づいた。

（何かくる？）

心の声を聞いたバロシオンが振り返ったときには、廊下の壁から黒い火花が散っていた。バチバチっとものすごい音でエーシャは驚いて倒れる体のバランスが取れなくなっていた。

後ろへ体勢が倒れていくエーシャを支えたのは魔力。しかし、それはエーシャが発したものではない。

<あなたは・・・・・・>

エーシャを支えた魔力の持ち主は二人の目の前にいた。壁に三次元の制約を無視してぽっかり開いた穴。簾に腰掛ける全身ピンクな少女。宙に浮くキラッキラになった（現代的に言えばデコられた）ステッキ。

「やつぽー、オン君。久しぶりだね」

<何年経っても、あなたも僕も変わらないようだ、アデシヤ>

バロシオンがピンクの少女に言ったアデシヤの名。それを聞いて立ち上がったエーシャの肩がぴくんとはねた。

それを赤銅色の目で捉えていた全身ピンクの少女は、見なかった

というように無邪気に笑った。

「なんで、そんなあつさり教えちゃうのかなあ。おかげでワタシの台詞減っちゃったじゃん」

（え？ アデシヤ？ 私の家名？）

名前についての疑問がエーシヤの頭を埋め尽くしていたので、次の会話についてははつきりとした記憶が無い。

<シャスール。シャスール・アデシヤ、この時代に現れたということとは始まるのか？ 『ディデファイアル下人昇華の月』が、僕らの闇が>

「大げさだよ、オン君。ところでさあ、シオちゃんもこの城にいらんでしょ？ 二人のご主人も一緒、でしょ？」

シャスールと呼んだ少女の言葉を聞いて、バロシオンはぐっとつまつた。きれいに弧を描いたシャスール・アデシヤの口元は乾いた笑い声を発していた。

<僕が答える必要性はない。シャスール、あなたはエーシヤの母親か？>

自分の名前ばかりに反応するエーシヤは、顔をあげた。ふと、宙に浮くステッキをいじくりまわして遊んでいる少女を見つめた。

「あはは、そうだと思つよ。目なんかそっくりじゃない？」

そして呆氣あつけにとられた。どうみても同年代の少女が自分の母親である訳がない、と。

（確かに目はそっくり。だけど、私にはちゃんと両親がいたわ）

<そうか。ではエーシヤを預かるために？>

バロシオンはエーシヤの声が聞こえているはずだが、突っ込むと話がややこしくなるので、アイコンタクトで後で答える、という意味の合図をしていた。

「まあ、自分の娘がどんな子が興味はあつたけど引き取るためだけに、現れたりなんかしないよ。ワタシがこの時期に現れたのは、ワ

タシの主人が現れたからだよ。立ち位置的には、今度はワタシとオン君たちが敵対するみたいだけどねっ」

箒からおりたシャスールはピンクのトンがった三角帽に触れた。すると、シヨッキングピンクが穏やかな黒に様変わりした。

「今回だけ、昔の仲間だったよしみで、忠告してあげる。ワタシのご主人は、ここにいないからあ黒幕を倒そうにも倒せないからねっ
じゃあ、オン君。この城でもう会わないことを祈るねっ」

バイバイ、と少女さながらの笑み。箒とステッキを持ったほぼピンク（帽子だけ黒）の少女は穴に飛び込んで消えた。ピンクのスカートのすそが見えなくなったと同時に、また黒い火花を散らせ穴は壁から消えた。

「なんか、いいたいことだけ言っただけ帰っちゃった」

<そういう人です。仕方ありません>

エーシャにとってあの少女の登場は無くてもいいような気がしたのだ。

「はあ、あの。今の話はということなんですか？」

エーシャが唯一興味を持ったのは、シャスールが自分の母親だという話だけだ。あとの話はほとんどシャスールとバロシオンの間で交わされたことで意味のわからないことばかりだった。

<・・・彼女は古くからの知人です。僕たちに教えてくれた話によると、彼女とその主人の間にできた子供とある夫婦に預けたらしく。それがおそらくエーシャさんが今、両親と慕う方たちではないでしょうか？>

今日は厄日だ、と思わざるを得ないエーシャであった。

「あの、エリムさんを探しません？」

現実逃避のためか、動いていたほうがいいと思い、声をかけた。
<そうですね・・・>

前を向いたら、見えなくなった。バロシオンの伏せがちな金色の
眼が。

歩き出したら、見えなくなった。小刻みに震えている私の指先が。
目をつぶったら、見えなくなった。頬つたう一筋の涙が。

【番外編1-11】久しい人（後書き）

ああああ。

すみません、イレギュラーがなんと三人も！ 女性陣を増やそうと思いついて、マリちゃんを登場させたところ、マリCが侍女ならば仕えた人も必要だー、ということでお嬢様もやむをえず登場。こちら、マリ！ 勝手に動くんじゃない！！

そして全身ピンクのシャスール・アデシヤ。姿は、某少女アニメ（？漫画）の魔法少女を想像していただければ、です。

暴走しすぎだわ、シャスール。

やつと伏線だせたーと思ったら、思いもよらぬ方向へ！？

癖を直さなきゃですね。

では、暑い日が続いていますが、来週を楽しみにしていただき。来週も見てくださることを楽しみに思いながら、あとがきとさせたいと思います。

7/29

アクセス数がきりのいいところを超えたのでご報告します（あらすじ部分にもありますが・・・）。

ユニーク数10000人、PV35000ヒットをいただきました
！！

ありがとうございます！ 約一万人の人がここを、（少しだけでも）覗いてくださったということに驚きました！ インターネットすげえな、とあらためて思いました。ほんの少しの暇つぶしにでもなってくれればと思い、この物語を完結するべく頑張りますのでよろしく願います。

「ちりも積もれば山となる」、これって本当だったんですね。誰もいなかった初投稿頃が懐かしいです。

6章以上になりそうですね。このかくれんば編。番外編1の分だけで、初回〜6章終わりまでの分になりそうという脅威！道筋は決まっていますが、どこに内容をつめるか、というところが決まっていないのでなんとも言えない限りです。7章の後の、番外編は「太陽vs月（仮）」編と称することにします。7章同様に楽しみにしてらしてください。

期待に添えない場合もありますので、ほんのり期待してください。

【番外編 1 - 12】八時の鐘 2

深いスリットが入った黒いドレスから、白いあしがのびている。椅子に身をもたれさせ優雅に足をくむ姿は、御伽噺に出てくる女王様の如く。

肘掛に腕をおき、スラッとした顎をのせる細く可憐な指と手のひら。腰にかかるほど長い妖艶な黒髪は、レベッカの雰囲気をかもし出している。長いまつげの下にあるは、夕方、黄昏、空の紫苑の輝き。瞳の奥に秘められた夜の色が、彼女の真意を悟らせない。

レベッカが見つめるは、赤毛の少年。彼のこころの声が聞こえるようだった。

（もしかして——僕ら新兵の中に、リオン・フェブリーヤが？）

濃い血のような口紅が弧を描いた。上品にこぼれた笑い声が妙に反響する。

「フフツ、あなたの予想通りよ。新兵のなかにリオン・フェブリーヤがいる」

「なぜ、僕がそんなこと——。それに、あなたは誰がリオン・フェブリーヤか分かっているのでは？」

目に見えない力にエリムは圧倒されつつも、もつともな疑問を投げかけた。レベッカは足を組みなおしながらこたえた。

「リオンは、力を上手く・・・隠している？ いえ、まだ力の全体を把握できていない。だから、リオン・フェブリーヤだという確証がないの。なぜあなたが、あたしの言うことを聞かなければいけない、かですって？ それは、あなたが弱いからよ。姉と一緒にね」

「どつどこが弱いというのですか！」

エリムはかつと怒鳴り返した。レベッカは大人びた雰囲気^{ひょうひょう}で顔にかかった黒髪を耳にかけた。エリムはその飄々とした様子をキツと

にらんだ。

「あなたは人に依存する。剣の腕は上がったかもしれない。だけど、己の性質を変えることは難しい。あなたは大切だと思った人、全てを守るのかしら？ たった一人、自分の腕からこぼれおちてしまつと、あなたはどうなるかしら？ あたしならば、守れる人と守れない人で線をひく。あなたは守りたい人と守れる人の違いがわかる？ あなたは冷静にすべてに線をひけるかしら？

あたしは、あなたがまごついている間にすべてを消すことが可能なのよ。力に敏感なあなたなら、自分がよく分かっているでしょう？ あなたがあたしに敵^{かな}わないことは。

あたしにあなたの守りたい人を殺されなくなかったら、リオン・フェブリーヤを見つけることに協力してくださるわよね」

最後のみ問いかけではなく、確認だった。矢継ぎ早に、心にグサツと突き刺さるような言葉を浴びせかけられて、エリムは俯かざるをえなかった。

「・・・・・・・・」

レベツカは無言のまま自分の足を見ているエリムに、繰り返して言った。

「協力、してくださるわよね」

聞く者全てに緊張の糸を張り巡らせるような鋭い声が、エリムの顔をあげさせた。それと同時に、何か薄く堅いガラスを叩くような音が聞こえて、レベツカの眉がぴくりと動いた。

「僕の友達に手を出さないのならば、協力しま——えっ？」

といいかけて、エリムが感じたのは流れるように目と耳に触れた冷たい手。振り返ると、金髪金目の青年と数歩離れたところに目をひく緑髪と赤銅色の瞳の少女がいた。

バロシオンが片手に持っていたのは、不思議な金属。精霊や魔法

について知らないエリムにとっては未知の物体だった。だが、レベツカはバロシオンとその時計をみて、内心嬉しく思いながら呟いた。「リオン・フェブリーヤは未熟、そして近くにいる……」

レベツカに一番近かったエリムには聞こえず、『瞳^レ』をもつエーシャにも聞こえず、リオンの剣に宿る精霊にであるバロシオンにだけ聞こえたそれは、バロシオンの口元をゆがませた。

★

バロシオンとエーシャが、エリムとレベツカのところにとどり着く数分前。

バロシオンが持つ時計は、壊れて動かなくなっていた。妨害が大きすぎて、敏感すぎた時計は壊れてしまったのだ。

<どうやら、近づいているようですね>

(はい……)

シャスール・アデシヤが穴の中に消えたときから、エーシャはあまり喋らなくなった。自分から話題を提供しようとせずに、さきの会話について聞こうとせずに黙々と歩き続けていた。

一方バロシオンといえば、古き旧友の突然な登場にたくさんの疑問を抱えていた。バロシオンやアポシオンが精霊になってから、シャスール・アデシヤに会ったのは三代目に仕えていた頃だった。それ以来会っていないのだから、何百年という単位になる。

それなのに、身長の一エル(約一センチ)のこと。五十エル「一ポア」も変わっていない、思春期の少女の姿だった。

アポシオンに相談しないと、と決心する彼であった。

ゴンツと、何かがぶつかる音がした。考えにひたっていたバロシオンが、目をやると頭を押さえて「いてて」と呟くエーシャがいた。<見えない壁、ですか?>

涙目で上目づかいにバロシオンを見たエーシャはこくと頷いた。バロシオンが目の前の宙に手を伸ばすと、彼女のいうとおりガラスのような物体を感じる。

<エーシャさん、叩きながら『アドル 消えよ』といってください。おそらくこれは結界です>

エーシャが言われたとおりにすると、結界は小さな輝きとなって崩れ去った。そして視界は開けた。

結界の先に、赤毛の少年と年の知れぬ妖艶な女性がいた。エリムは何かを言いかけていた。

「・・・のならば、協力しま——」

バロシオンはエリムに気づかせるため、エーシャが驚くような速さで近づき、エリムの目と耳に流れるように触れていった。

「ーえっ？」

振り向いたエリムは現れた二人の登場に、驚きながらも笑顔をこぼしている。だが、バロシオンはきらびやかな椅子に座っている黒髪のレベツカのほうを見据えていた。

レベツカはバロシオンと彼がもつ時計をみて、とても小さな声で呟いた。

「リオン・フェブリーヤは未熟、そして近くにいる・・・」

その呟きが唯一聞こえたバロシオンは、口元をゆがませる。それを見て、レベツカは上品に笑い声を立てた。エリムがバロシオンに並び立つと、その声はやんだ。

「くふっ、エリム・マドウカ。協力、してくれないのね？」

「僕が全てを守るなんて、傲慢だった。少なくともここにいる僕の友達は自分の身は自分で守れる。僕が無駄にじたばたしてただけです。あなたが何のために、リオン・フェブリーヤを追い求めるのか知りませんが、僕は協力しません」

真剣なまなざしで、いいきつたエリムには、安堵したような表情がうかんでいた。横で彼を見ていたバロシオンは、長くリオン・フェブリーヤに仕えてきた間に感じた罪悪感が沸いてでていた。

歴代のリオンの中には己の身分を隠して旅していた者が多く、リオンに使用している二人の精霊は度々その罪悪感をもてあましていた。「そう、ならその精霊さんに伝えてくれる？　せいぜいあなたの主人を鍛えることね、と」

レベツカにもバロシオンが見えているはずなのに、エリムやエーシャに気づかれないようにわざわざ言った。バロシオンは怪訝なおつきで、レベツカをにらんだ。

「容赦しないわよ、十五代目さん・・・？」

いかにも、十五代目のリオンに向けて言う台詞。十五代目ときいて、バロシオンの顔が一変した。エリムとエーシャは困惑した顔でバロシオンをみた。

一般にフェブリーヤ一族の存在は伝説的な英雄の末裔、という程度の認識がある。だが、誰がその時の一族の頭か、ということについては歴史に精通している者でなければ、あまり知られていない。十四代目は珍しい女のリオン・フェブリーヤであったことから、知っている者がわずかに多かったが、彼女の死は村とその付近の住人でなければ、ほとんど知られていないはずだった。

<エリムさん、ひとまずここから離れましょう>

(あ、はい)

不敵に笑うレベツカを尻目に三人は駆け出そうと、回れ右をした時それは響いた。

キーンツカライン、キーンカラアーン。体の芯ごと振るわせるような鐘の音。一瞬、足元が揺らいだかと思うほどの大きい音。

「時間切れね、今日はここを去るわ。だけど、必ず見つけ出してあげる。リオン・フェブリーヤを、ね」

ウワンという謎の耳のブレとともに、“暗黒のヴィデルタ”は消えた。頭の中がぐらぐらと動いた途端、目の前の幻想は急速に朽ち果てていた。

余韻がまだも響く鐘の音が視界をばやけさせた。精霊であるバロシオンは、しゃがみこんで床に手をつくとき、頭がスツと冷えていくのを感じる。

<ここは・・・>

未だなおものびている騎士に、エリムによって蹴飛ばされた大きな扉があった。次に正気を取り戻したエリムは、壁を頼りに立ち上がった。

「あれ、ここは・・・」

ちらつと見渡して場所を特定したエリムは、意味がわからないというように首を横に振っている。寝ぼけているようなエーシャを、足元に発見したエリムは、朝方のワンシーンを思い出して顔を赤くした。そのようすをちら見していた、バロシオンはくすつと笑いを漏らした。

「うーん？ ふあ・・・、ってここは？」

寝起きそのままのような様子で目をこするエーシャは、ぺたんと床に座り込んだままエリムを見上げた。その愛らしさに、もっとエリムは顔を赤らめた。

「ここは、僕と君が会った訓練室だよ。きっとあのレベルカとかいう人に元に戻されたんだ」

そっぽを向きながら言うエリムは、エーシャを立たせた。バロシオンもエリムの考えに頷く。

<おそらくそうだと思います。ですが、鐘は鳴りました。あの人が何者か、論ずる暇は無いでしょう。最初の広間に戻りましょう>

バロシオンが有無を言わせない声で言うことで、戻ることが決定し戻る道すがら、質問されても答えないと、暗に言ってもいた。バロシオンは先頭に立って、倒れた扉を踏み越えていった。二人はそれに黙ってついていくほか無かった。

【番外編 1 - 12】八時の鐘 2（後書き）

こんにちは。毎度の如くのとがきです。

今回は些いさやか急いで作ったので、おかしいところや、変なところがあるかもしれませんが。あつた場合は是非お知らせ下さい。

バロシオン視点を後半かいているので、アポシオンの存在がちらつきました。あのひと、変人美形騎士と堅つくるしい生真面目騎士が登場してから全然現れていませんから、今頃なにやってんのかなーと他人事のように思つて（ry

ツイードさんの呼び名のレパトリーがひじょーに少ないです。是非、うんぜひとも面白い呼び方ないですか？ あつたら同じくお教え下さい。

次回は、マリという侍女についていったヘックさんです。楽しみにしてらして下さい。

【番外編 1 - 13】八時の鐘 3

マリという侍女についていくと、テラスとつながっていた部屋の向こうに、彼女が侍女として仕える主あるじがいるようだった。

いま、通っている部屋の全ての家具に白いシーツのようなものがかぶせられていた。元々は気高い純白だったのかも知れないが、埃や踏みつけられた跡でくすんでいる。おそらく、あのテラスもこのつながった部屋も、使われていないのだろう。

日が低いところでも入るようにして作られた部屋であるのか、手垢や雨粒で汚れた窓から柔らかな光が僅かに差し込んでいた。だが、窓枠の角には蜘蛛の巣があり、糸をたれて揺れる蜘蛛が妙に浮いていた。

「こちらで、お嬢様はお待ちです。新兵・・・さん、わたくしがお支えしましょう」

二人を呼び出した人が待っているという扉の前で、ヘックは腕をワイスの肩からどかした。ワイスは、ヘックがマリに支えられるのを確認してから、扉を叩いた。

「失礼致します、デイオン將軍令嬢様。ワイス・ル・ヴォークです」
開かれた扉のさきに、金髪緑目の少女がいた。そばに見た目麗しい侍女を従えさせているが、ひとときわ輝く存在感を放つその少女は、聞く者を釘付けにするような声で微笑を浮かべた。

「ようこそお越しくださいました。ワイス・ル・ヴォーク様、ヘック・カーロン様」

優しい微笑みになにも感じなかったワイスは、顔の筋肉をあまり使わないように言葉をつむいだ。

「いえ、我々のようなしがない者に様など必要ありません。デイオン將軍、侯爵令嬢カトレア様」

口元に可愛らしく手を添えたカトレア・ド・ディオンは、わざとらしく「まあ」となどと言って見せた。貴族なんて見る機会が無かったヘックには、そのやり取りがただのくだらない茶番のように感じた。ヘックを支えるマリも、苦い顔をしていたので、同じことを考えているんだろうな、とヘックは思う。

「では、お言葉に甘えさせていただきますわ。それよりも、お二方の怪我の手当てが先でしたわね。どうぞ、お入りになって」

（二方？ 自分は怪我などしていないはずだが・・・）

ワイスはカトレアの言葉に疑問に抱きつつも、言われるままに部屋の中に入った。侍女が用意した椅子にヘックは座らせられ、ワイスは部屋の中央にある机の傍にあるソファ―に座らせられた。

傷に当てると思われる清潔な布と、消毒液を侍女が運んできたのをみてワイスは思わず言った。

「自分は、何処に怪我をしているというのでしょうか？」

目の真剣さに気づいたカトレアが、上品に驚いた。その様子に、ワイスの眉がひそめられたが。

「お気づきになられていなかったのですか？ その首筋に血が流れているではありませんか」

脳裏に鮮やかによみがえった、一瞬の鋭利な刃のきらめきが、今更ながらぞつとした。首元に手を当てて、そこに乾きかけた血が僅かについているのを認識した。

視界の隅に掠めた、鈍いきらめきの正体はこれだったのだ。

二人の姿が交差した、その刹那。

ワイスは『デモラシユハクスイ紅血・白水』を起こさせることで、軽量化と刃の無力化をはかった。そしてそのまま、紅く光っていた剣は、その時地面についていた足のすねに直撃。

目がそれを捉える寸前に、視界の端でかすめたきらめきは、遠ざ

かりそして、二人の距離が離れヘックが膝をつき、漏れでた一言。

『ああ……。力が』

服を侍女にめくられ、ワイスの膝蹴りを受けたわき腹があらわになつていたヘックをみて、ワイスは少しの焦燥といったものを感じる。

（力が足りない？ 力があれば？ それはもしや自分のこともやしれぬ。これが、もし。このような遊びでなければ、自分は——）
自分の無意識による驕り^{おご}を恨みながら、優秀な人材がヒーデイオン軍に入つたことを嬉しく思った。

ヘックの蹴られたわき腹はあざになつていて、見ると「痛そう……。」「と思つてしまうほど、痛々しかった。どのような状態か調べるために、侍女にあざをつつかれているのだが、痛そうな声を上げることは無かつた。

そのようすを見ると、彼がいう『師匠』にワイスは会いたくなつた。

一方のヘックは、わき腹の痛々しいあざよりも、足のすねの方が痛いと感じていた。だが、痛がる様子がないため気づいてもらえない。そのうち、侍女の一人が湿布をもつてきてあざの部分に貼ってくれた。ひやつとした感触が腹のあたりにじわじわと広がっていく。足の方もみてほしい、と口を開きかける前にマリがいった。

「そちらの方は足にも怪我をしています。見せてもらえますか？」

ヘックがズボンのすそを膝のあたりまでたくしあげた。一瞬、マリがすねの部分を見て顔をしかめたが、きつと注視していたヘック以外は気づいていないだろう。

マリは優しくすねの部分に手のひらを当てた。ヘックの目が大きく見開かれる。ずきずきいつていた痛みが嘘のように消えてしまったのだ。

「聖女・・・？」

マリはヘックの呟きにもっと顔をしかめてぼそつと言った。

「そんな厨二病全開な呼び名なんてごめんだわ・・・」

ちゅうにびよう？ 病気なのか？ と疑問に思ったヘックだったが、癒してもらったお礼を言わなければ、と思い当たって気にならなくなっていた。

「ありがとうございます」

「いえ、仕事ですから」

と、しかめ面から普段の表情に戻ったマリは、当てた手を離れた。普段の表情といっても、ほぼ無表情だ。

ふと、ヘックがワイスの方を見ると、ワイスの首元にあるうつすらと付いた傷の消毒をしている。その様子をみてなんとも言えない嬉しさが、心のなかに広がった。

（今回は、動けないような負傷のせいで俺の負けになっちまったけど、次さアやるときや俺が勝てるっちゃア勝てるね）

再戦の勝ち宣言を心の中でしていたヘックだった。宣言が終わる頃にはワイスの手当ても終わっていたのだった。

手当てをもらった侍女に、静かに礼を言ったワイスは居住まいを直した。姿勢をピンツとはって肩こりについて色々心配されそうなほど肩に力が入っている。

「それで・・・カトレア様。わざわざ、許可をおとりくださって自分との時間を作ってくださいだったので、そろそろ本題を申し上げます。ご了承くださいませんか？」

よどみない声に、カトレアはレモン色の長めの髪に触れた。「そうでしたわね」と笑顔をつくったカトレアは、仮面をかぶって言った。

「わたくし、あなたのご活躍は人よりも知っておりますの。だから、

新兵訓練などという低レベルなお仕事など、ワイズ殿には役不足という感じが否めません^{いな}の。ですから、お父様に掛け合ってもっとワイズ殿にふさわしいお仕事をおすすめしたかったのですわ」

声色と表情をすこしずつ変えていくカトレアに、ヘックは本気で憧れる(?) ワイズを氣遣っているような印象をもった。

だが、ワイズはあまりというか全く表情を変えなかった。無表情の割合で言うところと同じ割合だ。

ワイズは予想通りだ、とでもいうように反応が単調であった。言葉に隠れた意味でも探すように、ゆっくりと頷く。

「それでは、まだディオン將軍にお話されていらっしやらないのですね?」

カトレアはワイズの言葉に肯定し、本当の色が見えない海のような瞳でワイズの顔を覗き込んだ。

「はい、ワイズ殿のお言葉を聞いてから、お父様にお話しようかと思っております」

(つまり、自分が二つ返事で了承する、とこの傲慢女はいう訳か?) カトレアの言葉の意味を汲み取ったワイズは眉間に力をいれることとなった。

「失礼ですが、カトレア様。自分はこの仕事を役不足などと思っております。今の自分にふさわしいのはこのような戦地の前線から一歩はなれた所からですから」

自分の意見を軽く払われたカトレアは鋭い目つきで、立ち上がったワイズをじっとにらんだ。ヘックも、今度は誰の手も借りずに椅子から立ち上がった。

「わざわざ、この時間にお呼びくださったのか、意図ははかりかねますが、手当てについてお礼申し上げます。カトレア様、そのお話はまたいつかにいたしましょう。では、失礼いたします」

二人がカトレアのいる部屋をあとにすると、マリも部屋から出てきた。

「方向音痴のワイス様」

さっきの無表情っぷりは何処へやら、驚くほど生き生きとした表情でワイスに話しかけた。ワイスも方向音痴と聞いて、驚くほど怖い顔で振り返った。

「その声は他人に冷酷無慈悲だというマリ殿。何か？」

「来たばかりの城で場所がわかりませんでしょうか？ 方向音痴ゆえ、一年ほどでたどり着くかと思われますよ。数十分で戻りたいのであれば、わたくしをお使い下さいませ？」

戻るので一年とはひどいいいようですな、とワイスが目以外笑って言うまえに、音がさえぎった。このリク城全体が震えているように感じるほど、とてつもなく大きい音。頭に直接響いてくるかのような、胸を打つ鐘の音。

両手で耳をふさぎながら、ふっとマリは不敵に笑った。

「タイミングが悪かったですね、分かりましたご案内いたしますしゅう」

このところ黙ってやり取りを聞いていたヘックは、二人の間に根強い絆があることを感じ取っていた。マリさんの笑みとワイスさんの笑みが似てんなあとのんびり思いながら。

ワイスは、初対面の第一印象ぶち壊しな感じで、噛みもせずには敵意むき出しで言い放った。

「自分は頼んでなどいないのだが、まあタダで案内してくれるというのなら案内されよう」

「あら、有料ですよ。ワイス様？ わたくしへのチップくらい、蚊のようなものですものね」

「自分の年収を知っているとは驚きですな、マリ殿。さすがは侍女のコネ、とでもいいましょうか？」

「ただの情報収集の人脈ですわ。コネだなんて、嫌味なことをおっ

しやりますのね。もしかしてそれがご趣味とか？」

「趣味だんて、そんなことをいうあなたの方がそのような悪趣味をお持ちなのでは？」

「それをいうのならばあなただつて・・・」

ヘックは勝負事以外であまり、こだわることはないようで、のんきに二人の言い合いを歩きながら見ていたのだ。

【番外編1-13】八時の鐘3（後書き）

二人とも初登場時のイメージを、誰かさんの右手でぶち壊されたような気がするのは私（作者）だけだろうか？

・・・この一文の、誰かさんの右手。知らない人はスルーをお奨めします。

え？ 知りたい？ そんな方がいるなら、「とある」でぐぐれ！！
いえ、ぐぐってください。

すみません、誰か。わたくしめに文才を――！

8 / 8

・・・あれ？　もうすぐこのかくれんぼ編が終わるはずなんですが、全然かくれてねええええええええええ！！

もはやただの鬼ごっこ
www

すみません。とりみだし（??）しました。

お気に入り件数が2つ増えていたので、とても嬉しかったです。未知の40pt突入！、なんてね。

なるべく週一更新を目指しますので、どうか見捨てないでください
ね。作者のメンタルは、卵よりもろいです！

・
・
・
駄文失礼致しました。

【番外編 1 - 14】にぎやかな合流

鐘が鳴った。何の前兆もなく、広い城中に響き渡る。それは朝方にも関わらず室内の人口密度が高い緑の間でも同様のことだった。

リク城に長いこといる者には慣れたものだったが、新参者や新兵達は音の大きさに圧倒されるのだった。魔方阵の真ん中でまだ座り込んでいるビルも同じだった。とっさに耳をふさいだが、急な大音量で耳がキーンといっている。

さっきまで緑の間の壁にもたれていたザナイス・イ・ヒスタ監督が、いつのまにかビルのすぐそば（広間の中央）の数段あがったところで声を張り上げた。

「よし、ここにいる奴ら全員脱落だな。名前確認するから、動くなよ」

しばらく監督が、名前を呼び上げていった。ビルは静かに、耳をすまして自分の名前を呼ばれるのを待っていたのだが、一向に呼ばれない。

立ち上がって、耳の調子がおかしいかと、耳を叩いたり頭を振って見たが正常状態だ。そのうち、名前の羅列が終わる。

「・・・と、これだけだな。それじゃあ、ほかの新兵がここに帰ってくるまで待機。質問あるやつは、いるか？」

「はいっ！」

ザナイスの言葉に反応した一人の新兵が手を上げた。緑の間中の視線が自然に集まった。手を挙げた新兵は短めの貴族らしい金髪をわざとらしくなでつけた。その新兵の周りに貴族らしき取り巻きが数人いる。

「僕には、まだ呼ばれていない新兵がいるように思えるんですけど」
フンっといったようすで、顎でビルのほうを指し示した。ザナイ

スはビルを見やり、新兵をずっと見つめた。

「ふむ。ビリー・ヘンリルのことか？ 彼はこのかくれんぼの性質を見抜き、攻略方法を探して実践するという行動が評価され、脱落者から除外された。説明はこれで十分か、マーニユ・ル・イーグス」

マーニユと呼ばれた新兵はあまり納得していない様子だったが、十分ですといって引き下がった。ザナイスのすぐそばのビルはなるほどー、と頷いた。

「で、質問はもうないな？ 全員確認したら朝食だからなー」
緑の間中の新兵が、喜んで各々の思いを口にした。ザナイスは、リク城付きの騎士と何やら話しながら、また緑の間の壁へと戻るのだった。

＊

はあああ、・・・くそ。ほんつとため息しか出ない。

なあ、主人公にするなら正義のヒーローでいいじゃんか、俺だってそんなの一回ぐらいやってみたいじゃんかよ。

——え？ リーディアに正義は通用しないって？ いいじゃん、ちよつと夢みたって。

現実逃避するなっ？ そりや無理な話だよ。頭のイかれた顔だけがいい、ぜってー変な騎士が満面の笑みで、俺のことを君付けしてくるんだ。他人が見たら、とある趣味があるんじゃないかと疑う・・・いや問い詰めたくなるよ？！

あ、アポシオン。そういえば、アポシオンは？

ハッ！ まさかつ、アポシオンは高見の見物を決め込んでいたのかああっ！！

くいえ、そんなつもりは全く無かったのですが。ご不快なら謝りま

すが>

って、今まで何処にいたんだ、ですか。とりあえず姿を見せてくださいよ。

すると、ひやっとした冷たい感触がまぶたと耳を撫でていった。目を開けると、心配していたような顔つきの先生……いやアポシオンがすぐそこにいた。

<あなた方から見えないところで連絡をとっていたのですが、戻った時に二方の戦いが見えまして、目を奪われてしまったのですよ。気が付いた時には違う連絡がきていましたね>

違う連絡？

<はい。エリムさんの方にもバロシオンという精霊が行っているのです。そのバロシオンから連絡があったのです>

えっ、エリムに何かあったのか？！

<ご安心を。エリムさんに関するものではございませんから。ただ……わたくしたち……精霊に関わることでしたので、心配はご無用ですわ>

そう、ですか。ところでヘックは？

<始めの広間に戻りはじめていますようです>

そうですか。……うん、それで隣にいる満面の笑みを浮かべている騎士さんは、移動しようとか言わないわけなのかなあ？

「はあ、あんた。名前なんていったっけ」

「ツイード・ジョーエル。普通に呼んでくれて構わないよ」

普通ってなんだよ（笑）。あんたの方がよっぽど普通じゃねえのに、普通に呼べとか無理だわ。あ、そうだ。普通に呼べってことは、変人騎士さんって呼んでもいいカンジ？ てか、あんた変人〃普通だから、構わないよな。

「ふーん、じゃあ変人騎士さんって呼ぶことにしとく。で、戻んないの？」

「戻るよ、ジアン君。でも、その途中でワイスたちを拾ってかなきやだよ」

「なんで？」

素朴な疑問を発した俺に、目の前の無駄に美形で、頭がおかしくなちやつてる騎士はふつと笑った。その様子が一瞬、ふつーの人に見えたが目の錯覚だ。うん、絶対にそうだ。

「ワイスって、重度の方向音痴なんだよねえ。だから、彼についてくと一生たどり着けないと思うよ？」

「…………この変人の近くに、まともそうな人がいると思ったらよりによって方向音痴かよ。道に迷っても当てにできそうな感じがしたのに、頼りにならないとかマジで悲しいわ。」

「そうっすか。でも場所、分かるのかよ」

俺が普通の疑問を口にする、髪がクルクル(?) いやくにやくにや?の騎士さんは真つ黒な剣の柄に手を置いた。たぶんあの髪は、そっち側のイケメン君がやるとよく似合ってしまうタイプだと思う。

「この『碧血・黒水』^{ビレネッシュ コクスイ}なら、『紅血・白水』^{デモラッシュ ハクスイ}の居場所が分かる。色こそ違えど、その二振りは同じ金属から出来たいわば、双子の剣だからな」

えーと、ぴれねっしゅ こくすいは銀髪美形(馬鹿)が持つ真つ黒の剣で。でもらっしゅ はくすいは、そのぴれねっしゅ こくすいと双子の剣だって？

うわああ。よくわからん。

「つまりその、でもらっしゅ はくすいを向こうの堅そうな騎士さん……ワイスさんが持っているというわけ？」

普通にいつてくれれば、→の台詞はいらなかったのに……。あと、満足げな笑みを浮かべるのは止めて欲しい。ほんつとにねえ。

あ、あと。口さえ開かなければまともに見える騎士さんに聞こえ

ないからって、俺の考えが読めるからって、アポシオンけらけら笑わないで欲しい。あんだ、立场上読者みたいな感じになってるよ？！<ふふふ。>とっても面白いんですもの、これを笑うなとかいう方が馬鹿ですわ！>

がーん、キヤラ的に一番常識人っぽいヒトに馬鹿つていわれた・・。しかも、先生の顔そっくりだから、残酷さ倍増！！ お前らもこの攻撃を受けてみる！ ありえねえダメージで自分のみお陀仏、弱小パーティーメンバーのやられ様をみるしかないんだぞ？？！！ほんっと、無駄に字数だけ増えてんじゃねーかよ。とつとと、話すすめようぜ。

「それなら、道案内よろしく・・・」
「わかったよ」

・・・今思ってたんだけど、こいつにわざわざついていく必要なくね？ アポシオンがおそらくの居場所がわかってるみたいだから、アポシオンに案内してもらえば全員と合流するのに一番の近道じゃ——
うわあああああつ！！ 自分のまぬけさにホント頭にくる。

アポシオンにつこりと、ご愁傷様ですといわれてorzのポーズがふさわしくなっていた・・・。ですよねー！。

数十分後。見事ヘックたちと合流した。

え？ その間になんかあっただろって？ 俺の心の中の悲しい葛藤が、な？ あったんだよ。文字に表すと無駄に話が重くなるんだよ。

ヘックたちは黒髪黒目の侍女さんが先頭に歩いていた。ワイスさんは方向音痴だからか。その人はマリと呼ばれていた。ワイスさんと、マリさんと、そーいえば副班長と呼ばれていたなあ騎士さんはなんだか知り合いらしい。

ワイスさんとマリさんがくだらねー口の攻め合いをやっていて、そのいちいちに副班長な気がしない騎士さんが変な方向に口を突っ込む。この一連の動作がなめらか過ぎて、逆に怖い。

こんな感じだ。

「ほら、わたくしの案内のおかげでツィード様たちと合流できましたよ」

「何をおっしゃる。ただの運でしょうが」

「二人はこうしても変わらない気もするケドねー」

「ワイス様は、この合流がご自分のお手柄だとしても、思いなんですか！　なんて傲慢なんでしょう」

「そういうマリ殿が、思っていらっしやるのではないのですか！　人に自分の妄想を押し付ける癖は直した方がいいと思いますが？」

「二人、付き合っちゃえばいいのにねー」

「馬鹿なことを！　！」

「ほらほら、息ったりだし」

昔がどうだったのか気になるけど、わざわざ尋ねようとは思えない。朗らかに笑うヘックに聞いてみたが、曰く二人はさつきからずっとこんな感じなだけんど、おもしれえからいいんじゃねえとのこと。

まあ、いつか。いやー、合流できてよかったよかった。

あれ。ワイスさんと顔が緩みまくってる馬鹿騎士さんの持つてる剣がひかって、る？　そういえば双子の剣とか言ってたよな。磁石みたいに引き合ってるのか？

そういえばアポシオンは、二振りの剣のうち一振りに宿ってるんだっけ。それに、あの黒い剣・・・なんか色々と言ってなかったか。『人間の感覚は・・・うんたらかんたら』とか、奴は自動整理とかいってたけど。

似てる？ 双子の剣と、ビルの持つてゐる二振りの剣が、似てる？
かも、しれない。

どういうことだろ・・・・・・・・・・？

まっ、魔法とか興味がない俺には関係ないか。

あつ、エリム発見！

俺が手を振ると、赤毛のエリムが手を振りかえしてくれた。

【番外編 1 - 14】にぎやかな合流（後書き）

こんにちは、毎度書かせていただいています笹沢です。

ジアスの一人称はやっぱり、書いててとても面白いですし楽しいです！ でも、ヒアの一人称も捨てがたい・・・（笑）。

あれ。今更気づいたけど、一人称キャラの周りに同じ人種の人がwwww

くそお、これではワイスをマリの前で幾分かはっちゃけさせないとやっぱり、ツイードは謎だ。書いてて何処が本当か見えなくなる。

書いてる本人が謎とか言ってたら、この話おわらねええ！
支離滅裂な内容ですが、近いうちに修正したいです・・・。
では、また来週お楽しみに。

8 / 22

今日更新するはずだったのですが、このところ謎の接続障害に悩まされており、今週分が遅れることになってしまいそうです。やっとつながったので、お知らせに参りました次第です。今週分だけでなく、どんどんずれてしまう可能性が！

楽しみにしてらっしゃる方（もし・・・いらっしゃるのならば）、本当にすみません。それで、また残念なお知らせがあります。

話の都合上、この番外編 1（三ヶ月の訓練分です。かくれんぼ編のみではないです）が終わらない限り、ビルたち&あそこの兄妹のお話を進めることが出来ません。

それで次のような感じになると思います。

かくれんぼ編終了

←

間章（ここで、週一のバランスを取り直したいのですが・・・）内容はのちほど

←

七章（これは、前回の予告どおり七章が入りますが、内容はry）

←

番外編1をすすめる

間章ですが、ここですれてしまったペースを整えるため、若干遅くなる可能性があります。内容は、とある隊長さんです。

七章の内容については間章の更新の頃に・・・

では、本当にすみませんでした。なるべく、遅れないようにします・・・。

【番外編 1 - 15】かくれんぼ終了

駆け寄ってきたエリムの脇には、背の高い金髪の男の人と目をひく緑色の髪をした少女がいる。感覚的にいうと、多分男のほうが精霊のバロシオンということか。それで、そっちの女の子は？

「うん、今日知り合ったばかりなんだけどね。エーシャっていうんだ。エーシャ・アデシヤ」

あれ、なぜ俺の考えが読めるのエリム？ それになぜにそのエーシャちゃん、を見る目が熱っぽい？

「そこの子は誰、っていう目で見てたじゃん。それで、エーシャ。こっちは文官の見習い期間の部屋で同室者だったジアンだよ、ジアン・マクシア」

あつ、エリム！ 何気に軽くスルーするなよ。てか、今日初めてあつたんじゃなかったのかよ。

「あつあの。初めましてジアンさん。エーシャ・アデシヤです、呼び捨てで結構です・・・」

「あつ、こちらこそ。エーシャ、でいいのか。ジアン・マクシアですって、お互い敬語はなしでいいこうぜ」

「あ、は・・・うん！ ジアン君よろしくね」

いやあ、やっぱり立場的に女の子に君付けされるほうが、すんなりいく。まあ、俺は友情フラグしか立てないぞ？ てか、そっちのほう期待するなよ？ ストーリーの主筋はあくまで（アクション）ファンタジーなんだから、二股なんやら三角関係を期待するのは見当違いだ。そっちを期待している人は、作者に直談判するしかないぞ？

「ヘックー？ そこの三人漫才も面白いけど、こっちも面白いぞー」
とりあえず、面白くする為にヘックを呼んでみた（笑）。他人の

目から見ても息ぴったりな三人の後ろにいたヘックは、面白そうということでこっちによつてきた。まずは紹介しておく、面白くね。
「ヘック、このこエーシャ・アデシヤ。エリムの思い人なんだって」
ボツと同時に顔を赤らめたファーストネームがエの二人。もしかして、このために二人の名前がつけられたのか?! 計画的犯行? まあいいや。ヘック、ナイスなコメントを頼むぜ。
「へえ? (意味ありげな目でエーシャの頭からつま先を見ると親指を立てた!) まっ、身の危険を感じたら逃げればいいんだかな。俺はヘック・カーロンっうんだ。よろしくな」

うおっし。固まった! ヘックにあとでこっそりグッジョブって言うっておこう。

「なっ・・・なっ」

エリム、しばらくそのまんまでいいよ。面白いからー!!

あはははっ、もう笑いがとまんねえ!。ヘックも口元を必死に押さえて笑っている。

「ぼッ僕達で遊ばないでくれっ!!」

「ぶっ! くくくくっははははは」

あー、もうだめ。喉が痛いし、笑うのやめよ。

あ、やっど動き出した。城のなかが分かるのは、変人騎士さんとマリさんだけだから、あの三人が今先頭にいる。その後ろに精霊の二人が、俺にはまったく分からない謎の言語で話し合ってる。

漫才をしながら、呪文みたいなごによごによ声に耳を澄ましている三人。いそがしーね。

「あの、それで。あの騎士さんたちは、どなたですか?」

「そっそれ! 僕も思った。騎士って鬼じゃないの!?!」

あー説明するの面倒だな。ヘック、いってやれよ。

「ジアン、面倒くせえなんて思ってたのか? 俺はあ説明しいひんで」

なんでや。いいじゃんべつにー。説明するぐらい、やったげればええのに。

「なんで、おめえも訛っとるのや。ていや、ぼそぼそと不気味に呟かんで」

呟いてなんかおらんわ。

*

まぶしい金色の光が、リク城全体に差し込んでいく。リク城の敷地で一番高い塔の一番上には鐘が備え付けられている。城の人々はこの塔をイーゼル塔と呼んだ。塔のなかに、当時のディオン当主の婦人イーゼルの部屋があったことから、そう呼ばれている。

塔の屋根に、帽子以外ピンク色の服を着た少女のようないでたちをしたシャスールが立っていた。高所ゆえ強く吹き付ける風にもびくともせず、風になびく髪を触れた。その直ぐ下、鐘をつくための所ではレベッカが下を見下ろしていた。レベッカの足元に昏倒している兵士がいるが、空気と同然に扱っている。

「ねえ、レベちゃん、ちゃあんとウタ聞こえたかなあ」

「聞こえたはずよ。あたしのウタ、失敗したことないんですもの」

シャスールは、どこからか箒を出現させそれに飛び乗った。箒は宙に浮いたまますいーっと空中を移動して、塔のまわりをまわった。なにやら某魔法少女みたいだが、スルーする。

「でもさあ。前はネイロでやってたしい、補助具もあったからねー。ちよつと心配」

「大丈夫なはずよ。前は、遠距離の連絡だったから色々と頼る必要があったわ。だけど、今回は距離が近くて、ウタ声を防ぐような芸当が出来ない未熟なやつらだったじゃない」

長いレベッカの黒髪が、まるで生きているかのようにうねった。

シャスールは、レベツカの目を正面からみつめた。

「そう、かなあ？　まだまだ未熟っていうのは否定しないけどお、ワタシたちみたいな長いこと生きられる人じゃなくて、そこの兵士とかに對して精霊チャンを使うのは得策だと思ふよ」

「何？　精霊が個人的な知り合いだから^{ひいき}贖^{ひいき}しているわけなの？」

少し問い詰めるような厳しさを持ったレベツカを一蹴するように、シャスールは声を立てて笑った。その様子に、レベツカがむっとした。

「そんなわけないじゃん？　だってワタシの——ボクのご主人様が褒めておられるから——ワタシも褒めただけだよ？」

*

俺が仕方なく、赤鬼とかいうものの説明して、どうこうなったのかってという報告を試みたら、ちよつと氣になった。

「そういえば、ヘック。結局勝ったの？」

「いんや。でんも、アレが試合やなくて決闘やったら俺が勝ってたんだろ」

「……それは、つまり？　殺してもいいような戦いだったら、迷わずいけたと。」

あー。つまりは、人を殺した経験があると、ね。いやあ、いつになく久しぶりのシリアスな氣がするが、まあいいや。

「まあ、殺伐とした詳細は聞かないことにするよ。それで、エリムたちの方はどうだった？」

うん、と頷いたエリムが比較的簡単に説明してくれた。俺より断然説明うまいなあ、おまえ。

「二人と分かれてから、鬼をひきつけながら走ってたら室内訓練用

みたいな部屋にたどり着いたんだ。それで鬼に触れないで振り返ってやるうかと思いついてね」

「ほえー、エリムがやるなんぞいうからには、思いっきりやられたんやろなあ」

エリム。かすかに口元をあげる様子、とっても怖いよ！？ あんまり怒らせないようにしよう、うん。

「とりあえず、鞘に入ったまんまの剣で急所を打つといたよ。もうしばらくは目覚めないんじゃないかな。そうしたら、不思議な気配というか力を感じたんで振り向いてみたら、精霊がいてね」

あ、エリム、そんなのを感じ取れるのか。すごっ！ なんか俺、二人に比べて経験不足だな。いや、年上ってこともあるんだろうけどさ。一年でも、差があると結構違うもんなのか？

「バロシオンが、ビリーの使いだつて聞いたくらいかな。そのとき彼女、エーシャが飛び込んできたんだ」

「ちよつと、待て。それが二人の初対面？」

俺が鋭く突っ込んでみると、エーシャが案外きっぱりと言った。

「ちっ違っの、ジアン君」

「え、じゃあ。いつ出会ったの？ いや出逢ったんだよ？」

俺の、なんかアレな言い方（笑える！）。まるで、もう付き合っちゃってるおーゴールイン寸前のカップルに出会いから聞いているみたいだぞ？

俺のごく普通（？ いやまあね、相思相愛の二人を対象として言うことにおいては普通）の質問に、名前の頭文字にエがきて、並ぶと容姿が反対なお二人は、初対面の場面が色鮮やかによみがえったのか、さっきに勝るとも劣らない勢いで、まくし立てた。

「あっあっあの！！ そっそんなことよっよりも、いいいまはえっエリムさんのお話！！ そう！ おはなし、聞きませんかっつー！！！！」

きッ聞きますよね！！」

「そ、そうだよ！！？　ぼッ僕の話聞いてくれよ！！　そもそも僕に話を催促したのは！　君じゃないか、ジアン！！」

「あはー。名前の頭文字にエがきちゃうお二人さん、そんなに必死だと逆にヤマシイことがあるみたいだけどなー」

「なー」の部分で俺とヘックが同調してみると、二人は顔を赤くしたまま勢いを失った。いやー、合流できてよかったよ。

そんなこんなで、ようやくたどり着きましたー、あの広間。このまんまだとダラダラつづくので、一部省略しているが、気にするなよ。

わきあいあいと俺達が、マリさんを先頭に緑の間に入っていくと壁際に並んで立っている騎士達がすげえ驚いたような顔をしている。たむろっている新兵達の中にビルを見つけた。俺は駆け寄って、ビルのわき腹に鉄拳を食らわせてみた。

ぐぬうううつとわざとらしいうめき声を上げたビルの顔には笑いが浮かんでる。その顔がちよっとムカついたので、頭をはたかせてもらった。

「あのなあ、そういうふうにするなら合図やら何やら、ちゃんとこちにしてからしてくれよ！」

「だってさあ・・・、『剣のなダッ！』——つってえな」

ビルが愚かにも、秘密をばらそうとしたので足を踏んだまです。

てか、秘密にしようって言い出したのはお前だろうが。だから、んな目でみるな。

「ボケ！　口をつぐんでろ、馬鹿！！」

「ジアン、いつにもまして暴言が多いぞ」

だあああああつ！　絶対あの馬鹿のせいだー！！

「ジアン？　ジアンってば」

「ジアン？　ひじょーにめだつとるんだが？」

・・・俺は一体、何を？　していたんだ。てついうか、大原因はやっぱビルだろうが。

はぁ、もういいや。とてつもなく疲れた。ということでおとなしくするから、どうぞ続けてくれ。

それからパラパラと数名のの新兵が帰ってきた。え、構成がぐだぐだすぎるって？　しかたないだろーが。

もう疲れたから、寝たい。ふと、瞬きするときに誰かの視線を感じた。それほどはつきりした悪意は感じないけど、好意を向けられているわけではない。

ビルは、・・・気づいてないのか。まあ、仕方ないといえばそうなんだけどな。あーもうなんか、思考がぐるぐるする。

ここって緑の間のほぼ中央だからからか、やっぱりこつちに視線が集中している気がする。

俺がいろいろと考えている間に監督さんが真ん中の台の上に立った。

「よし、新兵全員集まったな。それじゃあ食堂へ移動する。必ず遅れずについてくること！」

そう言い放つと、壁際に騎士と同じように立っているマリさんに二言三言葉をかわしてまっすぐに扉の出口へと進んでいった。マリさんは進んでいく監督に頭をさげた。

監督の後ろに多くの騎士が付いていき、それにつられるように新兵達もそろそろとついていく。

・・・これで、かくれんぼは終わり、なのかな。

「ワイス様、どちらに行かれるのですか？　食堂は、というか出口はあっちですよ」

「ふうむ・・・、自分の方向感覚をくるわせている輩がいるようですが。まさかっ！　・・・あな（以下略）」

変わった様子がないのは、マリさんとワイスさんだけだった。

T o b e c o n t i n u e d .

【番外編 1 - 15】かくれんぼ終了（後書き）

遅れてしまい申し訳ありませんでした。一日おくれで番外編 1 - 15 をお送りいたします。

サブタイどおり、これでかくれんぼ編終了となります。なかなか、進まないなかつとうとう 50 話目となつてしまいました。

本当に自分の、文をまとめる力のなさにがっかりします。ほかのすばらしい作者様方は、苦勞しておられながらもこつこつと書き上げていつていらつしゃるというのに！

次回について、1 - 14 のあとがきに昨日付け加えさせてもらったのですが、ここでもいつておきます。

接続障害により、今回分が遅れてしまいました。なんとかつながつたので、更新しておりますが、週一日曜更新がだんだんに慣れてきた頃に、コレを崩すのは良くないと考え、次の更新は必ず日曜日とします。

もし、今度の日曜をすぎてしまつてから、次回分の文を書き上げたのならば、次の日曜日に更新という形になります。このたびは本当に申し訳ありませんでした。

次回の内容ですか？ 自己満足のようですが、とある隊長さんと副隊長さんになります。つまり、間章という形です。

それでは、早めにお会いできることを願つております。

8 / 30

なろうに入ってから、一年がたちました。ということとでちょっとした記念といたしまして短編を書きました。ここの話とまったく接点がありません、が宣伝ですorz・・・

作者のマイページから探せますので、暇つぶし程度に見てやってください。

・ ・ ・ ・ ・ おそらく今週の日曜にはあげられると思います。 リオ
ンが。 ではなく

【第7章1】ゆるやかな歩み

目を開ける音がした。レベツカは瞬きを数回繰り返し、上を見た。上はごつごつとした洞穴の一部だ。目がそれを認識すると、レベツカは昨日のことをさらっと思い出しながら体を起こした。

（そう、この風変わりな二人と会って。一緒に寝させてもらったのよね、たしか）

思いながら、今だ毛布に包まっているニイラと、腕に何かの布を巻きつけている 그레이を見た。レベツカは、自分で持ってきていた毛布を片付け、 그레이のところへ行った。 그레이は、布を巻き終わると近づいてきたレベツカに向いた。

朝の挨拶を告げたレベツカは微笑んだ。長い間挨拶を交わす相手のいなかった旅を続けていたせいかな、 그레이は一瞬とまどいながら、そして口ごもりながら挨拶を返した。

朝から陽気に笑うレベツカの姿に、 그레이はふっと目を疑った。どこかで見たことのあるような気がしたのだ。だが、そんな感じは直ぐに消えた。

（全く・・・、最近はこの者らといると、消えた記憶とやらが浮かんでは沈んでいく。それはまるで、餌欲しさに水面に浮かび上がる錦鯉の如く）

レベツカは 그레이の心中を知ることもなく、 그레이に尋ねた。

「ねえ、アーナスさん。ここの近くに川はあるか知ってる？ 私、顔を洗う水とか飲み水を貰ってよかったと思っただけだね。あつ、あなたたちの分も持ってこようか？」

「ああ、その茂みを少しばかり南へゆけば小さい川があるはずだろう。わたしの分も持ってきてくれるのならば、ありがたく頼もう」
 그레이は自分の荷物から水筒を取り出して、レベツカに手渡した。

自分の水筒とタオルを抱えたレベツカは、グレイのも持って茂みの中へ小走りでいった。

グレイは、遠ざかるレベツカの気配を感じながら、そろそろニイラを起こそうと足を向けた。グレイが近づくと、ニイラが寝返りを打つ。どこかで鳥が歌を口ずさんだ。鳥の鳴き声が、なぜか耳新しくグレイは振り返った。

朝の為か色が若干薄めの青が上に広がり、おぼろげな厚みのない白い雲が高い空に吹く風に流された。全てが映える空に、鳴き声のもとと思われる鳥の姿はない。

それでも、なぜかグレイは空を見つめている。グレイの顔のすぐ横を風は通り抜けて、洞穴の直ぐ前の茂みの隙間に入り込んだ。木の枝がほかの枝の葉や幹に当たって音を立てた。

ニイラが少し、うなった。体を動かしながら、声が出ている。そして、ニイラのまぶたがピクピクつと動いてつぶらな瞳に、朝日が入り込んできた。体をゆっくりと起こしたニイラのすぐ前には、空を見上げるグレイがいる。衣擦れの音に振り向いた。

「お早う、ニイラ」

返事を返そうと思って、口をひらこうとすると体が無意識に動いて、ニイラは痛いと声を上げた。グレイは豪快に笑った。初めて野宿した者は、同じように痛みを訴えた。グレイも初めてのときも、うめきあげたものだ。

「うう。おじさん、ひどいよー笑うなんて」

頬をぶくつと膨らせた様は、子供らしく愛らしかった。痛いと言いながらなんとか立ち上がったニイラは、花のように可愛い笑みをグレイに向けた。

「おはよう、おじさん！」

レベツカに朝の挨拶をされたときよりも、面食らったグレイ。や

はりニイラと重なる一人の女性。高めの声が耳元でいう。『おはよう、グレイ!』という声が鮮明に聞こえたが、グレイにはそれが幻聴であることは分かっている。

「どうしたの? 腕以外にどこが悪いところでもあるの、あたしには見えないけど?」

大きな瞳でグレイの顔を覗き込むニイラを再び見ると、幻聴も幻想も掻き消えた。目をしばたかせたグレイは首を横に振った。腕はまだ痛むが、顔色を悪くさせるほどひどいものではなくなっている。

「いや、この腕の方はあまり痛まなくなっておる。どこも痛いと感じるところはないぞ。お主の気のせいだ」

「そう、なのかな。それなら、いいけどね」

ニイラは段々からだの痛みにもなれ、腕を振り回したり飛び跳ねたりと、元気いっぱいである。しかし、グレイの様子が微妙に違うことに気づかないほど幼くは無かった。

話題を変えようと、ニイラの口から出たのはごく普通のことだった。

「あつ、おじさん。レベツカおねえちゃんは、どこに行ったの?」

お、おねえちゃん・・・? とグレイは一瞬耳慣れない単語に首を傾げたが、すぐにニイラがいう『おねえちゃん』とはレベツカだと思い当たった。グレイは簡単にどこへ行ったか説明した。それを聞いたニイラはそうなんだ!、と言いながらグレイと並び立った。

そして先程のグレイと同じように空を見上げた。目を輝かせて青空を見上げる様は、初めて空というものを見たというようだった。

「ニイラ、お主空を見たことがないのか?」

くすりと大人びた含み笑いをグレイにみせたニイラは、また空を見上げこういった。

「そんなわけ、ないじゃん。ただ、ね。こんな時間に、じっくりと空を見つめたことがなかったの」

そしてグレイは、ニイラが農村の家で引き取られていたことを思い出す。農家であれば朝の早い時間から、起きだして畑に出て働いていたリ針仕事に精を出していたりしていても、不思議ではない。というか、当たり前だ。

一人納得したグレイが視線を前の茂みに下げると、ニイラが気づいたように声を上げた。

「あつ！ レベツカおねえちゃんが帰ってきたよつ！」

『^{ロディーヨフ}生命の根源』を持つニイラは多少の障害物があつても、そのものが持つ『^{ロディーヨフ}生命の源』が見えるのだ。それぞれが持つ『^{ロディーヨフ}生命の源』は同じ種族や種類のものであつても、個々多様でそれを見分けられるそうだ。

元氣いっぱいに、茂みに隠れてこちら側から見えないレベツカの方に駆け寄るニイラ。数個の水筒と皿のような物を持ったレベツカは、いたずら好きの子供のような目で立ち上がった。

「あーあ、ニイラちゃんはどうして分かるのかしら。こんなにあつさり分かれちゃ、盗賊なんか成り立たないわけね」

レベツカは持っていた水筒を幾つかグレイに渡して、皿はニイラに差し出した。皿を可愛らしい様子で覗き込むニイラに見えたのは、ときどき揺らめく自分の姿だった。皿の中には水が入っていたのだ。レベツカがニイラに顔を洗う為の水だというと、素直にお礼を言つてパシャパシャと自分の顔に水をかけた。

タオルを用意せずに水を顔にかけてしまったので、あつとニイラは顔をあたふたとさまよわせた。その様子が実におかしかったので、くすつと笑いながらレベツカが自分の使い終わったタオルで、ニイラの顔を優しく拭いてやった。再びお礼を言つたニイラの頭を、そつとなでたレベツカはグレイの方に向いた。

グレイが何かいいたそうだったので、向いたのだ。

「えっと、アーナスさん？」

「ああ、レベツカ嬢。お主の目的先を知りたくてな」

グレイのえらく丁寧な『レベツカ嬢』に反応したレベツカは、ぶんつぶんと両腕を振ってみせた。

「わっ私、そんないい人じゃないって。さっきも言ったと思うけど、盗賊やってたって……」

「聞いておった。まあ、呼び名が気に入らないというのならば、単にレベツカと呼ぶことにしよう。して、レベツカ。見受けたところお主は、目的があつて旅をしているのであろう？ その目的地を教えてはくれぬか？」

別に隠すことも無いので、レベツカは正直に答えた。

「うん、いいけど？ 私は、ヒーディオンの首都近くにある村に用、というかその村にいる人に会いに行くの」

ヒーディオンの首都近く、そして村という単語にグレイの眉がぴくっと動いた。もとの仕事柄、人を観察する癖がついているレベツカには、それが僅かな動きでもちゃんと見えていた。

「偶然だな、わしもその辺りに用があるのだ。そうなれば、お主も途中まで共にゆかぬか？」

レベツカにとっては願っても無い話だった。彼女は若干の方向音痴であり、何年も住んだ町でもなければ方角をよく間違えてしまうのだ。方向音痴のおかげで、オメガからアーリアへと国境越えをし、こうしてグレイとニイラに出会ったのだが、それは彼女の知る由もなかった。

「ありがたいわ。私、見知らぬ土地ではよく道に迷うから。じゃあ、これからしばらくよろしくね」

グレイとレベツカの話のすぐそばで聞いていたニイラが、それを

聞いて喜んだ声をあげた。子供さながらの元気で、レベツカの腰に飛びついた。レベツカは笑いながら、飛びついてきたニイラの脇に手を入れて体ごと持ち上げてくるくるとまわった。ニイラが歓声をあげる。

二、三回まわり終わって優しく地面に下ろしてやると、ニイラが不満を訴えた。それさえも可愛くてレベツカはにっこりと笑って何も言わなかった。

出発の準備を終わったレベツカとグレイは、昨夜の野宿した痕跡を隠す作業をしていた。食べた食料の欠片などがこぼれていないようにし、火をつけていた焚き木をまわりの茂みに隠したりしていたのだ。

グレイが正体不明のものから追われているということを、至極簡単に説明されたレベツカは慣れた手つきで痕跡を可能な限り隠した。盗賊だった、という事実を思い出したグレイはレベツカに声をかけた。

「レベツカ」

「うん、なあに？」

「盗賊をやっていたそうだな。ならば、逆に襲われても返り討ちにすることは可能か？」

レベツカは作業する手をとめ、まばたきをした。ひと呼吸のあいだに何を想像したのか、軽く頷いた。

「うん。よほど酷い怪我を負ってなければ、大丈夫だと思うよ？」

もともとオメガという治安の悪く、盗賊の集まる場で盗賊業をやっていたレベツカは、手ごわい盗賊のやり方を知っている。一瞬、仲間達が思い浮かんだが、自分の手で握りつぶした。

軽い調子で言った様子にグレイは安心して言った。

「それでは、ニイラに護身術程度でよい。身の守り方を教えてやっ

てくれ

【第7章1】ゆるやかな歩み（後書き）

普段より台詞が少なくなっております、仕様です。

この三人の絡みは、すごい癒されます。時間がとつてもゆっくり進むので、描写に力をいれてみました。スローペースな感じが伝わっているでしょうか。

特に、ニイラに癒されます。ジュディー（幼少期）がなんだか色々元気すぎるというか、妙に大人っぽく妙に子供っぽいので、天真爛漫でちよっぴり頑固なニイラは最大の癒しです！！

（→言い切った・・・笑）

いやね、ジュ&ドラ&モデとヒアの絡みは、書いててほんとーに楽しいですよっ？！

だからっ！ ジュディーちゃん、そんな目でこっちこないでえええっ！ しかも真剣だしっ！？ せめておもちゃの木刀で、お願いします！！！！

・・・ほ、っほら！ そこにヒア君いるし！！ 鍛え害があるのはヒア君なんですよおっつっ！！？？

——暴走気味なジュディア（幼少期）はヒアのほうへ神速で駆けていったとき。ヒアは数時間後、モデランとドラントに引きずられてベッドに投げ込まれたそうだ。

【第7章2】ゆるやかな流れ

彼らは、荷物を肩にしょい出発した。方向を北、正確に言えば北東に定め、その日の簡単な計画を立てて歩き出していた。

レベツカは、常に腰につけている小さなバッグから、短刀をとりだして鞘ごとニイラに手渡した。ニイラはそれを受け取り、しげしげとそれを眺めた。よく見ると短刀と鞘がぴったりと合っていない。「この鞘、このナイフとあってないみたいだね」

「ナイフじゃなくて短刀よ。包丁みたいに峰と刃があるでしょ？私はその短刀を使うのは、相手に投げる為だからいちいち鞘を拾っている暇が無かったのよ。それで大体おんなじ長さで大きさだった短剣の鞘が余ってたから、その場しのぎでね」

そう、短刀と鞘があっていないことを説明したレベツカは、同じような短刀をまた腰のバッグから取り出した。そして、握り方を丁寧に教えた。

見よう見まねのぎこちない手つきで短刀を握るニイラに、レベツカがふと思いついたように尋ねた。

「ニイラちゃん、あなた利き手ってどっち？」

「ききて？」

短刀をもつ右手を開いたり閉じたりしながら、無垢な目でニイラは隣をあるくレベツカを見つめた。そんな目で見つめられたレベツカは、戸惑いを覚えてため息をつく。ニイラはそれを不思議がつて首をかしげる。レベツカは困ったように、短刀を持っていない手で頭を抱えた。

レベツカにとって、ニイラは幼すぎて穢れなんてほとんどま

ていない存在に思えた。だから、これからニイラを汚れさせていくようなことをしてもいいのだろうか、と不安に感じたのだ。

「・・・ねえ、ニイラちゃん。私はこれからあなたに自分の身を守る術を教えようとしてる。だけどそれは、守るだけじゃなくてあなた自身をも傷つけてしまうかもしれない。それでもいい？」

立ち止まったレベツカの口から出た言葉に、グレイも振り返った。ニイラは、伏し目がちに手の中の短刀を見つめるレベツカの目と自分の目があうように、レベツカのすぐ前に立った。そして、レベツカが強く握り締めている短刀を驚くような力でもぎ取った。

それにびっくりしたレベツカがニイラに視線を向けた。ニイラはレベツカと目を合わせたまま一步下がった。レベツカが持っていた短刀を握っている手をすつと前に出す。すると、合わない鞘が地面に滑り落ちて音を響かせる。

「おねえちゃん。あたしね、守ることも傷つくことも知らないっちゃな子供だよ。だけど、あたしはあたしを守って代わりに傷ついでくれたひとの姿を知ってるもの。知っているからもう見たくない大切なひとが傷ついてしまうところなんて」

レベツカがか細い「あ・・・」という声を漏らした。ニイラが刃むきだしの短刀を前に出し、レベツカの目の前で仁王立ちする。風がニイラの長い髪をなびかせた。

レベツカは震える手を口元に無理やり近づけ、乾いた声で笑った。それは直ぐに止まる。顔をさつと引き締めたレベツカは真剣に言った。

「ごめんなさい、ニイラちゃんの覚悟を疑うような真似をして。今の言葉、忘れて？・・・おねがい」

「・・・うつん、忘れない。だってそれは正しいことだもん。ちゃんとこのところのおいておくよ。さっ、おねえちゃんどうやって持つか教えて？」

ニイラは刃がでた短刀の柄のほうをレベツカに差し出した。レベツカはニイラの顔をみて微笑むと、短刀を受け取った。そして何もなかったように、教え始める。

「利き手が無いなら、両方いけるね。じゃあ、まず右手から・・・」

グレイは髭の下で口を僅かにゆるめ、前を向いた。

そして何も無かったように、三人は歩き始め道はゆるやかに進んでいくのだった。ゆるやかな、ゆるやかな。流れは、そう。止まることを知らないが、はじめのうちはとてもゆるやかで、ゆるやかで流れのさなかにいるその人々はまだ、流れには気づかない。流れの外にいる人々は気づき始めた。その流れがいずれ大きくなることに。

*

日は傾き西の空が赤く染まり始める。長い雲がほんのりと桃色に色づき、まだ青いところはアーリアとヒーディオンの国境になっているポールレ山脈の後ろに隠れた。そのころにはもうすぐ近くに、割と人の出入りが多そうな町が見える。そこがその日に泊まる所となった。

町の入り口となる門の脇にはとても大きな壁が築かれている。高めの門には町の衛兵が槍を持って、構えている。

ニイラは歩きながら、今日のうちでとても仲良くなったレベツカに話しかけた。

「ねえ、あのおっきな壁は何？」

「あれ？ あれは、城壁ね。あそこの町やその町の中にある城を守る為に作られたのよ。ほら、あの壁よりも高い建物が見えるでしょ？ きつとあれが城ね」

ニイラに分かるよう簡単に説明したレベツカは、一歩先に行くグ

レイの隣に並ぶと小声で聞いた。

「あの町、衛兵をおいてるってことは、当然通行者の身分証明を求めるわよね？ アーナスさん、もってる？」

グレイはそつと頷きズボンのポケットから、ちらりとそれらしき物を少しだけ見せた。レベツカは確認すると、ニイラのほうを盗み見た。

「あの子の分もってるかしら？ 無いのなら、もっともらしい言い訳を考えなくちゃ」

「いや、わしは持つておらん。門についている衛兵が少ないゆえ、なくても軽く注意されるだけであろう。だから、それほど警戒しなくてもよい」

レベツカは注意深く、門の前に立つ二人の衛兵とグレイを見比べたが、今見てみるとただの見張りにすぎないように思えた。ふうつと息をついたレベツカは、短刀を刃が出たまま靴の中に差し込んだ。それをみたニイラが、後ろから小さな悲鳴を上げる。

「おっおねえちゃん！ 靴の中にたんとう入れちゃってだいじょーぶなのっ？！ 刃がでたまんまだったよね」

首をまわしてニイラをみたレベツカはにつこり笑って、さつき短刀をいれた靴を振って見せた。ニイラ顔色がやや悪くなる。

「大丈夫にきまつてるじゃん。この靴のなかには、こういう短刀を収納するポケットがついてて、私の足をまもってるのよ。ふふっ、ニイラちゃん。そんなに驚くこと無いのにねえ」

いたずらっぽい笑みはニイラのほかに上気した頬をふくらませた。アハハハハツという、心から愉快そうな笑い声をレベツカははじけさせ、ニイラはちよつと不機嫌そうに眉根を寄せながらも、口元には笑みを浮かべている。グレイも目を細め、深いしわの入った頬を上げさせた。

そんなこんなで町に近づきながらこの旅を楽しんでいる三人は、

すでに門の前にたどりついた。槍をもった衛兵の一人が三人に声をかけた。

「旅の者か？ 身分を証明できるものを提示せよ」

レベツカとグレイがそれぞれ身分証明書を衛兵に見せると、衛兵は頷き一歩後ろにいるニイラに気づいた。あごでニイラを指し示しながら、二人に尋ねる。

「後ろの者は、二人の連れか？」

レベツカがためらいも無く肯定した。衛兵はレベツカにニイラの分の身分証明をもとめた。

「あら、ごめんなさい。この子の分、持っていないのよ」

と、軽い調子でレベツカがいうと衛兵はふんつと、あまり機嫌がよくない様子で鼻を鳴らした。衛兵がいらつき気味で槍の柄の方で地面を叩いた。

「まあ、いいだろう。祭りも近いから旅人も多い。いちいち警戒していたらこつちの身がもたない。通れ、そしてようこそ我らがリロイ領主様の町へ」

衛兵の脇を通り抜け、町の中に入った三人は暗さを増し始める空を尻目に宿を探すこととなった。とはいっても、すぐに見つかった。＜永久の風見鶏亭＞という宿で、屋根に塗装がはげ気味の風見鶏がある。

三人が＜永久の風見鶏亭＞の扉を開くと、酒や汗、ほのかに甘ったるい香水のにおいがした。むっとした熱気に包まれている。カウンターにいる宿の者は忙しく一階の酒場部分の注文を聞いてまわっては、奥に大声で叫んでいる。多くの客が酒を手にして、大騒ぎしている。

ニイラの手をそつとつかんだレベツカは、まわりの客の間を縫うようにして先頭に行くグレイに迷うことなくついていく。グレイはカウンターまでずんずん進んでいくと、ポケットから銀貨を数枚取り出して無造作にカウンターに置いた。お金独特の金属音で、宿の

者が飛びつくように現れた。

「はいっ！ お客様でしょうか？ 何をご注文で？」

商売者らしい笑みを浮かべた宿の者に、グレイは無愛想に答えた。彼は普通必要なことしか口にしない。だから、こういう根っからの商人と世間話をするような性質^{タチ}ではない。

「二部屋頼む。朝食付きだ」

それを声音から感じ取ったのか、宿の者はすぐに頷き三人を二階へ案内した。案内するとそそくさと一階の喧騒にまぎれていった。

それぞれ、部屋に入った三人は荷物を置くとまた出てきた。さきに食事を済まそうというのだ。

階段を降りながらレベツカはグレイに聞いてみた。

「追われているんでしょう？ なのに泊まってるの？」

「無理に野宿ばかりしては、その線で捜査されやすい。野宿と宿泊を同じくらいの頻度ですること、向こうの捜査の手を分散させる。そうすれば、見つかりにくくなる」

グレイの理論に納得しながら一階に着くと、また騒音の最中に引き込まれる。

空いている席に適当に座ると、酒場の舞台となっている所に奇抜な人物が立っていることに気づいた。黒くてつばの大きい帽子を被っていて目元が見えない。僅かに見える顔の顎には髭が生えている。人物がまとう、多くの色で塗りつくされた裾の長いマントやローブのような服が、その男の全体をおかしく見せている。

拍手となにかを求める口笛が酒場中から沸き起こった。客達の視線は舞台の謎の男が、手に握られたグラスの中の酒に注がれていた。そういった拍手などに答えるように男は深々と宮廷風のお辞儀をして、低めの声で言った。

「さて、みなさんありがとうございます。しかし、私の方も疲れて

まいりましたので、次の詩でおしまいとさせていただきますよ」

どうやら、この男は詩人のようだった。客の間から残念そうな声が聞こえた。その声に微笑を浮かべた男は、ちらりと酒場の隅に座る三人の方を見た。レベッカはとっさに警戒したがただ見ただけで何も起こらなかった。

男は笑みを深くし、口を開いた。

「それでは、最後の詩は……誰も知らない歌姫の詩にしましょうか」

レベッカの目が大きく見開かれた。ニイラが、レベッカの手を握ったが、彼女は気づかない。それほどにレベッカは驚いていた。『ヴィデルタ』という言葉に。

ヴィデルタ

【第7章2】ゆるやかな流れ（後書き）

・・・毎回恒例となってますあとがきです。どうもこんにちは。

えつと、今週は結構忙しかったですが、計画立てて今週分仕上げられました！ よしつ、この調子で完結へ頑張るぞー！！

いやあ、この三人。やっぱり癒されますう。心の安らぎですね、ほんとまじで。

えつ、ジューディー（幼少期）は大丈夫なのかって？ ええ、まあ。今寝てます、ヒア君下敷きにしてね。

ヒア君の悲鳴が聞こえた気がしたけど、「あああああああ」きこえなーい♪

なんだかんだでヒア君が好きです。それでは、またー来週！

【第7章3】ゆるやかな降下

「それでは、最後の詩は……誰も知らない歌姫ヴィデルタの詩にしましょうか」

男はそういうと、口を開いた。地声とはかけ離れた美しく響く声がおかしな格好をした詩人の口から流れ出た。この酒場中にいるほとんどの人間が、その声に魅了された。

詩人は、何も楽器を手にしていない。それなのに最高の楽師達の伴奏つきで、聞いているかのような不思議な感覚に包まれる。

ただ一人、レベル力だけはその魅了の力に取り込まれておらず、体が凍るような思いをしていた。テーブルの下で握られたこぶしは小刻みに震え、そのこぶしに触れているニイラを現実に取り戻した。

美しきヴィデルタ 愚かな歌姫 さあ手をおとりになって
わたくしを選んで くださるのでしょうか？

かつて栄えた魔法の王国 歌に魔力をこめ 誰にそれを伝えましょう

歌姫と噂される そんな美女がひとり 歌を歌って暮らしていました

ヴィデルタ、ああ ヴィデルタよ。 どうしてそんなに愚かになったのか。

歌姫には友がいた 可憐で優雅なベルマージュ 上位の女魔術師
二人はとても仲がよく 共にひとつの家で 暮らすほど
ヴィデルタ、ああ ヴィデルタよ。 醜みにくき己をよくみたのか。

愚かな歌姫を慕う者 数多あまたの男がいたが 彼女が恋するは 無鉄砲な傭兵

傭兵によく似た流浪の剣士に 恋した乙女はベルマージユ 二人の思いは貫かれる

グレイ、ああ グレイよ。 なぜ気づかないのか。

今までテーブルに視線を向け、じつと男の声を聞いていたグレイは、ガバツと顔を上げてその男をみた。自分の名が呼ばれた驚き以上の表情を、顔のはしはしににじませながら。

舞台上で酒場中の視線を集めている詩人は、グレイの目をずっと直視していた。視線が交差して、詩人の口元に笑みが浮かぶ。その笑みは、ほかの誰かに気づかれないうちに消え、また続きを詠み始める。

グレイはギリツと奥歯を噛み締めた。もうグレイはまともに、男の美声を聞くことが出来なくなつた。

古く生きた魔法の王国 傭兵は国を去る その後姿をみるは
ベルマージユ

ヴィデルタは見つける ベルマージユの恋した 流浪の剣士の
居場所

ああ、運命、そうだった。 いずれ思いはすれ違い 夢見た心
は地に堕ちる。

勘違いしたベルマージユ 哀れな彼女は 友人の恨みをかう
醜きヴィデルタ 憎しみに覆われる 呪いを紡ぎだす

呪いの歌は傭兵を襲う 突然居合わせた剣士は ベルマージユ
救い国の外

愚かで醜いヴィデルタはやがて 正気を取り戻し自分の過ちに
気づく

どうしてですか？ あなたはわたしを選んでくだらないの？
呪いをかけたそんな者 伴侶に選ぶことなど ありえようか。

呪いが解けない傭兵は 国を去り すべてを忘れた
もつとも愚かな歌姫は 黒をまとい恨みの矛先を 剣士へと向
けて

憎しみのウタを 悲しみのタネを 広げた

これが話というのなら 私の苦勞も水の泡
先人の詩を あなたの道選びに お役立てを

詩人独特の決まった台詞を口にし、深々と礼をした男に酒場中の
温度がぐっと上がった。中には立ち上がって、大げさに拍手をする
ものもいる。顔を上げた詩人は袖の中に手をいれ、袋を前に出した。
多くの客が思い思いのお金を入れに、舞台の前へ行列をなした。と
きどき投げ入れるものもいて、微笑みながら彼はそれを掴んでみせ
た。

その行列がまばらになる頃には、さきの詩についての話題で酒場
中が盛り上がった。自分なりの解釈を大っぴらにいう者もいれば、
自分のテーブルで静かに酒や料理で口をみたす者もいた。

そういった盛り上がりが一定以上になる頃には、舞台に立ってい
たおかしな格好の詩人は消えていた。何人かそれに気づいたものが
いたが、誰もそれを声高に叫ぶような真似をせず、酒場の賑わいは
まだ消えることはなかった。

ニイラは空腹を訴えるお腹の声にハッと顔を上げた。周りの騒ぎ
ようで、グレイとレベッカには聞こえていないみたいだった。二人
の様子をみてニイラは、二人が何か深く考え込んでいるようだった。
それぞれに触れながら、気づいたように声をかけてみると、二人と
もニイラに気づいた。

「ねえ、お料理頼まないの？」

本心だったがやっとなづいた二人は、まだなにか氣をとられつつ

も返事を返した。

「あつ、そうか。だから、お腹すいてるのね。ここ、何の料理があるのかしら」

「悪いな……。呼べば、メニューぐらいくれるであらう。給仕の者を呼ぶか」

手を挙げて給仕係を呼ぶと、さつとメニューを渡してくれた。だけれど二人はさらっと目をやっただけで、ニイラにメニューを手渡した。そして、注文を待っている給仕に言った。

「とりあえず三人分のお水をくれないかしら」

「適当に頼む」

心ここにあらずといった様子の二人に、給仕は愛想よく返事をし、厨房の方へ駆け戻る。そして直ぐに二人は自分だけの世界にもぐりこんだ。

ニイラは、二人のおかしさに首をかしげながら、手元のメニューに目をやる。ニイラには難解な文字が書き連ねてある。かろうじて数個の単語や数字が読めたが、一つの料理の名前すら完全に分からない。

農家で育ったニイラは、ほとんど文字は習わずに過ごしてきた。だから、ほとんど知らない文字ばかりだった。二人のどちらかに聞こうと思っただが、二人とも自分のなかの深いところに入り込んでいて、声をかけづらかった。

（面白くないなあ……。）

しょうがないので、ぶくつと頬をふくらませてテーブルにうつ伏せになった。

*

食事を済ませそれぞれの部屋に戻った三人は、夜を過ごしていた。

ニイラは寝台に入るなりすぐに寝入ったが、他の二人はそういうわけにはいかなかった。

グレイは、部屋の窓を乱暴に閉めた。木が悲鳴を上げたが、グレイはそんなことを気にもせず、また乱暴に椅子を蹴った。椅子は入り口の扉に当たって大きく音を立てた。

グレイの苛立ちはまだおさまらず、汚く誰に当てるでもなく罵った。

「くそっ！」

己の名を呼ぶ詩人の声や、何もかも知っているという満悦した笑みが、脳裏に浮かんでもっとグレイの顔はゆがんだ。

（あいつは、俺の何を知っているというのだっ！？）

不機嫌なまま寝台に座り込んで、そしてはっとなった。無意識のうちに片手が頭へ動いていく。

自分の手が、顔をすべってなぞっていく。指が覚えたあきらかな違和感。もう片方の手も顔へ伸びていった。どちらの手もはつきりとした変異を感じた。

立ち上がって、グレイは壁にかけられた鏡に近寄る。窓も閉められ、明かりの一つもついていない部屋の中は、闇に限りなく近かったが、グレイにはありありと見えた。鏡の中でぼんやりと浮かび上がるようにうつる自分の顔をみて、ささやくような言葉が口から出てきた。

「どうなっている？ この顔は・・・?!」

思わず視線は手の方にも向けられた。さっき、顔に触れていた指には、沢山のしわがない。それどころか、怪我をした腕がなんともないし、腕の筋肉のつき方や指の節の大きさからみて、昔の若きし頃とほとんど同じ状態なのだ。口の周りを覆っていた髭も、多くの白髪もなくなって、背も幾分か伸びたような錯覚におちいる。

これは幻か、とグレイは動揺した様子でランプに火をともした。

あたかな光が部屋いつぱいに広がって、またグレイは鏡を覗き込むがさつきよりも明確に顔が見える。間違えようが無い。顔が、手が、体が、そして精神までもが、若い頃に戻ったのだ。

もうひとつ。あの詩を聞いた後に、いくらか記憶が戻ってきたのだ。特に、あの詩人が詠った詩についての記憶が。

（あの詩人は、俺と会った事がある・・・というのか？）

謎が深まるばかりだった。グレイは深くため息をついて、ランプの火を吹き消した。眠れそうにないと、グレイは閉めていた窓をぐいっと押し開けた。一気に夜の風が入り込んでくる。窓のへりに足をかけたグレイは、その身を窓の外へ投げ出した。数ポア（一ポア＝約五十センチ）の高さから飛び降りたグレイは、足が地面につく前に目の前の木に飛び移る。木がグレイの体重でたゆんだが、その反動で宿の屋根に飛び込んだ。あきらかに、身体能力も若返った。陰り気味の表情で、グレイは屋根に腰掛けた。夜が長そうだった。

眠れない人がとなりの部屋にも、もう一人。すやすやと静かな寝息を立てて眠るニイラを見ながら、レベツカは椅子に座って考え込む。防音設備が皆無に等しい為、隣の部屋の物音も聞こえるのだが、自分だけの世界に浸りきっている彼女には聞こえていない。

癖で、左腕に巻かれた黒いバンダナの結び目をいじってしまふ。

それに、このバンダナがあればあのひとが傍にいてくれると思える。

あの女性ひと、といって記憶がパツとよみがえる。あのひとの美しい紫色の目。色合いが昔栄えた芸術を思わせた。家族のもとを出てから出合った、彼女の大切な恩師。

「あなたは今、何処にいらっしゃるんでしょうか」

ぼつりと呟かれた言葉に答えるものはいない。そして聞くものもない。レベツカが目を静かに閉じれば、師と過ごしたかけがえない日々が幾つも浮かんでくる。だけど、必ず。いい思い出ばかり

じゃなくて、最後に師とすごした時間はよかったとお世辞にもいえるほどではなく。

（あのとき、すごくおかしかった……）

レベツカはそう確信する。毎度毎度、師を最後に見た時を思い返すたびに確信し、そして最後に投げつけられた凍てつくような冷たい言葉が心を貫いた。

『あたしの憎しみはあなたには理解できない。必要ないわ、あんたみたいな馬鹿なんて』

また、体が冷たくなってぎゅっと自分の体をかき抱いた。左腕の黒いバンダナがしわくちやになるくらいに握り締めていた。

気づくとレベツカは椅子の上で三角座りをして、小さな幼子のように顔をうずめていた。肩が震える。気を緩めたら、嗚咽が口から漏れでそうだった。だから、ぐつと口を引き結んで、涙であふれないように目をかたくつぶっていた。

（誰もこないで……）

必死にニイラを起こさないように、ひとりの世界に沈んでいく。ぐるぐると、おなじ問いが頭の中を駆け巡った。もがくように問いに答えをだそうとしても、新たな問いが生まれ元の根源の問いにたどり着く無限ループ。

また日が出れば、元の陽気な自分に戻れるのだと、早く夜が終わって欲しいと、椅子の上でうずくまり縮こまり殻の中にこもった。

【第7章3】ゆるやかな降下（後書き）

はい、どうも。笹沢です。この三人の話もシリアスっぽくなってきました。

グレイ、なぜ若返ったし……。老人キャラクター減ったよ、まったく。

というより、正直詩について自信が無いです。なんかキャラがひどいこといつてくるんです。

グ「普通、酒場で憎しみ云々の暗い歌をやるか？」

レベ（盗）「もうお祭りも近いからね、明るくて元気いっぱいの方が人気あるはずよねえ」

ニイ「うーん……。よく、わかんないけど。さくしゃさんイジめちゃだめだよお」

ううつ、ニイラちゃん。なんて君は天使なんだ！ あの子と大違い！
とっても優しくて、おねえちゃん。涙が出そうだよ。ああなんて、
いい子なんだ！

決めた！ ニイラちゃん、おねえちゃんのおうちで預かるよ。危険な旅に出させた自分が馬鹿だったわ。「可愛い子には旅をさせよ」
っていうけど、ニイラちゃんの場合はかんっぜんに間違ってるもの。
可愛い子は自分のものにせよ、だよ！

作者の人格を疑った方、正常です。自分は友人に多重人格といわれました。今日はエラーしているようです。スルーの方向でお願いします。

【第7章4】ゆるやかな変化

新月の夜に屋根の上で、空を見上げる男がひとり。やや暖かくなってきた風は強く吹き付けることもない。しばらく身動きひとつせず空を見上げていたグレイだったが、ゆつくりとこちらへ向かってくる大人数の気配を感じて立ち上がった。

多くのたいまつで夜道ををたらしながら、こちらへ来る何かの集団行列がグレイの目にうつった。不審に思っ立ったまま行列を観察していると、その行列はすでに閉じられたこの町の城壁の中に入ろうとしているようだった。行列は旗を掲げていた。炎のあかりに照らされた旗には、羽の生えた白馬を主題として盾と聖剣が描かれている。

「あれは……」

グレイは立派で他を圧倒させるようなその旗を見て、眉をひそめた。聴覚も鋭くなった今では、風に乗って聞こえてくる鎧同士がぶつかり合う音や、馬の蹄の音もかすかだが確かに聞くことができた。

ほんの数秒、考えをめぐらせたが、グレイはすぐに動き始める。屋根から下りて器用にも、さきの部屋に窓から戻った。ほとんど音がしない。あまつさえ、夜の鳥が聞こえた。グレイは寝台で横になる為に帰ってきたわけではなかった。

少ない荷物の中からは、フード付きの暗い色のマントを引っ張り出して身に着けると、振り返りもせず窓から飛び降りた。風圧でマントが膨らみはためき音を立てたが、たいして大きくもない音に動物以外は反応しない。

多少崩れた身なりを簡単になおしたグレイは、フードを深く被り辺りに人がいないことを確認して、足音を立てない軽さで走り出した。案外近い城壁に向かって、不慣れな町でも構わずに。

＊

東の空が、溶けた太陽をうつしだす。早起きの鳥達が、挨拶を交わしながら飛び立った。春も本格的に入ってきて、わずかに初夏の香りもおわせた。澄んだ空気が開けられた窓から入り込み、古い空気と交じり合った。

冷え込むようなことはなく、新鮮な風が運んできた青い葉の匂いがニイラの鼻をいっぱいにさせる。窓辺に立つニイラは、精一杯背伸びして身を乗り出した。とはいっても、窓のへりにぎりぎり顎が来るくらいだ。早い時間から、さっぱりと目の覚めた様子のニイラは、純粋な瞳で一心に青い空を見つめている。

雲の少ない空はなんとなく孤独を思わせた。だから、見つめるのかもしれない。

ニイラは部屋の中を振り返った。小奇麗にまとめられた室内に、ぼつりと真ん中に置かれた椅子の上で、幼い子供のような様子でうずくまって寝ているレベツカ。器用にも椅子の上から落ちることなく眠っている。寒そうなので、ニイラが使っていた毛布をレベツカにかけてあげた。

ふと、ニイラは壁の方を向いて首をかしげた。壁のすぐ向こうの部屋はグレイがとった部屋だ。

彼女の持つ『生命の根源』^{ロディイヨフ}は、この薄い壁くらいなら遮られることなく、壁向こうの『生命の源』^{ロディイヨフ}を見ることが出来る。それにニイラは、同じ種族だとしても個々の『生命の源』^{ロディイヨフ}には、微妙な差異があることを把握している。だから、グレイとレベツカの『生命の源』^{ロディイヨフ}を見分けられる。

ニイラは壁に近づいた。壁に手をあて、壁の向こうに見えるはずのグレイの『生命の源』^{ロディイヨフ}を見た、否見ようとした。ニイラが寝る前にははつきりと見えていた、グレイの静かに輝く『生命の源』^{ロディイヨフ}が見

えなかった。

（おじさんがいない？）

胸に芽生えた疑問を振り払うように、ニイラは首をふった。長い髪が振り回される。疑問を断ち切るために、ニイラは直接となりの部屋へ行くことにする。急ぎ気味で走りながら、扉を押し開けた。

開けた途端に強めの風が吹き付けてきて、反射でニイラは目をつぶった。カーテンのはためきあう音がニイラの耳に届く。割と敏感な肌のすぐ横を何かが掠めた。

すぐに風はおさまり、ニイラも目を開けた。それほど広い部屋でもないので、入り口から部屋全体が見渡せた。だから、すぐにわかる。グレイは、今この部屋にはいない。

無駄に揺れるカーテンが、ニイラに何か言っているように思えた。開けられた窓と、使われたとは思われない寝台がただ淡々と並べられているだけだ。

寝台のすぐ下に、グレイのものとおもわれる荷袋があった。中途半端にあいた袋の口から、大きな布と砥石が出ていた。それに、椅子が乱暴にも横倒れになっていた。これからみて少なくとも、ニイラが寝た後しばらくは部屋にいたことになる。

だが、今グレイはいない。おそらく夜が明ける前にはここを出ていただろう。しかし、荷物がまだ置いてあることも鑑^{かん}みると、帰ってくる可能性が大きい。

不安をもったニイラはとりあえず、元の部屋に戻ってレベツカを起こすことにした。すぐさま駆け戻ったニイラは、若干興奮気味にレベツカを揺り起こした。

「おねえちゃん、おねえちゃん！ おきてっ、ねえ」

「ん・・・」

と、すぐに起きたレベツカは寝起きのややぼんやりした様子で、ニイラを目で捉えた。椅子の上の三角座りも自然に崩れたレベツカ

は、目をこすりながらばーっとしつつも挨拶をいう。

「おはよー、ニイラちゃん。今日はとっても早いねえ」

のんきなレベツカに、興奮の度合いが上がったニイラは大きい声で言った。

「のんびり挨拶してる、ヒマはないの！ おねえちゃん、おじさんがいないのっ！」

大きい声の成果か、内容の成果か定かではなかったが、ぱちくりと一回瞬きをしたあとのレベツカは、幾分か寝ぼけたものを様子から取り払った。それで、何割かの様子は演技だったことがわかる。

頭に血がのぼりぎみのニイラを落ち着かせるように、レベツカはゆっくりとニイラの肩に手をやった。レベツカは肩に置いた手を頭に移動させて、優しくニイラをなでてやる。そしてやわらかい声音で言い聞かせた。

「どうしてニイラちゃんはそう思ったの？ おはなししてみて」

ニイラの不安をとりのぞくようなことを、言ってやりたくて、レベツカは無理やりにも笑顔を作ってみせる。やや落ち着いたニイラはこくりと頷いて、壁を見て 그레이の『生命の源』^{ロディーヨフ}が見えなくなつたことから話しはじめた。

「きょうはきのうよりも早くおきたの。ちょっとお部屋のなかに行ったときに、なんとなく壁をみたの。そうしたら、おじさんの『生命の源』^{ロディーヨフ}が見えなかったの。あたしが寝る前には見えただけど、ね。それで、不思議におもっておじさんのお部屋に、いったらあれもいなかったの。荷物はおいてあつただけど」

レベツカは、『生命の源』^{ロディーヨフ}という言葉に目聡^{めさとい}く反応した。だから、口調が少しきびしくなった。

「ちよっと待って。ロディーヨフって、『生命の源』のことよね？」

「うん、そうだよ。あたしは、『生命の根源』^{ロディーヨフ}を持ってるよ。あつ、おねえちゃんには話してなかったんだっけ」

警戒するようなレベツカの態度に、気づくことなくニイラはごく普通に返した。レベツカは頭を回転させて、ニイラに問いを返す。ほかに、あなたが『^{ロディ・ヨライラ}生命の根源』を持つていること知っている人はいるの、と聞いたレベツカは目を瞑^{つぶ}っていた。

ニイラは座って目を閉じているレベツカを見つめ、元いた農村のことはほとんど忘れることにした。明るい声で、グレイおじさんが知っているよ、というレベツカは厳しい表情ですぐに目を開けた。そう、と静かに言ったレベツカは椅子から立ち上がり、さつきとはうって変わった陽気さで微笑んだ。

「荷物はおいてあるんでしょ？　ならすぐに戻ってくるわよ。まずはご飯、ご飯食べましょう」

レベツカの変わり様に驚いたニイラだったが、昨夜はほとんど食べれていないのですぐさま頷いた。

二人で夕べは酒場だった一階に下りていった。昨日の騒ぎようは何処へやら、ほとんど客がおらず宿の主人が受付カウンターで、暇そうに座っているだけだ。レベツカがその主人に声をかけた。

「すみません、ちょっと早いですけど朝食をお願いしますか？」
あいよつという気前のいい返事が返ってきたのを確認したレベツカは、ニイラと一緒に席についた。

すぐに給仕の係が水を差し出した。給仕のひとが暇をもてあましている様子だったので、レベツカは聞いてみた。

「あの、すみません。うちの連れのおじいちゃん、知りませんか？　部屋にいないみたいなんです」

暇そうだった給仕は話にのってきた。

「いやあ、すみません。ちょっとわからないですね」

少し申し訳なさそうに、ぽりぽりと頭を掻いた給仕は、あつと声を上げた。人懐っこい動物のような笑みで楽しそうに笑った。

「そういえば、何があるのか知りませんが、夜中のうちに国の騎

士団がきたらしいですよ

【第7章4】ゆるやかな変化（後書き）

あつというまに九月も終わり、やつと秋らしくなってきたこの頃ですね。衣替えて忙しいところでもあります。

えっと、ここを読んでいらっしゃる方のなかに、作者の活動報告を見ている方がいれば、もうすでに知っているかもしれないですが、お知らせします。

始めの辺りなど、とてもじゃないけど黒歴史に入れざるをえない酷い文章を、改稿したいと思っています。今でも文はぐちゃぐちゃでしょうけど、始めの辺りよりはましになっている・・・と信じたいところですが。

そのため、大筋の話は変わりませんが、ちょっとした小話や、後々の設定を裏付けるような言動等、変わる部分が多くあることと思います。文字数的に、割り込み投稿で話数を増やさなければいけなかったりと、皆様が混乱するようなことがあるかもしれません。ですが、その改稿作業と平行して新しい話も更新したいと思っています（欲張りです）。

えと、つまり何がしたいかと申しますと、前に投稿した部分を大々的に書き直すので、この次の更新もその次の更新も、改稿が終わらない限り、不定期更新としたい、ということです。

週一更新が身についてきた頃でしたが、あえてこんな暴挙にでました。

もつと沢山の人に興味をもってもらいたい、というのが多分自分の中で大きいと思います。それに、こんな酷い文章でも、お気に入りに入れてくださった方や感想・評価を付けてくださった方、ここ

まで読んでくださっている方に、少しでも自分が成長したところを見せたいのです。

こんなことをいうのもおがましいのかもしれませんが、自惚れていいですか？　ここまで来れたことに自信を持っていますか？

ここまで支えてくださった、姿の見えない皆さんありがとう。そしてこれからも支えてください。よろしくお願いします。

【第7章5】ゆるやかな平和の崩壊

「そういえば、何があるのか知りませんが、夜中のうちに国の騎士団がきたらしいですよ」

給仕の言葉に、レベツカの眉がぴくりと反応した。給仕の青年は、かまわずに続けた。

「いやあもうすぐお祭りですし、そのための警護にでも来たのかなあ」

自分の憶測を述べた給仕に、レベツカは丁寧に礼を言つて、名を聞いた。給仕は名を聞かれたことに、疑問を抱いたようだったが素直に答えた。

「ああ、オレはイムつていいいます」

イム、と名前をかみ締めるようにレベツカがつぶやくと、厨房のほうから彼を呼ぶ声が聞こえた。イムはいはい、と返事をしながら厨房のほうへ駆けていく。

昨日の夜と負けず劣らずおかしな様子のレベツカを、しげしげと見つめるニイラ。イムが戻ってくるまでに、ニイラは聞いてみた。

「ねえ、おねえちゃん。どうして、あの人のなまえを聞いたの？」

「ん？ ちょっと気になったからねー」

なにが？ とニイラは首を傾げたが、レベツカは答えなかった。

頬杖をついて、食堂の出口のほうを向いている。わずかに開かれた扉から、急がしく行き来する人々の足がみえていた。

イム以外の給仕は隅のほうで、もうすぐ来る祭りや昨夜いた詩人の詩について話していた。世間話という程度のもだったが、それさえにもレベツカは耳を澄ましていた。

数分すると、イムはパンが入った籠を持ってきて、『おまちどうさま』とレベツカたちのテーブルに置いた。つけあわせのスープとサラダは、ほかの給仕係が持ってきた。

湯気と共に香ばしい香りがする食事に、目を向けなかったレベッカは、厨房のほうへ戻ろうとするイムを呼び止めた。

「イムさん」

呼ばれたイムはくるりと振り返った。渋い色のエプロンがふっと浮き上がった。なんですか、と営業用の笑顔で問いかけるイムに、レベッカは同じく営業用の笑顔で言った。

「私、ここで仕事を探さなきゃいけないんですよ。どこかいいる、知りません？」

木の椅子から立ち上がったレベッカを、イムは足の先から頭のとっぺんまで見た。特に腰のバッグを見たイムはひとつ頷き、どこから紙を取り出してレベッカに渡した。

紙をもらったレベッカは、紙に書かれた内容を確認しないまま手の中にしまいこむ。

「ありがとうございます。これで一安心です」

そう笑った。そして、イムもにこやかに言って厨房へ戻っていく。

「いえいえ、思いがけない出会いはいいものですから」

一瞬、レベッカの背筋を冷たい雫が伝って落ちた、ような気がした。レベッカは動揺を胸のうちに押し込み、平然とした様子で椅子に座りなおした。ニイラに声をかけて朝食と一緒に食べる。

昨日の朝とは大違いだ、そうニイラは思いながら口をひんやりとした水で潤した。昨日の朝は、レベッカが途中まで一緒に旅する、と聞いて嬉しくなって大はしゃぎした。乾いたパンと水だけの軽い朝食だったのに、とっても楽しいものだった。

ふうっと息をついたニイラは、パンをちぎりスープに浸して口に運んだ。

テーブルの上のものを食べ終えた二人は、席を立った。レベッカはカウンターにいる宿の主人に声をかけた。

「あのお、すみません。もう一日、部屋続けて借りられませんか？」
いいながら銀貨をすこし多めに取り出した。それをみた主は、気前よくうなずき銀貨を受け取った。礼を述べたレベツカは、ニイラをつれて部屋へ戻った。

階段をのぼる途中でニイラに疑問の目を向けられたが、レベツカは部屋で話すわ、と言って質問を受け付けない。親しげな態度はあるものの、気まずい雰囲気は二人の間にあった。

階段をのぼりきつて、部屋に戻るとレベツカは唐突に話し始める。
「ニイラちゃん。私、アーナスさんがすぐ帰ってくるって言ったけど、正確にいつかっていわれてもわからない。だから、私が外でアーナスさんを探す間、この宿で待っていてくれないかしら？」

ニイラはこくん、と頷き質問をレベツカにした。

「ねえ、さつき言ってた気になることって？ あたし、何もできない子供でいたくないよ。ほんのちよつとだけでも、力になりたい！ここで留守番することも、おねえちゃんの力になれるならやるよ！でも、あたしそれが気になって……」

真剣な表情でレベツカを見つめるニイラ。レベツカは、まだまだ子供らしいなつと内心苦笑した。レベツカの手が伸びてニイラの頭をなでた。

「アーナスさん、追われてるって言うてたでしょ？ けどなぜ、誰に追われているのかは分からないともいつてたわ」

「うん」

素直にニイラは相槌をうち、レベツカは話を続ける。

「アーナスさんにも目的地はあることだし、着くまでの間はあんまり物騒なことにはなりたくないわ。だからアーナスさんを追っている相手、その理由を突き止められれば厄介なことを回避できるかもしれない。そうするために、まず情報が必要な。普段と変わったことは旅する私たちには、分からないけどそこに住む人なら分かる。」

だから、イムさんに聞いたわ、アーナスさんの不在をおりませで」

さっきイムから聞いてみて、出てきたのは『国から騎士団』。もしかしたら、 그레이を追って来たのかもしれない。だけど、アーリアの騎士団といえば少数精鋭部隊、国に使える高位の兵の集まりだ。それがたった一人を追うために、夜通し移動してくるほど大変なことを 그레이はしたのか？ そうならば、国中大変なことになって、 그레이はのんびり泊まっていられるはずもないのだが……。

もしそうだとすると、レベツカがその騎士団の団長だったら、彼女は騎士団をいくつかに分けて 그레이を追ひ、『騎士団の一部がここにいる』という情報を伏せて彼についての情報をまとめるだろう。つまり、騎士団が 그레이を追っている場合、一介の町人が騎士団の来訪を知っているはずもないし、裏で国の政府とでもつながっている者であつても軽々しく口にするはずもない。

だがイムは町の祭りの警備だとか述べていたが、確実に祭りの規模はアーリアの首都の方が大きい。祭りの警備云々が目的で、きたわけではないことが確かだ。

（あのイムという男……、私たちと同じようなニオイがするのよね）

そこまで考えてレベツカは息をついた。

「ふう。まあニイラちゃんにも分かるように言うと、あのイムっていうひとはキーマンなの。だって、私の聞きたいことをこちらが示唆する前に、答えてしまったでしょ？ そこが気になったのよ。なんらかの関わりや、あのひとの情報は持っていたほうがいいと思うけど、あまりこっちの情報を漏らさないほうが優先ね」

ニイラはよく分からない、と首をかしげたがレベツカはにっこり笑って言った。

「よく分からなくてごめんね、だけどニイラちゃんはお昼までここにいてくれればいいわ。その間、イムさんからもらった場所に行つて、アーナスさんを探してくるから」

お昼までここに居ることは理解したニイラは、レベツカの手をそとと取った。無邪気なニイラはレベツカに笑いかける。

「グレイおじさん、早く帰ってきてくるといいね！」

「そうね、アーナスさんが先に帰っていたらニイラちゃんはちゃんと、私が戻ってくるまでアーナスさんをよろしくね」

*

その始まりは、レベツカがグレイを探すため宿を出、昼に帰ってきた頃であった。

アーリアの騎士団とは別の集団が、レベツカたちのいる町をめざし進む。

ザッザッザッ。特殊な軍事訓練でも受けたように統率の取れた集団の、進み行く先々で時折叫ばれる『イツワリの神 に 天罰ヲ！』、『ワレらには シンの神が ついている！』などという声が、そこに住む人々を震え上がらせる。

黒をまとい、頭からすっぽりとかぶり物をかぶり、昼間だというのに燭台に立てた一本のロウソクに火を灯す。異様な姿の集団は、総勢数百名を越しているにもかかわらず、一糸乱れず進んでいく。彼らの集団の先頭には不思議な形をした槍を持った男が一行に並んでおり、そのなかでもリーダー格らしき一人の男はその槍以外に、銀色に輝く杭のような杖を背に背負っていた。

槍をもった男のうち一人が、杖も背負うその男に話しかける。
「教祖様、あれが見えますか」

男が指差す先には、この集団に向かってくるようにして歩いてくる商人の荷馬車があった。彼らが行く先の町は、一本道で見通しの良いなだらかな丘が広がっているため、それがとてもよく見えた。

男に恭しく話しかけられた、杖を背負う男は重々しく頷いた。

「うむ。余にも見えよう、アギリス？ 第一部隊で布教をせよ、我らの同胞は多ければ多いほどよい」

「はっ」

アギリスは同じ槍を持つすべての男に、彼が『教祖様』と呼んだ者の言葉をすばやく伝え、集団の歩みをとめさせた。そして『教祖様』の言う、第一部隊の隊長を先頭に呼びつけ命を下した。

アギリスは命の最後に、こう付け加えるのを忘れなかった。

「布教活動に失敗した場合は、すばやく処理し荷物を引つ張つて来い。これは、『教祖様』直々の命である」

『教祖様』という単語に反応して色濃い畏怖の感情と、格違いの者を盲信するような目が現れる第一部隊の隊長。ぴしっとお手本通りの敬礼で答えた隊長は、第一部隊の隊員らを引き連れて、布教という名の脅しをかけるために、商人の荷馬車の下へ走っていった。

それを満悦の笑みで見ている『教祖様』という男。彼の手元にも小さな燭台と今も燃えるロウソクがある。赤い光は男の黒い衣装を照らし、奇妙な形をした槍をほんのりと染める。

銀色の杖を背負う男は、燭台を口元まで持ち上げて囁いた。

「異教徒の　うすよごれた者共よ、　お前たちに　更生の機会を与えてやるう」

昼まえに町を出た商人は護衛を雇って、荷馬車で移動していた。

太陽がほぼ真上にある、そんな頃に商人の前に現れたのは、足元まで垂れた黒い服に覆面をした怪しげな一行。手元には真昼間だというのに、火のついたロウソクがあった。

商人たちの目は節穴ではないから、彼らもその者達が、少し離れた向こうにいる黒い大きな集団から来た、ということはちゃんと把握していた。そんななか、突然その怪しい一行のすべての人間が、口をひらいた。

「異教徒の　ウスヨゴレタ者共よ、　オマエタチに　コウセイの機

会をアタエてやろう」

突如言われた言葉に、商人たちの目が点になる。怪しいものたち全員が、一字一句間違えることなく、さらには全く同じ声のトーンで言う不気味な光景に、商人は動揺しながら声を上げた。

「いつ異教徒お？ そつれは何の話だ？ わたしはただの、国に忠実な商人だ！」

その悲鳴に近い声に、護衛が商人の前に立つ。

そして『国に忠実な』という言葉を目にした、『教祖様』と崇められていた男は、黒い含み笑いをする。また燭台を持ち上げ、今度は低い声で囁いた。

「間違ったモノに その心意気を向けるとは。貴様らには更生の機会なぞ 甘すぎる。真の神の元へ すぐさま送ってやろう」

さつきと同じように、第一部隊の人間は虚ろな目で商人らを見据え、その口から同じ音が出てくる。怯えた商人を覆面越しの空虚な瞳で見つめ、黒服の者はそれぞれ何処からか武器を取り出した。彼らを取り出した武器には、半ば乾いてこびりついた黒々しい血が、拭われることなくついている。

商人の護衛はたったの数人しかいなかったのだが、警戒態勢で武器を構えた。だがそれも、もはや無駄な動作。護衛らが武器を構える前に、黒き死刑執行人は荷馬車ごと囲んで、襲い掛かってきていたのだから。

第一部隊の隊員は見事な連携で、護衛の武器を構える前に攻撃を繰り出し、護衛を地に伏せさせた。皮膚がするどい鋼で引きちぎれる。神経や筋肉のすじがぶつとりと切れ、骨を砕けさせる怪力が護衛たちをふつとばす。

黒纏う怪しい一行が武器を振り上げるたび、舞い上がるは真紅の花弁。地面に零れ落ちた花弁は、毒々しい色合いで存在を示し、生臭いその臭いで襲撃者を酔わせる。

赤い花弁がついても、ヌラヌラと反射するだけの黒服には、ちゃんとロウソクの光が当たっている。

残るは商人ただ一人。甲高い声で命乞いをするも、盲信者たちの耳には届かない。無慈悲な刃の鈍い光がいくつも商人に向かって飛んでいく。

「ぐあぁっ……！」

荷馬車をひいて戻ってきた第一部隊に、『教祖様』は一人で手をたたいた。燭台と槍を持っているためはつきりとした拍手にはならなかったが。

「どうだアグリス？ 余の力も増してきたであろう」

満足したように問いかけた銀の杖を背負う男に、隣のアグリスは笑みをもって答えた。

「はい。御力の向上はめざましいものでございますよ、“暗黒のマリステリメ”様」

アグリスの笑みが一瞬、別人のようにブレたような気がした。

【第7章5】ゆるやかな平和の崩壊（後書き）

言いたいことが伝わらなかった……orz

改稿（いや序章は、ほぼ書き下ろし）と新話それぞれ一話ずつで一ヶ月だなんて。なんてスローペースなんだ。

そしてニイラちゃんが全く理解してくれないし、イムがキーマンって感じがぜんぜん伝わらなかった。やっぱり難しいですね。説明不足で意味不明な場合、ネタバレしない程度で説明・加筆しますので、一言お願いします。

こんなスローペースでもなお、見放すような真似をしなかった皆様ありがとうございます。本当に土下座したいくらいに、嬉しかったです。

お気に入り件数が減っていたらどうしようと、毎日ビクビクしていたのですが、それほど変わることなく今回の話をあげられました。一ヶ月近くあけてしまいましたが、毎日ちょこつとずつ書いていきます。励みとなりますので、よろしかったらどうかこのまま、読みにきてください。

よろしくお願いします。

【第7章6】騎士団事情。

彼はそれなりに年を重ねていたし、髭も生えていた。

彼は自分の執務室で座っていた。いつものように、ダラダラと書類の処理をして、『騎士団長』の欄に走り書きでサインを連ねた。時折現れる、隣の欄の生真面目で角ばったサインは『副団長』のもの。

コンコン。

ふと礼儀正しいノックの音がする。いい革の椅子にゆったりと座るテオ・ミストは、持っていた書類とペンを机に置いた。目端の扉に目を向ければ、押し開いて入ってくる人影がある。

「……失礼します」

「おう、入れ入れ。サミュエル」

入ってきたサミュエル・コウパは、にやにやと笑みを浮かべ、背もたれに身を預けて椅子に座っているテオに向けて、苦笑いでそう呼んだ。

「団長」

落ち着いた深緑でまとめられた、アーリアの騎士団団長の執務室に、二人の男。

サミュエルは扉をしつかりと閉じて、テオの目の前まで歩み寄った。テオもそれにあわせて立ち上がった。

そうすると、この二人は向かい合う格好になる。背丈は若干、テオの方が高かったが。

規則正しい、国が定めた騎士の正装を着たサミュエル一方、鎧ではなく薄いシャツにベスト、全身赤で統一したテオ。唯一のまともらしさは、帯剣をしていることぐらいの、奇抜さである。

「ほんつとに、アーリアの騎士団長がこのような有様。いい年こい

て、怠ける癖も相変わらず」

悪態でもつくようにサミュエルは言ったが、テオは気にした様子も見せずにけろりと言った。

「おれだつてちいっとは、やったわい」

「訛ってどうするんですか……。ったく」

もはや呆れた声で、困ったとでもいうつもりか、両手をあげてみせる。サミュエルがそうすれば、テオはがっはっはは、と髭の下で大口を開けるのだ。

「それで！」テオの豪快な笑い声を遮って、サミュエルは言った。

「騎士団長、私を呼んだご用件は？」

「ああ！ そうそう、それだったな！ えーっと」

今、思い出したというように声をあげて、机の引き出しの中をテオはあさった。十数分に及ぶ乱雑な書類（もはや解読不可能なものも含む）たちとの争いの結果、テオは折り目がつきまくっている紙を引っ張りあげた。

「あつたぞ！ よしっ」

「なんですかその、クソガキによってぼろぼろにされたような紙切れは」

「何気にサミュエル。おれを侮辱してはいまいか？」

うら若い顔を真剣にさせて、テオはにゅっと頭を突き出したが、サミュエルの冷めている目で元の位置に戻る。

「はあ……。分かったよ」

ふざけることを諦めたテオは、頭をかきながらその折り目のつきまくった紙を差し出した。受け取ったサミュエルは、その紙のふにやふにや加減にイラッとしたが、冷静にその紙に書かれた内容を読み解くことにした。

「事件報告書、ですか」

「なんだっけな、オメガとの国境近くの間所か。そこで宗教集団の暴

動があった。その場所担当の騎士か兵士が知らんが、そいつらが書いた報告書だ」

テオは、折り目がつきすぎている紙を読み込んでいるサミュエルを伺おうともせず、また無数の書類が雑に入った引き出しと格闘しだす。それでも内容は覚えていられしく、つらつらと並べ立てた。「宗教といったら、もうアレ。ペディア・アゴリブ神しか思いつかないんだが、確か、このアーリアだけに何か違う昔話が残っていないかったか？」

サミュエルのほうも、紙に書き込まれた小さい文字を読みながら、テオの言葉にも耳を傾けていた。

テオの問いかけに、生まれも育ちもアーリアである生粋のアーリア人のサミュエルは答える。テオはもともと、アーリアで生まれ育ったわけではないのだ。

「そう、ですね。この世界は『大いなる父』によって作られたもので、『大いなる父』はリーディア唯一の守護神であると、いうものがあつたと思いますが」

「多分、それだろうな。その話から発展した宗教らしく、ペディア・アゴリブ神はただのニセモノなんだとか」

テオはいいつつも、二枚の紙をまた引き出しからすくい上げた。それぞれ人相書きが付属としてついている。

「しかし、その事件はすでに主導者は拘束して、都へ移送済み。ほとんど終わったようなものでしょう？」

今さっき、引き出しから取り出した二枚の紙をピッと、サミュエルの目の前に突き出す。

「これが、その主導者だ。移送を始めた直後に逃げられたらしい。鎮静化させた信者共も、逃亡を知ってかこの二人について北上している」

テオの言葉に、サミュエルの眉がくいつとあがった。今度は、そんなに折り目がついていない二枚の紙を掴んだ。個人情報がかかる紙だ。

本来、すべての行が埋まるはずの人物の情報。氏名、生年月日、住所、職業、それに伴う身分、家族構成など、ほとんど書かれていない。一人はファーストネームのみで姓は名乗らず、もう一人にいたっては自らを仰々しい称号で呼ぶのだ。

ただ、参考として書き添えられた信仰理由にはもつともらしいことが書いてあった。一人は、『大いなる父によって救われ、新たな使命を授かったから』、もう一人は『ひたむきな教祖様をお手伝いたく』と書かれていた。

「この二人を、私に追えというんですか」

「いや、違う。裏情報によれば、この二人はただ布教するために活動してるわけじゃないらしいぞ。誰かを探しているようだ」

これに納得したのか、一人頷いたサミュエルは「紙とペンをお借りできますか」と、テオに言い放つ。騎士団長に筆記用具の貸し出しを求めるなんて、よくあることなのか、テオは意味不明な鼻歌を歌いながら、紙とペンを机の上に置いた。

もともと執務机の上にあった黒いインクの小さなつぼ。預かった書類はひとまず脇に置き、つぼのふたを開けてサミュエルは、ペンを黒い液体の中に沈み込ませた。余分なインクを落としてから、紙にサラサラとペンを走らせていく。

「つまり騎士団をいくつかに分けねばならないわけですか。では、三つ……いえ四つに分けさせていただきますよう」

サミュエルは四つの長細い丸をかいで、丸の中にそれぞれ違う名前を書き入れた。そのうちに、テオとサミュエルの名前は入っている。それを見て上機嫌にテオは言った。

「おれは行かないぞ？」

「ちつ、最近は公務が多かったか。夢見る馬鹿騎士共に、怠ける団長を見せてやりたいのですが」

サミュエルはさぞ悔しそうに顔を歪めて、テオの名前の下に怠ける団長の姿を知る、騎士の名前を適当に連ねていった。といっても、四つの頂点に書かれた残り三人も、いい年でだらけまくるテオを知るに知りすぎているが。

テオのところと隣の名前のところを線でつないで、その上に『任務外』と書く。

テオは『任務外』に心からの喜びを表した。憎らしいように、サミュエルがこほんと咳払い。

おっと、とわざとらしい声をあげて、にやつく顔を無理やり仕用の顔に戻す。ある意味それは歪だ。^{いびつ}

「団長の隊はこの主城務め、団長とその補佐以外は警備。もう一隊は都の警備兼巡回」

「ああ、そろそろ年が明けるからな。祝祭目当てで旅人も多くなり、特にいさかいは増えるだろうし」

さつきまで、サミュエルが書いていく紙を覗き込んでいたテオは、ふとそこを離れ執務室の隅の書類棚から地図を出してきた。丸められていた地図を広げて、机のうえに置く。

「情報によると主導者率いる集団は、ここに向かっていているらしい」
そういつて、テオが指差したのはアーリアの右上のはじの方。ヒーデイオンとオメガとの国境近く、それらの国と結ぶ整備された公道が集まる町。さりげなく添えられた、その町を治める領主の名前は、リロル。

「確か伯爵位をもつ貴族でしたか？」
「知らん」

一刀両断。バッサリ切り捨てられては、サミュエルも反応のしよ

うがない。

苦笑したまま、サミュエルは再びペン先をインクつばに突っ込んだ。はあ、と息をつきながら紙に書き足した。『任務有』の二隊のうち、サミュエルの隊はリロル伯爵領へ、もう一隊は宗教集團の周辺調査、と。あとは、それぞれの隊の下に隊員名を並べるだけで完成だ。

「団長、できましたよ」

書きあがった紙をテオに手渡し、サミュエルは筆記用具を片付け始めた。テオが紙の内容を一読する間に、サミュエルはインクつばのふたを元に戻し、ペン先に残った黒インクを布切れでふき取った。二つをそろえて机の上に返すと、もう読み終わっている。

「おし、これでいい。すぐに騎士共集めてくれ」

「了解しました。出発はすぐにも、ですか？」

テオは返されたペンを元の場所に返し、インクの入ったつばは執務機の隅に置きなおした。サミュエルは脇に置いていた三枚の紙をすつと抱える。

「出来る限り早く出発してくれ。特に、情報担当の隊は」

サミュエルの質問に答えながらテオは、執務室内にある、自身の衣装だんすに駆け込む。勢いでだんすの扉を開き、見栄のよく丈の長いコートを羽織りだしている。返答を聞いたサミュエルは外で待っている伝令に、騎士が全員集まるようにとの旨を伝える。

「あつ！　そうそう、大公様に言われていたんだっけか」

衣装だんすに向けていた体をくいと回転させ、テオはその目を執務机の方へ向けた。いや、正確には、執務机のさらに奥、執務機の壁の方に貼られた旗へ。

伝令に令を伝え終わったサミュエルは室内を見回して、赤いシャツの上に品のいいコートを着ているテオの、見栄っ張りに頬を緩め

そうになった。しかし、テオが部屋の奥の壁に飾られた旗に見入っているのを見て、ゆるやかに目がそちらへなぞられていく。

「どうしました？」

出入り口の扉のすぐ傍で声をかけるが、その自分が、美しい刺繍に織られた白馬に見とれていた。

暗闇のなか、一筋の温かな光を求めるように空を駆ける翼が生え、純白の馬。他を圧倒させるような威圧感をもたらす、馬は神々しく波打つ海のように躍動していた。

サミュエルの声に気づいたのか、こちらを振り返るテオ。コートの下から嫌でも赤がのぞく。

テオの視線を感じたのか、まっすぐにテオを見つめるサミュエル。サミュエルはテオが、『外向きの顔』をしていることに気づいた。ひとくくりに外向きといえど、一部は彼自身なのだが、サミュエルはひどくびっくりした。

「サミュエル・コウパ副団長、きみはこの団旗を持っていきたまえ」この、とはひとつしかない。そして、騎士団の旗を持つていくということとは、アーリアの騎士団権限がそこにあるということ。

「はっ、テオ・ミスト騎士団長。早々にお返しいたしますので、お待ちください」

正式な礼をしサミュエルは扉を開け、『外向き』の騎士団長を先に通した。

「ご案内いたしましょう、騎士団長」

「頼む」

【第7章6】騎士団事情。（後書き）

なっなんとか、今日中にあげられました。もう寝ないと明日がやばい時間ですが。もともと自分は睡眠でできた人間でしたからね。

はあ、何というか。最近ハードです。

本当に、今月忙しい。今週は特に。

絶対去年より、忙しいとは思いますが、筆がそれなりに進んでいた頃が多かったのは去年だし。

文章力の上達とペースのアップがちゃんとできるようになりたいですね。

さて、愚痴はこれまでに。

今回、前触れもなしに新キャラを登場させてますが、混乱…していませんよね？

似たようなキャラじゃねえか！ という声が聞こえてきそう……。

もっと語彙増やしたいですね。テオ…はなんとかいけそうですが、サミュエルはなんとも。

サミュエルに毒入ってますか？ 仕事上は入れませんが、ふざけるときに入ってますでしょうか。

毒含んでいる友人としゃべって、勉強してみることになります。

あれ、やっぱり愚痴っぽくなってい（ry

すみません、最後に少しだけ。

このペースだと、改稿が一話更新できるかなあ……くらいで年終わっちゃいそうです。まだリーディアでは、終わりませんけど。↑

あれ、この文書き覚えが……？

ひとまずここで、挨拶をさせていただきます。

一周年たち、二回目の年末であります。一話からここまで読んでくださり、更には感想・評価を下さった方々、のろまなペースでも見捨てずにいてくださった方々、本当にありがとうございます。どうぞ来年も、リオンを読みに来てくださいますように。

では、もし年中に改稿できたらそのときに、できなければこの場をお借りして、挨拶とさせていただきます。

【第7章7】騎士団状況。

夜もふけ、人通りのない街道を進みゆく騎士団。その行列の真ん中あたりにサミュエルはいた。騎士団の旗は先頭の旗手が掲げて持っている。

馬にまたがりながら書類を手にしているサミュエルは、脇に並んでいる騎士らに明かりを持たせて目をこらしていた。真夜中同然の暗闇のなかで、明かりと呼べるのは月と火のついたランプだけ。

暗いところで、こまかい文字を目で追っていた。そんなことをすれば、目が悪くなるというのに。

隣の騎士が、好奇心をそそられたのか、サミュエルに声をかけた。「サミュエル、何を熱心に読んでいるんだい？」

女性に甘く響くという評判の、柔らかな低音。それに気づいたサミュエルは、そのまま顔を上げた。声をかけてきた騎士には目もくれず、鼻をひくひくさせて匂いをかいだ。

そうしてから、やっと隣の見た目麗しい騎士に顔が向く。長く結われていない黒髪が、金属の鎧に落ちていた。その美しいといわれる容姿をもつ騎士は、ランプを持っている。

「……ああ、レルルアー・シエスタか」

わざとらしく、すまなさそうな声音でサミュエルは、反面表情で笑みをみせた。

「悪いな、シエスタ。女人の香水の匂いばかり気になっていて、あなたがいるということを忘れていたようだ」

オレンジの光が当たっているサミュエルの表情にレルルアー・シエスタは、口元の筋肉を引きつらせていた。

「毎回その茶番はないだろう？　そもそも今回は、任務の概要を聞かされたすぐに城をでたんだ。僕がその間に女性と会う機会なんて

ないよ」

自分が、毎度の如く女と絡む、と思われるのは心外だ、とばかりにレルルアは眉を吊り上げた。のだが、それを含んでなおサミュエルは余裕綽々よゆうちやくしゃくに毒をもった笑みで答える。

「ほお……。なるほど、失礼だったなシエスタ。今回は、任務先で恋人をつくらないようにつけてくれよ？」

「なんっ!? そ、そんなことを僕がするはずがないだろう。僕は全ての女性の味方なんだからっ！」

周りの騎士たちは、あきれながら笑った。暗い夜にも関わらず、進んでいく騎士たちのあいだには明るい雰囲気があった。

レルルアの『全ての女性に云々』発言に、ひととき大きな反応を見せたのはサミュエルの隣に馬を並べるオリイエ・ロージエクラウド。サミュエルを挟んでレルルアの反対側にいる。

あたたかな光を放つランプをひぎの上で、抱えているオリイエはよく見れば鎧姿ではなかった。いや、彼女自身が光源を持っているのだから、目をやればすぐに分かる。

フリルがふんだんに使われて盛り上がった形のスカートをはき、上着の下に薄っぺらい金属を身につけている。その金属はとても鎧、胸甲としていえるほど頑強な作りには見えなかった。せいぜいが胸当てにしか思えない。

一般人が目撃すれば、どこぞの令嬢が間違えて胸当てを着て、馬に乗ってついてきているようにしか目に映らないだろう。そもそも、夜中を出歩く住民も旅人もいるはずがないのだが。

「あら、ナルシエスタ様は全ての女性のお味方だとおっしゃるの？ ですが、貴殿に優しくしていただいた記憶はございませんわよ」

実におしとやかにいうのだから、まさしく深窓の姫君のごとく。長い髪は結わえられて、後頭部で三つ編みのおだんご状態である。

顔に垂れるのは前髪と横髪のみで、明るい光に明暗分かれた。

ただ、オリイエは礼儀作法に一点のくもりもないのだが、彼女の漂わせる雰囲気は険悪なものに変わりつつある。上質な手袋をはめたオリイエの手がピクピクと動いた。

「なっナルシエスタあ？　僕がナルシストであるわけがない！　オリイエ嬢、それは勘違いも程ほどにしてくれないか」

レルルアは汗をかきながら、あわてている。そのあわてっぷりに、オリイエは内心ほくそ笑む。二人の間にいるサミュエルも歪みきっているに違いない。

オリイエのたおやかな手つき。その姿が明るみに現れた途端、白く細い手は闇の中へ。歩む馬の上で再び光に照らされた手には、扇状に広げられた銀色のナイフがあった。もう一方の腕は、オリイエ自身のひざの上でランプを持っている。

まるで鏡のように磨き上げられた刃の連なりを見て、サミュエルはまたかと思いつつも一歩先に馬を進ませた。そうしたこと、レルルアとオリイエは隣同士になり、オリイエのナイフに彼が映る。「ナルシエスタ様？　此方こなたが持っているナイフ、見えていますね。この鏡の如く銀色に、貴殿の顔が映っておりますわ。貴殿は自分の顔に、現在進行形で見とれているのではなくって？！」

ナイフの銀に映ったレルルアの顔が苦渋に歪む。サミュエルはくくくつと喉を震わせながら、後退してきた。明かりがないと見えにくいんだと、レルルアが手にしていたランプを無理やりもぎ取る。

そうすると、レルルアはわつと声を上げて手綱を思いっきり引っ張った。足にも力が入ってレルルアの乗る馬は突然駆け出していく。夜の暗闇をすすむ騎士団一行から外れて、レルルアは黒の向こうにいつてしまった。

「ヘタレだな」

「ヘタレですわね」

偶然にも声がかぶって、レルルアをイジめた共犯はケラケラと笑った。

ひとしきり笑いあつて、声がとぎれた頃にナイフをしまい終わつたオリエイは声をかける。

「コウパ様、こんな時間であるにもかかわらず、熱心に読み込んでいらつしやるそれは、一体？」

「団長からもらった資料だ。目標の二人についてのものや、これから行く先周辺の情報が多いな」

サミュエルがレルルアから奪ったランプの灯火は、揺れてはいるもののまだ赤々と燃えている。サミュエルは一枚、紙を差し出した。

条件反射でそれを手に取つたオリエイは、顔の前まで紙を持ち上げた。

「“暗黒のマリストリメ”？ こやつは目標のひとりですか。しかし何者でしょう」

読んだオリエイは怪訝な顔をあげる。サミュエルは首を横に振つた。

「分からない。ロージエクラウド、あなたはこの称号、名称に聞き覚えはないか？」

「そうですね……。 “暗黒の” というのはネイロの方で、忌むべき称号であると聞いたことがありますわ」

聞いた彼は思案しながら、ゆっくりと手をあごにそえた。

「ネイロか。そう名乗るということは、ネイロと何かしらの関係が有るということか。しかし忌むべき称号をそのまま使うのは、どういうことなのか」

しばらく考えていたが、結局答えは出てこない。サミュエルはも

う一枚、紙をオリイエに渡す。

二枚目を受け取って読んだオリイエは、静かに首をかしげた。

「もうひとり。あら、こちらは案外普通ですね。 “ア” 呼ぶなっ

！ オリイエ嬢」

紙に書かれたその名を呼ぼうとしたオリイエは、ぱつと振り返る。オリイエの声を遮った本人が、馬を駆って戻ってきていた。

サミュエルに奪われていた明かりを、取り戻すと長くさらさらの黒髪があかく染まる。青とも緑ともつかない目がオリイエを見ていた。

「シエスタ様。どういう意味でして？」

耳の前にたれる彼女の横髪がすつとかき上げられた。オリイエの耳たぶに光る石がランプによってあかく見えた。

レルルアが戻ってきてサミュエルの隣に並んでも、騎士団は歩みを止めない。訓練された軍馬は、主人の合図があるまで足を持ち上げる。深い闇の中、馬のひづめがよく聞こえる。

「無闇に名を呼ばないほうがいい。僕らに説明されたとおり、目標の彼らが宗教団体のリーダーならば、何かしら謎の力を操れるはずだ」

声をひそめながらいうレルルアに、サミュエルは皮肉った笑みでいった。

「なかなかヘタレにしては懸命な判断だ」

「ヘタレとは、失礼な！」

案外沸点の低いレルルアを軽くいさめながら、サミュエルはまた手をあごに当てる。

まだ疑問点があったオリイエはまた尋ねた。

「それならば、“暗黒の” という名称つきの方はどうしましょう。

此方、呼んでしまいましたわ」

やや心配そうな顔でレルルアを見たオリイエ。美人に期待されていると、興奮を覚えたレルルアはあごをくいつと上げて、自信満々に言い放った。

「そちらは問題ないだろう。それはおそらく称号であり、本当の名ではないかぎり感づかれにくいと思う」

「そうですか、なら安心ですわね」

しかし、疑問が解消された時点でオリイエの興味は、レルルアからあっけなく去る。見る者もなく、無駄に張られた胸が無性にさびしい。

サミュエルは、レルルアとオリイエの話を聞きながら考えていた。しばらく口を閉じていたが、進んでいく道の先に目的の町が見えてくる。

そうなった頃に、やっとサミュエルは口を開く。

「レルルア、オリイエ」

呼ばれた二人はすぐさま顔をあげた。サミュエルが、名前を呼ぶのは珍しかった。

「周りにはまだ伝えていないことがある」

ぶつ切りに言葉が届く。町を目前にして急ぐ馬の足音で、脇の二人にしか聞こえない。

「詳しくはあとで教えるが、今のうちに言っておく」

「今回を皮切りに、……始まるだろう」

夜に響く無数のひびめに、サミュエルの低い声が重なる。サミュエルは何が、とは言わない。感覚で二人も分かっていた。

「しくじるんじゃないぞ？」

面白がるように笑うのが、闇の中で聞こえるにちがいない。明かりを消せ、と言外に合図すればほとんど二人同時に、火が掻き消えた。オリイエの持っていた紙は返され、サミュエルは資料の紙束を

整えて、それ用の箱にしまった。

命を下せば、列の先頭のあたりに多くの火が寄り集まる。旗手が高々と掲げる団旗がよく映えた。

サミュエルがレルルアに手を出したが、レルルアは、頭をふって長い黒髪を適当に結わえた。

「サミュエル、いい加減にしてくれよ。僕は最善を尽くすだけだ」
消えた炎の煙の匂いがふつとかすめる。不要となったランプを離れていた従者に手渡したオリイエが、髪に鋭利な髪留めをさした。

「此方は、アーリオにとって良き場面を迎えられるようにしますわ」

サミュエルはただ、そうかと言った。

【第7章7】騎士団状況。（後書き）

遅れてしまつて申し訳ありません。ほんつとおうに、遅くてすみませんでした！

やつとお送りできます、【第7章7】騎士団状況。でした。
相変わらず微妙なところでできてしまいましたが、ここでひとまずアーリオの騎士団視点は終わりです。次はえつと多分、若くなつたグレイのあたりからはじまると思います。しかし、その前に改稿の方だ……。

改稿は、割り込みで入れますので、「話数が増えている」七章のほうの更新」とは受け取らないでくださいね。

さて、一ヶ月近くかかつてしまいました。その間アクセス数が不自然に増えるということもなく安心していたのですが、なぜか段々お気に入り件数が増えていくのもやっぱり……。

こちらにも忙しく、毎日チェックしているわけではないですが、増えるのはありがたいです。いつもモニターの前で頭を下げてしましますが。

見ていてくださる方がいらつしゃると、励みになります。これからも、お読みいただければと思います。それでは、次の更新までお待ちください！

【第7章8】孤独な炎と青

向かいつける風で、フードが外れそう。外れて顔があらわになる前に、男の節ばった手はフードをつかんでいた。

綺麗に整備された町中を埋めつくす道。旅人風の恰好で走りいく彼は、颯爽とマントをなびかせた。暗い道に、人は当然おらず。時折通り過ぎる建物からの明かりは、きつと酒場のものだろう。夜が更けてもまだにぎやかさは残っていた。

グレイは現実から逃げるように、足を急がせた。明らかに足並みや体力は、目をそらせられない程に向上している。それでも、闇にまぎれてしまえば事実を直視せずにすむような気がしていた。

彼はさつき、屋根上でこちらへ進行してくる武装集団を見た。多くの炎にてらされた旗に浮かぶ白馬。それはアーリアの騎士団という証だった。

（俺は追われている。だが、何処に追われているのかはさっぱりだ。近づいてくるものには、警戒せねば）

自分の思考の一人称が、若返っていることに気づいたグレイはすぐに顔をしかめる。実に悔しそうに舌打ちをして、道をたどる。日が暮れる前に通った道を逆に進み、この町の城門へ急いだ。

宿が多く立ち並ぶところを抜けてしまうと、途端に目に明るい光が飛び込んでくる。通った覚えのない明るさに、グレイは困惑する。鮮やかな色に彩色されたランプに、更けた夜に媚びた手つきの妖婦。着飾りながらも、露出を忘れない売春婦。

情事売り物にする娼婦は、すぐさま立ち去ろうとする男に声をかけた。

「ねえ、おにいさん！ ちょっと休んでいきましょーよ」

グレイは声をかけられても、聞こえていないようにさつと通り過ぎた。それでも諦めきれない女は、グレイの腕をつかんでいた。

腕をひっぱられた反動で、グレイのフードが外れる。あらわになった顔を見て、女は一瞬だけ目を見開きそして紅のついた唇の端を持ち上げた。

相変わらず無愛想なグレイは、ふんつと不機嫌に腕をふるう。女の長い爪先が離れると、足早に娼婦のそばを立ち去る。

夜中だというのに、まだまだ人がいるこの通り。人が多く、グレイも全力で走って駆け抜けることはできなかった。現に、今の早足のグレイにぶつかった人影がある。

「きゃっ！」

派手にぶつかって、地面にどんと落ちた人影。さすがに悪いと思つたグレイは足を止め、倒れこんだ人に手を差し伸べた。謝りながらその手をとつた人物は顔を上げる。長い黒髪をたらしただ女の顔がグレイの目に飛び込んできた。

グレイは結んだ口の端をくつと引き伸ばして、女を引き上げた。大きな手に引つ張られて、立ち上がった女は申し訳なさそうにまた謝る。

「すみませんでした。あの、お怪我はありませんか……？」

気遣わしげにグレイを見た女は、さっきの娼婦などよりもいい意味で違っている。そういった様子にグレイは嫌悪感を引つ込めて、しつかりと答えた。

「いえ、こちらが悪かった。俺は大丈夫だが、貴殿も怪我などしておらぬか」

まるで、現代の貴族のような言葉遣いに女はびっくりして飛びのいた。ただ単に、グレイが何百年も前から生きている故の言葉遣いなのだが。フード付きのマントを着ているこの男を、女は貴族だと勘違いしてしまった。

「いいえ！　こちらこそとんでもありません。わたし、急いでおりますので御用の際はこちらへどうぞっ」

早口でしゃべりきった女は疲れた様子で息はつく。それでも、しっかりと紙をグレイに手渡している。グレイがちゃんと受け取るのを確認すると、女はぴゅーっと夜の明かりにまぎれてしまった。

あっけにとられたまま、グレイは見えなくなった女の背を見ていた。そのうち気が付くと、もらった紙に目がいく。店のものと思わしき名前と、彼女本人らしき名前が入ったものだった。

『芸者一連　さつき

マミ・サツキ』

後に名刺と呼ばれるものだったが、今では名称もない紙を、律儀にもきちんとは折りたたんで懐にしまう。そして、時間が空いたならばぶつかつた詫びをしに伺おうと、思う几帳面なグレイであった。

「さて……」

一段落ついたところで、夜の町に並ぶ明かりの上に見える東の空を見上げた。城壁に囲まれた町である以上、空の見える面積は狭い。しかし思ったよりも時間をかけていたようで、もう東のほうが白くなっている。

もうあの騎士団は、城壁の中へ入ってきているのかもしれない。それでも、とグレイは建物同士の間の路地に上手く滑り込んでしまつと、息でも吸うように軽く飛び上がった。二階建ての建物の窓ぶちを足がかりに、トントントと音は弾むように。

建物の屋根まで上ってしまうと、急に空は広くなった。宿屋の屋根より若干、しっかりとした屋根にグレイは両足をつけた。

グレイが屋根まで上ったのは、空を見るためではない。人の多い地の道をさけ、野良猫ぐらいしか通らないような道を行くためだった。ちゃんと城壁の門を確認して、闇にまぎれる黒猫のように跳ぶ。

建物と建物の間をとびこえてしまうのは、若返った体にとって快感のように思える。今までの記憶は変わらないのに、精神まで若くなるのにはグレイの背筋が凍る思いだ。

音をつれて空を浮く。すつと息を吸うたびに、跳んで。ふつと息を吐くたびに、駆けて。しばらく屋根の上を移動していくと、騒ぎきらめく一角は過ぎ去った。やがて、そびえる城壁が見える。灰色の石を積み上げ、隙間には接着剤のような役割をする土がはめられて。

グレイは静かに速度をゆるめた。並ぶ家屋の間から色づきの明かりではなく、炎の色をちらりとのぞかせる。炎の影は伸びて向こうの家の壁も色づかせて。

「もう、さすがに壁の中に入っていたか」
呟くが、息のでる音しか聞こえないような。

馬の落ち着いた息遣い。鋭い槍と剣を持つ集団の足なみは揃い。話し声はその音らに隠れて見えず。

町の中央に立つ城への道を一直線。進む軍勢のような行列は、先頭に旗を掲げる。遠くからでも見えた翼の生えた白馬が、いやに大きく誇張されているようだ。

グレイは足を止め、身をかがめた。音をたてないように、屋根のふちへにじり寄る。下を覗き込んで、大通りに広がる火影を見つめた。

進む騎士の多くが頭に金属のかぶとを被っていたが、位の高そうな騎士は顔を出している。特に、顔をあらわにしている騎士が三人も固まっている辺りがあった。あの辺りが、この行列の中央なのだろう。

眠る町を、おごそかに進む騎士の並び様は、まるで葬式の弔問のよう。周りの騎士たちはそれこそ黙りきっているのに、顔を出して

いる騎士はおだやかに談笑していた。

いぶかしむように、グレイはもつと端へ寄る。それが丁度、彼らが近くを通る頃だった。だから、グレイは彼らをこくはつきりと見、そして彼らもグレイを闇の中に見た。

「――っ」

何事もなかったように、通り過ぎる騎士。驚いたように息を呑んだのは、グレイのほうだった。

だんだんと騎士団の行列の最後尾が近づいてくる。そのときになって、やっとグレイは我にかえた。そして互いに存在を知ったということが、だんだん飲み込めてきた。すぐさまグレイは立ち上がり、騎士の波が通ってきた道をたどるように駆け出す。グレイは目をらんらんと燃やし、速度はさらにまして残像すら残さない。

生きた目。若さを取り戻した目には、明らかな違いがあった。それは燃えていた。目を合わせたときに見た一人の騎士の姿を、奥にしっかりと焼き付けて。長い黒髪、手にしていた炎が顔を濃い影に包んでいた。それでもなお、見えた確信の証拠は目だった。影のなかで唯一光を拾った目は青く。

（今の俺が髪が長かったら、アイツに瓜二つかもしれない）

夜を駆けるふくろうのように、すばやく飛ぶグレイは城壁を目指す。グレイが入ってきた町の入り口へ。

グレイが覚えていること。数少ないそれには、ある人物に向けた憎しみがある。その人物というのは、グレイとそっくりだった。他人の空似是災いして、今普通なら生きているはずのない彼が、生き続けている原因となった。

グレイの旅の目的といえば、それだった。ある人物というのは今はすでにないが、子孫がおり今でもその名は名高いそう。目的、その子孫を一掃。

自分を追う者かと思えば、自分が追うほうの人物が現れる。これは何かの因果なのか、とグレイは答えを求めるわけでもなく問うた。もちろんそれに答えるものはいない。夜風に声を織り交ぜてしまえば、よほど耳のいい者にしか聞こえない。

今は、情報を欲する。そんな彼は不意に、ある建物の上で立ち止まり静かに下り始めた。もうすぐ城壁の門を守る兵士が見える距離になるのだ。グレイはどうやって彼らに話しかけようかと考えながら、頭をおおっていたフードを取る。一応の用心のために、隠してあった武器の確認。そしてマントについてしまった土ぼこりを払った。

普通の速さで歩いていった。城壁までの距離は思ったよりも遠く感じる。それだけ城壁は大きいということ。

城壁の門は当然閉じられていた。日が完全に落ちてしまい、暗闇に包まれば、どんな町だろうと訪問者を拒む。それが上の身分の者でもない限り。ちなみに、去るものは何の抵抗もなく去ることが可能だ。さて門には、入ってきたときと同じように衛兵が立っている。宵闇でも見渡せるようにと、赤々と燃えたいまつがあった。それで照らされている範囲は広い。衛兵の持つ影は足元においてあった。

「どうも、こんばんは」

赤い光の範囲に、足を踏み入れる前。グレイは普段の様子を取り払って、陽気な旅人のように片手を挙げる。

「こんばんは。夜更けですが、出発ですか？」

グレイたちが町に入ってきたときの衛兵よりも、この衛兵は丁寧なことを遣う。これなら友好的に会話ができると感じたグレイは、につこりと笑った。前のままだったなら使われていなかった筋肉がひきつってしまっていただろう。でも、違った。

今、彼は黒髪に、炎の加減で揺れる青の目をした好青年だった。

【第7章8】孤独な炎と青（後書き）

大変長らくお待たせいたしました。七章の八話目です。

今回は、グレイだけの視点でした。グレイ単品のときは、サブタイトルに「孤独な」をつかうこととしましょう。

さて今回は、伏線をひろえたのかなと思います。代わりに、違うものが出てきましたが。七章は女の子いっぱいです。

次話は、グレイの続きとなります。衛兵さんとお話して、そこで何を得るのか。ニイラとレベッカとはどうするのか。ちゃんと入ればいいのですが。

今年は忙しいです。改稿と平行して新話をしているのでなおさら遅い更新ですが、それでも待つていくくださる皆様に最大の感謝とお詫びを。

個人的なのですがひとつ。六月二十七日は、「リオン - 剣術使い -」のもとを書き始めた日であります。今年で二年経ったことになります。こんなにも長い間、連載できる・書き続けられるものに出会ったのは初めてで、是非とも何年かかろうと完結させたいと思っています。

このサイト様に出会えた偶然に感謝を、皆様が目に留めてくださった事実感謝を。

私の文字で、少しでも何かを感じてくださいますように。

笹沢 莉瑠

【第7章9】孤独な夜明けは訪れるものなのか？

宵闇の中勤務をまっとうする二人の衛兵は、 그레이の答えを待ちそれによつては門が開けられるようにする。町に並ぶ家屋よりも、一段と巨大な門を目の前に、 그레이は一步踏み入れた。

城門のまわりには石が敷き詰められ、天候が悪くても大型の馬車などが受け入れやすくなっている。街中の一般的な道の一部にも、石畳はつかわれているが、ここの石はさらに硬い。
いしたたみ

足音が、たいまつでばやかされた黒に逃げた。

「いいえ、衛兵の方にお尋ねしたいことがあるんですよ」

いくら丁寧な物腰といえど、夜更けにこうしてやって来るのは警戒心を抱くのだろう。喋らなかった方の衛兵が、得物の穂先をわずかに動かす。

(……こうなったら、徹底的に演じてやろう)

그레이は役になりきるため、両手を胸の前あたりまで上げて必死に振った。

「いいえ！ 私は、気になるといてもたつてもいれられない、性質チなもんで！」
タ

さっきの 그레이の挨拶を返した方が、実に友好的に笑う。対する相棒は無口である。

「そうですか。ご質問は結構ですけど、夜も遅いですし物騒なコトも起こってますしね、早めにお願ひしますね」

衛兵たちの様子では、幾分か態度が軟化したことが分かる。余計な誤解が解けてよかった、と 그레이は手を胸に当てほうつと息をついた。

これでこの“青年”の印象が決定付けられただろうか、そう思った思ひは演技の内に隠してしまえ。

「そうですね！ 人間の三大欲求は睡眠・食欲・性欲と言われていますがね、私睡眠だけで十分ですよ。えーそれでちょっと気になったので、お尋ねしますけど『物騒なコト』って何ですか？」

さりげなく、“青年”の姿をあくまで具体的にしておく。グレイは、言動ひとつで人の印象がガラリと変わることを知っている。

「最近、この辺りの地域で商人や旅人が襲われたり、失踪したりといったことが多いんです。そのうち、町中で起こったことは少ないんですけども、話では段々増えてきているということですし、一応旅人や商人など移動してくる人には注意を呼びかけておきませんか。あれ。旅人さんは、お聞きになりませんでしたか？ この町へ入ってくる際に」

自分のつくりあげた“青年”ならば、どうするか。考えればすぐに、大きく首をかしげる動作が出てきた。

「うーん。ちょっと前なんですけどねえ、多分聞いていないですよ、はい。もしかして、その事件って結構アブナイんですか？」

無口な方の衛兵が、穂先と一緒に頷いた。丁寧口調の衛兵は、相棒に軽く同意して事件の詳細をつらつらと並べる。

失踪している人よりも、無惨な死体と成り果てた人の方が圧倒的に多いこと。失踪した商人の物と思わしき荷馬車が、ひどく痛んだ状態で野にさらされていたこと。護衛を何人もつけた商人ですら、全員傷まみれの血だらけ。周辺の地域に位置する集落では、不審な集団を見かけていたらしいこと。

「えーっと。それではつまり、謎の目的を持つ腕利き集団が、町と町を移動する者を襲っている、っていいことではないですかね？」

グレイはかゆくもない鼻の横を、ぱりぱりかきながらまとめ上げた。

「そういうことになります」

人のよさそうな衛兵は、神妙に肯定する。自分の手が被害者にまわらなかったことを、悔やんでいるのかもしれない。

グレイにとっては、あまり関係ない話のように思われた。それでも、情報があるだけマシだと、ひとりごちた。

「その話によりますと、事件に巻き込まれた人は増えていく一方、まだ対策がされていないことになりますね。このままでは、危険な集団がアーリアで野放しになり、更に事件は膨れ上がってしまいますよ？」

まるで他人の世間話。能天気なのか、それとも自分には関係ないと高をくくっているのか。

物腰の柔らかい衛兵は、心配ないといった様子で断言した。

「大丈夫です。国の騎士団には連絡して、こちらに何隊か応援に来てもらいましたから。丁度つい先ほど、その騎士の方たちがこの町に到着されたんですよ。これで安心できますよ」

騎士団という単語に、グレイの口端がほんの少し反応する。衛兵があとに続けた文章で、自分の知りたかったことを知った。

「へえ！なるほどー、私が気になっていたのはですね、鎧よろいの音の行列についてなんです。もしかして、それが騎士団の列隊という訳ですかね？」

「ああ、そうでしたか。ええ、騎士の方々は鎧を身につけていましたから、その音はきつと騎士団のもでしょう」

喋る方の衛兵は簡単に答えたが、尋ねた方はあまり聞いていなかった。

もうその後は事務的な質問のようなもの。それでも、聞かなければならないことが、一つだけ残っている。

これ以上ないと言っていいくらいの、笑み。グレイは、するする動く表情筋の上に、とっておきの覆面を用意した。それに描かれて

いるのは、新月直前の弓だ。

「納得、納得。そういう訳だったんですね。……ところで騎士団の方たちは、どちらに向かわれたんでしょう？」

その覆面にだまされたのか、それとも道化師のように可笑しく見えたのか。あいまいな顔で衛兵はグレイを見据えた。

すると、今まで一言も喋らなかった方の衛兵は、口を薄く開き息を吸い込む。

「城、ですよ」

たったの五文字だった。結局吸い込んだ息は、五文字のために消費された。

グレイはその声をしっかりと受け止めて、そうですかと呟いた。そして羽織ったままのマントをひるがえして、彼らに背を見せる。

「夜分遅くにご迷惑をおかけしました。おかげさまで、私の好奇心は満たされたみたいです。私は宿に戻りましょう」

来たときを再現したように、グレイは片手を上げて、^{ウツク}焰が届かない夜の空気へまぎれた。お氣をつけてという衛兵の、心にも無い言葉^{ことば}を背にしながら。

どれほど歩いただろうか。体感時間と歩行距離は比例しない。ほんの少し、たいまつで照らされた場所にいたぐらいで、目は濃い闇に惑わされていた。

焦るように、足をどんどん前へ出しているつもりなのだが、実際それがしっかりとしたものなのか、さだかではない。やっと住宅が並ぶ地域にたどり着き、そこでようやく振り返った。

そんなに離れていなかった。まだ周りが暗いおかげで、たいまつの明るい部分が浮いて見える。色彩にとぼしいこちら側、温かな色が彩る向こう側。

ある程度の距離を保っても、グレイの警戒する様子は変わらなか

った。幽暗^{ゆうあん}な雰囲気をかもしだす住宅街の陰。堅い住宅の壁に身を
そわせ、闇に目がなれてきた頃には、火が見守る城門付近をちゃんと
捉えていた。

夜目が揺らぐことはなく、色は青と緑を掛け合わせたような。し
かし、炎の下で魅せた色とは、鮮やかさに欠ける。あの色は条件つ
きだから、鮮明になるのだと思わせる。

（あの声は——忘れようが無い。確実にあれば）
それでもグレイは瞳の色など気にしていなかった。何百年と生き
てきて、瞳の色だけは変わらなかったのだから。

それよりもしきりに目を凝らす先には、言葉を交わしたばかりの
衛兵達。突然グレイの様子が一転したきっかけは、そのために多く
の息を費やされた五文字。

距離があつても視線には敏感だった。衛兵達の注意が向く前に、
グレイは住宅街の奥へと逃げ込んだ。

こんな風に焦っている自分を、古びた建物の壁に預けて、落ち着
けようとする。片手は額に当て、頭の頂点を壁とくつつけたら、体
に入っていた力が抜けた。背中の壁を頼りに、ずるずると地面が近
づく。

「はあ、俺は何をやっているんだか」

やはり、口から出る一人称は意識しないと『俺』に固定されてい
た。この夜の変えられない条件なのだろうか。

夜、とふと思ひ顔を上げてみれば、向かいの住宅の屋根の上に青
色が広がる。夜の青暗さの上に朝の澄んだ青を重ねたものだから、
パツとしない色だけでも。それは、グレイの目の色に似ている。

その曖昧で何色かの絵の具を混ぜ合わせた色、そこにうつすらと
黄金色が入れば……。

ほら。

「もう朝だ」

空の青に金色の光が差し込み、だんだん色と色はひとつに合わさる。朝の色だ。

朝の色にやがて登場する、丸い輝きの塊は。まだ画家の意思によつて、紙の外の絵の具のままの。

すがすがしい朝は訪れた。だが、そんな朝にはふさわしくないため息を、グレイは生きる疲労を混ぜ込んで吐き出した。

また新しい日は始まったのだ。四月二十二日、今日が終わればこの年の残りも一週間となる。グレイはそのままの体勢で空を見つめた。そういつた事実気づいて、グレイの思考は宿に置いてきた二人へと移動した。

そして、何も言わずに宿を出てきたことを、グレイははたと思いつ出すのだ。

(ニイラは『生命の根源』ロディイヨライラを持っていくから、俺がいけないことをすぐに気づくだろう。しかしレベルカがいる。荷物も置いてきたままだから、むやみに失踪とは決め付けはしないだろう。……だが、追っ手に捕縛されたと思われるかもしれない。一度は二人に会わねばならんな)

空の色が段々変わっていく様を、空に干渉できない傍観者は、ただ黙って眺めることしかできない。傍観者の腕はずっと短く、不変の色を塗るには長さが足りなかった。

だから傍観者たるグレイは、その腕を違うことに使おうとした。口を覆っていたひげを触ることに。

ところがその指は空をきる。不審に思い、再び望む行動を実現させようとした。それでも叶わない。なぜなら、昨夜彼は『老い』を失ったのだから。

「ああ」

そこでやっと気づき、グレイは問題を発見したのだった。

「これではまともに、会うことが出来んぞ」

失望したような声音なのか、それとも現状を楽しんでいる調子なのか。彼のよく通る声からは判別できなかった。

【第7章9】孤独な夜明けは訪れるものなのか？（後書き）

お待たせいたしました。七章の八より、三ヶ月経って九をお届けしました。遅すぎるというお言葉は謹んで伺います。

しかし、改稿から一ヶ月経たないうちに仕上げられたことを少し褒めていただければ。ああ、すみません。おこがましいことを。

えっと、グレイの部分はあと少し続きます。残りの進み具合によりますが。それまで、俺と思わず言ってしまう老人な青年に、お付き合いただければと思います。

更新スピードがのろいので、読者の皆様向けの七章のあらすじでも書いておこうかなと考えています。きっと作者の活動報告で、書くことになると思いますので、その際興味がおありの方は覗いていただければ嬉しいです。

さて次は改稿です。現在、誰の視点にしようか思案中。

引き続き後書きまで読んでくださることを願っております。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8537h/>

リオン -剣術使い-

2011年11月13日14時13分発行